岡山県営山陽新住宅市街地開発事業 用地内埋蔵文化財発掘調査概報 (3)

四辻土壙墓遺跡·四辻古墳群

他 方形台状墓発掘調査概報 3 編



1973年3月

岡山県赤磐郡山陽町教育委員会

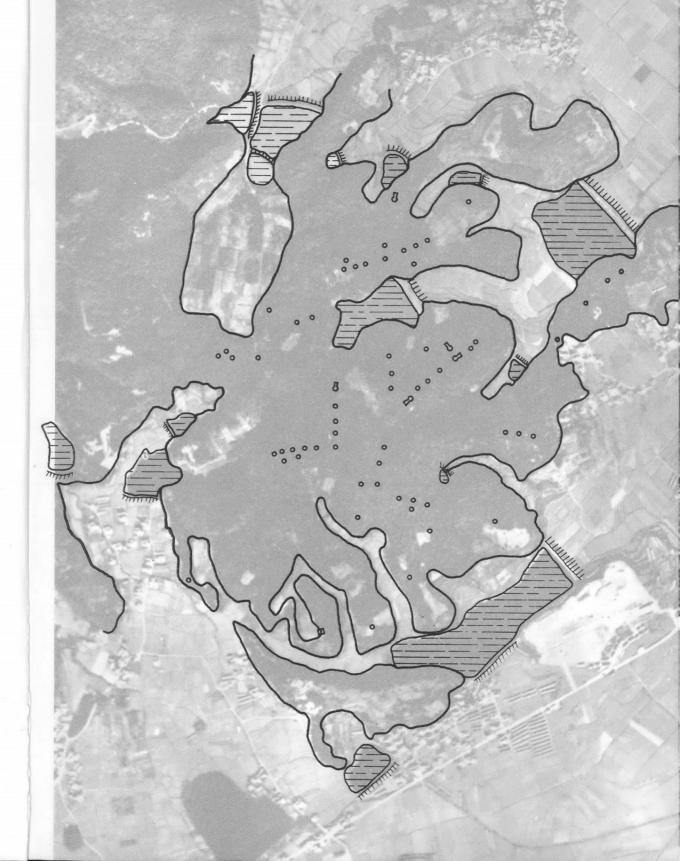


四辻土壙墓遺跡·四辻古墳群

他 方形台状墓発掘調査概報 3 編



巻頭図版 東高月丘陵群航空写真





岡山県営山陽新住宅市街地開発事業にともなう、埋蔵文化財発掘調査報告書第3集が発刊の運びとなった。

昭和44年11月に発掘調査に着手して以来すでに3か年半、一方においては発掘調査を継続しながら、また整理・研究を積み重ね、それをまとめた記録である。

本書では、昭和46年度に発掘調査を行なった、四辻古墳群7基、四辻弥生墳墓遺跡2遺跡を中心に報告した。しかし、その後の調査において検出された、便木山方形台状墓、宮山方形台状墓、さくら山方形台状墓の3遺跡は、四辻弥生墳墓群ときわめて関連が深いので、調査年次にこだわらず、本書にあわせて集録した。

これらの遺跡は、弥生式時代中期から古墳時代に至る墳墓遺跡を主とするもので、特に四辻弥生式時代土壙墓群等は、その後の時代に築造された、用木古墳群等初期の古墳との関係において、わが国の墓制変遷を解明する上で、多くの問題をもつ貴重なものである。

また便木山方形台状墓は工事中に発見された遺跡であるが、確認調査の段階で現況保存の処置がとられ、文化財保護行政の見地から喜こばしいことであった。

この調査にあたり、終始ご理解とご協力をいただいた県当局、関係各機関の方々,ご指導を賜った研究者各位,ならびに直接この調査を担当せられた,調査団の皆様に厚く御礼を申しあげます。

昭和48年3月

山陽町教育委員会教育長

湯 本 堅 志

例 言

- 1, 本書は、山陽町教育委員会が岡山県の委託を受けて実施した、岡山県営山陽新住宅市街地開発 事業に伴なう住宅団地造成地内の埋蔵文化財発掘調査報告第3集である。
- 2. 今回調査し報告する遺跡は、第4次および第5次発掘調査委託契約にもとずく、四辻古墳群7 基と、それと複合して発見された土壙墓遺跡2遺跡である。しかし、その後の契約によって調査 した遺跡のうち、これらと類似する台状墓3基が確認されたので、契約年次にこだわらず、本書 に加えて集録することとした。
- 3. 第4・5次発掘調査委託契約による調査は、昭和46年1月1日に開始し、昭和46年10月31日に 終了した。他の3遺跡の調査は、昭和46年度下半期および昭和47年度委託契約によるものであ る。個々の遺跡の調査年月日は、序説・調査の経過で表に示したとおりである。
- 4. 発掘調査に要する諸経費は、すべて岡山県の負担による。
- 5. 調査の組織は、山陽町、山陽町教育委員会、山陽町文化財保護委員会等を中心に調査委員会を また発掘調査は、山陽町教育委員会を中心に、山陽団地埋蔵文化財発掘調査団を構成した。
- 6. 調査委員会の諮問機関として、当初、山陽団地埋蔵文化財保護専門委員会を、山陽町教育委員会が委嘱して設置した。しかし昭和47年、岡山県教育委員会が、山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会を設置発足された。したがって、山陽町教育委員会設置の専門委員会は発展的に解消し、以後は対策委員会を諮問機関とした。
- 7. 本書の執筆および編集は、調査員である則武忠直、神原英朗の討議をもとに神原が行なった。
- 8. 出土遺物の整理,実測およびその浄書では,岡山大学学生 安川豊史君,石橋正樹君,近藤耕 一君の助力を得た。
- 9. 各遺構の実測は、神原英朗、則武忠直、岡本豊が分担してあたり、その整理・浄書は神原の指導のもとに、太田耕一、国安敏樹が中心となって行なった。
- 10, 写真の撮影および編集は、神原英朗が行なった。

目 次

調査の経過と環境13						
四辻古墳群第1号墳・四辻峠台状墓29						
四辻古墳群第 2 ・ 3 号墳57						
四辻古墳群第5号墳・四辻土壙墓群69						
四辻古墳群第6・7号墳						
便木山方形台状墓						
宮山方形台状墓						
さくら山方形台状墓						
あとがきにかえて······ 217						
揷 図 目 次						
(調査の経過と環境)						
第 1 図 山陽町遺跡分布図(則武·神原作成) ······24						
第 2 図 住宅団地造成地内遺跡分布図(作成 則武,神原・製図 太田)25						
(四辻古墳群第1号墳・四辻峠台状墓)						
第 3 図 四辻古墳群周辺地形図 (作成 神原・製図 太田) ······30						
第 4 図 四辻第1号墳外形図(実測 神原・製図 太田)33						
第 5 図 四辻第1号墳墳丘断面図(実測 神原,則武·製図 国安)34						
第 6 図 内部主体実測図 (実測 神原・製図 太田)37						
第 7 図 内部主体出土,玉類,櫛(実測 安川,神原·製図 安川,神原)38						
第 8 図 内部主体出土鉄器 (実測 安川,神原・製図 安川,神原)41						
第 9 図 墳外表須恵器 (実測 石橋・製図 石橋) ·······42						
第 10 図 埴輪片 (実測 安川・製図 安川)43						
第 11 図 四辻峠台状墓外形図 (実測 神原,則武・製図 太田)45						
第 12 図 土壙墓配置図 (実測 神原・製図 太田)46						
第 13 図 第1土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)48						
第 14 図 第 2 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)48						
第 15 図 第 3 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)49						
第 16 図 第 4 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)50						
第 17 図 第 5 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)51						
第 18 図 第 6 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)51						
第 19 図 第 7 土壙実測図 (実測 神原・製図 国安)52						
第 20 図 台状墓出土石器 (実測 安川・製図 安訓)53						

(四辻古墳群第2・3号墳)

第	21	図	四辻古墳群第2・3・4号墳地形図(実測 神原・製図 国安)58
第	22	図	第3号墳墳丘断面図(実測 神原・製図 国安)60
第	23	図	第3号墳石棺実測図(実測 神原・製図 国安)62
第	24	図	第2号墳墳丘断面図(実測 神原・製図 国安)64
第	25	図	第2号墳遺物出土地点図(実測 神原・製図 国安)65
第	26	図	第2号墳出土鉄器(実測 安川・製図 安川)65
第	27	図	その他の遺物(石鏃)(実測 安川・製図 安川)66
			(四辻古墳群第 5 号墳・四辻土壙墓群)
第	28	図	第5号墳外形図(実測 神原・製図 国安)71
第	29	図	第5号墳墳丘断面図(実測 則武,神原・製図 太田)73
第	30	図	第5号墳円筒埴輪(実測 国安,太田・製図 国安,太田)74
第	31	図	第5号墳形象埴輪(実測 安川・製図 安川)76
第	32	図	A主体実測図(実測 神原・製図 太田)77
第	33	図	B主体実測図(実測 神原・製図 国安)78
第	34	図	B主休出土直刀(実測 安川・製図 安川)79
第	35	図	紡錘車状鉄器 (実測 安川・製図 安川)79
第	36	図	四辻土壙墓群調査前地形図(実測 神原・製図 国安)81
第	37	図	四辻土壙墓群発掘区(実測 神原, 則武・製図 国安)82
第	38	図	四辻土壙墓群配置図(実測 神原, 則武・製図 国安)83
第	39	図	第5号墳・台状墓関連図(実測 神原・製図,国安)85
第	40	図	第1土壙実測図(実測 神原・製図 国安)86
第	41	図	第17土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)87
第	42	図	A地区土壙墓配置図(実測 則武, 神原・製図 太田)89
第	43	図	第16土壙実測図(実測 岡本・製図 太田)91
第	44	図	第22土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)92
第	45	図	B地区土壙墓配置図(実測 神原, 則武・製図 太田)93
第	46	図	第28土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)95
第	47	図	第29土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)96
第	48	図	第38土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)97
第	49	図	第23土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)98
第	50	図	B 東地区土壙墓配置図(実測 神原, 則武・製図 太田)99
第	51	図	第20土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 100
第	52	図	第34土壙実測図(実測 岡本・製図 太田)
第	53	図	第35土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 102
第	54	図	第41土壙実測図(実測 岡本・製図 太田) 103

第	55	図	第42土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)	104
第	56	図	第43・44・45土壙実測図(実測 則武・製図 太田)	105
第	57	図	第46・47・48・49土壙実測図(実測 則武・製図 太田)	106
第	58	図	第50・51土壙実測図(実測 神原・製図 太田)]	107
第	59	図	第52・54・55・56・57土壙実測図(実測 則武,神原・製図 太田) 1	108
第	60	図	第52土壙実測図(実測 神原・製図 国安)	09
第	61	図	第53土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 1	.09
第	62	図	第54・55土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 1	.10
第	63	図	第57土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 1	.11
第	64	図	第58土壙実測図(実測 岡本・製図 国安) 1	.11
第	65	図	第59土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)1	.12
第	66	図	第61土壙実測図(実測 神原, 則武・製図 太田)1	13
第	67	図	第59・60・62・63土壙実測図(実測 神原, 則武・製図 国安) 1	14
第	68	図	第65土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)1	14
第	69	図	第63土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)1	15
第	70	図	第67土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)1	15
第	71	図	第68土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)1	16
第	72	図	第69土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)	16
第	73	図	第70土壙実測図(実測 岡本・製図 太田)	17
第	74	図	第71土坡実測図(実測 岡本・製図 太田) 1.	18
第	75	図	第66土壙実測図(実測 岡本・製図 太田)	18
第	76	図	第64土壙実測図(実測 岡本・製図 太田)	19
第	77	図	第72土壙実測図(実測 岡本・製図 国安)	19
第	78	図	出土遺物玉類実測図(実測 安川・製図 安川) 12	20
第	79	図	出土遺物鉄器実測図(実測 安川・製図 安川) ······ 12	21
第	80	図	出土遺物石鏃実測図(実測 安川・製図 安川) ····· 12	22
第	81	凶	土器棺(K1)実測図(実測 石橋・製図 石橋) 12	23
第	82	図	土器実測図(1) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 12	24
第	83	図	土器実測図(2) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 12	25
第	84	図	土器実測図(3) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 12	26
第一	85	図	土器実測図(4) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 12	28
第	86	図	土器実測図(5)(実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 12	29
			(四辻古墳群第6・7号墳)	
第	87	図	四辻第6・7号墳地形図(実測 神原・製図 国安) 14	42
第	88	図	第6号墳遺構配置図(実測 神原・製図 国安) 14	44
第	89	図	第6号墳断面図(実測 神原・製図 太田) 14	45

第 90 図	第6号墳内部主体(実測 神原・製図 国安) 1	.46
第 91 図	第6号墳出土鉄器(実測 安川・製図 安川)1	.47
第 92 図	第7号墳遺構配置図(実測 神原・製図 国安)1	.48
第 93 図	第7号墳墳丘断面図(実測 則武,神原・製図 太田)1	.49
第 94 図	第1主体実測図(実測 神原・製図 国安)	.51
第 95 図	Ⅰ 第2主体実測図(実測 神原・製図 太田)1	.53
第 96 図	第3主体実測図(実測 神原・製図 国安) 1	54
第 97 図	第4主体実測図(実測 神原・製図 国安)1	55
第 98 図	l _. 第5主体実測図(実測 神原・製図 太田)	56
第 99 図	3 第7号墳出土鉄器(実測 安川・製図 安川)1	56
第 100 図	】 第1号住居址実測図(実測 則武・製図 国安) 1	58
第 101 図	】 第2号住居址実測図(実測 神原・製図 太田)	59
第 102 図	□ 第1・2ピット実測図(実測 岡本・製図 国安) 1	60
第 103 図	】 第3・4ピット実測図(実測 岡本・製図 太田) 1	61
第 104 図	Ⅰ 第5ピット実測図(実測 岡本・製図 国安)1	62
第 105 図] 第6ピット実測図(実測 神原・製図 太田)	62
第 106 図	出土土器片実測図(実測 石橋・製図 石橋) 1	63
	(便木山方形台状墓)	
第 107 図	便木山周辺地形図(作成 神原・製図 太田)	66
第 108 図	便木山遺跡・便木山方形台状墓関連図(実測 神原・製図 国安) 16	3 8
第 109 図	便木山方形台状墓外形図(実測 則武,神原・製図 国安) 17	70
第 110 図	列石出土状況図(実測 神原・製図 太田)	70
第 111 図		71
第 112 図	内部主体実測図(実測 神原・製図 国安)	72
第 113 図	第1・2土擴実測図(実測 則武,神原・製図 国安) 17	73
第 114 図		
第 115 図	第2土壙実測図(実測 神原・製図 太田) 17	74
第 116 図	出土遺物玉類・鉄鏃(実測 安川・製図 安川) 17	75
第 117 図	(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	76
第 118 図	溝状遺構底の土器片(実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤) 17	?7
第 119 図	土器棺(K2)出土状況(実測 神原・製図 太田) 17	
第 120 図	土器棺(K2)実測図(実測 石橋・製図 石橋) 17	79
第 121 図	遊離須恵器(実測 石橋・製図 石橋) 17	
第 122 図	住居址周辺地形図(実測 神原, 則武・製図 国安) 18	30
第 123 図	土壙墓実測図(実測 神原・製図 太田)18	80
第 124 図	竪穴住居址実測図(実測 安川・製図 安川)	17

第 125 図	土壙内出土土器(実測 石橋・製図 石橋)	182
第 126 図	住居址出土石鏃(実測 安川・製図 安川)	182
	(宮山古墳群第4号墳・宮山方形台状墓)	
第 127 図	宮山周辺地形図(作成 神原・製図 太田)	184
第 128 図	宮山第4号墳外形図(実測 則武,神原・製図 太田)	186
第 129 図	宮山第4号墳断面図(実測 則武,神原・製図 太田)	187
第 130 図	葺石出土状況図(実測 神原・製図 太田)	188
第 131 図	墳外表の須恵器(実測 石橋・製図 石橋)	189
第 132 図	家形埴輪(実測 安川,石橋,近藤・製図 近藤)	190
第 133 図	円筒埴輪実測図(実測 太田,国安·製図 太田,国安) ····································	192
第 134 図	方形台状墓現況図(実測 神原,則武・製図 太田)	193
第 135 図	遺構配置図(実測 神原,則武・製図 国安,太田)	194
第 136 図	第1土擴実測図 (実測 神原・製図 太田)	195
第 137 図	第2土擴実測図(実測 神原・製図 国安)	195
第 138 図	第3土壙実測図(実測 神原・製図 国安)	196
第 139 図	第4土擴実測図(実測 神原・製図 国安)	196
第 140 図	第5土擴実測図(実測 神原・製図 国安)	197
第 141 図	第6土壙実測図(実測 神原・製図 太田)	197
第 142 図	第7土壙実測図(実測 神原・製図 国安)	198
第 143 図	土器棺(K1)実測図(実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤)	198
第 144 図	第5土壙一括土器(実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤)	199
第 145 図	遊離土器片(1) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤)	201
第 146 図	遊離土器片(2) (実測 石橋,近藤・製図 近藤)	202
第 147 図	遊離土器片(3) (実測 石橋,近藤・製図 石橋,近藤)	203
第 148 図	遊離出土石鏃(実測 安川・製図 安川)	204
第 149 図	遊離須恵器片(実測 石橋・製図 石橋)	204
	(さくら山方形台状墓)	
第 150 図	周辺地形図(作製 神原・製図 太田)	208
第 151 図	方形台状墓現況図 (実測 太田, 国安・製図 国安)	209
第 152 図	方形台状墓断面図(実測 太田,国安・製図 太田)	210
第 153 図	第1主体実測図(実測 神原・製図 国安)	211
第 154 図	第2主体平面図(実測 神原・製図 国安)	212
第 155 図	第2主体側面図(実測 神原・製図 国安)	213
第 156 図	第3主体石材出土状況(実測 神原・製図 国安)	214
第 157 図	出土遺物鏡・管玉 (実測 安川・製図 安川)	215

付 表 目 次

付表 1	山縣	易住宅団地内埋蔵文化財一覧26					
付表 2	四泊	士第1号墳玉類計測値40					
付表 3	3 四辻峠台状墓土壙一覧4						
付表 4	_						
付表 5	玉	類計測値 120					
付表 6	土	嫉施設別分類表······ 131					
付表 7	小	口溝土壙床面計測表 132					
付表 8	遺	物出土の地区別一覧					
付表 9	出:	土土器器形別個体数 136					
付表10	出:	土土器時期分類表 137					
付表11	便.	木山方形台状墓土器個体別分類					
付表12	宮	山方形台状墓土器個体別分類 204					
付表13	宮	山方形台状墓土壙計測值 205					
		図版目次					
		(本文対象頁)				
卷頭図版	反 3	東高月丘陵群航空写真卷頭 .					
図版1	1	住宅団地造成地遠望13・22					
	2	住宅団地造成丘陵······13·23					
		(四辻古墳群第1号墳・四辻峠台状墓)					
図版 2	1	四辻古墳群第1~5号墳景観31					
	2	四辻第1号墳調査前外観31					
図版 3	. 1	第1号墳内部主体発見36					
	2	第 1 号墳内部主体36					
図版 4	1	玉類出土状況38					
	2	内部主体遺物出土状況38					
	3	鉄器出土状況38					
図版 5	1	第 1 号墳墳丘調査状況44					
	2	内部主体と土壙の関連44					
図版 6	1	方形台状墓全景(北から)44					
	2	方形台状墓全景(南から)44					
図版 7	1	土壙群出土状況(西から)44					
	2	土壙群出土状況(南から)44					
図版8	1	第4~7土壙(西から)49~52					

	2	第3~5土壙(南から)48~50
	3	第2・3土壙(西から)47~48
図版 9	1	第1土壙(西から)45
	2	第1~4土壙(南から)45~49
	3	第4土壙(西から)49
	4	第5土壙(西から)52
		(四辻古墳群第2・3号墳)
図版10	1	第2・3号墳外観59
	2	第2・3号墳調査後外観59
図版11	1	第 2 号墳調査前外観······59
	2	第 2 号墳調査区景観64
図版12		鉄器類出土状況64
図版13	1	第3号墳調査前外観61
	2	第 3 号墳調査状況61
図版14	1	第3号墳箱式石棺出土状況61
	2	第3号墳箱式石棺身部61
図版15		箱式石棺出土状況61
		(四辻古墳群第5号墳・四辻土壙墓群)
図版16	1	四辻第5号墳遠景(東谷から)70
	2	四辻第5号墳近景(善応寺山から) 70
図版17	1	四辻第5号墳調査前外観72
	2	四辻第5号墳表土剝土状況22
図版18	1	第5号墳A主体(西から)76
	2	第5号墳A主体(南から)76
図版19	1	第5号墳B主体(北から)77~78
	2	第 5 号墳B主体(粘土床構造) ·······77~78
図版20	1	第 5 号墳埴輪片出土状況71・75
	2	家形埴輪出土状況71・75
図版21	1	墳丘断面(南北)80
	2	墳丘断面(東西) ·····80
図版22	1	土壙群出土状況(南から)80~85
	2	土壙群出土状況(北から)80~85
図版23	1	B地区土壙群(東から)85
	2	B地区土壙群(26~32土壙)85
図版24	1	第25~37土壙(東から)100~101
	2	第35~37土壙(西から)100~101

図版25	1	第34土壙 100
	2	第36土壙
図版26	1	第37土壙 (一括土器出土状況) 101
	2	第37土壙 101
図版27	1	第21~30土壙出土状況92~94
	2	第29土壙95
図版28	1	第30土壙周辺および土器棺出土状況(東から)95~96
	2	第30土壙および土器棺 K 1 出土状況(南から)95・96
図版29	1	第30土壙内土器出土状況95
	2	第35土壙上一括土器群出土状況 100
	3	第35土擴高坏出土状況 100
図版30	1 ~	~3 土器棺K1出土状況96
図版31	1	A地区第2~8土壙出土状況(北から)87~88
	2	A地区第2~8土壙出土状況(西から)87~88
図版32	1	第 2 ~ 4 土壙出土状況86~87
	2	第9・10土壙出土状況90
図版33	1	第 1 土壙出土状況 · · · · · · 86
	2	第1土擴床面玉類出土状況86
図版34	1	第11土壙出土状況90
	2	第 3 土壙出土状況87
	3	第16土壙出土状況91
図版35	1	第13土壙および土器棺K3出土状況90・91
	2	土器棺K3出土状況91
	3	土器棺K2出土状況91
図版36	1	C地区土壙群全景 (北から)
	2	第46~57土壙付近土壙群出土状況 102
図版37	1 -	第46・47・52土壙出土状況104
	2	第54・55土壙出土状況107・110
図版38	1	第52土壙出土状況 106
	2	第52土壙内一括土器片出土状況 106
図版39	1	第59土壙出土状況 112
	2	第59土壙粗小土器出土状況
	3	第59土壙一括粗小土器出土状況 112
図版40	1	第47土壙出土状況
	2	第50土壙出土状況 113
	3	第70土壙出土状況

図版41	1	第66土壙出土状況	117
	2	第45土壙出土状況	104
	3	第56土壙出土状況	110
	4	第57土壙出土状況	112
		(四辻古墳群第6・7号墳)	
図版42	1	第6・7号墳調査前外観(北西から)	141
	2	第6・7号墳調査前外観(北東から)	141
図版43	1	第6・7号墳調査後外観(東から)	143
	2	第7号墳調査後外観(北から)	148
図版44	1	第6号墳調査区全景(南から)	144
	2	第6号墳調査区全景(東から)	144
図版45	1	第5号墳遺構配置状況145。	160
	2	第6号墳第3・4ピット出土状況	161
図版46	1	第5号墳內部主体出土状況	146
	2	第6号墳内部主体発掘状況	146
図版47	1	第7号墳第1~3主体	150
	2	第7号墳第4・5主体154~	~ 155
図版48	1	第7号墳第1主体出土状況	150
	2	第1主体土壙と棺の関係	150
	3	第1主体鉄器出土状況	
図版49	1	第2主体粘土槨発見	152
	2	第2主体粘土槨出土状況	152
図版50	1	第3主体出土状況	154
	2	第5主体出土状况	
図版51	1 ~	~3 第4主体出土状況	154
図版52	1	第1主体枕石出土状況	150
	2	第2主体枕石出土状況	
	3	第 4 主体枕石出土状況	
図版53	1	第1号住居址出土状況	
	2	第2号住居址出土状況	159
		(便木山方形台状墓)	
図版54	1	便木山方形台状墓外観(東から)	
٠.	2	便木山方形台状墓外観(西から)	
図版55	1	台状墓内部主体内一括土器群	
	2	台状墓内部主体出土状况	171
図版56	1	溝状遺構出土状況(西および南溝)	169

•

	2	溝底出土の土器群および土器棺K 1	169
図版57	1.	列石および土器棺K1出土状況	169
	2	列石出土状况	169
6 ·	3	溝底出土の一括土器片169・	175
図版58	1	土器棺K1出土状况	178
	2	土器棺K2出土状況	179
図版59	1	第1土壙発見状況165・	172
1.1	2	第 1 · 2 土壙出土状況······172 ·	173
図版60	1	第1土壙出土状況	172
4. 1	2	第 2 土壙出土状況	173
図版61	1	弥生式時代竪穴式住居址出土状況179~	-180
en en	2 .	平安時代土壙墓出土状況	179
1000		(宮山古墳群第4号墳・宮山方形台状墓)	
図版62	1	宮山古墳群第4号墳調査前外観(西から)	
x ** .	2	宮山古墳群第4号墳調査前外観(東から)	183
図版63	1	宮山第 4 号墳調査後外観(西から)	185
135 m	2	宮山第 4 号墳墳丘断面および台状墓上面	
図版64	1	宮山第 4 号墳葺石および台状墓全景	187
	2	宮山第 4 号墳葺石および溝状遺構	
図版65	1	葺石および埴輪片出土状況	
	2	葺石および須恵器出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
図版66	1	台状墓遺構出土状況	193
\$ ⁵⁰ .	2	第2 • 3 土壙出土状況	196
図版67	1	第 4 ~ 7 土壙出土状況196~	198
<u> </u>	2	第 4 • 5 土壙出土状況196~	197
S	3	第 5 土壙内一括土器片	197
図版68	1 ~	~ 3 第 3 土壙内土器棺K 1 出土状況	196
		(さくら山方形台状墓)	
図版69	1	さくら山方形台状墓外観	207
v. 1	2	さくら山方形台状墓遺構配置	210
図版70	1	溝状遺構内の石材	210
V j	2	第1主体出土状況	212
図版71	1	第 2 主体出土状況	214
	2	第2主体基部·····	214
図版72	1	第2主体石室石積み	214
	2	第2・3主体間鏡出土状況	214

(出 土 遺 物)

図版73	1	四辻峠台状墓出土石器53
	2	四辻土壙墓群出土一括石鏃 121
図版74	1	便木山竪穴式住居址出土石鏃 182
	2	四辻土壙墓群出土石鏃 121
	3	四辻第3号墳封土内出土石鏃66
図版75	1	四辻土壙墓群出土土器123~129
図版76	1	四辻土壙墓群出土土器 129
	2	便木山方形台状墓出土土器 175
図版77	1	宮山第 4 号墳出土家形埴輪 191
	2	宮山方形台状墓出土土器棺(K1) 198
図版78	1	四辻第5号墳出土形象埴輪片79
図版79	1	さくら山方形台状墓出土鏡 215
	2	さくら山方形台状墓出土管玉 215
	3	便木山方形台状墓出土玉類 175
	4	便木山方形台状墓出土鉄鏃 175
図版80	1	四辻土壙墓群第1土壙出土玉類 120
	2	四辻第1号墳出土玉類38・39
図版81	1	出土鏃器類64•121•156•41•64•147•79
図版82	1	出土須恵器49・188・189

調査の経過と環境

第1章 調査の経過

1. 序 説

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団、それは山陽町教育委員会で組織された調査団である。新住宅市 街地開発法にもとづく、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業と呼ばれる、住宅団地造成予定地内に 所在する埋蔵文化財のうち、記録保存と決定された遺跡を、岡山県の委託を受け、岡山県教育委員 会の指導のもとに発掘調査を実施する調査団である。

住宅団地造成予定地は、岡山市の北東に隣接する岡山県赤磐郡山陽町にある。東西、南北とも約1000m,造成面積約104ヘクタールの丘陵群である。この丘陵一帯は、当初は数基の古墳の存在が知られていたのみであったが、立木の開伐された時点、造成工事が開始された時点と分布調査のたびに、その遺跡数は増大して、現在では弥生時代集落址等の集落遺跡9、弥生時代土壙墓群、台状墓等6、古墳64と総計79遺跡にもおよぶ密集地帯となったのである。

発掘調査団は昭和44年10月に結成された。造成予定地内の埋蔵文化財の分布調査と、発掘調査にかかわる 諸準備期間をおいて、 昭和44年12月1日、 用木古墳群第3号墳から 発掘調査は開始された。 爾来すでに3か年半を 経過しようとしている。 その間に発掘した遺跡は、 弥生式時代集落址15,000㎡、土壙墓群および方形台状墓等6、古墳32基におよぶ。昭和45年秋からは、造成工事と併行しての調査である。

町村教育委員会で構成された弱体の調査団組織に加えて、造成工事の工期との関連もあって、発掘、発掘に明け暮れる毎日である。暑かろうが寒かろうが、雨さえ降らなければ現場にでて発掘作業を行ない、雨天の日には屋内で出土土器片の洗浄記名を繰り返す毎日である。

記録保存の発掘調査は、本来発掘調査-整理検討作業-報告書作成が1セットとなるべきもののはずである。しかし現実は、個々の遺跡の掘りあげるのを待ちかねるようにして、すぐ次の発掘調査契約が待ち構えているというきびしいものである。いわゆる整理作業とか、報告書執筆などの時間的余裕は、なかなか生みだせない。雨の日や休日、農繁期の作業の少ない時期を利用したり、夜少しづつの原稿を書きためていくなどして、やっと調査を追いかける現況である。そしてここに遅れ馳せながら、やっと第3集を刊行する運びとなったものである。

本書では,第4・5次契約にもとづく四辻古墳群および同土壙墓遺跡を中心としてとりあげたが 契約年次にこだわらず,これと類似する,宮山方形台状墓,便木山方形台状墓,さくら山方形台状 墓の3遺跡を加えて集録した。

調査にあたっては、岡山県教育委員会文化課ならびに関係各機関から、終始指導と協力をいただいた。また直接造成事業を担当する岡山県土木部住宅課から、理解と協力をいただいた。多くの研究者の方々からも、折りにふれて教示と叱咤激励を賜わった。なかでも恩師岡山大学教授近藤義郎

先生には多大の助言と鞭撻をいただいた。はじめに記して厚く感謝の意を表したい。

遺物の整理および実測にあたっては、岡山大学学生安川豊史君、石橋正樹君、近藤耕一君の3名,さらに遺構および遺物の評価と検討については、学友正岡睦夫君の真摯な助力と協力を得た。 共に謝意を表する。

しかしそれにも増して、私が今日あるのは山陽町教育委員会の同僚と、作業員一同の一体となった暖かい支援と励ましにおうところが大きい。なかでも生業を犠牲にしてまでも、献身的な協力をいただいた調査員則武忠直氏、作業長阿部政信氏には筆舌に尽せない支えとなっていただいた。こうした仲間達に守られて、はじめて調査は成り立つのである。ほんとうに私は幸せだと思う。深く感謝の意を捧げたい。

2. 調査の契機

昭和42年,岡山県では岡山県南地区新産業都市建設地内の,旺盛な宅地需要に対処して,低廉で しかも住環境の良好な宅地を大量に供給する目的をもって,県営の大規模住宅団地建設の計画が立 案された。

当初都窪郡早島町や総社市福井地区等が、候補地としてあげられていたが、用地買収の難航や文 化財の包蔵地であったりして流産した。候補地は二転三転して、当山陽町の東高月丘陵群に決まっ たのである。

昭和38年制定の新住宅市街地開発法にもとづいて、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業として、昭和44年6月11日、建設省告示第3072号によって都市計画決定を受け、開発計画は発足したのである。

住宅団地開発予定地となった,岡山県赤磐郡山陽町は,岡山市の北東に隣接する農村である。砂川流域に開けた約30㎢の埋積平地を中心に,まわりを低い山々で囲こまれた,のどかな田園地帯である。住宅団地はその山々の一角,東高月丘陵群に白羽の矢がたてられた。下市,岩田,和田,河本,熊崎,鴨前の6部落にまたがり,方約1㎞,面積104ヘクタールにおよぶ丘陵群である。そこは,国指定史跡両宮山古墳をはじめとする高月遺跡群の後背地にあたり,多くの研究者からは埋蔵文化財の包蔵地として注目されていた地域であったのである。

しかし、住宅団地開発計画が立案された時点では、1965年岡山県教育委員会発行の「岡山県遺跡地図」には計9基の古墳の記載であった。 "この程度なら緑地帯等に取り入れて現況保存も可能"と、土地買収が先行したのである。

住宅団地のマスタープランは、昭和43年一応まとめられ、同年秋から試案にもとづき、岡山県教育委員会と、山陽町教育委員会による事前の埋蔵文化財分布調査が行なわれた。その結果、当該地内に古墳37基、弥生式時代集落遺跡2か所が発見されたのである。

事業当局である 岡山県土木部と 岡山県教育委員会を中心とする 関係機関で この資料をもとに, "開発と文化財保護の調和"を求めて協議が繰り返された。熊崎古墳群 4 基のように造成予定地からはずしたり,団地内自然公園に取り入れて,現状保存に努めた。しかし住宅団地造成上,技術的に保存の困難な遺跡については,止むなく発掘調査による記録保存の処置を行なうこととなった。 上記39遺跡は、現状保存21遺跡、記録保存18遺跡に振り分けられたのである。

ところが、山林が伐採され丘陵群が裸となった段階での分布調査によって、弥生式時代を中心とする集落址7か所、古墳8支群65基とその数は増大したのである。その都度協議は繰り返され、土木部は大小6回にわたる設計変更と、一部地区の除外を決めたのである。保存のための努力はこうして尽されたが、用地買収をはじめ、諸設計が決定した後では、資本投資の関係もあり、大きな設計変更は、実際問題として不可能に近い。なににもまして、事前の精密な分布調査の重要性を痛感させられた次第である。

後日談となるが、現在では造成工事中発見を含めて、当該地内の遺跡数は、集落址9遺跡、墳墓 遺跡70基と計79遺跡におよび、そのうち保存決定遺跡29、保存協議中遺跡5遺跡となり、現況保存 率は低下の一途をたどる。

当該地内の埋蔵文化財の取り扱いおよび発掘調査に関しては、岡山県教育委員会教育長と岡山県 土木部長との間に取り交わされた、阳和44年5月24日付、山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項、および、昭和45年5月1日付、山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項細目協議書にもとづいて実施されることとなった。

発掘調査は、原則として集落遺跡を岡山県教育委員会文化課が、古墳等墳墓遺跡を、岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が担当することとなった。

山陽町教育委員会では、調査予定の古墳が30基を越え、調査期間が長期にわたるため、数次に分けて契約をすることとし、昭和44年12月1日、用木古墳群第3号墳の発掘調査を皮切りに、今日 にいたるのである。

山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項

岡山県教育委員会教育長(以下「甲」という。)および岡山県土木部長(以下「乙」という。)は, 乙の計画する山陽新住宅市街地開発事業(以下「事業」という。)施行に伴なう埋蔵文化財包蔵地の 取扱いについて,次のとおり取り決める。

(総則)

第1条 乙は事業施行にあたり文化財保護の趣旨を尊重し、甲は事業施行が円滑に行なえるよう協力するものとする。

(事業施行前の協議)

第2条 甲および乙は事業施行前において次の各号に掲げる項目について別添図示を目安として, 可及的すみやかに協議を終了するものとする。

- 1. 事業区域から除外するもの
- 2. 事業区域に含めるが、公園、緑地に取り込むなどにより保存を図るもの
- 3. 発掘調査を行なって記録を保存するもの

(事業施行中に埋蔵文化財包蔵地を発見した場合の協議)

第3条 乙は事業施行中に埋蔵文化財包蔵地を発見したその取扱いについては、甲と協議のうえ措置するものとする。

(発掘調査)

- 第4条 1. 前2条の協議の結果,埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は甲または甲が指定するものに委託して実施する。
 - 2. 前項の発掘調査に要する経費については、甲、乙協議のうえ負担区分に応じて負担するものとする。

(協議の決定)

第5条 この確認事項に定めのない事項または疑義の生じた事項については、甲,乙協議のうえ決 定するものとする。

昭和44年5月24日

甲 岡山県教育委員会教育長 篠井 孝夫〔印〕

乙 岡山県土木部長

高橋 光〔印〕

山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項細目協議書

岡山県教育委員会教育長(以下「甲」という。)と岡山県土木部長(以下「乙」という。)は、昭和44年5月24日付けで甲と乙との間で取り決めた山陽団地の文化財取扱いに関する確認事項(以下「確認事項」という。)の実施細目について次のとおり決める。

第1 発掘調査の実施者(確認事項第4条第1項)

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査については、原則として古墳の発掘調査は山陽町に委託して実施することとし門前池附近弥生遺跡の発掘調査は、甲が直接実施するものとする。

第2 発掘調査に要する経費の負担区分(確認事項第4条第2項)

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査費は、乙において負担するものとする。ただし山陽町に委託して実施する発掘調査の一般指導旅費は、甲において負担する。

第3 発掘調査実施計画書の作成

山陽団地内の埋蔵文化財発掘調査を行なう場合、発掘調査実施計画書を作成し、甲、乙協議して 発掘調査に必要な事項を定めるものとする。

昭和45年5月1日

甲 岡山県教育委員会教育長 篠井 孝夫〔印〕

乙 岡山県土木部長

佐藤 昇〔印〕

3. 調 査 組 織

住宅団地造成予定地内の古墳発掘調査を担当することとなった山陽町では、町教委、町文化財保護委員会を中心に、関係機関代表をもって、山陽団地埋蔵文化財調査委員会を組織して、調査を推進することとした。直接発掘調査を担当する調査団は、県教委から町教委へ派遣された専従調査員を中心に、町内在住者で山陽団地埋蔵文化財発掘調査団を構成した。

用地内埋蔵文化財の発掘調査委託契約,造成工事工期と調査遺跡の選定および調査期間等の調整,県教委直営の発掘調査団との調整等,発掘調査にかかわる事務的折衝および連絡機関として,

県土木部住宅課、県教委文化課、山陽町教委の担当職員で三者協議会を設置した。

埋蔵文化財の調査に関する考古学上の専門的な諮問機関として、当初山陽町教委は独自の立場から、山陽町教委教育長名で県内研究者の方々のなかから、9名の諸先生を山陽団地埋蔵文化財調査委員会参与として委嘱し、その指導と助言をあおぐこととした。昭和47年度になって、県教育長より岡山県遺跡保護調査団から推選いただいた、諸先生方に委嘱した、山陽団地埋蔵文化財保護対策委員会が発足したので、町教委委嘱の参与の会は解散し、対策委員会に統一して諮問をお願いすることとした。参与の会は昭和45年1月発足以来昭和47年5月解散までの間に4回、また対策委員会は現在までに2回開催されたにすぎない。実質的な審議とはほど遠く且つ問題点も多い。このことについては次の報告書において、言及し明らかにしたい。結果として各委員の諸先生方には、多大の迷惑をおかけしたこととなり、心苦しく思うものである。

各組織の構成員は下記のとおりである。調査が長期にわたるため、調査委員会、調査団ではその間に若干のメンバーの交替があった。今回は、本報告書に集録した四辻古墳群等の調査当時、すなわち、昭和46年度の構成員を中心に記名した。

山陽団地埋蔵文化財調査委員会参与

山陽町教育長委嘱

昭和45年1月5日~昭和47年5月20日

今 井 堯(津山市教育委員会主事)

岡 本 明 郎 (岡山県立西大寺高校教諭)

鎌 木 義 昌(岡山理科大学教授)

角 田 茂(瀬戸中学校教諭)

長 光 徳 和 (岡山県文化センター主任)

西 川 宏(山陽学園教諭)

春 成 秀 爾(岡山大学助手)

問 壁 忠 彦 (倉敷考古館副館長)

三 杉 兼 行(甲浦郵便局長)

(アイウエオ順,職名は昭和45年1月委嘱当時)

山陽団地埋蔵文化財保護対策委員

岡山県教育長委嘱

旧和47年5月設置

鎌 木 義 昌(岡山理科大学教授)

近 藤 義 郎 (岡山大学教授)

角 田 茂(瀬戸中学校教諭)

土 井 秋 夫 (瀬戸町文化財専門委員)

西 川 宏(山陽学園教諭)

春 成 秀 爾 (岡山大学講師)

問 壁 忠 彦(倉敷考古館長) 三 杉 兼 行(甲浦郵便局長) (アイウエオ順)

山陽団地埋蔵文化財調査委員会

昭和44年10月1日設置

				就任	退任	役職
小	坂	寿	徳	S 44.10.1	S 46. 9.30	教育委員長
青	井		武	"	<u>.</u>	町議会議長
明	石		巌	"	S 48. 3.15	町議会文教委員長
生	本	Œ	義	"		町助役
则	武	忠	直	"		町文化財保護委員長
測	洲	政	信	S 44.10.1		町文化財保護副委員長
花	房	長	男	"		町文化財保護委員
本	郷		連	"	destroyers	町文化財保護委員
湯	本	堅	志	"	yakili mada	町教育委員→教育長
F	永	Ŧī.		"	S47. 9.30	町教育長
小	坂		伝	"	S44.12.27	和田区長
横	囲	民	治	"		岩田区長
山	本		寬	"		河本区長
社	甦	Ξ	郎	S 45. 1.1		和田区長
Ш	藤	:	二生	S 46. 4.1	S48. 3.31	鴨前区長
藤	原	和	太	//	-	下市区長
岡	野		猛	"	S47. 3.31	熊崎区長
小	坂		患	S 46.10.1	S48. 3.31	町教育委員長
犬	餇	正	利	S 47. 4.1		熊崎区長
岩	本		單	S47.10.1		町文化財保護委員
河	田		弘	S 48. 4.1		町教育委員長
坂	内	紀	八	S 48. 4.1	-	鴨前区長

山陽団地埋蔵文化財発掘調査団

昭和44年10月20日結成

昭和47年4月1日現在構成員

調 查 主 体 者 山陽町教育委員会

発掘調查団長 中 永 五 一(山陽町教育長昭和47年9月退任)

/ 湯本堅志(山陽町教育長昭和47年9月就任)

調 査 主 任 神 原 英 朗(山陽町教育委員会指導主事)

調 査 員 則 武 忠 直(山陽町文化財保護委員長)

調 査 補 助 員 太田耕一(山陽町教育委員会主事補)

〃 国安敏樹(〃)

作 業 長 阿 部 政 信(山陽町文化財保護副委員長)

同上補佐 植田 臣 山本 富

作業員井上政男岩本竹志入江忠一尾上弘治

山 吹 三 一 山 本 高 男 阿 部 茂 子 阿 部 美枝子

阿部春恵 阿部芳恵 石原竹子 井上節美

井 上 初 遠 藤 操 鎌 田 八重子 小 坂 弘 江

小 坂 光 子 中 務 佐登江 社 寿 子 社 百 枝

社 芳江 横田可奈子 横田正子

事 務 局 長 花 房 清 志 (山陽町教育委員会主査)

4. 調査の経過

今回の発掘調査は、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう、山陽団地埋蔵文化財発掘調査第4・5次委託契約にもとづいて、岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が実施した、四辻古墳群7基、四辻土壙墓群2遺跡を中心としたものである。しかし、その後の契約によって発掘調査した遺跡のうち、本土壙墓群等と関連の深い、宮山方形台状墓、便木山方形台状墓、さくら山方形台状墓の3遺跡については、契約年次にこだわらず、本報告書に集録した。第4・5次契約による調査期間は、昭和46年1月1日~昭和46年10月31日であるが、他遺跡個々の契約年次および実質調査期日は、一覧表に示したとおりである。

各々の契約については、一応発掘調査終了後の、 遺物の整理および 調査概報作成等の 期間もみて、かなりの余裕をもっているかのようであるが、 現実には、住宅団地の造成工事と併行しての発掘調査であるために、 掘りあげが終るのを待ち構えるようにして、 すぐ次の契約を重複して結ぶというようにきびしいものである。

第1・2次契約

調查期間 昭和44年11月1日~昭和46年3月31日

調査遺跡 用木古墳群16基のうち12基

第3次契約

調查期間 昭和45年10月1日~昭和46年7月31日

調查遺跡 便木山遺跡, 岩田第3 • 5号墳, 惣図遺跡第1地点

o 第 4 · 5 次契約

調查期間 昭和46年1月1日~昭和46年10月31日

調查遺跡 四辻古墳群7基,四辻土壙墓群2遺跡

○第6次契約

調查期間 昭和46年7月1日~昭和47年3月31日

調查遺跡 惣図遺跡第2地点,便木山方形台状墓,大久保遺跡

○第7次契約

調查期間 昭和46年10月1日~昭和47年3月31日

調査遺跡 宮山古墳群第4号墳,用木山遺跡第1地点

○第8次契約

調査期間 昭和47年4月1日~昭和48年3月31日

調査遺跡 用木山遺跡第2・3地点

さくら山遺跡第1地点, 中池遺跡

。第9次契約

調査期間 昭和48年4月1日~昭和49年3月31日

調査遺跡 さくら山遺跡第2地点, 愛宕山遺跡

発掘調査の委託期間は重複し合い、現実には、整理および報告書作成の時間が犠牲となった。また個々の遺跡の発掘調査も、住宅団地造成工事と併行するため、その工期の都合等によって、こま切れの調査となり、そのたびに個々の遺跡の完掘を終らないままに、他の遺跡の発掘を行なうといったことの繰り返しで、時間的にも精神的にも、また身体的にも大きな負担を余儀なくされた。

また、県教育長と、県土木部長との間に取りかわされた、細目協議書によって、集落址調査を行なっていた、県文化課直営の調査団は、山陽新幹線、中国縦貫自動車道建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査のために、当山陽町から引き上げた。したがって、本住宅団地内の埋蔵文化財発掘調査が2パーティで併行した期間は、昭和45年6月1日から、昭和47年3月31日の、19か月間にすぎない。そして、現在は山陽町教委調査団のみで、この膨大な遺跡群の調査を背負わされ、掘り続けているのである。

個々の遺跡の発掘調査の経過については、本書のスペースの関係もあり省略する。各遺跡の調査 を行なった期日を一覧表によって示すこととする。なお今次契約と事実上重複した、前後の調査に ついても併記した。

① 便木山遺跡 昭和45年9月7日~昭和45年10月12日

昭和45年11月11日~昭和45年11月26日

昭和46年3月27日~昭和46年4月16日

② 岩田第3号墳 昭和45年10月13日~昭和45年11月10日

③ 岩田第5号墳 昭和45年11月27日~昭和45年12月17日

④ 惣図遺跡第1地点 昭和45年12月20日~昭和46年1月2日

昭和46年4月21日~昭和46年5月25日

⑤ 四辻第2・3号墳 昭和46年1月19日~昭和46年2月26日 ⑥ 四辻第5号墳 昭和46年2月1日~昭和46年3月26日 同土壙墓群 昭和46年4月17日~昭和46年4月20日 ⑦ 四辻第6 • 7 号墳 昭和46年5月26日~昭和46年6月16日 昭和46年6月17日~昭和46年7月10日 ⑧ 四辻第1号墳同台状墓 ⑨ 惣図遺跡第2地点 昭和46年7月10日~昭和46年10月10日 ⑩ 便木山方形台状墓 昭和46年10月10日~昭和46年11月12日 ⑪ 大久保遺跡 昭和46年11月13日~昭和46年12月12日 ⑫ 宮山第4号墳 昭和46年12月13日~昭和47年2月14日 ⑩ 用木山遺跡第1地点 昭和47年1月6日~昭和47年3月25日 昭和47年4月12日~昭和47年4月19日 @ 中池遺跡 昭和47年3月27日~昭和47年4月13日 ⑤ さくら山遺跡第1地点 昭和47年5月1日~昭和47年6月30日 さくら山方形台状薬 ⑩ 用木山遺跡第3地点 昭和47年7月25日~昭和47年11月3日 ⑩ 用木山遺跡第2地点 昭和47年4月20日~昭和47年4月30日 昭和47年6月9日~昭和47年7月25日 昭和47年10月18日~現在進行中

以上のように、毎日が発掘調査に明け暮れる連続である。調査現場のすぐ近くを、ブルドーザやスクレーパー等の重機が行き交い、平板測量の際のメーター続みの声も聞きとれないほどの響音と写真撮影にも支障をきたすほどの土ほこりの中での作業である。朝通って登った道が、午後にはなくなって面喰らったり、発破作業のたびに作業員を避難させなくてはならない等の、時間的、精神的な負担も大きいのである。

第2章 地理·歷史的環境

1. 地理的環境

山陽町は、岡山市の北東に隣接する農村である。まわりを 100m級の低い山々で囲まれ、その中央を北から南へ貫流する砂川の流域に発達した、約30kmの埋積平地を中心として成立している。ことは吉備高原の南縁から、岡山平野への漸移地帯にあたる地域でもある。

砂川下流の瀬戸町からさかのぼると、船廻りで狭隘な谷をつくっている。そこから北は急にひらけて、広々とした低地がよこたわる。しかも周囲を山地にかこまれて盆地を形成しているのである。そのため、この盆地に入るには、狭隘な谷か、峠道をたどって山越えを余儀なくされる、一つのまとまりをもった単位地域を構成しているのである。盆地の中央を北から南に流れる砂川は、小

規模な小川である。したがって、川の大きさの割合にしては、この平地はあまりにも大きく、盆地 床の沈下に伴なう埋積谷を想定する説が有力である。風化しやすい花崗岩山地を流下する砂川は、 勾配比の小さい谷を埋積して谷底平地を形成したのである。

まわりをとりかてむ丘陵群は、複雑に開析されて巾狭な馬背尾根となっているが、その稜線はなだらかで、山頂付近まで開畑されて桃、ぶどうを中心とした果樹園や、放牧場が営なまれている。 しかしその谷に向う斜面は山麓まで概して急斜面で、松林が多い。少ない雨量と地形的な制約から 侵食谷の入り口をふさいだ溜池の分布が目立つ。両宮山古墳の周湟なども溜池に利用されている。 竜王山等雨乞儀礼に関係ある山もある。

当地は気候も温暖で、風水害による被害も少なく、盆地内には4か所にのぼる条里制が敷かれていることが物語るように、肥沃な耕地に恵まれ、古くより緑豊かな農村であったのである。

しかし最近の土地開発の波は、この静かな山合いの、のどかな田園地帯にもなだれのように押し寄せてきているのである。当山陽住宅団地もさることながら、東の熊山町にまたがる丘陵地 500へクタールにおよぶ、東岡山ネオポリス(住宅団地)、西山地区のゴルフ場計画、山陽高速自動車道等々枚挙のいとまもない程である。そのたびに山の木は切られ、丘陵は削りならされ、自然環境は大きく改変されるのである。文化財はもとより、植生、生物なども大きな影響はまぬがれないであろうし、村そのものの経済構造も大きく変えられようとしているのである。

2. 歷史的環境

砂川流域に開けた埋積平地を中心として成立する当山陽町には、数多くの埋蔵文化財が集中的に 所在する。末だ十分な分布調査が完了しておらず、現在岡山県埋蔵文化財分布調査5か年計画の一環として、分布調査を進行中である。次期においては集計して報告できると思われるが、今次はそ の大要を記して、その責を果したい。

当山陽町における最古の遺跡は、縄文式時代晩期に逆のぼる。埋積平地南縁の南方部落の山裾にある南方前池遺跡(図1-1)がそれである。前池と呼ばれる農業灌漑池底から発見された縄文式時代晩期から弥生式時代前期にかけての遺跡である。なかでも縄文式時代終末期の食物貯蔵穴が多数検出され著名となっている。

埋積平地のほぼ中央部砂川自然提防の東にあたる,現山陽小学校敷地に,遠賀川式土器を伴なう弥生式時代前期の集落址(図1-2)が存在する。

また平地を取り囲む丘陵の斜面から山麓台地一帯にかけて、広い範囲にわたって、弥生式時代中期から奈良・平安期にかけての土器片の散布、集落址が発見されている。これらの遺跡は概して、弥生式時代中期中葉から後期初頭にかけてのものが、谷頭に面した丘陵尾根および斜面の高所に集中し、弥生式時代後期以降は、山麓部の平地との接点に集中する。こうした谷口や山麓微高地の集落は、広い範囲にわたるものが多く、大きいものでは遺跡範囲が 60000㎡におよぶものもある。なかでも、岩田大池遺跡、門前池遺跡、鴨前遺跡(図1-3・4・5)において顕著である。

古墳をはじめ墳墓の分布も密度が高い。平地の一角と、まわりを取り囲む山々の麓や、そこから のびる小丘陵の上に大小多数の古墳が分布する。平地の南西部には、国指定史跡で水をたたえた周 湟をめぐらす全長 192mの前方後円墳, 両宮山古墳を中心に, 森山古墳, 廻り山古墳, 茶臼山古墳, 朱千駄古墳, 小山古墳等の大型古墳を特色とする高月古墳群(図1-6)が, 水田中や山麓に群在する。

両宮山古墳の後背地でもあり、今次住宅団地の造成が行なわれている東高月遺跡群には、四辻土 壙墓群(弥生式時代中期)宮山台状墓(弥生式時代後期)便木山遺跡(酒津式併行期)等土壙墓を 中心とした墳墓遺跡 6 基と、それに引き続く用木古墳群をはじめ、前半期古墳を中心とした64基の 古墳(図 1 - 7)が所在する。

町内北西部西山地区を中心とした地域は、一部隣町の赤坂町鳥取上にまたがるが、前方後円墳4基を含む、方墳・円墳約40基からなる西山古墳群(図1-8)が構成されている。内部主体も、土壌、粘土棉、土器棺、箱式石棺、横穴式石室。また陶棺も土師質、須恵質とバラエティーに富む。中でも吉原古墳群第6号墳は昨秋盗掘被害を受け、青銅鏡2面を出土した。また鳥取上高塚は前方後円墳で巨大な横穴式石室を有し、両宮山古墳の西方約3kmの岡山市牟佐に所在する牟佐大塚の横穴式石室(全長18m)と対比の上で興味深いものである。

中東部高陽地区には、丘陵頂および山麓部に群在する約20基の小形円墳からなる高陽古墳群(図1-9)がある。

この地域は、旧山陽道の通過地にもあたり、埋積平地の西端部岡山市に通じる狭隘な谷あいに、高月馬屋の地名が残る。西の総社市周辺とともに、古代吉備の国の中心の一つでもあった地域である。両宮山古墳の西に接して、方2丁四方の備前国分寺址(図1-10)が所在する。現在は水田となっているが、田の畦の石垣に礎石の一部と、布目瓦が散見される。また国分寺址の南約200mの仁堂池底には、かつて国分尼寺(図1-11)が建立されていたと伝えられ、池底に瓦片が散見される。近年国分寺址内に、宅地造成が行なわれたり、仁堂池が道路予定路線に含まれる等、文化財の保護行政のあり方が問われる時である。埋積平地の水田地帯には、高月、西山、高陽と条里制の跡も明瞭に残り、鳥取の庄の庄園の跡もある。

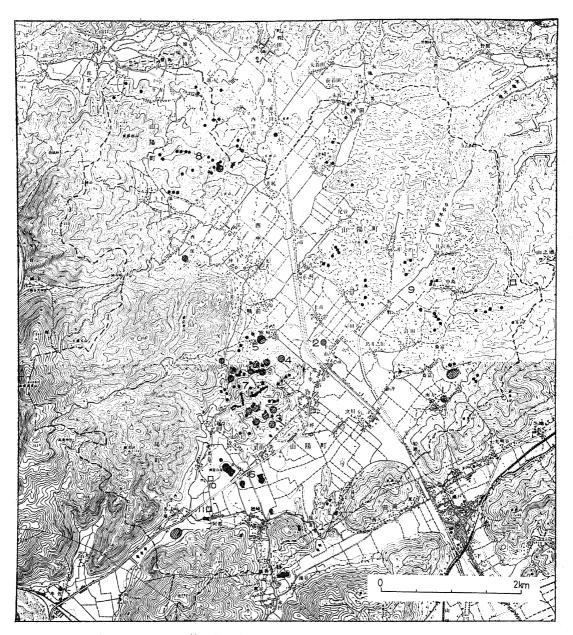
したがって,一単位地域内において,縄文式時代から,歴史時代にいたるまで,各時代を通じて の資料を見聞できる村である。

3. 造成地内の埋蔵文化財

当該地における埋蔵文化財の所在については、両宮山古墳をはじめとする高月古墳群の後背丘陵地でもあり、かなりの数の遺跡の分布は、以前から予想はされていた。しかし、全山立木が繁り、精密な分布調査が困難なこともあって、充分な踏査が行なわれていない地域でもあった。造成のための土地買収が行なわれ、立木が切り開かれ、また工事の進行に伴なって、当初の予想をはるかに上まわる数の遺跡が発見確認された。

住宅団地造成予定地内の遺跡は、現在では分布図(図2)および遺跡一覧表(表1)に示したごとく、弥生式時代集落址9か所、土壙墓群および台状墓6、古墳7支群64基の計79遺跡が確認されている。

集落址は、当初開畑されて地肌が露出している地点や道路等によって崖状に断面が露出している



第1図 山陽町遺跡分布図

- 1 南方前池遺跡
- 2 下市遺跡
 - 3 東高月遺跡群
 - 4 熊崎遺跡
 - 5 鴨前遺跡
 - 6 両宮山古墳群

- 7 東高月古墳群
- 8 西山古墳群
- 9 高陽古墳群
- 10 備前国分寺址
- 11 備前国分尼寺址(伝)



第2図 住宅団地造成地内遺跡分布図

部分について、散見される土器片や遺構をもとに、その地点でとに遺跡としてチェックしたため、9か所と遺跡数を多く登録したが、調査が進むにつれて、お互に関連を持ち本来広範囲にわたる同一遺跡となるものもあるように思われる。

用木山遺跡(Y 8)惣図遺跡(Y 7)のように、標高90mから60mの高所の丘陵尾根および斜面に所在する集落址は、弥生式時代中期中葉から後期初頭までと、一時期を限っての遺跡である。中でも用木山遺跡は常識では考えられない程の急傾斜面に、階段状に地形を削平整地して、竪穴式住居址群を構成する特異な形態を示す。現在調査進行中であるが、目下7段に造成されている。岩田大池遺跡(Y 1)、門前池遺跡(Y 2)、ヤケ池遺跡(Y 3)等の丘陵麓、谷口等埋積平地との接点にあたる地域の集落址は、遺跡範囲も広大となり、弥生式時代後期、古墳時代、奈良・平安時代と各時代の遺跡が複合するようである。岡山県教育委員会文化課が直営で行なった第2地点(Y 3

古墳群 名 称 墳 形 径 (m) 高 (m) 保存度 保 存 調 査 ンとの	施設
A-1 円 墳 31.0 5.0 ○ 中心 2 " (22) (3.0) ○ 小 月 3 前方後方墳 43.0 4.0 ○ 小 4 方 墳? (25.0) (4.0) ○ ○ 木 6 前方後円墳 37.0 4.0 ○ ○ 方 " 24.0 1.2 ○ 公 小 古 8 円 墳 14.0 1.2 ○ 小 今 5 " (6.0) ? △ ○ "	学校 葺石 幸石 公園 葺石 本園 全校
月 2 " (22) (3.0) ○ 「 " 小当 4 方 墳? (25.0) (4.0) ○ ○ 小当 木 6 前方後円墳 37.0 4.0 ○ ○ 児童 7 " 24.0 1.2 ○ ○ 幼科 B 円 墳 14.0 1.2 ○ 小 ○ 小 9 ? (6.0) ? △ ○ " 10 ? (6.0) ? △ "	学校 葺石 幸石 公園 葺石 本園 全校
用 3 前方後方墳 43.0 4.0 ○ 小 当 4 方 墳? (25.0) (4.0) ○ ○ ○ 小 当 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	登 単石 単石 単園 単樹
本 方 墳?	登 単石 単石 単園 単樹
木 5 " 12.0 0.8 ○ ○ ○ 児童 7 " 24.0 1.2 ○ ○ 少 分 古 8 円 墳 14.0 1.2 ○ ○ 小 今 9 ? (6.0) ? △ ○ " 10 ? (6.0) ? △ "	生園 2
本 6 前方後円墳 37.0 4.0 ○ □ 児童 分 和 14.0 1.2 ○ □ 小 当 14.0 1.2 ○ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □	生園 2
古 8 円 墳 14.0 1.2 〇 幼稚 9 ? (6.0) ? △	生園 2
古 8 円 墳 14.0 1.2 〇 小	学校
	1
1 HZ	1
15 円 墳 15.0 1.5 〇 ?	
16 " 13.0 1.5 0 0 ?	
宮 B−1 円 墳 17.0 2.3 △ ○	地
宮 B-1 円 墳 17.0 2.3 △ ○ 緑 山 古 2 " 15.0 1.0 ○ ○ ポ 15.0 1.5 ○ ○ " " 15.0 1.5 ○ ○ " " 15.0 1.5 ○ ○ " " 15.0 1.5 ○ ○ " " 15.0 1.5 ○ ○ ○ " 15.0 ○ ○ □ 1.5 ○ ○ □ □ □ □ □ □ □ □	,
群 4 方 墳 15.0 1.5 △ ○ ″	
C-1 円 墳 11.0 1.2 ○ ○ 近隣2	A EE
	1
	シスト
20.0	
#F 0.0 0 "	
愛古 D-1 台 状 墓 48.0 1.0 O 建壳5	予譲 弥生かも?
石琪 2 円 墳 13.0 0.8 0 0 / //	
山群 3 " (10.0) (0.5) 〇 "	
E-1 円 墳 17.0 2.0 × 〇 "	
	1 1781
3 方 趙 180 15	
H 4 H 10 B	ハニワ,葺石
古 5 古典 2 13.0	地
14 6 円 排 25.6 1.5 0 道	路 列石竪穴石室
7 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	
群 8 8 9 10 10 10 10 10 10 10	"
*	过地 //

古墳群	名 称	遺 形	径 (m)	高 (m)	保存度	取 扱	区分	マスタープラ	備考
口項和	177 1/2.	,,,,	(11-)	11-0 ()	PN 13 22	保存	調査	ンとの関係	, anv
岩古	E-11	円 墳			×		0	分譲宅地	横穴式石室
墳	12	" "	_		×		. 0	"	"
田群	13	"			×		0		. "
	F-1		18.0	2.0	0		0	"	
四	2	"	9.0	1.0	×		0	"	組合石棺
辻	3	"	9.0	2.0	×				
古	4	"	9.0	1.0	×		×	".	
墳	5	"	15.0	1.5	0		0	"	: '
群	6	"	15.0	1.2	0		0	111	
	7	"	15.0	1.2	0		0	"	
	G-1	円 墳	9.5	1.0	0	0.		児童公園	
便	2	"	15.0	1.5	0	0		"	· ·
木	3	"	16.0	2.0	0	0		"	組合石棺
	4	"	8.0	0.8	0	0.		集合住宅	1 mm
Щ	5	"	12.0	1.0	0	0		"	
古	6	"	8.4	0.8	0	0		","	
墳	7	"	12.0	2.0	Δ	0		"	ハニワ
	8	台状墓	16.0	1.0	0	0		"	5"
群	9	円 墳	11.0	0.8		0		"	L# +
	11	"	?	?	×		×	?	横穴式石室

	遺 跡	名	立 地	取 扱保 存	区分調查	備考
土方 遊形 墓状 墓 跡	四 辻 土 壙 墓 群 四 辻 峠 台 状 墓 便 木 山 遺 跡 宮 山 方 形 台 状 墓 便木山方 形 台 状 墓 でよ山方 形 台 状 墓	F-8 $F-1$ $G-10$ $G-12$ $B-4$ $E-10$	丘 陵 尾 根 " " " "	0 -	000000	71土壙,中心に方形台状墓 方形台状墓,7土壙 42土壙,6土器棺 2方向に溝,現状保存 7土壙 3小石室,3方に溝
集落	岩 田 大 池 遺 跡 門 前 池 // ヤ ケ 池 // 中 池 // 取 山 //	Y-1 2 3 4 5	丘 陵 裾 舌状丘陵・谷頭 丘 陵斜面	O Δ Δ	Δ Δ Ο	弥生集落址 弥生~古墳時代集落址(竪穴住居址) " 弥生包含層,弥生土器散布 弥生墓地?
址	大 久 保 // 惣 図 // 用 木 山 // さくら山 //	6 7 8 9	丘陵尾根		0000	ッ 弥生集落址(竪穴住居址検出) 集落址 ッ

のうち、門前池と縄文寺池の間の谷水田部)では、弥生式時代後期の竪穴式住居址とともに、平安時代の建物群が検出されて注目された。

土壙墓を中心とする墳墓遺跡は、四辻土壙墓群 (F8) は標高89mの丘陵頂に71土壙、3土器棺で構成される弥生式時代中期中葉から後半にかけてのものであり、宮山台状墓(B4)は弥生式時

代後期初頭,便木山方形台状墓 (G12) は,同後期終未,便木山遺跡 (G10) は41土壙6土器棺で構成され酒津式併行期と,各時期にわたる墳墓遺跡であり,用木古墳の定形化する古墳への橋渡しとなるものである。

古墳は門前池、中池を含む谷水田を抱きかかえるようにのびる丘陵尾根稜線に集中する。この谷水田の谷頭正面にあたる、四辻峠と呼ばれる丘陵尾根を中心に四辻古墳群7基,そこから北東に下降する舌状丘陵尾根に、便木山古墳群10基,それに対応して谷水田を渡って西丘陵尾根およびその支脈尾根に、用木古墳群16基、野山古墳群12基、愛宕山古墳群3基、宮山古墳群4基が群在する。用木山から西面する斜面には横穴式石室を中心とした、古墳群8基および尾根支脈突端部に点在する岩田古墳群4基があって、古墳総数は計64基となる。

古墳は、用木古墳群に代表されるように、前期古墳の特徴をもつものが圧倒的に多く、かつ盗掘 被害等も少なく、保存度の良好なことが特筆される。

集落址の調査等,丘陵全面広範囲にわたっての表土層を剝土して調査が進むにつれて,土師器甕を合せ口にした土器棺,須恵質蔵骨器,鎌倉時代灯明皿を伴出する土壙墓等も検出されたり,鍛冶炉址が発見されて注目されている。

·註

(1)昭和46年度岡山県教育委員会文化課調査,報告書近刊の予定

四辻古墳群第1号墳四 辻 峠 台 状 墓

第1章	序 説
第2章	立 地
第3章	調査前の概況 32
第4章	遺跡の概要32
第1節	四辻古墳群第1号墳32
第2節	四辻峠台状墓44
第5章	まとめ 54

四辻古墳群第1号墳 • 四辻峠台状墓

第1章 序 説

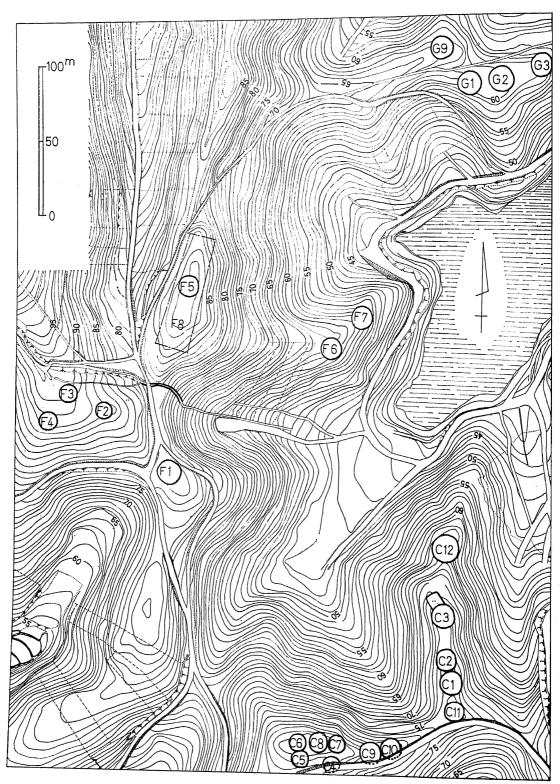
四辻古墳群第1号墳(略記号F1)は、岡山県赤磐郡山陽町大字和田小字別所 522-1番地に所在する円墳である。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう住宅団地造成工事のため、発掘調査の対象となった。 発掘調査は、岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が実施することとなり、昭和46年6月17日に開始し、昭和46年7月10日に終了した。

調査の結果、本古墳の墳丘直下が、さらに台状の高まりをもち、地山を掘り込んでつくられた、 土壙墓群が発見された。これらは、遺構の特徴から推察して、弥生式時代の所産と考えられる。す なわち、弥生式時代の台状墓の立地をそのまま利用して、その直上にさらに古墳を築造した二時代 にわたる複合遺跡である。

住宅団地造成予定地内には、本古墳と同様弥生式時代と複合するものとして、別稿の四辻古墳群第5号墳、宮山古墳群第4号墳があり、また土壙墓群としては便木山遺跡が知られている。しかし便木山遺跡、四辻第5号墳は、発掘調査終了後造成工事の進行に伴なってすでに削平され、今はもう存在しない。本古墳および宮山第4号墳もやがて同様の運命をたどるのである。

こうした遺跡は、当地方においても、いまだ発見例が少なく、貴重なものである。山陽町教育委員会では、その重要性にかんがみ、せめて一か所のみでも、現状保存をすべきであるということとなり、発掘調査終了後ただちに、岡山県教育委員会文化課と協議して、施工主体者である岡山県土木部にその旨を要請した。岡山県土木部は、本古墳周辺部を含めて、造成工事を一時中断して凍結し、保存を前提としての検討が重ねられた。協議は、県土木部、県教育委員会文化課、および山陽町教育委員会の三者で数次にわたっておこなわれたが、住宅団地造成工事施行上、技術的にも現状保存は困難であるとの結論となり、昭和47年5月24日、工事は再び開始され、本古墳も他遺跡と同様、その姿を永久に消した。発掘調査終了後、わずか10カ月の延命となったのみである。保存協議の対象となって、現場は一時凍結されたとはいえ、その他の地区は当初のマスタープランのとおりに工事は進められる。干数百年の風雪にたえてきた遺跡にとっては、10カ月はきわめて短かい期間であり、最新の重機械による開発工事は、その間に目を見張る程の作業実績をあげる。凍結場所境界線ぎりぎりまで工事は進行し、既成事実として厳存するのである。こうなっては遺跡の現状保存は望めないのも道理である。

多くの支脈をもって広がる緑豊かな丘陵のいただきに君臨していた木古墳も、山を削り谷を埋めつくす宅地開発の工事により、標高82mから69mへと、ひとおもいに丘陵ごと削りおろされたのである。今は幾何学的な階段状に造りだされた住宅団地となり、かつての谷や丘はもう目の前には浮びあがってはこない。 行政上の地名も それに伴なって 割り変えられ、 名実ともに消滅したのである。



第3図 四辻古墳群周辺地形図

四辻古墳群第1号墳と、四辻峠台状墓とは、本来ならば別個の遺跡である。報告も稿を改めて行なうべきものであるかも知れないが、同一立地に複合し、お互いの関連も強いので、本小報告では一括して取り扱うこととした。発掘の順序にしたがって四辻古墳群第1号墳、四辻峠台状墓の順に記述を進めたい。

第2章 立 地

四辻古墳群第1号墳(略記号F1)は、岡山県赤磐郡山陽町大字和田小字別所に所在する。

西方にそびえる高倉山 (標高 458.3m) 山塊の東面する急斜面は、標高約 100mの山麓部で鞍部をつくり、そこから眼下の埋積平地に向けて、ゆるやかな起状をもって扇状に広がる丘陵群を形成している。この丘陵群は東西約 900m、南北約1200m、面積 104ヘクタールにおよび、全体として低平なまとまりをもっている。四つの谷水田およびその支谷によって開析され、巾狭な馬の背尾根となって舌状にのびる丘陵群である。

本古墳は、こうした丘陵群の西端中央部、すなわち高倉山塊と丘陵群の接点ともいうべき、丘陵 尾根の山巓部に立地している。そこは、あたかも山塊と丘陵部を区画するように、北と南からそれ ぞれ谷水田が深くはいりこみ、両谷水田の共通した谷頭尾根となっている。そのため丘陵はこの地 で大きくくびれ、山塊と丘陵をつなぐ渡り廊下状の尾根となり、文字通り、扇状丘陵の扇の要にあ たる場所である。

またこの地は、東の珂磨駅から西の高月駅に至る、旧山陽道の通過地にもあたり、その旧道は今も林道として現存する。北の鴨前部落から谷に沿って峠にさしかかり、通称四辻峠と呼ばれる頂きで、本古墳の東墳裾部をかすめてまわり、さらに南に谷を降って和田部落に通じる道路がそれである。

本古墳の立地する丘陵尾根について、今少し詳述しよう。高倉山麓の鞍部から隆まりをみせて延びた尾根は、北と南に分岐する。本古墳はその分岐点の丘陵尾根頂に立地するのである。そこは尾根稜線が亀の甲型に僅かに隆起した部分で、丘陵はここを起点として南にゆるやかに下降してのびているが、古墳立地部での丘陵主軸の方位は、南29°西をしめす。ここは、東北方向から深く入り込んだ谷水田の谷頭尾根にあたるため、東斜面は 100分の30とかなりの急斜面となり、比高も40mと深いが、尾根続きとなる他方向はなだらかで、一見して平坦地の感じすらするところでもある。古墳の立地する丘陵頂の標高は82mで、東眼下には前記の谷水田を、さらに東から南にかけて、砂川流域に広がる埋積平地(約30K㎡)を一望できる。 埋積平地の平均標高は約20mで、本古墳との比高は約60mを測る。

門前池・中池を含む谷水田をだきかかえるように取り囲む丘陵尾根稜線上には,東の谷口から西の谷口にかけて時計まわりに,宮山古墳群4基,愛宕山古墳群3基,用木古墳群16基,野山古墳群12基,四辻古墳群7基,便木山古墳群12基が連らなり,また谷口である門前池周辺の低丘陵および谷部にかけて弥生式時代を中心とした大集落址が存在するが,それらすべての遺跡を一望のもとに眺観できる場所である(第2図 巻頭図版)。

第3章 調査前の概況

本古墳の立地する丘陵のうち古墳を含む尾根部は、アベマキを中心とした雑木林、谷および斜面は松林であった。そこは、ゆるやかな起伏をみせながら南にのびる丘陵尾根の一角で、亀甲形に僅かに盛りあがった隆起部のいただきである(図3、図版2)。

本古墳の周辺部は、後世の人々の手による諸工事で、原地形はかなり損なわれていた。現存墳頂部がそのまま、この丘陵尾根最高位でもあり、標高81.3mをしめすが、それより約3 mさがった標高78mの等高線に沿って、古墳を東と西からさしはさむように、2本の道路がつけられている。この道路は、本来同一道路であるが、登山電車の中央交叉分岐線のように、古墳部分だけ、それを取り囲むように二つに分れているのである。これは、巾2 m前後の旧山陽道を拡幅して、4 m巾の林道を施設した際、西に迂回させて新たに設けたためである。特に東側を通る旧道は、本古墳の裾部を一部削平していた。また古墳の北側は丘陵鞍部となっており、東眼下の中池と呼ばれる農業灌漑用貯水池への、雨水集水路が深く掘り込まれ、これまた墳端部を損なっていた。

しかし、古墳墳丘そのものは、墳頂部のほぼ中央に、径約 1.2mの円形プランをもって深さ約50 cmにおよぶ盗掘壙のあるほかは、等高線もさして乱れておらず、ほぼ原況に近い保存度を保っているものと推察された。

古墳は、丘陵尾根主軸に沿って、南北にやや長い楕円形の平面プランをもつ小円墳である。立木 伐採後の地形測量の時点で、墳丘南側に、方形の張り出し状の高まりが認められ前方後円墳もしく は造り出しをもつ古墳の可能性も考えられたが、発掘調査の結果、円墳であることが確認された。

墳裾部が、北および東側で一部削平され損傷を受けていたため、正確な計測値は示せないが、長径18.5 m、短径16 m、高さは南尾根上から 1.5 m、西墳端から 2.2 mを測る。墳頂部は盗掘壙もあって、やや乱れてはいるが、 6.5 m の径をもった平坦部を有するいわゆる截頭円錐形の円墳であるといえる。

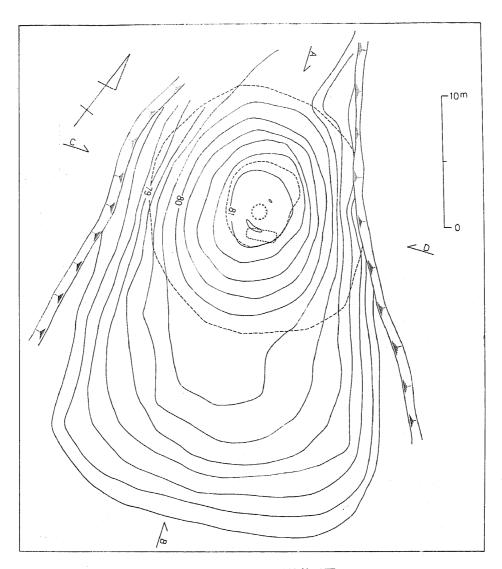
埴輪および葺石、周湟等の外部施設については、調査前の外表観察では何も認められなかった。 発掘調査は、住宅団地造成工事と併行して行なわれたため、調査開始の時点において、すでに工 事はかなり進行しており、古墳をとりかこむ道路内のみを残して、他の地域は、ブルドーザー等の 重機械がはいり、表土層は削平されていた。したがって調査は、古墳部分についてのみに限定され た発掘調査となった。

第4章 遺跡の概要

第1節 四辻古墳群第1号墳

1. 外形・外部施設

〔外形〕



第4図 四辻第1号墳外形図

本古墳の外形は、調査前の外表観察のとおり円墳である。

当初、墳丘南側の丘陵尾根に続く部分が、方形に張り出し、あるいは造り出しをもつものではないかとの推測もしたが、発掘調査の結果、墳裾部に周湟状の掘り方が確認され、円墳と判明した(図4,図版2)。

古墳の立地する丘陵尾根は,南29°西の方向にその主軸をおいている。周湟は,その尾根主軸と直交し,墳丘と丘陵尾根を画するような形に,地形を僅かにではあるが掘りくぼめて設けられていた。現状では地山上面の掘り方での巾 230cm, 深さ18cmを測り,その断面形はゆるい抛物線をしめす。現地表より最深部までの深さは,30cmを測る。この周湟の平面プランは,カーブのゆるい三日月形を呈し,東西の両端での掘り方は判然としない。東西長約 6.7m,両端にいくにつれて巾もせまくなり,深まりも浅くなる。

東および北墳端部は、すでに削平されており、調査することはできなかった。西墳端部の丘陵斜面にあたるところでは、精査したが周湟は確認できなかった。したがって本古墳の周湟は、墳丘端全域に掘りめぐらされたものではなくて、高い部分、すなわち丘陵尾根稜線部にのみ、設けられたものと考えられる。このような例は、この山陽住宅団地内の他古墳、たとえば用木第11号墳、岩田第3号場、宮山第4号墳、等にも共通してみられる現象である。

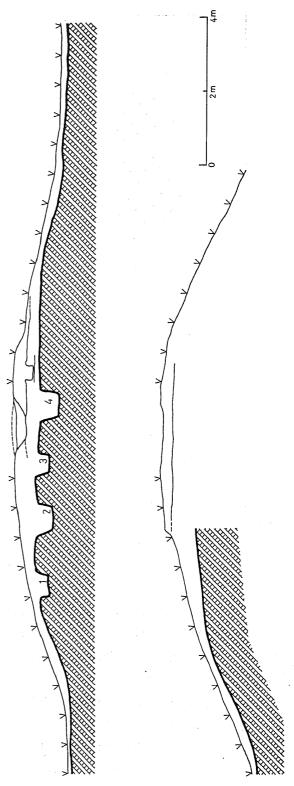
検出された周湟をもとに、本古墳の規模を 推測すると、長径18m、短径16m、高さ2m 前後の楕円形プランで、墳頂部に径 6.5m× 5 mの平坦部をもったいわゆる截頭円錐形の 円墳となる。

〔埴輪〕

古墳の外部施設である埴輪の囲繞および葺石については、調査前の外面観察の段階では知ることができなかったが、前記周湟底に埴輪片が散見されたことから、その存在が確認された。

埴輪はすべて細片となって、周湟掘り方内に散乱した状態で検出され、原位置を保つと考えられるものはなかった。約10㎡の周湟掘り方内での発見数は、きわめて小さく破砕された細片までかぞえて、その総数は 237片である。検出された埴輪片のほとんどは、周湟掘り方底面、すなわち地山上層に接するような状態で発見され、本古墳に伴なうものと考えられる。

周湟掘り方以外の地区からは、墳丘 表土 層の全域を剝土、および谷斜面部の表面採集をおこなったが、ついにただの一片すら検出することができなかった。調査時の現況では、



第5図 四辻第1号墳丘断面図

もともと埴輪が、墳丘四周をすべて繞る状態におかれていなかったものか、あるいは、基底部をも 含めて、すべて流失してしまったものか知ることはできなかった。周湟底に転落遺存した円筒埴輪 片を、その胎土や焼成から分類すると4種類に分けられる。それを最小個体数4本とみても、その 重量は、これと類似する埴輪重量の20%にも満たない。いずれも磨耗が著しく、刷毛目等の調整痕 跡を残すものもほとんどない。部位を明らかにすることのできる破片数もきわめて限られ、基底部 片4、口縁部片3、円孔部片1、壺形埴輪くびれ部片1のみである。また小片の中に、へら描きに よる鋸歯紋状の文様をもつ等、形象埴輪の存在を思わせるものが3片発見された。いずれも3㎝角 以下の小片で、もとの器種や器形は想定できないが、胎土や焼成の特徴から、あきらかに2種類の 個体に分けられる(図10)。

このような出土状況は、埴輪の樹立地点を、周湟に近い墳端部でなく、例えば、墳頂肩部等に比 定しても、その遺存度はきわめて低いものである。転落した埴輪片が最もよく遺存するはずの、こ の周淳底での出土状態は、本古墳の埴輪遺存度を暗示していると考えられよう。

〔須恵器〕

本古墳の墳丘外表からは、前記埴輪片の他に須恵器片が検出された。須恵器片はいずれも、墳丘南裾部の周湟底に近い部分からの発見である。古墳の長軸中心線と、古墳の立地する丘陵尾根稜線とは一致するが、須恵器片は、その中心線上に集中して出土した。調査終了後の整理でそれらの破片を水洗、接合したところ、坏および高坏各1個体分の破砕片であることがわかった。坏は約80%、高坏は約60%を復元でき、実測図の上ではどちらも原形を知ることができた。両者共、当地方において発見される須恵器のうちでは、最も古い編年範囲にはいるもので、本古墳の築成年代を知るうえで、重要な手がかりとなるものである。個々の器形特徴や計測値は後記遺物の項で記述する。

須恵器は破片となっていたが、墳丘尾根からみて正面にあたる墳端部の外側から、いわゆる手とどきの範囲に、意識的に置かれた状態で検出された。これと同様の例は本書後編で報告する、宮山古墳群第4号墳でもみられる。また時代を逆のぼるが、用木古墳群第5号墳、同第12号墳でもみられ、当地域において伝統的にみられる現象でもあるように思われる。

〔葺石〕

本古墳の葺石の存在は確実にはつかめなかった。古墳の立地する丘陵の地質は、頁岩を中心とした堆積土層で、墳丘もその土を使って盛りあげられている。しかし、周湟の調査の際、その掘り方内に花崗岩の山石が十数個散見された。これらの石材は児頭大から、拳大の範囲のものが多く、明らかに他地域から搬入されたものである。発見数の絶対量がきわめて少く、これをもってすぐ葺石の存在を言及することはできないにしても、埴輪片の遺存状況等から推して、その可能性は否定できない。周湟以外の地区からの発見例は、埴輪と同様認められなかった。したがって、ここでは、あるいは葺石が敷かれていたかも知れないと、その可能性の一端にふれておくことにとどめる。

2. 内部主体

本古墳の内部主体は、木棺直葬を思わせる土壙1基である。現墳頂平坦部の南肩部にあたるところに、尾根主軸とほぼ直交する方位をもって、盛り土中に埋葬されていた。そこは古墳の南北長軸線上ではあるが、東西の中心線からは、約2m南に片寄った場所である。

調査は、尾根主軸に沿って、南北中心線を基線に、墳中央で十字形に交わる50cm巾の畦を残し、 扇状の4発掘区を設営して、一枚剝がしに平面プランを観察しながら、掘りおろす方法をとった。

内部主体は、第3および第4発掘区にまたがって南北畦直下に直交する形で、現墳頂下約32cmにその上面を検出した。前述もしたように、墳丘中央よりかなり片寄っているため、あるいは複数埋葬の可能性もあり、他発掘区でも留意したが、埋葬施設は確認できなかった。古墳中央部に径1.2m、深さ約50cmにおよぶ盗掘壙があったが、その掘り方断面は拋物線を示し、そこに埋葬施設があったとしても、その全域を荒らす程の規模ではない。盗掘壙の周辺部は、特に意識して精査したが主体床面ベースなどの痕跡を検出することはできなかった。

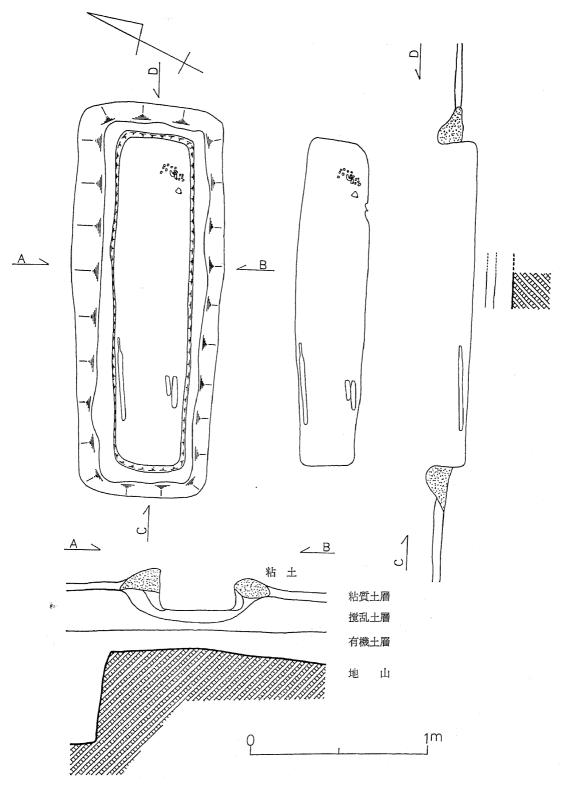
主体は、墳丘盛り土中に、箱形の木棺を直葬に近い方法で埋葬したものらしく、きわめて簡単である(図6、図版3・4)。このことは、主体内調査後の断面観察によっても明らかである。①墳丘築造のある時期にその頂部を平坦面をもってとどめる。②その平坦面から、長き230cm、巾185cm、深さ約25cmの長方形の土壙を掘りおろす。③土壙内に木棺を安置する。④棺側の下方を墳丘盛り土と同質の土で埋める。⑤棺側の上方には青白色の粘土を用いて埋め、さらに棺上端部と思われるところから外法を、堤状にその粘土をもって囲む。⑥棺上方に封土を盛り(現墳頂で約60cm)、墳形を整えて、埋葬を完了する。といった埋葬手法をとっていると推察される。棺側を囲む青白色の粘土は、長き 218cm、巾 182cmの隅丸方形で、その中に棺の存在を想起させる、長さ 183cm、巾40cmの長方形の山土面をもって発見された。したがって粘土は、棺の外法を帯状に囲む形におかれ、棺に近い内側を高く、端部になるにつれて低くなる堤状をみせていた(図版3)。

棺は調査時においてすでにて、でで、で、その材質および構造等の詳細については知ることはできなかった。しかし、上記の粘土の形状や棺側壁部のようす、副葬遺物や僅かに遺存する朱の広がりなどから、その形状の大要を知ることができた。

棺の床部は、やや胴ふくらみの長方形で、水平な面を有する。中心線上の長さ 182cm、巾は小口部で32cm、中央部で40cmを測る。主体の方位は、墳丘の載る丘陵主軸にほぼ直交し、東64°北を指す。壁部は、側壁・小口壁とも、ほぼ直立ないしはやや内傾し、粘土上端までの高さで北壁24cm、南壁22cmを測る。このことから、本古墳の内部主体は、外法長 182cm×40cm、高さ24cm内外の平らな板をもって作られた箱形木棺であったろうと考える。

棺の床部および棺の直上には、何らの施設も認められなかった。棺のまわりに粘土が用いられていたとはいえ、棺側壁上半の外周にのみ使用され、壁下方にいくにつれ山土(盛り土)となり、埋土との区別すら判然としないありさまである。したがって、粘土槨と呼べるほどのものではない。(図 6)。

3. 遺物の出土状態



第6図 内部主体実測図

本古墳の内部主体に副葬された遺物として、確認されたものは、碧玉製勾玉2, ガラス玉28, 漆 櫛1,鉄製針1,鉄剣1,刀子状鉄器2で、いずれも棺内床面からの出土である。

玉類は、主体床面東小口部壁から18cm、東西中心線から南8cmに、重なりあうように出土した2個の勾玉を中心に、その両側約7~8cmの範囲内に一括して検出された(図版4)。玉の向きも不規則で、連になったものをそこに置いたというよりも、身につけるか、または遺体の上に置かれたものが、その腐朽に伴なって、一括して落ちこんだという形状を呈していた。 櫛は玉類の少し酉、中心線から10cm、東小口壁から27cmのところで検出した。 櫛本体の材質はすでになく、頭部のみが漆膜となって遺存していた。背につまみをもつ竪櫛であるが、つまみを南に、主体主軸に斜行する形で発見された。玉類の出土状況と類似し、転落と考えるのが妥当のようである。

鉄器類は, 玉類の出土地点を被葬者の頭位と考えるならば, 体側にあたる部分の側壁部に, 主体壁に接して平行しておかれていた(図版4)。

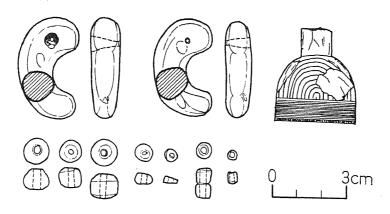
剣は、北壁に接して西小口壁から22cm~69cmに、柄を東にして置き、刀子状鉄器は、それと対称に南壁に接して、西小口壁より30cm~42cmのところに、これまた柄を東に、2本揃えておかれていた。針は刀子直下からの出土である。

4. 遺 物

〔内部主体遺物〕

勾玉(図7)

2個体出土したが、いずれも濃緑色の良質な碧玉製で光沢をもち、C字形の均整のとれた形をしている。前者は高さ 3.9cm,巾2.35cm,厚さは頭部で <math>1.1cm,尾部で0.85cm,孔径は大きい方で径 $0.5cm \times 0.4cm$,小さい方で径0.15cmを測る。貫孔は片側からなされ,C字形に置いて順方向である。孔口にはかなりの磨粍痕が認められる。後者は高さ<math>3.75cm,巾2.35cm,厚さは頭部で 1.1cm,尾部で 0.9cm,孔径は大きい方で径0.35cm,小さい方で0.15cmを測る。



第7図 内部主体出土玉類·櫛

貫孔は片側からなされ、C字形に置いて、裏方向からあけられている。前者にくらべて見た目には、若干小さく感じるが、計測値ではさしたる差異はない。貫孔方向からすれば、左右一対となるものである。

ガラス玉 (図7)

完形のもの25,破砕片3個体分計28の出土である。色別に分けると濃紺色15,紺色7,青色6となる。大きさおよび形状ともにかなりまちまちで不揃いである。一括出土とはいえ、散乱状態で検出し、連の配置は不明である。個々の計測値は表2に示したとおりである。

紺色の玉は比較的大形で,ほぼ同巧同大である。濃紺の玉は数値もかなりばらつき,歪みをもつ ものが多い。青色の玉は,本古墳出土の玉では小形に属するものが多い。ここでは,形状の特徴に ついてのみふれることとする。

紺色の玉は、平面形は円形、側面形は玉ねぎを縦に半裁したような胴ぶくらみのものが多いが、中には全体として球状を呈するものもある。両端中央部に僅かに水平面をもち、貫孔は中央部にほぼ垂直にあけられている。計測値も径 9.5mm~11mm, 高さ 7.9mm~9 mmの範囲に分布し、ほぼ同巧同大のものといえる。ただ1個だけ、径11mm, 高さ3 mm, と扁平なものが含まれる。中央の穴も径4.5mmと大きく、貫孔というよりは、径 2.7mmの円棒をリング状に曲げて作りだした感じのものがある。いわゆるガラス玉とは異なるものとして注目された。

濃紺の玉は、かなり歪みをもつものが多い。平面形も本来は円形につくられたものであろうが、 楕円形のものや隅丸三角形に近い形のものも多い。側面形も臼形で、やや胴ぶくらみを呈すのが本 来であるが、歪みをもち、斜傾しているものを多く検出する。貫孔も玉自体のゆがみに合せて、大 きくひずむものがみられる

青色の玉は前二者に対して小形であり、扁平なものが多い。中でも、両端が細長い管玉を輪切り にしたような、シャープな縁をもち、側面形が長方形を示すもの4を含む。

発見の玉は、いずれも貫孔両端部にかなりの磨粔痕をもち、連としての使用を物語るようである。 勾玉を含めて、玉の総数を1本の糸に通してその長さを集計すると、約21cmとなる。

櫛(図7)

櫛本体である植物質はすでに腐朽消滅し、頭部に塗られた漆のみが膜状となって遺存していた。 保存の状態が悪く、原形で取りあげることができなかったが、出土時の観察からその大要は知ることができた。

漆は黒色のもので、竪櫛の形態をとっている。背部に袋状のつまみを有し、細竹9本を揃えてU 字形にまげて、18本の歯をつくり、 歯部との あいだを 巾広く 糸でまきかためた 通常の ものである。

つまみの先端から歯部の接部までの長さ 3.8㎝, 歯の付け根の部分の巾 3.2㎝を測る。

剣 (図8)

付表 2

											形	状	
番	号	胴	部	径	高	さ	孔 最 大 径	色		調	平面形	侧 面	
	1.	11.0	~	11.0mm		3.0mm	4.5mm		坩		円	リング状	
:	2	11.0	~	11.0		9.0	2.8	"			"	太鼓状胴張	
;	3	10.0	~	10.0		9.0	2.2.		"		"	"	
	4	9.0	~	10.0		8.5	2.7		"		椅 円	"	
	5	10.0	~	10.0		8.0	2.8		"		円	"	
(6	10.0	~	10.0		8.1	2.2		"		"	"	
	7	9.5	~	9.5		7.9	2.0		"		. // .	"	
	8	9.5	~	9.5		7.9	2.5	濃		圳	"	日 形	
	9	9.0	~	9.0		7.2	2.0		//		,,	"	
]	.0	7.0	~	8.5		7.5	1.5		"		やや歪円	日 形 歪	
1	.1	8.0	~	8.9		8.0	1.2		"		· // // // // // // // // // // // // //	"	
1	.2	8.5	~	8.5		7.8	2.0		"		円	臼 形	
1	.3	8.0	~	8.0		7.8	1.2		"	**	"	臼形やや歪	
1	.4	7.5	~	8.0		7.5	1.0		″		ムスビ形	日 形 歪	
1	.5	8.2	~	9.0		7.5	1.5		"		楕 円	臼形やや歪	
1	.6	7.8	~	8.0		6.5	1.2		"		やや楕円	平行四辺形	
1	.7	7.8	~	8.1		6.2	2.0		"		。 稍 円	臼 形 歪	
1	.8	7.5	~	8.6		7.4	2.0		″		"	"	
1	.9	7.2	~	8.1		6.5	1.5		"		"	"	
2	20	6.5	~	7.2		4.1	1.2		. 11		桁 円	扁平寸胴張	
2	21	6.5	~	6.6		6.5	2.5		青		円	長方形	
2	22	6.5	~	7.0		6.5	2.8		"		"	"	
2	3	4.0	~	4.4		2.1	1.8		"		<i>"</i>	"	
2	24	5.0	~	5.8		4.5	1.0		"		梢 円	太鼓状胴張	
2	25	5.0	~	4.2		4.0	2.0		"		円	長 方 形	
2	:6	5.2 ~ !		5.2		3.0	2.0		"		"	扁平な臼形	
2	7				process. Month			濃 坩					
2	8.		_			-			"				

銹化した剣身部のみの出土である。おそらくは鞘に納めた状態での副葬であったろうと思われるが、それらを物語る木質や金具等はすでに腐朽消滅し、何も検出することができなかった。剣は鉄製で銹化が著しいが、ほぼ原形態を保っていた。

全長47cm, 刃部長38.2cm, 茎部長 8.8cmを測る。関部の刃巾3.35cm, 茎部付根巾 2.4cmを測り, 関部端は明瞭に角度をもって茎部と区別されている。

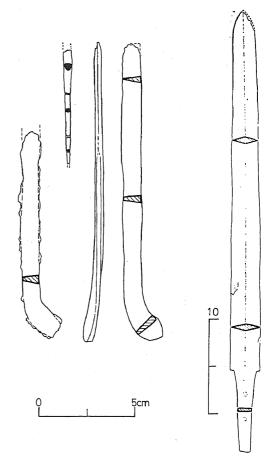
刃部は背中心線から左右対称につくられている。中心線は鎬をもち、その横断面は扁平な菱形となる。巾および厚さとも、関に近づくにつれて、その数値を漸増する。切先より4cmでの刃巾2.45 cm、刃厚 0.6cm、関部での刃巾3.35cm、刃厚0.75cmがそれを物語る。茎部は未端になるにつれ細まり、未端での巾は1.35cmで、断面形は長方形である。未端部より関の方向 2.5cmのところの、茎中心線上に目釘穴が1孔あけられている。

刀子状鉄器(図8)

鉄製の刀子状のもの2点が出土した。いずれも銹化が著しく、詳細は不明である。前者は現存長15.7cmを測り、ほぼ原形態を保つものと思われる。後者は現存長10.8cmを測るが、両端に欠損痕をみせている。形態的特徴からみて、両者とも同巧同大のものであり同一用途をもつものと考えられるので、前者についてのみ観察し記述する。

この鉄器は切先と思われる部分から、5.7cm の間の一方だけ、刃がつけられている。そして 柄にあたる部分の端部を丸味をもたせて、刃と 反対方向にワラビ状に折り曲げている。したがってその断面形は、湾曲部ではほぼ長方形、中 間棒状部では台形、刃のある部分で三角形を呈する。巾および厚さの計測については、銹化が 著しいため、正確さを欠くきらいがあるが、原形をとどめると思われる部分で、巾 1.1cm、厚さ 0.5cmを測る。実測図 8 に平面形とともに、刃部を上においた図を併記したので参照されたい。

この鉄器の用途についてであるが,右手の平 に柄部を握り,刃を外に向けて用いる刀子と考



第8図 内部主体出土鉄器

えられ、当初から、木柄等の柄拵えを必要としないものであったと考えられる。

鉄針? (図8)

刀子状鉄器とともに出土した鉄製品である。3つに折損して発見され、それも銹化が著しく、原 形態は不明である。3片を接合してその現存長を測ると6cmとなり、径0.2~0.35の丸味を帯びた 断面形を示す。現況の観察からすれば、針と考えるのが妥当と思われる。

〔古墳外表の遺物〕

本古墳の外表の遺物は、すべて破砕した小破片となって検出された。いずれも墳丘南端部外法に掘られた周湟状溝底部からの出土である。検討の結果、須恵器坏および高坏各1個体、形象埴輪片を含む 237片である。

須恵器坏(図9)

同一個体とみられる小破片計10点を検出した。お互いに接合できる破片が少なかったが、そのう

ち5片が接合できた。完形に対して約5分の1程度の復元であったが,底部から口縁上端近くまで 揃い,原形の大要を知ることができた。

胎土は非常によく精選されており、粒子もきわめてきめがこまかい。焼成は良好で硬い。外表面は暗褐色、内面は褐色である。破片の断面観察によると、断面の色調は、外表部に近い方は暗褐色、内面に近づくにつれて褐色味を漸次的に増している。ロクロの回転は、時計廻りである。口縁部上端を欠損しているため、端部の詳細は不明であるが、そのたちあがりは、ほとんど垂直といってよく、現存高で 1.7㎝である。 受部は外上方へのびるが 比較的みじかく先端は 丸味をもっている。

体部のほぼ中間に稜線をもち、受部と稜線の間に櫛描きによる波状文帯が横にめぐる。 櫛歯の数は7条である。 この文様帯の上方から、稜線の下段にかけて、飾りつまみがついているが、完全形でないため、その個数は不明である。また体部稜線から下方は、不定方向へのへら削りに痕を多く残す。

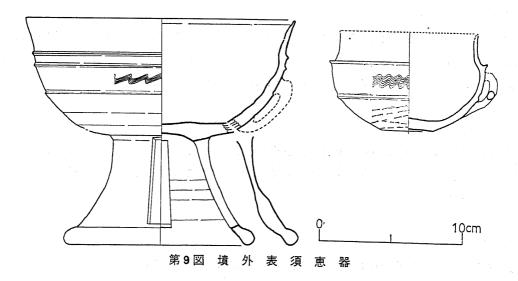
底部は平底状に削りだされ、体部との境界線は明瞭である。底面径は 3.5cm~ 3.8cmを測り、中心部で若干凹面鏡のようにくぼみをもつ。底部の面は布目状圧痕を僅かに認めるが、あるいは指圧による指紋痕かも知れない。

口縁径 9.5cm, 受部径11.0cm, 器高は推定で 6.7~ 6.8cmで, 径に対して背の高い感じの坏である。

須恵器高坏(図9)

・ 全部で27点の破片を検出し、接合により全形の約4分の3を復元することができた。

胎土はよく精選されており、焼成も良好である。色調は内外面とともに薄青灰色を呈しているが 内面および脚部下端の外表に自然釉が付着している。調整手法は坏部の内面は横なで、外面はへら 削り後なでて再調整、底面はへら削り、脚部内面はへら削り後横なで、外面は横なでによりしあげ ている。



坏部口縁はやや外反し、端部は丸くおさめている。坏部を3等分するように稜線をもつ。稜線の 上方は2条,下方は1条で構成され,中央の体部に,櫛描きによる波状文帯を施している。この文 様帯の中央部から坏底部にかけて、今は欠損しているが、飾りつまみがつけられていたと思われる 痕跡を残している。つまみの張りつけられた痕跡は1か所のみである。

脚部は短かく、脚端部を丸くふくらませておさめ段状となっている。脚柱部に長方形の透しが、 四方にあけられているほかは、装飾は施されていない。透し部の外面はていねいに面取りされてい たが、内面では粘土のはみ出しが付着している。脚の下方部で、透しの間にあたるところが、内外 面ともにふくらみをもっている部分が認められたが、装飾とするよりも、製作の過程における気泡 の膨張によるものと理解される。

口縁径18.5cm, 器高15.4cm, 脚部高 7.3cm坏部高 8.1cm, 脚底部径13cmを測る。

埴輪 (図10)

発見された埴輪はいずれも小片で表面も磨滅しており、 その特徴は明確でない。発見した破片の 総数は 237点であるが、いわゆる壺形埴輪のくびれ部片 1 点、形象埴輪片 3 点のほかは、通常の円 筒埴輪片である。

円筒埴輪片も,残存状態はきわめて悪く,計測にたえるほどのものもない。磨滅が著しく,表面 の刷毛目による調整痕すら残存しないし、本来断面が台形をなすたがも、丸みをもった弧状となっ ている。色調は,明るい赤褐色を呈すものが多い。 胎土に石英質の砂粒を多く含むものと,そうで ないものとの二種に分けられる。

円筒埴輪片の中に、いわゆる壺形埴輪といわれるものの、くびれ部にあたる小片を1点検出した が、これまた小片のため全形を知ることができない。

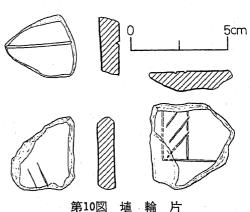
形象埴輪片3片は、いずれも3cm角以下の小片である。胎土焼成の特徴から、2個体分に分類で きる。 へら描き沈線による 文様が認められるものの, きわめて小部分で器種, 器形も明らかでな い。図10に図示するにとどめる。

本古墳に、円筒埴輪、壺形埴輪、および少なくとも2個体以上の形象埴輪が、用いられていたこ とを知る程度である。

5. 古墳築造の時期

本古墳の築造の時期について,決め手となる手 がかりは少ない。

外部施設に, 形象埴輪を含む埴輪をもつこと, **墳外表におかれた須恵器が、いずれも当地方にお** ける最も古い要素をもつものであること, 内部主 体に不充分とはいえ、粘土を用い、鉄剣を有し、 碧玉製のC字形勾玉をもつことから推して、前期 古墳としての特徴を示し、5世紀中葉の時期の所



産と考えられる。

第2節 四辻峠台状墓

1. 調査時の状況

第1号墳の内部主体および外表調査を一応終了した段階で、本古墳の墳丘築成状況を知る目的をもってトレンチによる墳丘断面調査を行なうこととした。トレンチは、古墳長軸線が、古墳の載る丘陵尾根稜線と一致することから、それに沿うトレンチと、古墳中央で十字形に直交するトレンチの計2本を設営して発掘した。

発掘調査の結果,現墳頂下約70cm,古墳内部主体床面下23cmのところで,地山上面に達し,長径9.7m,短径7.0mの平坦部となっていることがわかった。当初は古墳墳丘築成の過程において,地山上面を削平して,墓域を定めるための造成面とも考えられた。しかし,精査の結果,この平坦面からさらに掘りこまれた土壙墓が確認され,古墳築造以前に,それと同一立地をもった,土壙墓群が存在していた事実を知ることができたのである(図11,図版6,7)。

各土壙とも、墳丘主軸線とほぼ直交する形で、その主軸線上に、一列に平行した配置をもって掘りてまれており、集落とは離れた地に、意識的な墓域を定めた墳墓群である。土壙掘り方上端は、いずれも地山上面から掘られていたため、墳丘盛り土を全面排土して、この墓域の原形を知ることに努めた。墓域は丘陵尾根の高まりを利用して、その四周を削り、墳端部での長径約15m、短径12m、上方の平坦部長径9.7m、短径7.0m、高さ約90cmの台状部をつくりだしたものである。現況での平面形は楕円形を示すが、この台状墓の立地を利用して、後に円墳がその直上に築成されているため、原形をかなり損なっている可能性もある。たとえば、これと隣接する丘陵尾根に立地している、四辻古墳群第5号墳も、土壙墓と古墳が同一立地で複合しているが、四隅を削って円墳に造成し、隅丸方形に変形させた例もある。したがって現況が楕円状の平面プランを示すからといって一概に截頭円錐形の台状墓であったとはいいきれない。あるいは、方形台状墓であった可能性もあるのである。

各土壙上におかれた被土の状態についても現状からは不明である。古墳墳丘の断面観察によれば 古墳内部主体床面と地山上層との間に、地山面から約10cm上方に、水平に有機土層の線が走り、土 層を上下に分けることができる。しかし、この有機質層も土壙直上において陥没線をもたず、台状 墓上に盛られた 封土とは断定できない。 各土壙のいずれもが、 地山上面から 直接掘りこまれてお り、その深さとの関連から、いくらかの被土を行なっていただろうと推定されることを記すにとど める。

また、各土壙の埋葬の時間的な経過および順位についてであるが、これまた明らかにすることはできなかった。各土壙が互いに切り合うことなく、同一レベルから同一手法でもって、整然と配列されて掘られている。このことから前に埋葬した位置なり存在が、次の埋葬の際まだ記憶されている時期、すなわちさして時間的経過をへないうちでの埋葬として理解するのが妥当のようである。

なお墳丘盛り土内から遊離した形で, サヌカイト製打製石鏃2, および弥生式土器片1個体分数

片を採集した。墳丘南側の丘陵尾根上が、かなりの平坦面をもち、集落址もしくは埋葬に伴なう何らかの遺構が存在する可能性もあるため、この平坦部全域に4m×4m,50cm巾の畦を残すグリットを東西4列、南北6区、計24区を設けて地山面まで平面発掘を試みたが、遺構はおろか、それに伴なう遺物片1点すら検出したかった。

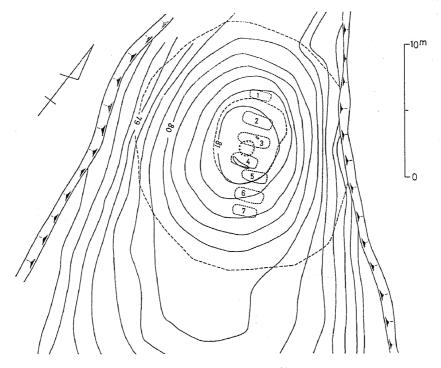
2. 各土壙の素描

本遺跡での埋葬施設は、前述もしたとおり土壙7基である。いずれも台状に削りだされた地山平 坦部上面から墳丘主軸中央線に直交して、横一列に整然と掘り込まれている。記述の都合上、北か ら南へ、第1土壙~第7土壙と呼称することとする。

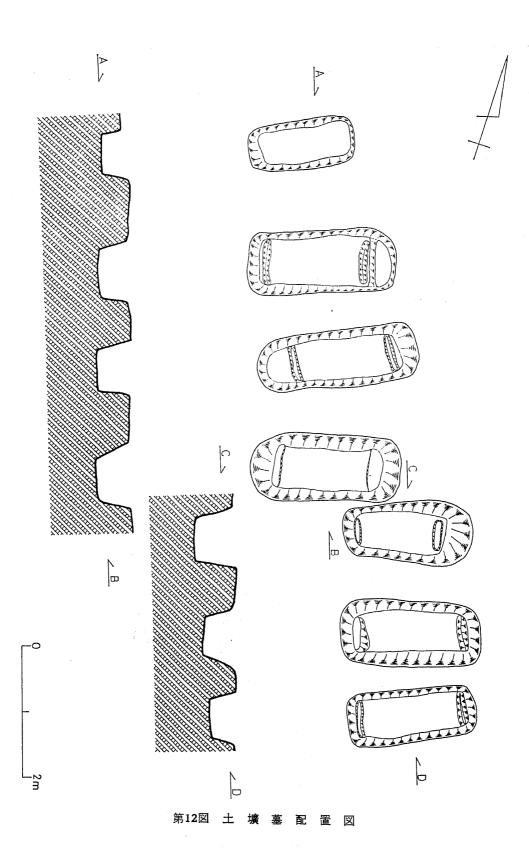
第1土壙から第4土壙までの4基は、墳丘主軸線上にほぼ各土壙の中心をおき、第5土壙から第7土壙までの3基は、主軸線よりやや東にずれて掘られている。したがって、配置のようすからグルーピングするならば、2つのグループに分けられるかもしれない。

第1土壙(図13)

土壙群の北端に立地する。台上平坦面肩部から20cmのところに掘られている。本土壙群の中では最も規模が小さい。地山上面の掘り方上端での長さ 155cm, 巾69cm, 床面の長さ 137cm, 巾55cm, 深さは西小口壁部で38cm, 東壁部で28cm, 平均34cmを測る。掘り方上端での平面形は隅丸長方形, 床面は長方形で, ほぼ水平である。 床面上に 部分的に少量の朱の広がりが 検出されたほかは, 枕石, 小口溝等の施設はない。土壙の壁は4方向とも,上方に広がり外傾している。長軸中心線の方



第11図 四 辻 峠 台 状 墓 外 形 図



- 46 -

位は東29°北である。

本土壙床面に接して、サヌカイト製の打製石槍1本が出土した。東小口壁より66cm、北壁に柄部を接して、槍先をほぼ南に向けて検出された。土壙長軸線に対して斜交する形である。直接本土壙葬送に伴なう副葬物であるかどうかは確言できないが、別稿報告の四辻土壙墓群の中に、石鏃を多量に供献していたらしい例もあり、また本土壙群およびその周辺に集落址等の存在が認められないことなどから、本土壙に対しての供献物としての可能性が強い。

付表3

四辻峠台状墓土壙計測値

土	壙	掘り力	了上面	床	面		٠	小口	溝巾	小口溝深さ		34t BB DE 1MI-
番	号	長さ	τħ	長さ	ф	深	さ	東	西	東	西	溝間距離
:	L	cm 155	cm 69	cm 137	cm 55		ст 34	Cm	cm	·cm	CM —	cm
2	2	217	92	165	70		48	8	10	7	8	141
3	3	238	89	165	61		50	13	16	5	6	134
4	1	222	101	170	63		54	27	23	4	6	128
	5	187	92	140	61		60	12	17	6	6	103
6	3	202	102	173	63		46	16	27	15	13	139
:	7	185	78	174	65		36	17	13	8	8	143

第2土壙 (図14)

第1土壙の南に92cmはなれて、それと平行に掘り込まれている。掘り方上面および床面ともに隅 丸方形を呈している。長軸中心線の方位は東23°北を示す。

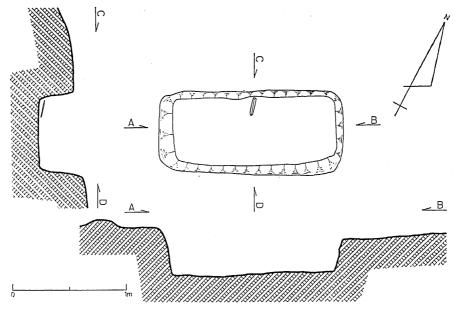
掘り込みの角度は、床面からみてやや外傾であるが、東小口部の壁は、地山上面から約23cm下方で、巾約20cmの段が設けられているのが注目された。床面はほぼ水平につくられ、東西の両小口部に板をたてかけるためと思われる溝状の遺構を残す。

掘り込みのはじまる地山上面での長さ 217cm,巾92cm,床部の長さ 165cm,巾70cm,深さは西小口壁で54cm,東小口壁43cm,平均49cmを測る。小口溝はともに長軸線に直交して掘られ,西溝の長さ67cm,巾10cm,深さ8cm,東溝の長さ64cm,巾8cm,深さ7cmを測り,溝の横断面は両者ともに V字形をしめす。小口溝間の距離は外法長で 158cm,内法長 140cmである。両溝状遺構とも,その 両端はそれぞれ側壁部にまでは達しておらず,約4~5cmの間隔を保つ。このことは,土塘掘り方と,棺の大きさの差とも考えられないこともないが,土壙掘り方の壁と,小口板との間に,より長い側板をたてたとみることも可能である。

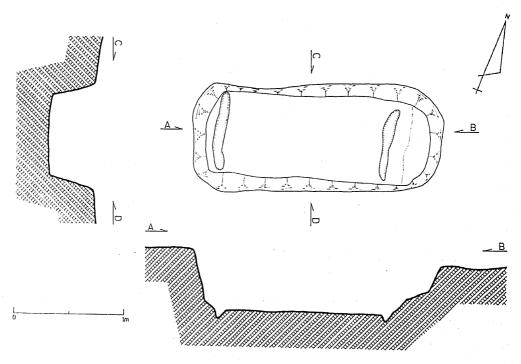
以上の特徴から推して、本土壙の埋葬手法は、土壙内に先ず側板をたて、その側板の間に床面に 溝を掘って固定した小口板をたてた、いわゆる平底の箱形木棺であったろうと考えられる。このことは、後述の第3土壙から第7土壙まで、共通して観られる現象である。

第3土壙(図15)

第2土壙の南,地山上面の掘り方間の距離56cmに, これまた平行に整然と並んで掘られた土壙で



第13図 第 1 土 壙 実 測 図



第14図 第 2 土 壙 実 測 図

ある。地山上面での掘り方プランは、 原則的には長方形であるが、西小口部では円弧状を呈してい る。掘り方上面での長さは 238cm, 巾89cmを測る。

床面は水平に掘られ、部分的にではあるが、朱の痕跡が僅かに認められ、東西小口に溝が掘られ ている。溝間の平面形は長方形である。床面の長さ 165cm, 巾61cm, 深さは東西両壁部とも51cmを 測る。溝間の距離は外法長 160cm, 内法長 134cm, 溝の深さは両者とも 7 cmである。溝の断面形は ともに抛物線を示すが、西溝に対して東溝の方がそのカーブがゆるい。

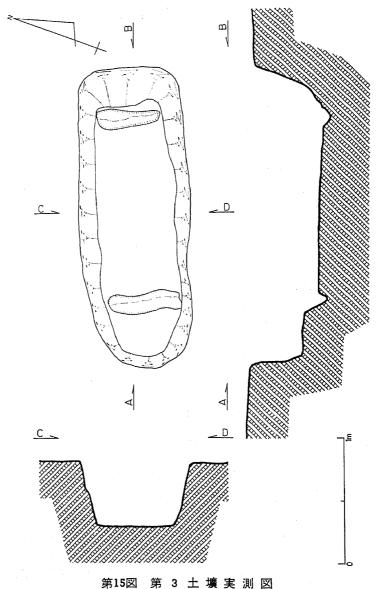
第2土壙では、東小口部掘り方内に段をもっていたが、本土壙では西小口壁にそれをもつ。掘り 込み上面からの深さ40cm, 床面から約10cmの高位に巾34cmの平らな段がつくられており注目され た。長軸中心線の方位は東19°北を指す。伴出遺物は何も検出されなかった。

第4土壙(図16)

第3土壙の南70cmのところ に掘られている。掘り方長軸 中心線の方位は東18°北を指 し,第3土壙と平行してい る。掘り方上面のプランは、 原則的には長方形であるが, 小口部は東西とも円弧状とな っている。 長 さ 222cm, 巾 101cm を測る。

床面はほぼ水平につくられ ているが, 東小口部にくらべ て西小口部で若干低くなって いる。床面プランは、東がや や狭く、西に広い台形状を呈 している。前3者にくらべて 掘り方はやや粗雑な感を受け る。土壙内での副葬物は検出 されなかった。 東西長 170 cm, 東小口部巾63cm, 西小口 部巾77cm,平均巾68cm,深さ は西小口部で65cm, 東小口部 55cm, 平均59cmを測る。

小口溝は東西両端とも設け られているが、これも前記第 2・第3土壙と趣を異にす



る。東西の両小口壁の掘り込み壁が、そのまま溝底にまで達し、かなりの底面巾をもっている。 したがって、巾広の溝となり、西小口溝では巾23cm、深さ6cm、東小口溝の巾27cm、深さ4cmを**測**る。断面形は、西小口溝はゆるやかなカーブの抛物線を、東小口溝は上広がりの台形状を呈している。 両溝状遺構間の距離は外法長 168cm、内法長 128cmである。

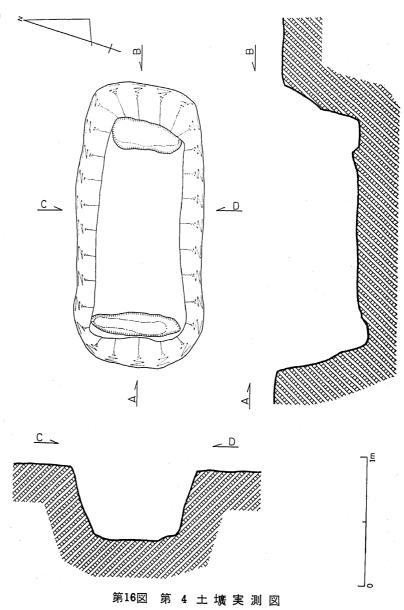
第5土壙(図17)

第5土壙から第7土壙までの3基は、前述してきた第4土壙同様丘陵主軸に対して、直交して平 行に並んで掘られているが、全体として、東にいくぶんずれている。前4者は台状墓の南北中心線 が、各土壙のほぼ中央部を横断しているのに対して、この3者は、土壙の西端小口掘り方が、中心

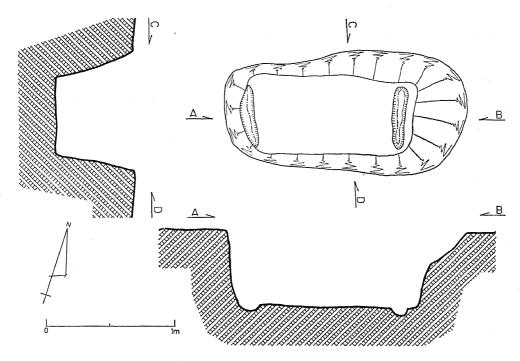
線よりもさらに東へ約20 cmに位置する。したがってその配置状況からみて,前4者とこれから記述する3者が,それぞれまとまりのあるグループとして分けられるのである。

第5土壙は第4土壙の 南にほとんど接して掘り 込まれている。最も近接 しているところでは、をの間の中は4cmであるはは。 東西の中心線の方位は土地 18°北を指し、第4土土壌 と平行であるが、東にかががってまっている。直接平行であるが、東にかががって第4土壌と直接平の90cmである。

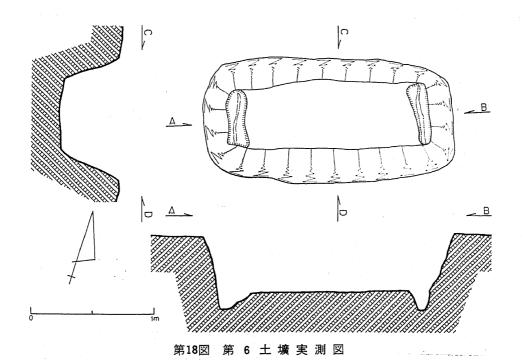
地山に切り込んだ掘り 方上面のプランは、歪み をもった長楕円形をして おり、長さ 187cm, 巾92 cmを測る。床面は長方形 でほぼ水平に掘られてい



— 50 —



第17図 第 5 土 壙 実 測 図



る。東西の小口部に溝をもつ。床面の長さ140cm,巾61cm,掘り込み面から床面までの深さ58cm,溝間の距離は外法長132cm,内法長 103cm,西小口溝の巾17cm,深さ6cm,東小口溝の巾12cm,深さ6cmを測る。両溝ともその横断面は抛物線をしめす。南北の側壁および西小口壁は,床に近づくにつれてやや狭くなるが,直線状に掘り込まれている。東小口壁の掘り込みは,上半部はかなりの緩傾斜で掘り降ろされ,下半33cmのみが直線状となっている。なお余談となるが,四辻古墳群第1号墳の内部主体は,本土壙の直上に重なるようにつくられていた。

第6土壙(図18)

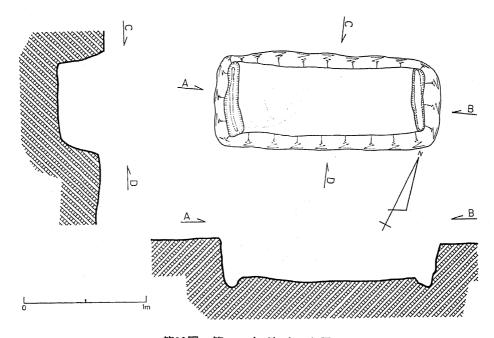
第5土壙の南59cmに位置している。掘り方上面のプランは、小口部は円弧状の長楕円形を示す。 長さ202cm、巾102cmを測り、長軸中心線の方位は東21°北を指す。

床面は水平につくられ長方形プランをもつ。長さ $173 \, \mathrm{cm}$, 巾 $63 \, \mathrm{cm}$, 深さ $46 \, \mathrm{cm}$ を測る。東西両小口部に溝をもち,その横断面はともに抛物線をしめす。西溝の巾 $27 \, \mathrm{cm}$, 深さ $13 \, \mathrm{cm}$, 東溝の巾 $16 \, \mathrm{cm}$, 深さ $15 \, \mathrm{cm}$ である。

第7土壙 (図19)

第6土壙の南32cmに位置する。本土壙群中南端のものである。掘り方上面のプランは隅丸長方形をしめし、長さ 185cm, 巾78cm, 長軸中心線の方位は東22° 北をさす。

床面は水平につくられ、長方形プランをもつ。長さ 174cm, 巾65cm, 深さは西小口壁で36cm, 東小口壁で30cm, 平均34cmである。東西の小口に溝をもち、その横断面はともに抛物線をしめす。西



第19図 第 7 土 壙 実 測 図

小口溝の巾13cm, 深さ8cm, 東小口溝の巾17cm, 深さ8cmを測る。

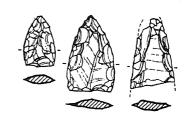
本土壙内埋土中より、サヌカイト製打製石鏃1本を 検出したが、直接本土壙の埋葬に伴なうものかどうか は不明である。

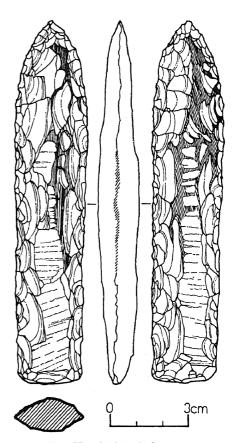
3. 出 土 遺 物

本土擴群から伴出する遺物は極めて少ない。それも 確実に本土擴に供献されたものと言いきれるものは皆 無である。土擴内の出土遺物としては,第1土擴の床 面から発見されたサヌカイト製石槍1,第7土擴の埋 土中に遊離して発見された,サヌカイト製石鏃1の計 2点のみである。また,四辻第1号墳および本台状墓 の盛り土中に含まれていた関連遺物,石鏃2,弥生式 土器片9を加えても,その総数は11点にすぎない。

石槍 (図20)

サヌカイト製の打製石槍である。均整のとれた精巧なつくりである。全長14.2cm,巾2.8cm,最大厚 1.5cmを測る。先端から 4.5cmまでは器厚も薄く,刃部も鋭利につくられいわゆる穂先を思わせる,巾もこの部分からきわめてわずかではあるが,基部にむかってせばまっている。器厚の厚くなる中央部分約 5cmでは,刃部をつぶしている。また基部は磨耗によるものか,丸味をおびている。断面形は凸レンズ状を示す。





第20図 台状墓出土石器

石鏃(図20)

3点の出土例があるが、いずれもサヌカイト製打製石鏃である。原則的には二等辺三角形状のものであるが、刃部が外ふくらみにカーブし、全体的に丸味をもっている。

(1)は,第7土據埋土内より出土したもので全長2 cm,最大巾1.25cm,最大厚 0.4cmを測る。基部巾は1 cmで,最大巾を基部から約3分の1のところにもっている。横断面は,凸レンズ状を呈している。(2)は,墳丘盛り土中より遊離の発見である。(1)と,ほぼ同巧のものであるが,やや大きい。全長 2.9cm,最大巾 1.9cm,最大厚 0.4cmを測る。横断面は,計測の部位によって異なるが,やや歪みをもった菱形を呈する。(3)も,盛土中遊離発見である。先端および基部ともに欠損しているため,原形を知ることはできないが,前2者にくらべて,刃部は直線状につくられた二等辺三角形のものであろう。現存長 2.6cm,現存最大巾 1.7cmを測る。

弥生式土器

小破片まで含めて、採集し得た土器片は計9片である。器壁は薄く0.45cmである。同一個体の破片と考えられる。器表面は明るい赤褐色、内面は黒色に近い暗灰色を呈し、胎土中に石英粒を多量に含む。基底部径は6.7cmで平底である。破片の特徴から推して、小形直口坩と考えられるが、詳細は不明である。当山陽団地内集落址等の類似土器から推察して弥生式時代中後後半のものと推定される。

4. 台状墓築造の時期

本土壙墓群を中心とした 台状墓が、 はたして何時の時代に築成されたものか、 明確にはできない。年代判定の重要な決め手となる伴出遺物があまりにも少なく、また同時性についても確実味に欠けるものである。 しいて言うとすれば、 第1土壙出土の石槍と 同時期もしくは 後出のものであり、四辻第1号墳の築造よりも明らかに先行するということだけである。 しかしながら、 当山陽住宅団地内の埋蔵文化財発掘調査が進むにつれて、土壙墓遺跡や出土遺物の資料が増加してきつつある。 本土壙墓および出土遺物を、それらの資料と比較検討することによって、今少し本台状墓築成年代の巾を縮めることも可能のようである。

土壙墓の構造および規模の特徴から、当山陽住宅団地内の類似遺構を観ると、四辻土壙墓群(F (6) をあげることができる。四辻土壙群のうち、B群と呼称した方形台状墓は、本土壙とほぼ同巧同大の土壙墓で構成され、明らかに葬送に際して供献されたと考える土器を伴出する。これらの土器は、当山陽地方での編年型式でいう前山田式を中心としたものであり、弥生式時代中期中葉から後半にかけての時期に比定される。またこれより後出の便木山遺跡(G10)は、42土壙墓を中心とした墳墓群であるが、床面に小口板溝をもたず、被葬者の頭骸を安定させたと考えられる枕石を施している。伴出土器の特徴から、酒津式併行期に比定される。

第1土壙出土の石槍であるが、これときわめてよく類似した出土例が数点、当山陽住宅団地内の集落遺跡から検出されている。惣図遺跡第1地点第8号住居址床面、用木山遺跡第1地点第5号住居址床面、同遺跡第3地点第7号住居址付近の柱穴内、さくら山遺跡第1地点第2号住居址床面、等である。いずれも丘陵尾根または斜面に立地した竪穴式住居址を中心とした集落址であるが、伴出土器の特徴から、弥生式時代中期中葉から後半にかけてのものと考えられている。

以上の二つの事柄の比較検討から、本台状墓の築成年代の巾を、弥生式時代中期中葉から、後期 初頭ぐらいの時期の所産と考えることが許されるのではなかろうか。

第5章 ま と め

- 1. 本遺跡は、標高約82mのなだらかな丘陵尾根上の、自然の高まりを利用して整形した弥生式時代の台状墓と、さらにその立地を再利用して、直上に封土を盛った古墳の、2時代にわたっての複合した墳墓遺跡である。
- 2. 台状墓は、地山の高まりをそのまま利用して、それを整形するように削り、台状につくりだし

たものである。後に円墳に作り変えられたため、原形態の詳細は不明であるが、丘陵主軸の方向に長い、長方形あるいは 楕円形プランをもった 台状茎と考えられる。 その規模は墳端部長径15 m, 短形12m, 台上平坦部長径 9.7m, 短径12m, 高さ1 m前後のものであったと推定される。

- 3. 埋葬施設は、すべて台上平坦部の地山に直接掘りてまれた土壙墓7基で構成されている。7基の土壙墓は台状墓長軸線上に、それと直交する方位をもって、一列に整然と営なまれていた。 各土壙とも、床面は水平に保たれ、1例を除いた他は、床面小口部両端に小口溝を有し、平板を箱形に組み合せた木棺の使用を想起させる。
- 4. 台状墓築成の時期は、伴出遺物がきわめて少なく、また同時性についても確実味に乏しいが、 周辺遺跡の調査による類似遺構等の比較検討から、弥生式時代中期中葉から後期初頭までの、それもかなり短い期間における埋葬と考えられる。
- 5. 当山陽住宅団地内においては、本遺跡とほぼ併行する時期の集落址の発掘調査を、かなり広範囲にわたって実施している。まだその全容は明らかでないが、現在までの調査においては、集落址の地域内からは土壙墓等の墳墓遺構は確認されていない。弥生式時代中期~後期の時代においての、集落と墳墓とを、意識的に分離していた資料を得ることができたのである。
- 6. 四辻第1号墳は、台状墓の立地をそのまま利用し、その直上に営造されている円墳である。現 墳頂までの盛り土は約70cm確認された内部主体床面と、地山上面までの比高約20cmとさして手を 加えていない。
- 7. 古墳の規模は,長径18.5m,短径14m,墳高約2m,墳頂部に平坦部をもつ,いわゆる截頭円 錐形の円墳である。
- 8. 内部主体は、盛り土中に直接箱形木棺を埋納した直葬と考えられる。主体部上半にのみ粘土を 用いているが、棺直上には使用されていない。これと共通手法の埋葬は、当山陽団地内において は、用木第11号墳が知られている。
- 9. 外部施設として埴輪をもつが、その遺存度はきわめて低く、詳細は不明である。円筒埴輪の他に、少くとも2個体以上の形象埴輪をもっていたことを指摘するにとどめる。
- 10. 外表遺物として検出された須恵器 2 点は 古墳主軸中心線上の, それも正面と思われる 墳端部 に意識的に置かれていたものである。ともに当地域では最も古式のもので, 単に本古墳の年代を 知る重要な手がかりとなるばかりでなく, 山陽地方須恵器編年資料として貴重なものである。

墳端外側から、墳域内に足を踏み入れないで置くことのできる位置に、土器を供献する例が、 用木第12号墳、用木第5号墳、宮山第4号墳と相いつぎ、当地方前期古墳においての伝統的現象 として注目される。

11. 本古墳の築造年代は、立地、主体構造、および遺物などの特徴から、前 N 期、 すなわち5世紀代の所産と推定される。

註

- 1) 神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(2) 1972年
- 2) 神原英朗「用木古墳群発掘調査概報」前掲調査概報(1) 1971年

- 3) 神原英朗「岩田第3号墳発掘調査概報」前掲調査概報(2)
- 4) 袖原英朗「宮山第4号墳・宮山方形台状墓」本書所収
- 5)本古墳出土の高坏と、ほとんど同巧同大のものが、岡山県教育委員会文化課発掘の、当団地内門前プ 2地点の集落址より検出され注目された。尚本報告書は近刊の予定である。

en en la companya de la companya de

- 6) 神原英朗「四辻第5号墳·四辻土壙墓群」本書所収
- 7) (1) に同じ。.
- 8~11) 昭和47年度調査地区集落址のものが多い。調査概報(4)で報告の予定。

四辻古墳群第2·3号墳

第1節	はじめに	57
第2節	立 地	
第3節	調査前の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	59
第4節	第3号墳調査結果	61
第5節	第2号墳調査結果	63
第6節	古墳築造の時期	65
第7節	その他の遺構・遺物	66
第8節	まとめ	67

四辻古墳群第2·3号墳

第1節 はじめに

四辻古墳群第2号墳(略記号F2)および第3号墳(略記号F3)は、ともに岡山県赤磐郡山陽町大字和田小字別所521番地に、隣接して所在する小円墳である。

第3号墳は、先に報告した同古墳群第1号墳の北西約85mの、丘陵尾根稜線上に立地する。この 第3号墳を最高位に、第2号墳および第4号墳の計3基の古墳が、隣接して築造されている。これ ら3基の古墳は、第1号墳とともに、岡山県営山陽新市街地開発事業に伴なう、住宅団地造成工事 のために、発掘調査の対象となったものである。発掘調査は岡山県の委託を受けて、山陽町教育委 員会が実施することとなった。

ところが、まことに残念なことに、調査にさきだって不幸なできごとが発生した。それは、発掘調査の対象となっていた3基の古墳のうち、第4号墳が、発掘調査着手前の昭和45年12月4日、当住宅団地上水道集配水貯水池工事にともなう、工事用道路施設の犠牲となって破壊され、調査不能の状態となったことである。このことは同月6日付の各新聞でも報道されたが、まことに遺憾なできごとであり、当住宅団地造成にかかわる、文化財保護行政の汚点として明記したい。今日の段階では、工事用道路施行前に行なっていた古墳外形測量図と、調査前外観概況記録が手元に残るのみである。

したがって、発掘調査は残された第2号墳および第3号墳のみについて実施した。いずれも小規 模な円墳であり、それもすでに盗掘被害を受けて保存状態も不良のため、調査は併行して行なっ た。調査期間は、若干四辻古墳群第5号墳の調査と重複するが、昭和46年1月19日に開始し、昭和 46年2月26日に終了した。

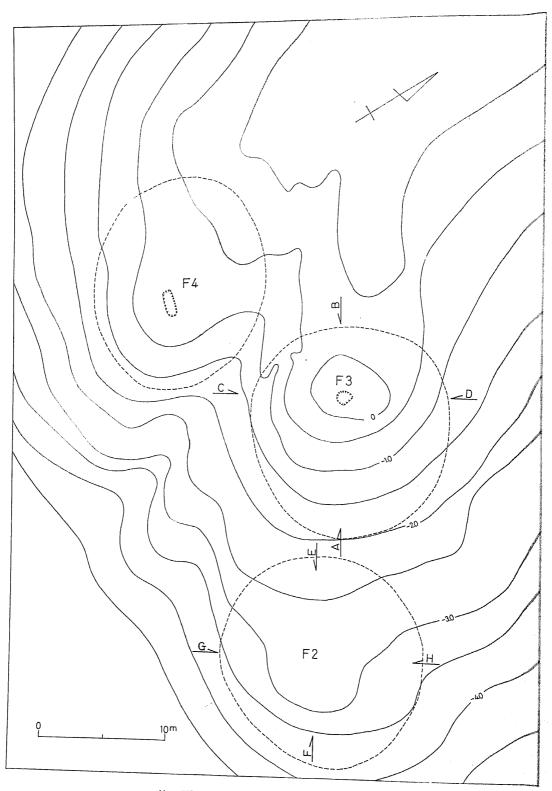
両古墳は、発掘調査終了後の昭和47年3月26日に、造成工事が開始されわれわれの眼前から永久にその姿を消し去った。もと標高91mにあった古墳も、その基盤であった丘陵もろとも削平されて現在は標高74mの階段状の住宅街の一画となり、行政地番も割り変えられ、昔日の面影は存在しない。

本小報告書においては、内部主体の遺存していた第3号墳の記述を中心におこない、第2号墳お よび第4号墳の概況を、関連項目において付記することにより、その責を果たしたい。

第2節 立 地

四辻古墳群第3号墳(略記号F3)は、山陽町大字和田小字別所521番地に所在する。

そこは岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう住宅団地造成予定地の西北部にあたる。西方にそびえる高倉山(標高 458.3m)の山麓部から、東方に扇状となって広がる丘陵群の、起点となる尾根稜線である。高倉山の山麓が標高97.6mのところで鞍部となり東に隆起して、通称善応寺山と呼ばれる、標高 106.6mの丘陵となる。この善応寺山を起点として、北と南西に向って丘陵尾根が、なだらかな起伏をもってのびているが、本古墳はその南西尾根に立地するのである(図3)。



第21図 四辻古墳群第2~4号墳地形図

善応寺山からゆるやかな下降傾斜をみせてのびる尾根は、標高約90mでその下降傾斜をやめ、約30mばかりの舌状平坦地となり、さらにそこから、東と南に下降する尾根支脈を分岐するため、尾根上巾もやや広まる。

本古墳は、この尾根支脈の分岐する平坦部端の肩に立地する。標高は91mの丘陵尾根にあり、西に高倉山を背おい、眼下には砂川流域に発達した、約30歳の埋積平地を眺望する景勝の地である。また、中池を含む谷水田を取り囲む丘陵尾根上に築造された、用木古墳群をはじめ、50数基の古墳群をパノラマのように一望することができる立地をしめているのである。

第3節 調査前の概況

当地はもと善応寺官林と呼ばれる植林地の一部に含まれ、調査前までは松林であった。丘陵傾斜 面をその等高線に沿って、階段状に削平して植林をおこなったため、古墳の墳丘表土層はかなり損 なわれていた(図21図版10)。

第2号墳は、さして高まりをもたない扁平な小円墳である。墳域も明瞭でなく、封土もかなり流失したらしい形態をしめしていた。別にこれといった盗掘壙も認められず、全体としてのっぺりとした感じのものである。現存径15.5m、墳高は傾斜面のため明らかでないが、北側墳外中央部からみて、約60cmを測った。葺石、埴輪等の外部施設は認められなかった。

第3号墳は、これまた小円墳であるが、隣接する3基の中では最も保存度もよく、墳丘もしっかりしていた。丘陵尾根平坦部の肩部に立地し、上方にあたる尾根部に周湟状の掘り方跡を残している。墳丘盛り土の流失のためか、丘陵尾根斜面の下方にあたる南東方向に張り出したように墳端がのびていた。現存墳丘の径15m、高さは傾斜面となっているため、みる方向によってかなり異なる。尾根上方からは殆んど高まりをもたず、平坦部の延長の感じすらするが、尾根下方の南東墳端からの高さは約2.2mを測る。平均的な高さをしめす位置として、北側墳外中央付近からみると、約1.5mとなる。

現墳頂部中央に、径1 m、深さ 0.5 mの盗掘穴が掘られ、組合せ式箱式石棺の蓋石と思われる石材2個が露呈していた。1枚の石材は原位置を保っていたが、他の1枚は動かされた状態で、その下方に側壁と思われる板石が検出される。このことから本古墳の内部主体は、箱式石棺であることがわかったが、すでに棺内まで盗掘による被害を受けているものと考えられる。調査前の外表調査では、葺石および埴輪等の外部施設は検出されなかった。

第4号墳も、第3号墳とほぼ同規模の円墳である。分岐した丘陵尾根に立地するとはいえ、傾斜面にあるためか、平面プランは尾根稜線主軸に沿って長い楕円形を呈している。長径16.4m、短径13.3mを測る。高さはみる角度によって、それぞれの数値が異なるが、西南側裾部中央付近からみて 0.8mである。

墳頂部に巾0.8m, 長さ2mの長方形の盗掘穴が掘られ, 箱式石棺が露呈していた。 天井石はすでに持ち去られたものもあるらしく, 2枚の板石が, 棺内に落ち込んだ形態を示し, 側壁の石材上端が盗掘穴の底面に露呈していた。石材はすべて付近の丘陵で産出する, 花崗岩の板石である。 巾8 cm~10cm, 長さ35cm~40cm大の板石を, 両側に立て並べ, その間に小口板石をはさむようにたて

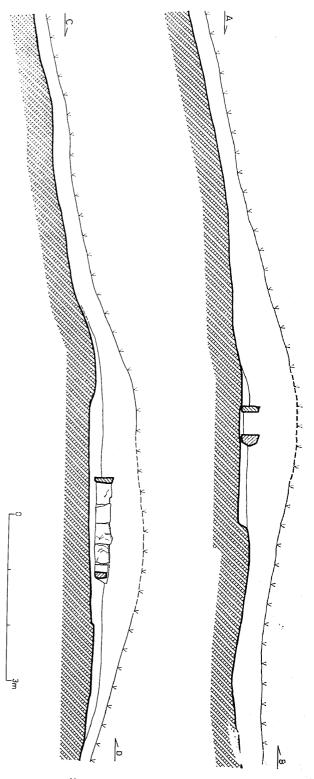
て,長方形の箱形に組んだものである。 石棺の外法長 185cm,同巾62cm,主軸の 方位は東15°南を計測した。

埴輪, 葺石等の外部施設の痕跡は, 前記2古墳と同様, なにも認められなかった。

第4号墳に関する記録は、以上ですべてである。近く発掘調査が予定されており、地形測量の段階での、外面観察では内部主体床面は、土で埋まり発掘調査にゆだねた。調査直前に不注意とはいえ、工事により破壊されるというアクシデントがあって、遂にそれ以上の記録をとることができなかったのである。現有資料をもとに推考して、第3号墳と、ほぼ同規模同手法による埋葬であったろうと想定される。

同地区の植林は、地元の人達の話によれば、今から約60年ばかり以前に行なったといわれているが、古墳を発掘したとか、遺物が出たとかの伝承は残っていない。

また、本古墳から北西に約 100m、善応寺山と呼ばれる丘陵尾根山巓部は、巾約50m、長さ約 100mの平坦地となっている。昭和30年頃、当調査団調査員である則武忠直の分布調査の記録によると、この善応寺山の南東斜面にかかる付近に2基の箱式石棺が露出していたとある。しかし当地は昭和40年頃に農業構造改造事業の一環として、畑地灌漑工事が施行されて桃畑となり、原況が大きく変わり今回の調査では確認できなかった。したがって、四辻古墳群は、現存7基の他に、さらに数基の古墳が存在していたものと考えるべきであろう。



第22図 第3号墳墳丘断面図

第4節 第3号墳調査結果

〔外形〕

第3号墳の外形は、調査前の外表観察のとおり円墳であった。古墳外表は最終的には全面剝土して調査したが、葺石・埴輪の類は検出せず、営造当初からこれらの施設をもたないものと想定される。

墳丘盛り土の断面観察によると、本古墳築成にあたり、内部主体である箱式石棺を置く中央部分を、あらかじめ削平整地している(図22)。また、地山の高い尾根稜線北西墳端部には、尾根主軸に直交する形に、巾 1.8m、深さ15cm程度の周湟状の溝が掘られている。この周湟底と地山削平線をもとに本古墳の径を復元すると約8.5mとなる。また内部主体を墳中央に埋葬したとして、周湟底中心から、内部主体中心線までを計測して2倍すると9mである。外観計測時に尾根下方にふくらんでみえた墳丘は、封土の流失および盗掘穴の排土等の影響によるもので、その時の計測値15mは、訂正されるべき数値である。現存封土高は、墳中央部の地山削平上面から、約1.2mであるが、これも原形はもっと高まりをもっていたものと解すべきである。

以上の事柄から総括して本古墳の外形は、もと墳径9m前後、墳高2m程度のこんもりとした小 円墳が想起される。

〔内部主体〕

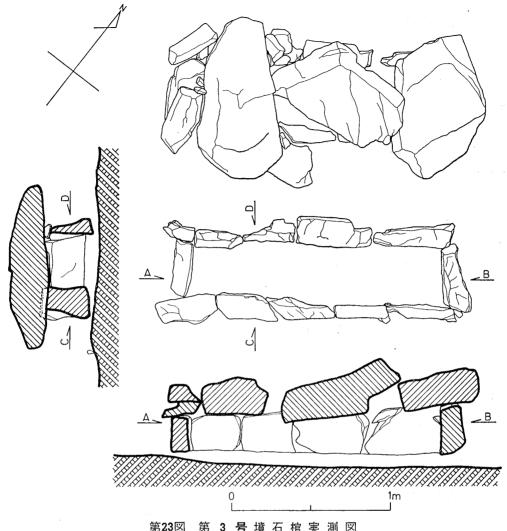
本古墳の内部主体は、前にも述べたとおり組み合せ式の箱式石棺である(図23図版14)。石棺に用いられた石材は、付近の丘陵に産出する花崗岩の割り石で構築し、墳中央部の現表土下72cmに床面をおいて埋葬されている。 主体の方位は、 古墳の載る 丘陵尾根の主軸に ほぼ直交するように、 東40° 南に長軸中心線をおいている。

棺身部となる側壁は、巾8cmから17cm、長さ30cmから47cm、高さ25cmから30cmと、やや不揃いではあるが、長方形の板石を箱形にたて並べたものである。使用石材数は、北側壁5個、南側壁4個、東西両小口壁は各1個の計11個を数える。石材の不整形面を棺外法および下部にまわし、棺内面と上端部に水平面をより多くなるような用いかたをして、内法は比較的整然とした長方形の箱形となっている。

棺床面は、側壁石材が倒れない程度の約5 cmほどを、地山と同質のよりきめの細かい生き土で埋め整地した程度で、他にこれといった設備は施行されていない。

天井石は、4枚の石材で構成されていたものと推定されるが、東西両端の各1枚が原位置を保つのみで、中の2枚は盗掘の際動かされていた。1枚はすでに持ち去られているらしく、復元して並べ直しても欠損して空白状態となる。残された1枚も、斜向してその1関を棺内に落してむ形となっていた。石材の大きさは、長さ80cm~100cm、巾35cm~54cm、厚さ約20cm程度の板石である。天井石間の隙間等を小石とか粘土による目張り等の施設については、認められなかった。

石棺の計測値は,天井部全長 200cm, 棺身部外法長 181cm, 同内法長 157cm, 棺外法巾63cm, 同内法巾36cm, 棺身部外法高平均27cm, 内法高23cm, 天井石を含む棺の全高53cmを測る。



第 3 号 墳 石 棺 実 測 図

〔遺物〕

今回の発掘調査において,内部主体内からの副葬遺物は,何も検出しなかった。しかしかつて内 部主体内にまで達する盗掘が行なわれている関係から、その実際については一切不明である。

〔墳丘築成と棺との関係〕

本古墳の墳丘築成と箱式棺のおかれた時間的関係であるが、石棺は、地山削平上面を若干掘りく ぼめて、直接構築されている。また墳丘封土断面に、封土を盛った後に、棺を安置するために掘り 降ろしたと考えられる。土壙掘り方の切り込みの線をもたない。むしろ、棺身部を組んで、その棺 側の高さまで土を盛った一時期を物語るような層がほぼ水平に走っている。これらのことから,本 古墳の築成は、①古墳築成の場所を定め、地山を削平して整地する。②その中央に棺を安置する場 所を定め,③棺身部となる側壁の石材をたて並べ、土壙と側壁外法の間および棺内底部に土を埋め、 側壁を安定させて床面をつくる。④棺身部の高さまで墳丘の封土を盛る。⑤埋葬を行ない、さらに 封土を盛って墳形を整える。という手順が考えられる。墳丘の築成そのものよりも、箱式石棺の構築の方が先行すると推定されるのである。

第5節 第2号墳調査結果

〔外形〕

第2号墳は、調査の結果内部主体の確認をすることができなかった。調査前の外表観察の際には 気づかなかったが、発掘によって墳頂部に盗掘穴らしい撹乱土層が検出された。

第2号墳の外形は,第3号墳と同様小円墳で,葺石,埴輪等の外表施設をもたないものと思われる。このことは墳丘全面剣土による調査によって確認された。地山の高くなる北西墳端部に,僅かではあるが,丘陵尾根主軸に直交する周湟状の溝址を残す。現存地山面での巾 1.2m,深さ12cmを測る。また墳丘築成前に行なったと思われる地山削平整地面の痕跡を残す。この地山削平面および周湟底中心部から,本古墳の墳域を推測すると径9m前後となる。第3号墳と同様,発掘着手前の計測値径15.5mは,改訂されなければならない数値である。

封土の盛り土の高さも、原墳頂中央部で削平整地された地山上面から64cmと、低いものである。 周湟上の堆積土の深さ58cmと考え合せると、かなりの流失が考えられる。

墳丘の断面観察の際,地山削平面から上方平均12cmぐらいのところに,巾14cm,長さ南北セクションで約6m,東西セクションで約6.8mのベルト状の有機土層があるのを検出した。この有機土層は後で項をたてて記述するが弥生式土器片および石鏃を含み注目された。

〔内部主体〕

本古墳の内部主体は前にも述べたとおり、ついに検出することはできなかった。しかし墳丘盛り 土の調査中、撹乱遊離した状態で、鉄器片4個体分を検出したことから推察して、本古墳内部主体 内に、少なくとも供献物としての鉄器を副葬していたことは確実である。

鉄器片は、剣1振りと鉄鏃3本である。剣は現墳頂中央部から北西1.3m, 現表土下約30cmの封土中に6片に折損して検出された。また鉄鏃は、古墳の西南墳端に近い封土中に散在して3本が検出された。散在範囲は1.6mにおよぶ。いずれも遊離状態での出土であり、検出高位は剣を0とすると、鉄鏃は-50cm, -70cm, -55cmとまちまちの数値を示し、一度撹乱されたことを物語る。

内部主体の構造はまったく不明である。古墳の立地および規模からすれば、木棺直葬、あるいは 箱式石棺、または若干の粘土を使用した粘土槨あるいは粘土床等が考えられるが、それらはいずれ も想像にすぎない。同一支群を構成する第3号墳および第4号墳は箱式石棺を内部主体とし、東南 60mに立地する第1号墳は、若干の粘土を使用した木棺直葬であったことを付記するにとどめる。

墳丘封土が、ほとんど高まりをもたないほど低小となっていることや、撹乱されていること、および鉄器の出土状況などからおして、本古墳の内部主体は、すでにその痕跡をとどめない程、破損消失していたと考えられる。

〔出土遺物〕

剣 (図26)

鉄製の剣1振りである。銹化による欠損が著しく,また6片に折損して検出されたため完形には復元できなかった。出土の状態は,封土中に遊離していたとはいえ,水平位を保ち,ほぼ一直線上に並び,土中においての折損と認められる。

剣は、切先および柄部の両端を欠き、また身部中央部 と関部の折損部は接合できない。したがって、剣の全長 等の計測は不能である。ここでは部分的な特徴および計 測値について記述する。

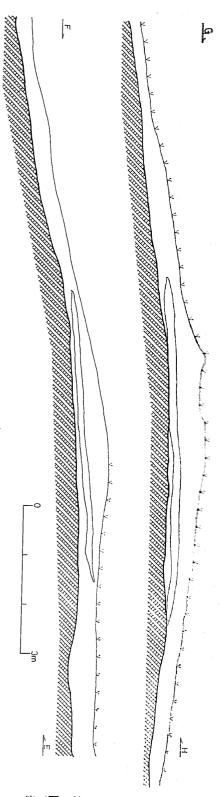
剣の出土時での現存長は55.2cm,取りあげ後の現存長は53.3cmを測る。折損部不整合部分の腐朽消滅等によるものと思われる。切先および柄部両端を欠くため,原形の全長はそれ以上,おそらくは60cmに近いものと想定される。

身部の現存長は46.2cmを測る。背の中央に鎬を有し、 左右相称の剣である。切先から関に近づくにつれて、や やその巾を増す形態をとる。関部での刃巾 3.6cm, 切先 に近い現存先端部巾2.76cmを測る。身部断面形は菱形を 示し、その厚さは 0.7cmと各部位とも平均している。切 先部は欠損、関部は銹化欠失しているため、その特徴は 不明である。

柄部は現存長 6.2cmを測るが、両端とも欠失し、その全長は知ることができない。横断面は長方形を示し、巾1.7cm、厚さ0.55cmを測る。銹化面によくみられる、布目とか木質等の付着物の痕跡を検出することはできなかった。

鉄鏃 (図26)

封土中に遊離状態で、3カ所から検出されたものである。1本は接合によってほば原形を知り得たが、他の2カ所の出土例は、柄部約9cm、矢柄部3.3cmの部分片である。後者の2片は、鏃の構成部位からみると同一個体の可能性もあるが確証はない。いずれも折損したり、柄部が折れ曲り、盗掘の際土砂とともに投げ捨てられたものと思われる。もとは、この3例以上の個体数の副葬と

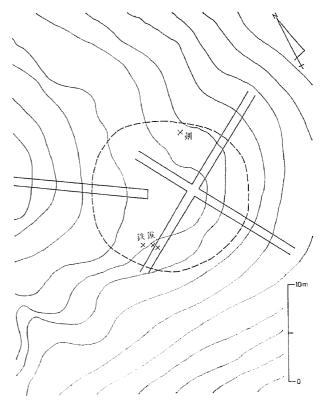


第24図 第2号墳墳丘断面図

考えられる。発見採集した鉄鏃はその部分的特徴から推して、同巧同大のものと考えられる。したがって、ここでは完形を知ることのできる1例のみについて記述する。

細身の尖根式鉄鏃である。全長15.9cm を測る。矢先は二等辺三角形を呈し,基部に左右ともかえりをもち,さらに茎との境の片側に棘状のかえりをもう一段もっている。左右にかえりをもつ矢先部長2.2cm,最大巾1.2cm,片側かえり部までの長さ4.75cm,厚さ0.4cmを測る。矢先は厚さも薄く鋭利である。

茎部は明瞭な稜線をもった,正方形に近い断面を示す。茎長8cm,巾0.55cm,厚さ0.55cmを測る。部位によって計測数値を変えることのない,均整のとれた角柱状を呈している。矢柄部は,茎部にくらべてやや細くつくられ,未端になるに



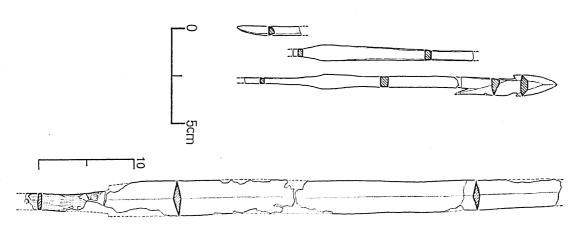
第25図 第2号墳遺物出土地点図

つれてその細まりを増すが、断面形は茎と同じく正方形である。矢柄部長 3.1㎝を測る。

第6節 古墳築造の時期

本古墳の築造の時期は、その手がかりとなる伴出遺物もきわめて乏しく、明確にすることができない。第2号墳出土の鉄器片があるのみである。

3基の古墳は、ともに同一立地に近接して営なまれ、しかもほぼ同規模、同一手法によって構築



第26図 第 2 号 墳 出 土 鉄 器

されていることからみて、たとえそれが世代を追った奥津域としても、さして年代巾のあるものと は考えられない。ほぼ同一編年単位内でのものと推考される。

現在調査進行中の、当山陽住宅団地造成地内の古墳群との比較検討等、今後の課題としたい。古 墳の立地、内部主体構造、鉄器などを総合して推考した場合、明らかに後期古墳といいきれる材料 はない。むしろ前期古墳としての性格をより多くもっている。しかし内部主体である箱式石棺の形 態は、同団地内野山第4・5号墳より後出のものである。したがって、本古墳支群3基の築造年代 は、一応5世紀代の所産と考えるのが妥当のようである。

第7節 その他の遺構・遺物

今までの記述においてはあまりふれなかったが、発掘調査を行なった第2号墳および第3号墳ともに、その封土中に弥生式時代の遺物を含む、暗灰色の包含層が認められた。第2号墳では、墳丘地山削平面の上方約10㎝から上方約14㎝の厚さで、径約 6.5㎜の円形プランをもつ、扁平な面として検出された。また第3号墳では、地山面に直接密着してその直上に、厚さ10~15㎝の面となって広がっていた。むしろ地山削平の際すでにその位置にあって、この有機層も含めての削平整地とも観られる状況である。いずれも地山と同質の黄褐色土で盛られた封土に包みこまれた状態で、墳麦面には露出していなかった。

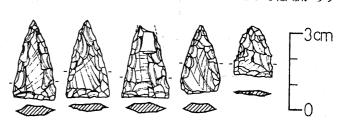
古墳立地が弥生式時代の集落址,あるいは墳墓遺跡と複合する可能性もあり、墳丘下地山層の全面発掘,および墳外周辺の丘陵斜面にトレンチを設けて、その検出につとめた。しかし、包含層は先に検出した封土中にみられた部分のみで、他地域からは検出することができなかった。集落址および土壙状の遺構についても同様である。

封土中に検出された有機土層の厚さから推定される。包含土の量はさして多くない。 古墳の立地 する丘陵上に遺構が 存在し、包含層が載っていたとしても、 尾根斜面であり流失する 可能性も強い。 先に報告した惣図遺跡は、当地と同様の丘陵尾根に立地する集落址であったが、 竪穴住居址の多くは、 床面も含めてかなりの流失状況を示し、 残存住居址内の埋土も含めて、 その上層には包含層となる有機質土は認められず、 直接地山媒乱土層であった例もある。

古墳を築造した時代は、弥生式時代からの年月も浅く、まだそうした有機土層が地表に存在し、それを抱き込んで墳丘は構築されたのであろう。それだからこそ、封土内にのみ有機土層は残り得るのである。墳丘以外の表土面は、その後の長年月の間に、人為的な作為も加えられ、また風化流失して、たとえそこに遺構があったとしても、その痕跡をとどめないまでになったのではなかろう

か。封土内に検出された有機土層は 若干の炭化木質や灰を含み,弥生式 時代の土器片とサヌカイト製の打製 石鏃を含んでいた。

発見した土器片は、1 cm大以下の 小片まで含めて、第2号墳89片、第 3号墳 287片である。いずれも細片



第27図 その他の遺物(石鏃)

のうえ磨耗も著しく、図示することもできないほどの状況である。 高坏脚柱部の沈線や、壺口縁部 片の特徴から、当地方での編年型式に用いられる「前山 II 」と呼ばれるものに類似し、弥生式時代 中期中葉から後半の時期に比定できるものを多く検出した。

石鏃(図27)はいずれも第3号墳封土包含層から検出された、計5点である。打製サヌカイト製である。器形はすべて縦長の二等辺三角形を呈する。

第8節 ま と め

- 1. 四辻古墳群第2・3・4号墳の3基の古墳は、標高約90m, 埋積平地との比高約70m, 丘陵尾根稜線上に隣接して所在する円墳である。
- 2. いずれも, 径10m前後, 高さ2m程度の小円墳で, 葺石, 埴輪などの外部施設をもたないものである。
- 3. 3基の古墳とも、すでに盗掘被害を蒙り、さらに第4号墳は調査直前に工事に伴ない破壊され 調査不能となった。
- 4. 内部主体は,第3号墳および第4号墳は,組み合せ式箱式石棺各1である。いずれも墳中央部 に尾根稜線に直交する形で埋葬されていた。第2号墳においては主体構造は不明である。
- 4. 内部主体を調査した第3号墳では、棺の構築が、墳丘封土の盛り土より先行することが明らかであった。
- 5. 遺物は盗掘されているため、検出例はきわめて乏しく、第2号墳遊離の鉄器片4点のみであった。原況については不明である。
- 6. 古墳築成の時期は明確には決められないが,立地,内部主体構造,鉄器などの特徴から一応5世紀代の所産と思われる。
- 7. 本古墳支群周辺部には、もと弥生式時代中期中葉から後半の遺跡の存在が考えられるが、その 実際は確認できなかった。少量の土器細片と、サヌカイト製打製石鏃5点を発見採取したのみで ある。

註

1)神原英朗「惣図遺跡発掘調査概報」本調査概報(2) 1971年

四辻古墳群第5号墳・四辻土壙墓群

第	1	章	序	説	69
第	2	章	77	地	69
第	3	章	調査	前概況	70
绾	4	章	四辻	古墳群第5号墳	70
第	5	軰.	四計	土壙墓群	80

四辻古墳群第5号墳・四辻土壙墓群

第1章 序 説

四辻古墳群第5号墳(略記号F5),および四辻土壙墓群(略記号F8)は,ともに同一立地に 複合して営造された遺跡で,岡山県赤磐郡山陽町大字河本小字野山65-21番地に所在する。

岡山県営山陽新市街地開発事業に伴なう、住宅団地造成工事のために、発掘調査の対象となったものである。発掘調査は岡山県の委託を受け、当山陽町教育委員会が実施した。調査は昭和46年2月1日に開始し、昭和46年4月20日に終了した。

当地は、標高約88mの丘陵頂平坦地にあたり、分布調査の段階では、その稜線上に直列に並ぶ3基の小円墳として理解した。四辻古墳群第5号墳・第6号墳・第7号墳と命名し、公表していた地域である。したがって、発掘調査の契約は、小円墳3基の調査として締結、その心算で開始したのである。ところが調査の結果、古墳は中央の高まりである第7号墳のみであり、その直下に同一立地で複合する台状墓と、その南北稜線上に営造された土壙墓群が構成されていることがわかったのである。

当開発事業に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書,第1集・第2集において公表してきた四辻古墳 群第5号墳および第6号墳は、実際には存在せず欠番となるという事態を生じたのである。

本小報告の執筆を機会に、今まで四辻古墳群第7号墳として公表してきたものを第5号墳に、さらに同第8号墳・第9号墳をそれぞれ第6号墳・第7号墳に繰りあげ、新らしく発見された土壙墓 遺跡を四辻土壙墓群(略記号F8)と改訂したい。

本古墳および土壙墓群は、調査終了後の昭和47年3月4日、住宅団地造成工事に伴ない、その基盤である丘陵もろとも削平され、約16m低い標高72mを最高位とする、階段状の住宅街へと変貌したのである。

第2章 立 地

四辻古墳群第5号墳(略記号F5)および四辻土壙墓群(略記号F8)は,ともに同一立地に複合して,山陽町大字河本小字野山65-21番地に所在する。

西方の善応寺山(標高106.6m)を起点として南西に下降してのびる丘陵尾根は、標高91mの四 辻古墳群第3号墳付近で支脈を分岐する。分岐点から東に下降する傾斜面は、通称四辻峠と呼ばれ る標高81.6mで敬部となり、ふたたび高まりをみせて、北に向ってのびる巾狭な丘陵となって発達 する。

本古墳および土壙墓群は、四辻峠の鞍部から隆起した、標高88mの丘陵尾根平坦部に立地する(図3)。そこは巾の狭い馬の背尾根の稜線ではあるが、亀甲型の扁平な面となり、巾約20m、長さ約75mの平坦地を形づくり、当尾根支脈の主丘となっている。この地での尾根主軸の方位は北北東

を指している。

この地からの眺望視野はきわめて広い。まわりを低い山々で囲まれ、その中央を流れる砂川流域に発達した、30㎡の埋積平地をパノラマの様に一望できる。また近くは、緩やかに湾曲して入りこんだ中池を含む谷水田頭を、東の眼下一50mに見おろす景勝の地でもある。

第5号墳の南西約110mに四辻古墳群第2~4号墳を、南125mには同第1号墳を、東眼下の尾根支脈稜線には、100mの位置に同第6・7号墳を指呼の間に望見できる。また本古墳の立地点から北にのびる丘陵尾根および端部には、当住宅団地外になるけれども、熊崎古墳群8基、北東に下降してのびる尾根には、便木山古墳群12基が立地する(図2)。目を転じて谷水田の南をとり囲む丘陵尾根には、野山古墳群12基、用木古墳群16基、宮山古墳群4基をも見渡せる場所である。特に用木古墳は、谷水田をはさんで北西方向正面から対峙する形となり、その間の直線距離は約400mである。

第3章 調査前概況

当地は、調査前までは小松林であったが、部位によっては、若干その植生を異にしている。遺跡 の立地する尾根平坦部は小松林、丘陵肩部から東面する急斜部は、伸びのよい松林である。西方は 約84mの等高線に沿って、河本から四辻峠に通じる林道が切られ、その林道から平坦部肩までは、 アベマキを主体とした雑木林、林道から下方は開畑されて果樹園(桃・栗)となっている(図36)。 立木伐採後の地形測量時における外表観察の時点では、丘陵頂中心よりやや北に片寄った尾根稜 線上に、かなりしっかりとした封土をもつ円墳があり、その南北に隣接して扁平な高まりをもつ小 円墳各1基の、計3基が直列状に立地するものと理解した。

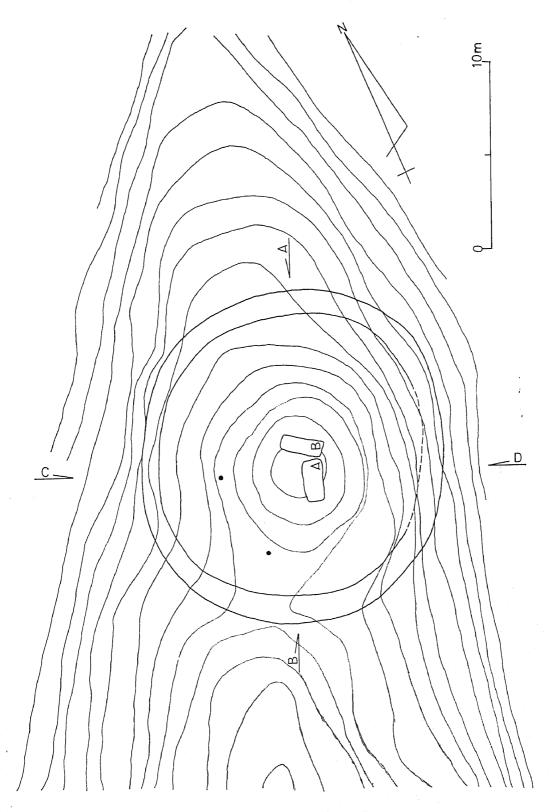
中央の古墳は、地山の高い南墳端に周湟状の掘り方を残し、墳形も整っていた。丘陵尾根主軸線での径14m、高さ約 1.5mを測る。盗掘痕も認められず未掘墳と考えられた。墳端部の一部をブルドーザがかすめて通過し、そこに円筒埴輪片が散見され、円筒埴輪の樹立があることを知った。

他の2基は、ともに約0.5m程度の高まりと、径約10mを計測したが、その端部は判然としなかった。盗掘穴もなく未掘墳と思われる。低平な小円墳でシストを内部主体とするものと推定した。

しかし、調査の結果、第1章において記述したように、当初のわれわれの観察は、中央の古墳、すなわち第5号墳をのぞいては、誤りであることを知らされた。第5号墳築成の際の周湟掘り方に目をまどわされたものか、あるいは、後に判明した、土壙墓群営造のための、自然地形移動によるものと考えられる。いずれにしても、後述の弥生式時代土壙墓群の存在は、調査前の段階では全く惑知し得なかったのである。

第4章 四辻古墳群第5号墳

第1節 外形・外部施設



第28図 第 5 号 墳 外 形 図

〔外形〕

本古墳の外形は、発掘調査前の外面観察のとおり円墳である(図28、図版16、17)。

当初地山の高い南西墳端部に、丘陵尾根と直交する形態をもって、周湟状の掘り方が検出されていたが、調査の結果、本古墳墳端部全域にめぐらされていることがわかった。周湟の掘られた上端は現状では知る由もないが現存地山上面をかなり掘り込むまで掘られている。その掘り方の巾は、確認することができる地山上面での現況で 1.5m~ 2.2mを測る。深さは先に述べた南西墳端部の尾根を直交に切った部分はかなり明確で、最大深20cmを測る。しかしその他の部分では、周湟が斜面に位置することもあって判然としない。やっとその痕跡をとどめる程度である。特に丘陵傾斜度の急となる東墳端部では、墳丘削平傾斜度を一時その地で緩め段状を呈し、さらに肩部に稜線をもって下降傾斜を強めるといった形態を示し、深さといったものは認められない。溝状を認められる部分での横断面は、カーブの緩い上向き抛物線を呈する。

この周湟帯の平面プランは円形を示し、本古墳の形状ならびに規模を知るうえで、大きな手がカンりとなった。周湟掘り方外縁での径は丘陵主軸に沿う南北で17.2m, 直交する東西で15.8m, 内縁での径は南北14.8m東西13.6m, 周湟底中心部径南北16m, 東西14.5mを測る。

墳高は、本古墳が丘陵尾根平坦部の肩にあり、馬の背尾根で尾根巾の方が、古墳の径よりも狭いため、墳端部は傾斜面となって、観る方角によってかなりの差異をもつ。現存墳頂部高は、地山の高い南西周湟から約80cm、地山の低い北墳端尾根から 135cm、地山の低い北東墳端傾斜面から 180cm、西墳端から 150cmとなる。墳頂部の構造は、見た目には直径 5 m内外の平坦部が認められるが、その肩部の稜線も判然とせず、墳中央を最高位に、とつレンズ状の丸味をもっている。後述の内部主体Bは粘土床であるが、その床面が現墳頂表土面から一30cmときわめて浅く、原形は現況よりももっと高いと考えられる。長年月の間での封土流失が推測され、もとは墳頂に平坦面を有する古墳であったと推測される。

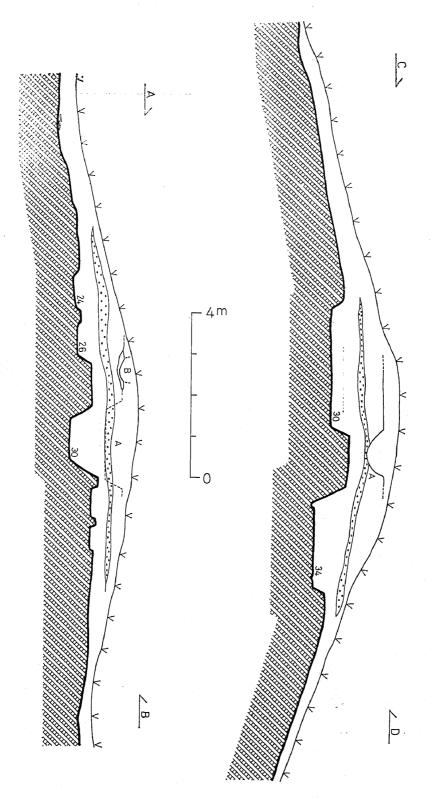
以上を総合すると、本古墳は丘陵尾根主軸の方向にやや長い径をもつ、長径15m、短径14m, 墳 高 1.5m前後の、いわゆる截頭円錐形の円墳であったと思われる。

[外部施設]

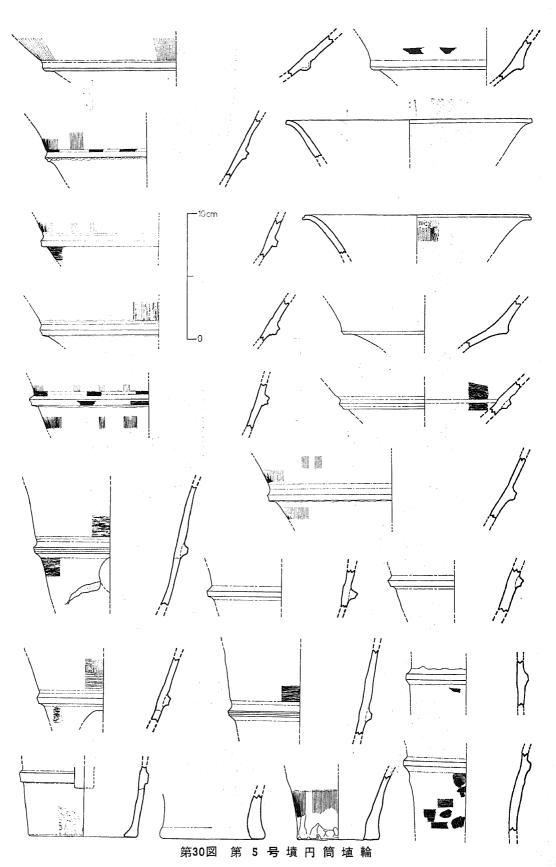
本古墳の外部施設として、 埴輪の囲繞が認められるが、 葺石と 思われるものは 存在しなかった (図版20)。

埴輪は、墳裾部の斜面および周湟掘り方底面に、破片となって転落した形態で検出された。墳頂 部および墳斜面上半部での検出は皆無である。

墳丘の全表土を剝土調査した結果, 埴輪樹立の原位置を保つものとして, 2個体分, 2か所を検出した。いずれも墳中央からの距離5 m前後, 比高一約1 m程度の墳斜面中央部での発見である。 第28図外形測量図に黒点で図示した位置がそれである。 両者とも円筒埴輪基底部で, 最下段のタガ 部までを残すが, 4~6片に破損していた。 基底部を円形に保ち, 墳丘に 直立した形で 発見された。そこは墳斜面のほぼ中間であるが, 地山削平面の肩部にあたる地点でもある。埴輪片は, 墳端 全域をめぐって発見され量的にもかなり多い。したがって墳斜面を鉢巻状に囲繞していたことが推測されるが, その密度については不明である。



第29図 第5号墳墳丘断面図



- 74 -

発見した埴輪片は、円筒埴輪片が圧倒的に多いが、 古墳の北および西の墳端周湟内に転落した、 家型埴輪片が検出され注目された。

〔円筒埴輪〕

いずれも小片となって検出し、接合による複元も不可能である。破片の特徴からみて、通常の埴輪片が圧倒的に多いが、口縁が朝顔形に開くものもかなり含んでいる。また「上部でラッパ状に開くまでに一度くびれた形式」の、いわゆるB型円筒と呼ばれるものの、くびれ部片も2片検出され注目された。各部分についての特徴のみ記すこととする(図30)。

埴輪の胎土は、きめの細かい粘土に石英質の砂粒を含む。焼成は良好で硬い焼きあがりのものが 多いが、中にややぐすく軟質のものもある。前者は褐色、後者は赤褐色を呈する。

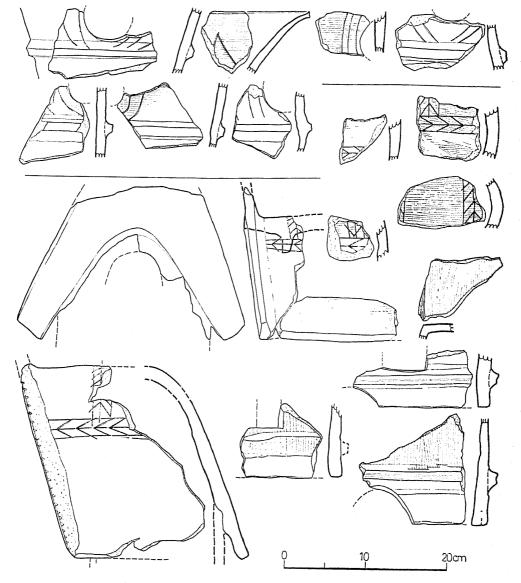
基底部は,下底径 $13\text{cm}\sim17\text{cm}$,下段9 がまでの高さ $10\text{cm}\sim12\text{cm}$ のものが多い。表面は一度刷毛目が施された上を,へらで削って仕上げているが,内面は下底におうとつが著しく不整形面を残す。 器壁厚は下底部が最も厚く 2.4cmにおよぶものもあるが,下端から $5\text{cm}\sim6\text{cm}$ 付近からは, $1.1\text{cm}\sim1.4\text{cm}$ となって安定する。たちあがり角度はやや外傾である。

胴部は、部位によって計測値も異なり一定でないが、タガの部分での推径24cm~28cmのものが多い。器壁の厚さは 1.2cm~ 1.4cmである。タガは最下段のものは、断面形が円弧状を示すものが多く、指での圧痕がそのまま残り、巾も不規則であるが、2 段目以上のタガは断面形は鋭い稜線を有する台形をしめし、指圧によって本体に張りつけられている。 胴部に通例みられる透孔は、円孔がほどんどであるが、中に1 例のみ方形孔が検出された。器表は刷毛目による調整が行なわれているが、縦横両方向の刷毛目が混じって見受けられる。タガの条数および透孔の個数は不明である。器壁のたちあがりは、外傾のものが多い。

口縁部は、朝顔形に大きく外反するものがより多く検出された。口縁径38cm~40cmとなるものもある。口縁外反部に段状の稜線をもつものがあり注目される。B型円筒の口縁とも考えられるが、明らかでない。B型円筒は破片中に数例、いわゆるくびれ部片を検出することによって、その存在を知る程度である。

<家形埴輪>

墳端部のかなり広い範囲に散見されたものであるが、いずれも同一個体の破片と思われる。切妻造りの屋根破風、へら描きによる網代目、角窓を切った壁等の部分を検出したが、破片数が少なく原形は不明である。しかし、破片の特徴から推して、かなり大型のしっかりしたつくりであることがうかがえる。また円筒埴輪の円孔部に、へら描きによる円弧文を付したものが数例検出された。形象埴輪の器台部の可能性が強いと思われる。径15m内外の小円墳であるが、3種類の円筒埴輪とともに、こうした器材埴輪を供献さしていたのである(図31)。



第31図 第 5 号 墳 形 象 埴 輪

第2節 内 部 主 体

本古墳の内部主体は、墳頂の平坦部、墳丘盛り土中に直接埋葬された2主体である。墳丘中心点 2対称点として、八の字形に位置していた。

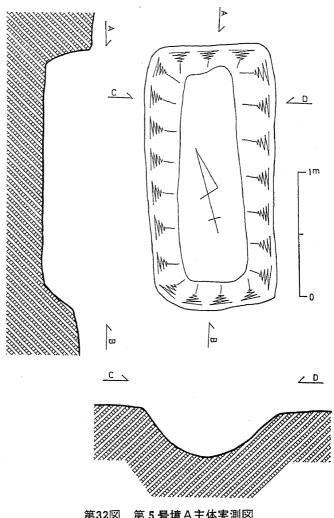
1. A 主 体

現存古墳中心より若干南東にずれて位置している。墳丘封土の盛り土中に設けられた、素**掘りの**:壙である(図32,図版18)。

A主体は、古墳の載る丘陵尾根主軸線とほぼ平行してつくられ、その長軸中心線の方位は北13°

東を指す。墳中央から東へ70cm,南 に50cm寄ったところに, 主体中心点 をおく。しかし、後述のB主体を合 せて,全体的な配置をみると,墳丘 に対して均衡のとれた位置関係を示 し、当初から複数主体の埋葬が考慮 されていたかのようである。

土壙は、現墳頂より約35cm掘りさ げた時点で, その掘り方上面を発見 した。墳丘封土として盛りあげた土 中に直接掘り込んだ素掘りの土壙で ある。掘り込みの確認された上面の プランは, 隅丸方形を呈し,長さ212 cm, 巾 104cmである。縦断面形は上 端の広い台形を呈し, 床部はほぼ水 平を保ち,床部長は 177cmを測る。 横断面形は上向きの半円形を呈し, いわゆる割り竹形木棺の存在を想起 させるものである。掘り込みのわか る上端から、床中心線までの深さ38 cm, 地山削平面から床底までの高さ 40cmを測る。副葬遺物をはじめ、棺 材,朱の広がり等に関しては,何も 検出できなかった。



第32図 第5号墳A主体実測図

2. B 主 体

A主体の北小口部に隣接して、八の字状に斜向してつくられた粘土床である。 A主体の土壙掘り 方上而と粘土床のベースは、同一レベルにあり、最も近接するA主体北東角と、B主体南東角の距 離はわずか16㎝である。 B主体長軸中心線の 方位は北54° 西, AB主体斜交角度は 118° である (図33図版19)。

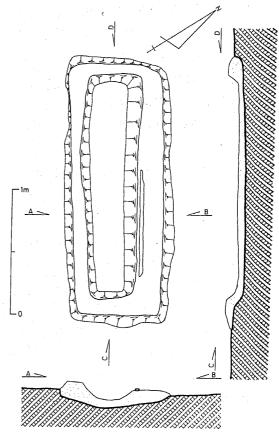
B主体の上部構造は不明であるが、青色粘土を用いた粘土床である。粘土床は当初縦 213cm, 横 86㎝の隅丸長方形ベースをもって検出され、その中央に縦 180㎝, 横42㎝ほどの長方形陥没面をみ せていた。

調査の結果床部は浅く、その横断面形は上向きの円弧状を呈し、両側の粘土帯上端からの深さは 9 cmを測る。縦断面は上向台形で床部はほぼ水平を保ち 168 cmである。また粘土上面に残る圧痕で の巾は、西に広く東に狭い形状を呈していた。西小口45cm、東小口37cm,平均42cmである。

このことから、本主体の棺材は割り竹形木棺の使用が考えられる。円柱形の棺を粘土床によって安定させ、さらにその四周に巾20cm~30cmの同質粘土による帯状の隆起帯を設けた埋葬施設である。用いられた粘土の厚さは床部5cm、隆起帯部8cm~12cmである。

床部横断面に残る粘土床圧痕カーブから、棺径を推計すると、中央部で54cmとなる。現況での粘土床底面から現墳頂までの深さは、約35cmである。径50cmを越える棺が用いられたとすれば、棺は直接現墳丘上に露呈することになる。このことからも、現墳丘はかなりの流土による墳高低下を物語るのである。

本主体に伴なう副葬遺物として、北粘土帯上面に接して、直刀1点が検出された。粘土床圧痕外法にほとんど接して、それと平行に置かれている。圧痕との間隔は2cmである。粘土床巾の広い西小口を被葬者の頭位とすると、左体側にあたる部分である。柄をほぼ中央、切先を東小口に、刃部を外に向けていた。出土状況は原位置を保つように見受けられたが、棺外副葬の



第33図 第5号墳B主体実測図

ものか、棺の腐朽に伴なって落下したものかどうか確証は得られなかった。

第3節 出 土 遺 物

本古墳の副葬遺物はきわめて少ない。内部主体出土品は、B主体出土の直刀1点のみである。他に墳端南周湟底から、転落した埴輪片とともに紡錘車状の鉄製品1点が発見された。なお今まで記述しなかったが、墳丘封土中から弥生式土器片が遊離検出されたが、これは後章で述べる土壙墓群との関連が強いと思われるので、本稿での記述は省略する。

直刀 (図34)

B主体発見の直刀である。銹化した身部のみの検出で、切先部の一部を欠損しているが他の保存 犬態は良好である。刀身表面の銹部に木質痕を部分的に認め、もとは鞘に納めた状態での埋葬と考 えられる。

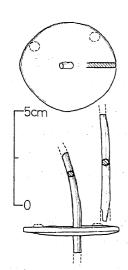
刀身のつくりは、 いわゆる平造りと 称せられるもので、 鎬をもたない。 刀背は角背の手法によ

る。したがってその横断面は二等辺三角形状を呈する。刀身部の巾は切先 に近い部分で 2.2cm, 関に近い部分で 2.6cm, 背厚は平均0.75cmを測る。

刃関は直角に段をもってつくられているが背関はなく,刀背と茎とは直線となっている。茎は背部がやや厚く,刃側の薄い横断面台形をなす。茎巾2.15cm,茎背0.75cm,刃側 0.5cmを測る。茎部に目釘穴2孔があけられている。目釘穴の位置は茎部から, 7.3cmと11.7cmのところである。

紡錘車状鉄器(図35)

墳丘南裾の周湟底から、埴輪片とともに出土したものである。直径 4.8 cm, 厚さ0.3cmの円形の鉄板の中心に、径0.4cm内外の円棒を垂直に通した 鉄製器具である。円形鉄板は下面はとつレンズ状にやや曲面をみせ、上方 縁部に2か所鋲頭の痕跡らしい跡を残しているが、検出か所もかたより、



第35図 紡錘車状 鉄器

また裏面にまで通っていないため、詳細は不明である。一見して紡錘車を連想させるが、貫孔を目的と したドリル等のぶりごまの可能性もある。

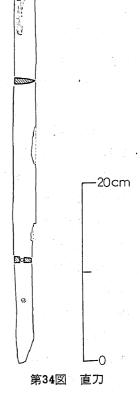
墳外周湟底での遊離出土で、直接本古墳に伴なう ものかどうかの確実性にも欠けるが、鍛造の手法、 埴輪片との伴出関係等から推して、一応本古墳にと もなう時期のものとしてとりあつかった。

第4節 古墳の築成と時期

本古墳は発掘調査の結果,後章で述べる弥生式時代の方形台状墓と同一立地に複合し,その高まりを利用して構築された円墳であった。方形台状墓の各土壙の掘り込みの線は,台状墓上面の地山削平面に明瞭に遺存し,古墳築成のために削られるようなこ

とはなかったと思われる。墳丘断面の現存地山上面から約35cm上方に、巾10cm~20cmのベルト状を示す有機土層が検出された。この土層が、方形台状茎当時の表土層であるのかどうかは不明である。この有機質土層は東西7.5m、南北8.5mの径をもつ楕円形の面となって広がり、本古墳築成の或る一時期を物語ることは確実である。

古墳の封土は、この有機質土を包み込むような形で盛られており、地山上面からの高さ約80cmに、A主体土壙掘り込み上面の線、およびB主体床面をおいている。A主体床部は、この有機質土を切り込んでつくられており、棺を置いて封土を盛るのではなく、少なくとも、掘り込み線の確認された、地山面上80cmまで盛られた封土を、再び掘りおろしたと考えるのが妥当のようである。



A・B両主体の前後関係であるが、その場所が現封土表面に近く、木根などの影響で土層が乱れ、断面観察では切り込みの線などを確認できなかった。したがって両者の埋葬順位については明らかでない。感覚的には主体床部の低いA主体、次いでその埋葬位置の記憶が明確な時期にB主体が埋葬されたと考えられるが、あるいは同時埋葬の可能性もあるのである。

古墳築造の年代についても明確にはできない。築造年代を知るための手がかりとなる伴出遺物は、B主体出土の直刀と、家形の器材埴輪を含む埴輪片のみである。それらの特徴および古墳の立地、墳丘、内部主体構造等からみて、後期古墳といえる材料は何一つもたない。当団地内他古墳との比較検討からみて、前期古墳それも5世紀代の所産と考えられる。

第5章 四辻土壙墓群

第1節 遺跡の発見と概況

四辻古墳群第5号墳の内部主体調査を終わり、ついで墳丘断面観察をするために、墳中央で十文字に交わるトレンチを設けて発掘した。ところが、現墳頂から約1.2m掘りおろしたところで、地山上面に達したが、さらにそこから掘り込む土壙群が存在するのを発見したのである(図29)。

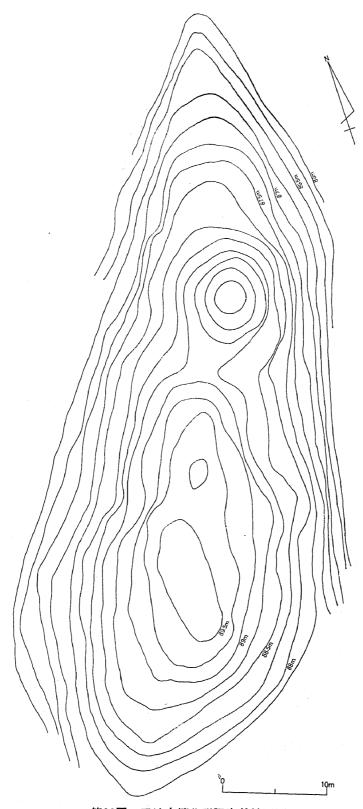
トレンチの断面観察によると、これらの土壙は、地山を削平整地してつくりだした、台状部上面の平坦部に掘り込まれていた。第5号墳は、台状墓の高まりをそのまま利用して、その直上に**重複**して営造されていたのである。したがって調査は、古墳封土を排土しての台状墓全域の検出作業から着手した。

調査の結果,本遺跡は弥生式時代の方形台状茎であることがわかった。南北にのびる丘陵頂**の平** 坦部肩の自然地形の高まりを利用して構築されたものである。地山を削平整地して方形の台状**部を** つくりだし,丘陵尾根にあたる南北の墳端は,丘陵主軸に直交する溝を掘って,その高まりと幅員 を増大させている。

台状墓の裾は、後の円墳築成の際に四隅を削られ、隅丸方形のプランをみせているが、上面平坦部および斜面稜線等に、方形台状墓の面影を残し、原形を推定することができた。東西14.1m、南北14.2mを測り、ほぼ正方形の方形台状墓である。上面平坦部は土壙埋葬その他の影響でかなりの地層変化も考えられ、若干の乱れをみせているが、一辺11mの方形の面をもつ。高さは埋葬後の被土の程度等不明の点が多いが、現状で確認できる地山上面までの高さ、南溝底から60cm、横の位置となる東西裾部から約1mを測る(図39)。

埋葬施設は、地山削平面から直接掘り込まれた土壙墓22基、土器棺1基の計23主体である。土壤は第1主体のみの例外を除いて、丘陵尾根と直交する形状で、相接して営なまれていた。丘陵主軸線を境に東に8主体、西に14主体の2グループに分けられる。

発掘調査はさらに、方形台状墓周辺地域についても拡大して行なった。台状墓の北側はトレンチ 調査、南平坦部はトレンチおよび、4 m×4 m,50cm畦のグリット調査がそれである(図37)。その 古果台状墓の北側に土壙墓17主体、土器棺2主体の計19主体、南で土壙墓31主体を検出したのであ



第36図 四辻土壙墓群調査前地形図

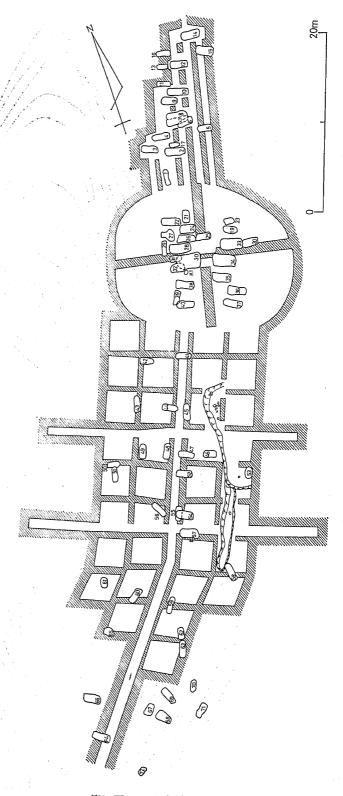
る。

したがって本遺跡は、一辺14m, 高さ約1mの方形台状盤を中心として、その南北丘陵頂一帯に多数の土 塘塞群を有する、弥生式時代の墳墓 遺跡なのである。埋葬施設は計73主 体を数え、遺跡範囲は東西16m、南 坩(82mにおよぶ(図38)。

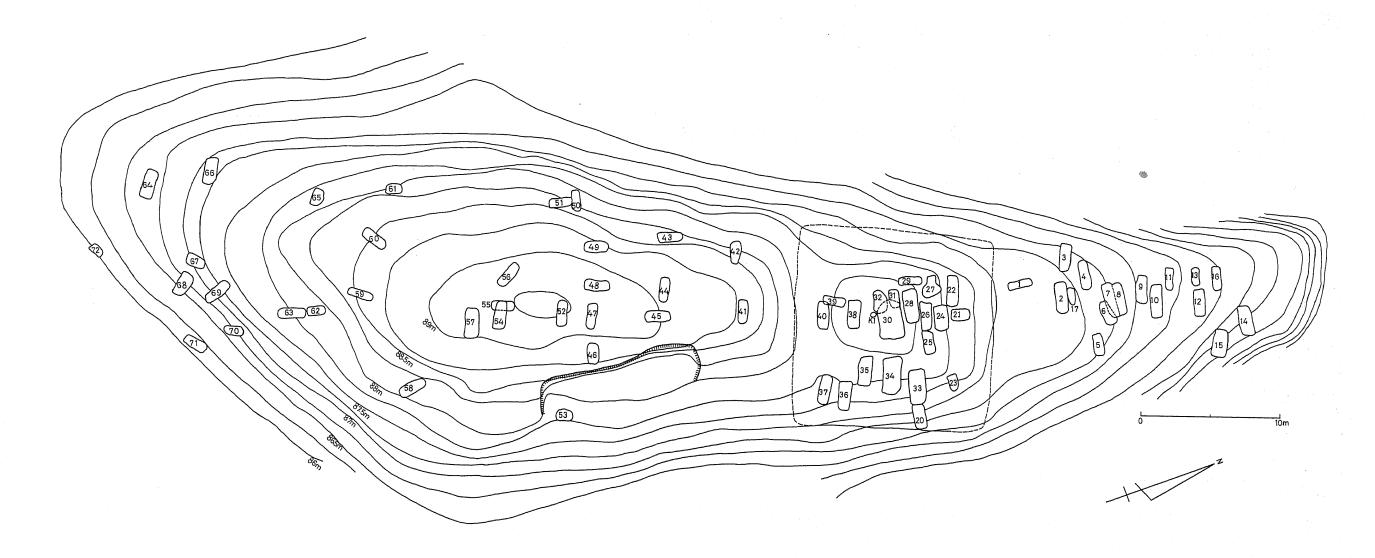
各遺構整理の都合上, この土壙墓群をA・B・Cの3地区に分けて呼称することとした。すなわち, 台状整の北側尾根上19主体をA地区, 方形台状募23主体をB地区, 南丘陵頂平坦部31主体をC地区とした。また各土壙については, A地区からの通し番号で表わすこととした。

A • B • C の 3 地区は, それぞれ 地区ごとに特徴をもつ。

A地区は,北に下降する巾狭な馬 の背尾根稜線周辺に営造されてい る。遺跡の範囲は南北17mを測る。 方形台状墓に近い第1土 壙のほか は, すべて尾根主軸に直交して地山 に直接掘り込んだ土壙墓である。土 壙の掘り方は、他のB・C地区にく らべて粗雑であり、やや小形のもの が多い。掘り方プランは隅丸長方 形, または長楕円形を示し, 床面も 水平面をもたないものが多い。両小、 口に溝をもたず枕石を置くものが多 い。土壙直上に置かれた石が、棺の **腐朽に伴なって陥没転下したと思わ** れる状態で,土壙掘り方内の土中に 検出される例が6例もあり注目され た。供献物と考えられる土器等の遺 物の検出は少なかった。明らかに土



第37図 四辻土壙墓群発掘区



第38図 四辻土壙墓群配置図

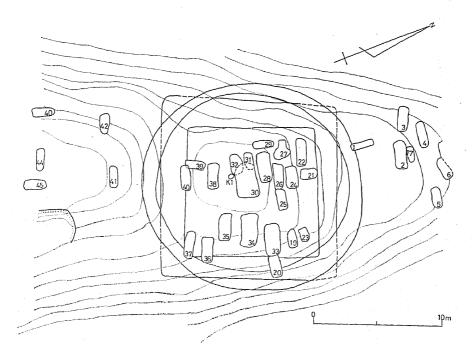
	-		-	
	-			壙に件
			-	土の土
	直			少ない
		-		形式 も
				れる。
				Вя
	all sur			を境に
	上器			れた世
Total or Total Or	i fi iku papa			保たれ
				に枕る
				を伴た
			1	半に上
~	2			干切!
36.82	86.57	35.95	35.52	C±
				×481
0	89	1.0	6.0	に沿-
8			<u> </u>	上方の
ş	77	ω.	ស្ម	面施計
****		, marriage	1-3	台状型
	33	8	8	ほぼり
	*****	ender en		
B	901	134	88	
,				
쫎	70	7	3	
			m	
8	रेश्वे जन्म	164	ğ	
A	ш	ы	z	
W.Z.W	N30'E	NS4'E	E32° N	
			inde	
13mg		平江	本行	
芴	4	力形	湯	
26.3	H	100	11	
	九 段	い口円端	-	
K	DE:	2	2	
S	8	Ħ	23	
v 1 v 1 d 1 d 1	. Anagon	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
				CONTRACTOR STATE

	麻		転石5 転石3	転石5	転石2	転石2				転石2					 	和 和 和 和 和 和 和 和 和 和		転石2,床面に朱	転石3	直上石2						直上に石		直上石1		転落石2声 - 元 1	1741	e e e e e e e e e e e e e e e e e e e	Wilder Williams & Wilder				床面に朱		gggggade van oor		w waterwes		7342	understand the second second		and the same of th	MARK communication (see that the second contract of the second contr	直上石材1	
	通	勾玉 2, 管玉13小玉21	土器片 土器片	土器片	土器片		计略计	上	十	上器片	上路下上路下	十二		土器棺K1		枕石?		一括十器		鉄鏃1	一括上器	土器片二年七點	10.L fir	一括上器		一括上路	一括王器,埋土中石鏃1	一括土器+第二	17 (iii)	-				有製込む			一括土器	干燥干		一括上器	和今七二二二二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	和小士器	門家では	新 小 活一等				工器工	
	床 面 施 設	枕石1対		床に段枕石1対		枕石1対		2 4			74			MATERIAL PRINCIPAL PRINCIP	ga	小口瀬コ	枕石2対	小口溝134 小口溝134		机石1対		枕石1対			接口ぐ	77 - 1	小山角, 枕石 1 刈一小口溝	in te desatel delitical	小口港		godine oz delphike v	松石 按			a wakanan Kirista	over the selection of t	ない。	小口牌		※日本	alanda Arriva		and a few section of	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		- Northern von Michael	Sec. of alternal		
床面高	(標高)	87.28m	86.77 86.61	86.47	86.58 88.58	86.33 86.26	86.17	86.21 86.21	85.91	86.24	85.22	86.77		87.71	87.40	87.50	87.40	87.20	87.78	87.74	87.61	87.93	87.54	87.65	87.29	87.53	87.33	87.81	87.86	88.24	88.07 40.08	88.83 88.83	8 8 8	86.83 86.93	88.41	8 8 8 9 7 9	88. E	8 8	8 8 8 8	88 1	87.83 88.83	8 8	97:19 97:93	87.72	8.8	8 8 8	8.82	86.57 86.57 86.98	88.54
和	現地表		58.7 45	29	28.5	82 83	46.5	27	41.5	4	45	48		l				1 - 1										1	I Managadar -	72	8 8 9	습 4 대	39.5	8 8 v v	SS :	28.5	42	44	i 8	83 : 19	& & E	32.5	9 8	22.00		4 77 5	÷ 8	41.0	36.0
斑	掘り方		24.5	37	18.5	27.5	25.5	13.5	ъ 6	24	20	25.3	TO CONTRACT VICINIA	35	8 8	8 7	26	26 15	61	16	32	4 5	47	88 5	24 Z	평 8	37	23	17	23	18.8	8 8	8 8	7.5	91.9	13. G	2	e e e	12 E	83 ! 	10 12 10	181	in 60 F	10 10	1 3 5	7 40 4	N) prod and prod	178	15
恒	4		50											WALL TRANSPORT	8 8	7 98	8	8 8	62	18	- 28	64	급대	22 (z &	8 8	74	8 8	3 8	នន	9 4	55 E	75	27 27	8	3 B	28 23	77.	52 25	8	8 B	88	8 8	20 G	3 Q 1	8 78 8	23	888	8
田	兩	162ст	197	201	150	226	191	158	127	105	160	114		1	165	R 21	211	8 8	140	280	220	168	G-6-	1.44	230	195	9 Si	182	187	157	174	151	131	166	145	143	164	े ह्य	193	5	2 S		23 -4 23 -4 24 -4 24 -4	5 8	3 60 1	3 27 3	3 19	8 8 8	88
方上面	4	55 <i>cm</i>	91	73	94	۰۰ ۰۰	8 9	\$ 23	8 8	32	84	23 25	No. providence common and selections of the c	54	84	e 8	77	65	75	8 5	3 2	8 5	68 89	8 8	133	102	8	103	75	3 83	77	75	39	92 93 93	4.	3 8	75 E	3 22 1	ជ ន	83	8 B	16	2 #3	£5 8	i	# S 1	¥ 8	2 2 2	61
現在掘り	斯	168cm	228	219	191	261	210	168	133	119	180	130	and plane and a great growth and	22	195	150	225	115	155	21.7	244	169	911	36.	792 780 780	217	215	202	8	170	661 661	171	199	777 174	170	159	8 8	8 8	r R	22	2 2	3 1	9 23	88	388	3 31	5 8	888	807
祖		N10° E	E 8°S E27°S	E 8'S	E10°S	E112 S	E13° S	E.20°S	E10°S	E10°S	E35°S	E10'S	er view dann da unión de	E'19S	E22'S	E22-S N15-E	E2028	E10°N E11°S	E112S	E2L'S	£20'S	N16'E	E19'S	E22'S	S,083	E29'S	E30, S	E7'S	E27'S	E21.5	E17 5 N25'E		E20'S	E18'S N22'E	N22'E	E24-5 N25'E	EZI.S	E23-S	N27-E E47-S	E36. S	NIO'W NEI'E	NS.E	NS E	NZVE	E 8 2	N E	¥.®×	N 30'E N 54'E	E32" N
配	3652	平行	直	直交计	国直义交	画画家交	直が次が	画画交叉	画数多多	直交	直数次次	回河交次		直交	直交计	国文	直交	直 河汊 交 交	直交	直点交流	直直文文	本本	国直入炎	國家	関数	東東	國意义交	直置或	國際	國家	医子父行	歴史が行	-	国の子	片片	単まれた	間次出	: 数 :	kung plang Ngan dispara Ngan dispara		Anna Anna Maria Anna Maria Anna Maria Anna				成成の文文文	X 12 :	X im	14年	,and
	半面ブラン	長 方 形	丸梢	格田	Į,	版 古 元 光 形	大士	これを の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	開丸長方形開か馬		題丸板力形留土底土炭				隅丸長方形口十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	#	E	長 才 版 方 形形	長 方 形	坂南田形工	不 禁 形 隅丸長方形	方品	発 名 な ⊿ 形小口円弧長方形	小口円弧長方形二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	長なる	五十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	カカ	大 買 工 工	两人 权力	双方十		質問力	配式成化形	配为成功形配为的人的	臨大成万形	配ろれと方配方はたが	大	(本) (本)	对		2 日本				a en		表 X 以 数 分 数	在東京	
上播		٦	0 0	4 (ဂ ပ	7 8	o 5		3 2	14	15	17	K 2	18	139	ন স	8	8 %	123	3 %	7 88	MARIT AND A PROPERTY OF	8 8	3 3	8 8	£ 8	37 %	8 8	8	4 5	4 t	44 th	; 94	4 A	& !	न्न ह	e e	2 2 2	ස 보 •		ස ස	8 8	d 3	8 5	5 13 8	8 53 8	88	288	2
岩	M		and the same of the same	Market and an analysis of	and the second of the second	and the contract of		4	*****		na an air an Annais (an a	(Annual or mine)				-		Name and the state of the state of		care appearance	**************************************	Å	nan matakin pelini m	La televisione de recent		promotive section	and the appropriate control of the second con-		ericanity commission in	1		make and ordered to the or			was the second of	otopen er objeto.		tuning the section consti		 			r Laure II	area desarta		and the second second	Committee or a state	gar a suppression	

療に伴なう供献の行なわれたと推定できるものは、第1土擴床面出土の玉類、第2土擴掘り方内出土の土器(酒津併行)、第14・15土擴内検出の土器(前山Ⅱ併行)のみである。いずれも個体数は少ない。また土器棺に使用されたと考えられるものは、地山上面にまでその掘り方が達せず、編年形式も、いわゆる上東Ⅰ式と呼ばれる時期のもので、土壙埋葬とは時期を別にしての埋葬と推定される。

B地区は、方形台状塞上面の平坦部地山に直接掘り込まれた土壙群である。台状墓の南北中心線を境にして、その東西に2つのグループを形成して埋葬されている。築成当初から計画的に配置された埋葬のようである。他の地区にくらべて、大型のそれも整然とした土壙が多い。床面も水平に保たれ、両小口部に小口板の存在を思わせる溝を有するものが11例検出され注目された。また床面に枕石をもつものは8例ある。土壙墓埋葬後その被土の直上、または掘り方縁辺に供献された土器を伴なうものが10例検出され個体数も多い。これらの土器は、いずれも弥生式時代中期中葉から後半に比定される、前山Ⅲ式の時期に併行するものである。土器棺は、後期初頭のもので地山面を若干切り込んだ形状で検出したが、多くの土壙墓群より後出のものと思われる。

C地区は、検出土壙数31主体と最も多いが、遺跡範囲も亀甲形の丘陵頂平坦部全域にわたり15m×48mと広く、その配置は前2者にくらべてまばらである。土壙の向きも、尾根主軸および等高線に沿って平行または直交とまとまりを欠く、土壙の掘り込みも地山上面からはじまるもの、その上方の有機土層からはじまり、地山上面でとまるもの、両者にまたがるもの等さまざまである。床面施設についても小口溝をもつもの、枕石をもつもの、無施設素掘りなどまとまりがない。しかし台状墓に近い北半の土壙は、床面も平らで小口溝を有し、伴出土器も前山Ⅱ式を検出し、B地区とほぼ同様の埋葬形態を示す。一方南端に近い土壙は、掘りこみの深さも浅く不整然となり、特に59



第39図 第5墳墳・台状墓関連図

~63土壙では酒津併行期と思われる手づくね土器を多数伴出する。なおC地区の北東肩部で、等高線に沿って約11.5mにわたり、段状の切り込み稜線が検出され、列石状の石組み数個を認めたがそれ以上のことは不明である。

第2節 各土壙・土器棺素描

個々の各土壙の計測値については麦4に一覧表で、またその配置関係については図38に示しているので、ここでは割愛して、各遺構の特徴のみを記すこととする。なお遺構番号は原則として、配置の順序に従って付したが、なかには発見がおくれる等のため、若干の乱れを生じた。遺構番号を整理訂正する時間的余力がなく、今回の報告では調査時の番号をそのまま用いた。したがって配置の順に記述をすすめると、通し番号と異なる記述順となる部分を生じ、多少の混乱をみせることとなった。初めに記してお許しを願いたい。

1. A地区(北の尾根グループ)

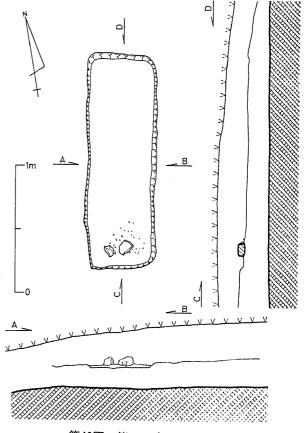
第1土壙(図40)

台状墓の北部墳端からさらに北へ1.5m, 尾根主軸線の西約2.5mに位置する。長方形のプランをもった, きわめて浅い土壙墓である。A地区土壙群の中では, 尾根主軸と平行する唯一のものである(図版33)。

床面は全体的には平らであるが、地形の低い北にやや低く傾斜している。床面南北端での比高は3cmを測る。掘り込みは地山上面まで達せず、現地表下一23cmに床をもち、地山上面までの深さは約18cmである。掘り込みの壁は現況ではかろうじて確認できる程度しか遺存せず、その深さは平均4cmである。南小口の主体中心線上に、付近に産出する山礫を用いた枕石1対があり、その周辺30cmの範囲内に、小形勾玉2、管玉13、ガラス小玉21、計36の玉類がまとまりをもって散っていた。おそらく被葬者の遺体に着装されていたものと考えられる。

第2土壙(図42)

尾根稜線にその東小口をおいて,直交する形に直接地山に掘り込まれた土壙である。掘り込み線の確認できる地山上面および床面ともに,小口部は外ふくらみの円弧状を呈する長方形であるが,形状

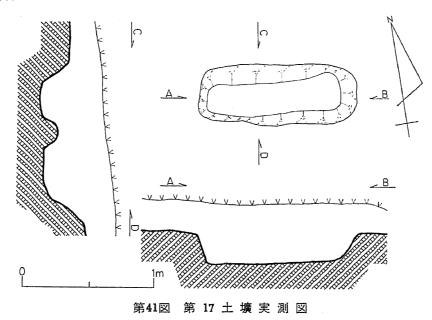


第40図 第 1 土 壙 実 測 図

はやや粗雑である。床面はほぼ平らな面をもつが、西小口に比して東小口が約8cm低く傾斜している。土壙内東半部に4個の山礫が検出されるけれども、枕石のように意識的に置かれたものではない。土壙上に置かれたものが棺の腐朽に伴なって、転落した形態を示している。土壙北側壁中央部の掘り込み部に高坏脚1および埋土中に土器片3個体分を検出したが、いずれも酒津式併行のものである。出土状況からみて、本土塘との伴出関係が強い。

第17土壙 (図41)

第2土壙の北に近接して、それと併行して掘られた小土壙である。両者の中心線間の距離は57cmである。隅丸方形のプランを示すが、掘り方は粗雑である。床面の埋葬施設、伴出遺物ともに検出しなかった。



第3土壙

第2土壙の西約70cmに,第2土壙と直列状に並んで位置する。土壙中心で尾根主軸より約4m離れ,100分の23とかなりの傾斜面に立地している。したがって床面もその影響を受けてか,東小口にくらべて西小口では約22cm低くなっているが,全体としては平らな面を有する。掘り方のプランはやや不整形な長楕円を示し,素掘りの埋葬施設である。東小口に近い埋土中に,3個の山石が検出され注目された。いずれも10cm大から15cm大の扁平な割り石で,床面上方約8cm~13cmに浮いた形で発見されたが,土壙中心線上に直列して発見された。枕石のように床面施設として意識的にその場に置かれたものではないにしても,塞標的な意味か何かの目的で,土壙被土の上に置かれていた可能性を示すものではなかろうか。

第4土塘

第2土壙および第3土壙の中間の真北に位置する。 両者の中心線間の距離は約 1.5mである。掘

り方上面および床面とも,両小口は円弧状の長方形を示すが床面は水平につくられている。南側に約5㎝高いベルト状の段をもち注目された。東小口に2個,西小口に3個の山石を検出したが,いずれも転落したもので,床面上約8㎝に浮いていた。

第5土塘

尾根稜線を対称軸とすると、 第4土壙と ちょうど対応する立地をしめる。 第4土壙との 距離約3.2mを測る。掘り方の平面、断面ともに歪みをもち不整形である。 西小口部床面に接して、10cm大の山石2個を検出したが、枕石ではない。

第6土塘

第6土壙から第8土壙までの3土壙は、尾根稜線上に、それと直交して存在するが、互にその掘り方は切り合っている。そしてさらに第6土壙と第7土壙の切り合い部の直上に土器棺(K2)が後から埋葬されている。

第6土壙はこれらのうちで、最も南に位置し東にずれている。 したがって 第6土壙の西小口部 は、第7土壙の南側壁中央部にあたり、第7土壙によって、北西部の約3分の1を切り込まれている。

土壙の地山掘り込みは約8 cmと浅く,第7土壙との床面比高は20cmを測る。平面プランは、掘り方,床面ともに楕円形となりやや小形である。床面は水平であるが全形は不明。東小口に10cm大の山石が1個検出される。

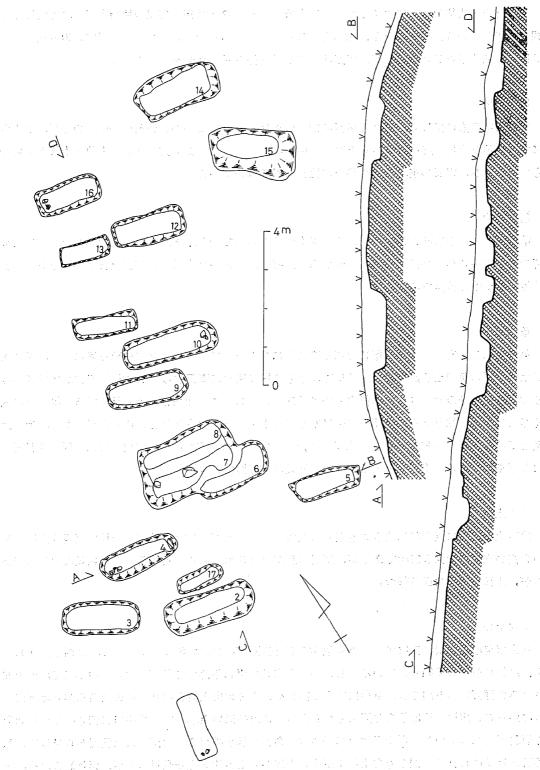
第7土壙

第6土壙の西北部を大きく切り込み、さらに北側壁は第8土壙と切り合う土壙である。互に切り合っているため原形は明確ではないが、長方形プランをしめすと推定される。床面もほぼ水平な面を保ち、整然とつくられている。掘り方上面での長径261cmを測り、A地区内では最大の規模のものである。掘り方上面とほぼ同レベルの土壙中央部に、25cm×35cm大の山石が検出された。床面から石材下面までの比高は約25cmを測る。さらに西小口北隅の床に18cm角の切り石1個が存在したが枕石ではない。ともに埋葬施設に直接伴なうものかどうかは不明であるが、この地には自然に存在しない石材である。

第8土壙

第7土據の北に接して、平行に掘られた同巧同大の土壙である。床面の直接の切り合いは認められないが、側壁が切られ、壁の立ちあがりは約3cm程度しか遺存していなかった。床面は第7土壙にくらべて約5cm低い。一見して第7土壙と第8土壙は、共通の掘り方内埋葬の感すらするほどであった。床面は長方形で水平な面を保つ。

第9土壙



第42図 A地区土壙墓配置図

第8土擴の南約1mに位置するが,第10土擴,第11土擴と相接して尾根稜線上にそれと直交して掘り込まれている。掘り方上面,床面ともに小口部は円弧状の長方形プランを示す。地山掘り込みは比較的浅く平均20cmであるが,床面はほぼ水平を保ち平らな面をもっている。

第10土壙

第9土壙の南に接して、それと平行に掘り込まれている。その間の距離は18cmを測るが、やや東にずれ、第9土壙の東小口壁が本土壙の中央部になっている。掘り方、形状とも第9土壙と同**巧の**ものであるが、床面の東小口中心線上に枕石一対を置いている。

第11土塘

第10土壙の西小口部の北28cmに、その東小口部をおいて掘り込まれている。前の2土壙とほぼ**同** 巧のものであるが、長径 173cmとやや小形で、掘り込みの深さも浅い。床面はほぼ平らであるが**杜** 石等の検出物は皆無である。

第12土壙

第11土壙の北約 1.3mに, 第13土壙と直列状に並んで位置する。尾根主軸線を境にして, 東に第12土壙, 西に第13土壙が位置し, 長軸線はともに尾根稜線に直交する。丘陵尾根自体がすでにかなりの下降傾斜をみせ, さらに尾根巾もやせて狭い。そのためか土壙掘り方も確認できる限りでは浅く粗雑である。掘り込みの壁面もその横断面形は上広がりの台形を呈し, 地形の高い南と, 低い北壁とでは10cm以上の差をみせる。床面も地山の低い東小口の方が西小口に較べて10cm低く傾斜面となり不整然である。素掘りの土壙で, 床面施設は何も検出しなかった。

第13土塘

第12土壙の西に直列状に並らぶ素掘りの土壙である。 長径 134cmと小形の土壙で壁高も浅い。 地山の高い南壁での深さ21cmであるが,反対の北壁では5cmである。 枕石等もたず粗雑な掘り方であるが,床面は水平な面を保つ。

第14土壙

本土擴群中最北端に位置する。 馬の背尾根の 稜線から約2 m 東によった ところに西小口をおいて, 尾根に直交して掘られている。 したがって現地は東に下降する斜面となり, 西小口では地山掘り込みの壁高20cmを測るが, 東小口は床面高がそのまま地山上面となり, 壁の立ちあがりは確認できなかった。 床面もほぼ平らな面はもつものの, 地山の低い東小口で, 西小口に較らべて約10cm低く傾斜面となっている。 西小口床上に20cm大の角石 2 個が検出されたが, 出土状況から推して, 転落石と見受けられる。 掘り方埋土およびその周辺から土器片 3 点を発見したが, 編年形式はそれぞれ異なり, 本土擴に直接伴なうものかどうかは不明である。

第15土壙

第14土壙の南約1 mに、それと平行に掘られている。第14土壙同様尾根稜線より離れ、東面する 斜面に位置するため、壁高も一定でない。地山そのものに山礫を多く含み土壙の検出も困難な状態 であった。掘り込みの状況も粗雑である。床面も地山の低い東小口は、西小口にくらべて16cmも低 くかなりの傾斜をみせ、その横断面も抛物線をえがく。土壙埋土および床面に数個の角礫を検出し たが、本土壙の場合はそれが意識的なものかどうかは不明である。掘り方土中から土器片4個体分 を検出した。弥生式時代中期末~後期初頭のものである。

第16土壙

第13土壙の北約90cm,丘陵尾根稜線上に、それと直交して位置する。平面形は長方形、断面形は 縦横ともに上広がりの浅い台形を示し、床面もほぼ水平に掘られている。床面の西小口中心線上に 山石4個を用いた枕石1対が置かれている。

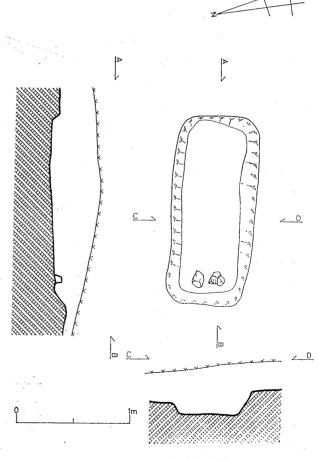
土器棺K2

第7土壙の南側壁に接するように、同 土壙掘り込みの中から検出された。そこは第7土壙 東小口掘り込み 線から 約60 cm,第6土壙の床面西小口にあたる場所 である。

土器は、その場所で土圧によって破砕した状態の一括破片甕1個体分である。横倒しにした状態で下半分のみが残存していた。口縁部を東に向け、その主軸線の方向は第7土壙と一致する。現況の土器下端となる胴部は、第6土壙床面下16cm、第7土壙床面上方10cmにあって、その出土位置だけからみると、第7土壙葬送に伴なうようにみえる。しかしこの土器の周辺には掘り込み線が認められ、小土壙内に置かれたものである。したがって本土器は、第7土壙埋葬後のある時期、同立地に小土壙を掘って埋納した土器棺と考えるのがより妥当と思われる。

土器棺K3

第12土壙の北側壁掘り方に接して,現



第43図 第16土壙実測図

地山上面よりさらに外法 7 cmに基底部を置く、壺形土器の破片である。そこは現地形地表面よりの深さ約13cmと浅い。土器は底部のみが残存し、それも土圧によって破片となっていた。第12土坡葬送に伴なう供献物との考えもあるが、先に報告した便木山遺跡では、これと同一状況で検出した土器底に玉類が発見された例もあり、一応土器棺として扱かった。

2. B地区(方形台状墓グループ)

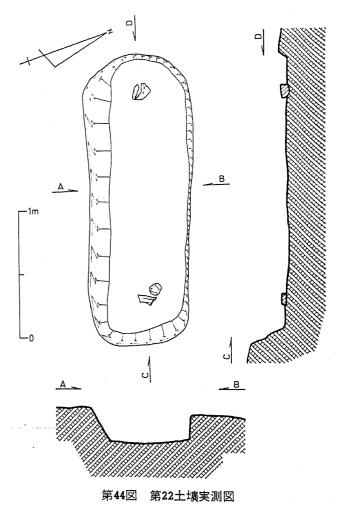
本土壙群の中心である方形台状墓に掘り込まれた土壙墓群23主体である。 A地区にくらべて整然と掘られ、床面も水平でしっかりしている。配置の状況から台状部南北中心線を中心とした西のグループと、台状平坦部東肩を中心とした東グループの2つに分けられる。 ともにその中央に大形土壙をもち注目される。 また葬送に際して供献されたと考えられる土器を伴出するものが多い。 ここでは土壌番号の順序にはこだわらないで、西グループの北端から南へ,ついで東グループ北端へと、配置の順に記述をすすめたい。

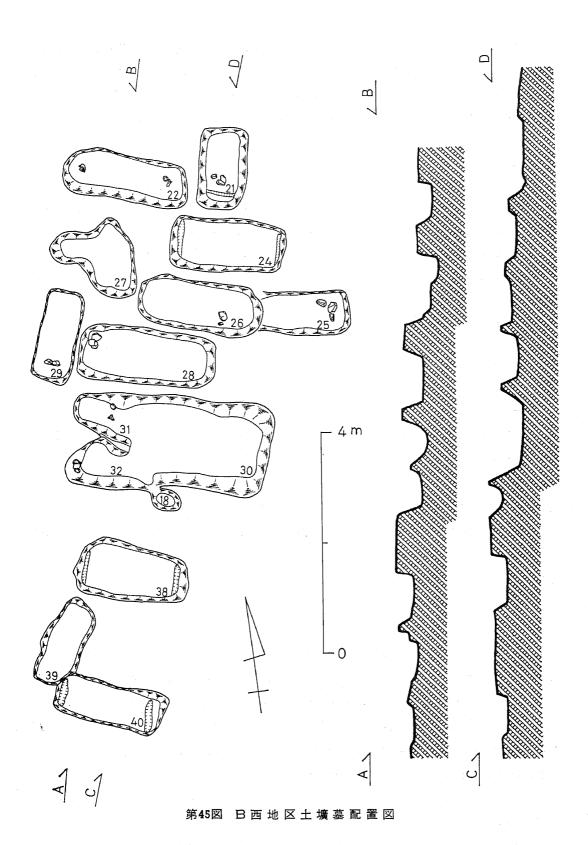
第21土塘(図45図版23)

西グループの北端に位置する土壙で ある。そこは, 台状墓頂平坦部の北辺 にあたり, 土壙はその斜面にまたがっ ている。また台状墓南北中心線より約 60cm西に位置する。掘り方および床面 とも, 隅丸方形のプランを示し, 長軸 は丘陵尾根と平行におく。掘り方上面 での長径 145cmと小形な土壙である。 台状墓肩に立地するため地形の高い南 小口壁の高さは25cmを測るが、北小口 壁では約6cmとなっている。床面は水 平な面を保ち整然とつくられている。 床面南小口壁に沿って浅い小口溝1を 有し,長軸床面上の南小口壁から30cm に、山石による枕石1対を置いてい る。

第22土壙 (図44)

第21土壙の南小口掘り込みに接して、南側掘り方をおいて、鍵の手状に掘られている。両者の間に畦状に残る地山上面巾は15cmである。したがっ





— 93 **—**

て、本土壙の長軸は尾根稜線に直交する。土壙の掘り込みは地山上面からはじまるが、西小口では 地形が低くなるため、東小口壁高25cm、西小口壁高7cmとなる。しかし床面は水平面を保ち、東西 両小口床に山石による枕石各1対を検出注目された。両枕石は長軸中心線からおたがいに反対に少 しずらし、差違えに2遺体埋葬を物語るかのようである。

第24土壙

第21土壙の南に接して、それとT字形に掘られた土壙である。両者の間に畦状に残る地山上面の巾は15cmである。土壙の掘り込みは地山上面からはじまり、長方形プランをもって整然とつくられている。床面は水平を保ち、東西の両小口に溝をもつ。溝は小口壁に沿って掘られ、巾は8~14 cm、深さ約12cmを測る。その横断面形は上向きの台形状を呈する。したがって床面長は全長で 183 cmを測るが、小口溝間での床面長は 157cmとなる。床面の一部に僅かではあるが、朱の広がりが認められる。

本土坡の西小口,南側壁掘り方外方に30cmの山石1個,および東小口床面上約10cmの埋土中に, こぶし大の山礫2個が検出された。また土坡埋土中に遊離した状態で弥生式土器片4点が検出され たが,いずれも小片で,直接本土坡の埋葬に伴なうものかどうかは不明である。

第25土塘

第24土壙の南約18㎝に第26土壙がそれと平行して位置し、その東に直列状に本土壙がある。第26 土壙によって本土壙の西小口は床の一部を含めて切られている。長方形プランをもって掘られているが、地山上面からの深さは約15㎝とさして深くない。第26土壙床面よりも7㎝高位である。横断面は中心の深い円弧状を示すが、壁の立ちあがりはやや外傾の直線である。しかし縦断面は台形で、床面は水平を保つ。掘り方内埋土中の、東小口に近く3個の山石が検出された。そのうち2個は長軸中心線上に対称的に並び、一見枕石状をみせているが、床面の上方約10㎝浮いており、残る1個とともに転落石と考えられる。

第26土壙

第25土壙の西小口を切って位置する。掘り方プランは,両小口部が外ふくらみの円弧状の長方形である。西小口部に巾16cm,深さ8cmの小口溝1をもつ。床面はほぼ水平を保つが,横断面では中心部がやや低くなっている。西小口溝から東へ約46cm,長軸中心線より南15cm,床面上方約12cm に鉄鏃1点を検出した。本土壙群中唯一の鉄製品遺物である。また東小口から約65cmのほぼ中心線上の,地山上面掘り方とほぼ同レベルに,15cm×20cm大の扁平な山石1個と,こぶし大山石1個の計2個の石材が検出された。

第27土塘

第22土壙の南約35cm, 第24, 第26, 第28土壙等に囲まれるような位置に掘られた不整形な土壙で

ある。その断面形も不整形で、一定の平面をもたない。本土擴群中他にこのような不整形な形状の土壙墓は見当らず、あるいは埋葬施設でないかも知れない。しかし、削平された地山上面から明らかに掘り降ろされ、最深部では45cmにもおよぶ。複数土壙の切り合いも考えられ、ここでは一応土壙としてとりあつかった。

第28土塘

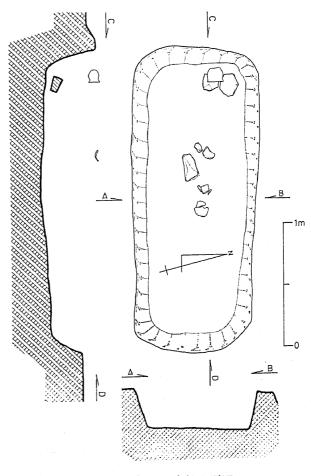
第26土壙に接して、それと平行に掘られているが、全体がやや西に寄っている。長方形プランをもって整然と掘られた大形の土壙で、長径 244cm、巾 100cm、深さ32cmを測る。断面形は縦横ともに上広がりの台形状を呈し、床面も水平な面を保つ。床面西小口に枕石1対をもつが、長軸中心線よりも北に扁している。床面の巾80cmから推して複数埋葬も考えられる。枕石直上にあたる土壙掘り方内の地山上面と同レベルに、完形の坩1個体の他、土壙中央付近の埋土中に弥生式土器高坏、壺など計5個体分の土器片が検出され注目された。これらの土器は、本土壙葬送に際して、その埋土の直上に置かれていた可能性が強い。さらに土器片とともに転石1がその近くで発見された。

第29土壙

第28土壙の西小口壁に接して、その西方に丁字形につくられている。したがってその向きは、尾根稜線に対して平行である。地山面の掘り込みはきわめて浅く約5cmを測るのみである。地山上面に直接床を置いていたといってよいほどで、その形状は、A地区第1土壙に類似する。床面はほぼ水平な面を保ち、南小口から23cmの長軸中心線上に枕石1対をもつ。

第30土壙

第28土壙のすぐ南に隣接して、それと 平行に掘られている。方形台状墓の中心 にあたる位置を占め、その大きさも長径 260cm、「1165cm、深さ51cmと本土壙群中 最大の規模をもつ。本土壙の西小口を第 31土壙、第32土壙が切り合い、また南側 壁中央部では土器棺(K1)が、その一



第46図 第28土壤実測図

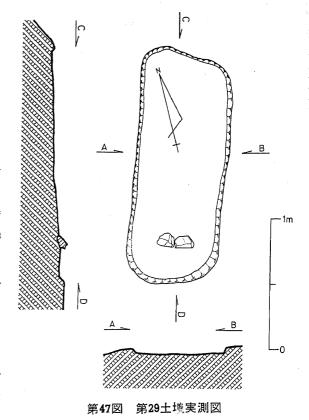
部を切って設けられている。そのため掘り方プランはかなりの乱れをみせている。しかし、原形は長方形のプランをもち、整然と掘られた土壌と推定される。断面形は縦横とも台形を示し、床面は水平な面をもつ。床面は水平な面をもつ。床面は水平な面をもつ。床面は水平な面をもつ。床面は水平な面をもつ。床面は水平な面をもつ。木側壁にいるため、その部分は不明であるが、遺存する限りでは何も認められなかった。北側壁に接して、棺の腐朽に伴なって転落した状態を示す完形の台付壺が1点と、他に弥生式土器片数点が検出された。台付壺は床面より29cm上にある。おそらく本土壙埋葬に伴なって、その埋土の直上に置かれていたものと思われる。

第31土壙

第32土塘

第30土壙の西小口壁を切って、その西方に 掘られた小形の土壙である。掘り方の形状か ら、第30土壙より後出のものと思われる。

床面は,縦方向には水平面をもつが,その 横断面は抛物線を示す。床面に枕石1対を検出した。



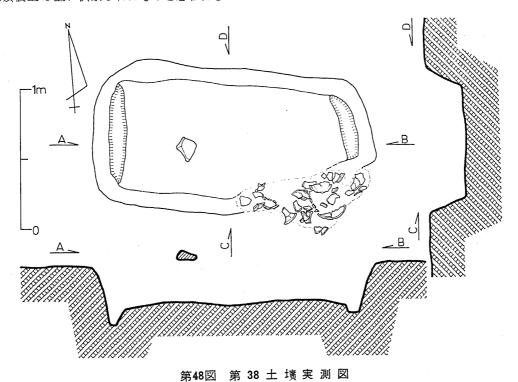
第31土壙の南に隣接して、第30土壙西小口を切った小土壙である。 互に切り合っているため、現 況は不整形であるが、もとは長方形プランをもつものと推定される。 第31土壙とほぼ同巧同大のも ので、西小口に枕石 1 対を有する。

第18土壙(土器棺K1)

第30土壙の南側壁上端を一部切って、その南に掘られた小土壙である。壺を利用した土器棺K1を埋納するために掘られたもので、その形状も土器の形に合せて、楕円形である。長径70cm、短径54cm、深さ35cmを測る。土器棺に用いられた壺は、底部を東南において、横倒しよりやや口縁を上にした程度の形で埋納されていた。その上方は地山削平面より上方に露呈し、口縁部および肩部の上方を欠損していた。弥生式後期初頭の壺である。蓋に用いられた土器は検出されなかった。おそらくは、地山上面よりももっと高い位置から堀り込まれたものと考えられる。なお掘り方内および周辺から、高坏片2個体分、坩2個体分の小片を検出したが、いずれも中期中葉~後半の特徴をもち本土器棺に先行する。いずれも直接本土壙に伴なうものかどうか不明である(図版30)。

第38土塘

第30土壙の南約1m離れて、それと平行して掘られている。掘り方上面および床面ともに隅丸方形に整然と掘られ、床も水平な面を保つ。床の東西の両小口に溝をもち、溝間床面の内法長は157cmを測る。溝の巾は10cm~12cm、深さは11cmで、その横断面は台形である。土壙掘り方の南東隅、地山削平面から埋土上方にかけて、高坏、坩を主体とした弥生式土器が、一括して小山のように盛られた状態で検出された。土器群の最高位は地山削平面より約30cmと高く土壙上被土の厚さを暗示するかのようであった。いずれも破片となっていたが、確認個体数は9個体である。葬送に際して土壙被土の上に供献されたものと思われる。



第39土壙

第40土塘

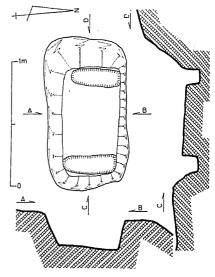
第39上坡の南東角と本土坡西北角を切り合っている。第38土坡と平行し、その間の距離 1.5 mで

ある。長方形に整然と掘られ床面両小口に溝をもつ。溝間の内法長は 147cmである。第38土壙とおなじく斜面にあるため、南小口では床面高が直接地山上面と同レベルとなり壁は検出できず、溝の存在でその規模を知り得る程度である。

第23土壙 (図50図版23)

本方形台状墓頂平坦部の東半から台斜面にかけて、その東稜線を直交して切る形で、8基の土壙が並列し、一つのグールプを形成している。

第23土壙はその最北に位置する,長径 115cm,巾65cm の小形の土壙である。長方形プランをもって整然と掘り込まれているが平坦部肩から斜面にかけて設けられているため,傾斜面に直角に掘り込んだ溝状の感じを与える。床面両小口に溝をもつ。土壙規模が小さいため溝間内法床面長は54cmと小さい。溝の断面形は台形に整然と掘られ,13cmと深い。枕石等の施設は検出されなかった。



第49図 第23土壙実測図

第19土壙

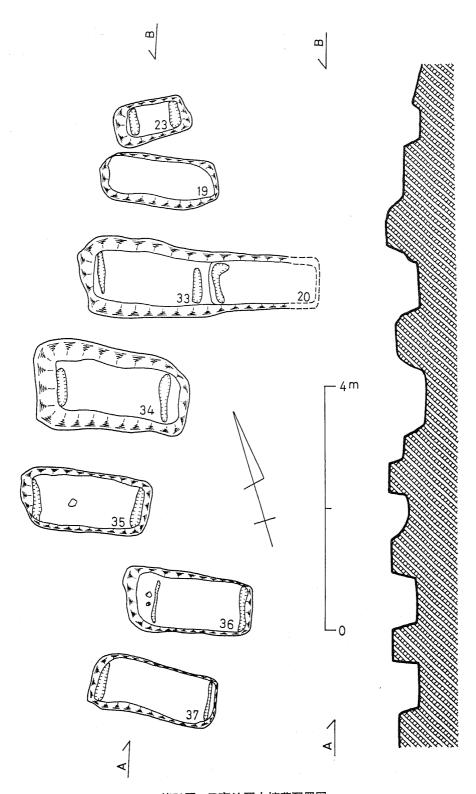
第23土壙の南に隣接してつくられている。 隅丸長方形の プランを示し、 床面もほぼ水平であるが、掘り込みはきわめて浅く、第23土壙との床面比高約20cmを測る。 このグループの各土壙は、小口溝を有するのが通例であるが、本土壙のみそれをもたない。

第33土壙

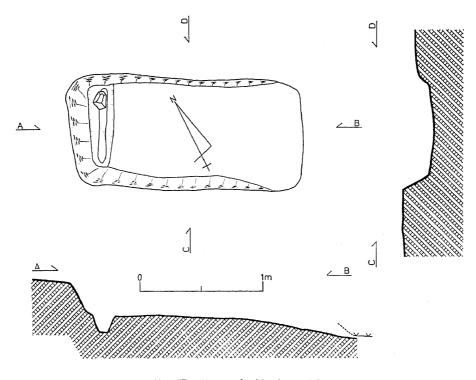
第19土壙の南約60cmに、それと平行して掘られている大形の土壙である。本土壙東小口には直列状に連なって第20土壙が掘られ、小口壁は切られている。南北の側壁は両者を通して直線状をなし長大な共通土壙の感じさえする。平坦部肩から斜面にかけて、それと直交しているため、西小口壁は60cmと深いが、地形の低い東小口では約25cmと浅い。しかし土壙は長方形プランで整然と掘られ、床面も水平な面を保つ。床面両小口に溝を有し、その内法長は148cmを測る。北側壁に沿って上から落ち込んだ状態で、壁に張りついた高坏等の一括土器片および、東小口床面付近でも土器片を検出した。この両者の土器片は、後の整理作業においてたがいに接合できるものもあり、もとは、土壙上に一括供献されていたものと思われる。破片から推定される個体数は5個体である。地山掘り込み上面と同レベル、土壙長軸中心線上に扁平な割り石1個が置かれている。

第20土壙

第33土壙と同一掘り方の形状をみせて、その東に直列状に連続する土壙である。床面も第33土壙と同レベルにつくられ、西小口部に溝を残す。第33土壙東小口溝との距離は19cmである。台状嘉東



第50図 B東地区土壙墓配置図



第51図 第 20 土 壞 実 測 図

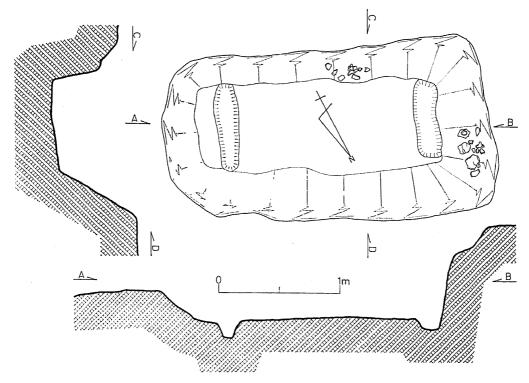
斜面に立地するため、床面の東半部は現地山上面より高位となって消滅し、 現時点では不明で ある。西小口部溝付近に一括土器片および転石1を検出した。

第34土塘

第33土壙の南約50cm離れて、それと平行につくられている。本台状墓東西中心線上にあり、西グループの中心土壙第30土壙と対応する場所にあたる。長径 260cm、巾 133cmと東グループ最大の規模をもつ。掘り込みの深さも大きく、地形の高い西小口壁では75cmを測る。長方形に整然と掘られ床面も水平な面をもつ。東西両小口に溝をもち、その内法長は 150cmである。溝の巾は上面掘り込み線で18cm、底部巾10cm、深さ10~16cmを測り、その横断面形は台形を示す。西小口壁、および南側壁の一部に、地山上面掘り込み線から壁中間部にかけて、上から崩れ落ちた状態での一括土器片が検出された。破片整理後の推定では、高坏を含む弥生式土器 6 個体分である。

第35土壙

第34土壙の南約70cmにそれと平行に位置する。長方形プランをもって整然と掘られた土壙である。 床面も水平な面をもち、西小口に溝をもつ。西小口壁部上方に、一部地山上面にまたがって、高坏が数個体積み重ねられた状態で検出され注目された。 完形の土器を土壙埋土の縁辺に一括して置いたものが、土圧等によってその位置で破砕した状態を示している。 後の検討の結果、これらの土器は高坏4を含む弥生式土器7個体分であった。また本土壙においても、土壙掘り方上面、長軸中心



第52図 第34土墳実測図

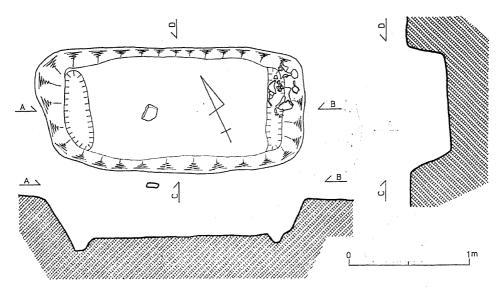
線上に, 扁平な山石1個が検出された。

第36土壙

第35土壙の東小口の南約50cmに西小口をおいて、それと平行して位置する。長方形のプランをもって整然と掘られているが、台状墓斜面のため、東小口床面は、現地山上面とほとんど同レベルとなり、掘り込みは認められないほどである。それに対して地形の高い西小口掘り込みは40cmと深い。床面はほぼ水平につくられ両小口に溝をもつ。さらに西小口中心線上に枕石状の山石1対(2個)をもつが、床面より約3cm高位に浮いており、転落石の可能性もある。西小口掘り方上面から床上にかけて、壁にそって崩れ込んだ一括土器片が検出された。高坏4を含む計7個体分の破片である。

第37土壙

第36土壙の南約60cmに、それと平行して掘られている。本グループ南端につくられた土壌で、一部は南斜面にかかっている。掘り方形状とも、第36土壙とほぼ同巧同大である。床面両小口に溝をもつ。西小口南壁角に掘り込み壁の中程から床面にかけて、一括土器片および床面中央部に高坏上縁部片が検出された。これらはいずれも、棺の腐朽に伴なって陥没転落したものらしく、後の調査で、高坏4を含む7個体分の土器であった。さらに土壙埋土発掘中、埋土中に遊離した石鏃1点を検出したが、直接本土壙葬送に伴なうものかどうかは不明である。



第53図 第 35 土 壤 実 測 図

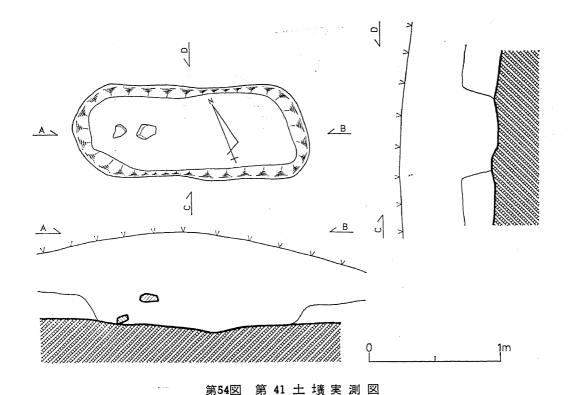
3. C地区(南丘陵頂平坦部グループ)

方形台状墓の南、亀の甲形の巾狭な丘陵尾根頂の平坦部一帯に広がる土壙墓群31基である。遺跡の範囲は南北46m、東西18mにおよんでいる。墓域設定のための地山削平整地とか、溝状の掘り込みをつくるとかの、これといった施設は施されていないようである。しかし、本地域の東北隅にあたる丘陵頂平坦部肩にあたる部分で、等高線に沿って長さ約11.5m、深さ約40cmにわたる掘り込みがあり、その東方斜面部と巾約3m~4mのテラス状の平坦部をつくりだしている。この掘り込み壁に近いところに、その上方掘り込み稜線に、直列状に並べられた石材が転落した状態で、30cm~40cm大の山石が7個検出され注目された。しかしその周辺一帯に土器片等の遺物も発見されず、この遺構が、本土壙墓群と直接関連をもつものかどうか、同時性を表わす確証は何も得ることができなかった。

各土城の配置は、前2地区に比してまばらであり、主軸の向きも尾根稜線に対して直交、平行、斜交とさまざまである。しかし各土壙の掘り方形状および出土遺物等から推して、第57土壙を境にその北と南の2グループに分けることができるようである。北グループはおおむね整然と掘られ、床面も水平で、伴出遺物もB地区と同時性をもつが、南グループは、掘り込みも浅く不整然であり、伴出土器も酒津併行と、前者に比して後出のものをもつものが多い。しかしこれはあくまで顕著に現われた特徴をもつものについての観方であって、各土壙個々がすべてその範疇に入るというものではない。

第41土壙

方形台状墓の南周湟掘り込み外縁から、さらに南へ約 3.5m、丘陵尾根稜線上にそれと直交して 位置している。 C地区土壙中最北端に存在する。本土壙は、地山上面から掘り込まれたものではな



く, 現表土層の中程からほぼ垂直に切り込まれている。現地表下-44cmに掘り込み上端をもち, 地山上面に床面をおく。小口が円弧状を呈する長方形プランをもつが, 床面は安定せず 不規則である。床面施設はない。西小口から20cmの長軸中心線の床上と, その東に接して床上16cmに, それぞれ10cm大の扁平な山石が各1個検出された。

第42土壙

第41土壙の西約 2.5mに東小口をおいて、直列状に位置する。現表土層内から掘り込みがはじまり、床面は地山上面で終る。西に下降する斜面にあり、床も東小口に対して西小口で約15cmと低くなり、かなりの傾斜をみせているが、全体としては平らな面をもつ。土壙掘り方上面とほぼ同レベルで、土壙中央部に20cm×30cm大の山石が1個検出される。

第43土壙

第42土壙の南へ等高線に沿って約3.5mに北小口をおき、丘陵稜線と平行してつくられている。 やや不整形な長楕円プランで掘られているが、床面は水平な面を保つ。これも麦土層内から掘り込 みがはじまり、地山層の掘り込みは約10cmである。

第44土塘

第42土壙の東 2.5m, 尾根稜線に直交して掘られている。 長楕円形のプランをもって, 表土層内

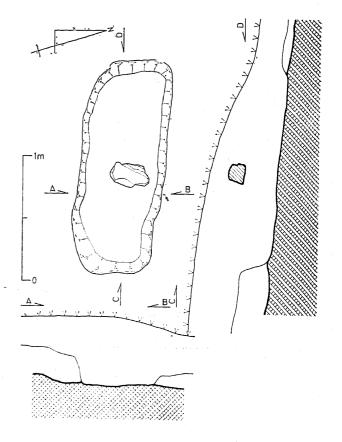
に掘り込まれ、床面は地山上面でとまっている。床は地形の低い西小口が、約5cm低くなるが、全体としては平らな面をもつ。南側壁中央部付近の掘り方外縁に20cm大の扁平な山石1個を検出する。

第45土塘

第44土壙の東約60cmの尾根稜線上に、その主軸をおいてつくられている。長方形のプランをもって、整然と掘られた土壙である。表土層内に掘り込み線を有し、床面は地山上面でおわる。床面も水平を保ち、地形の高い南小口の中心線上に枕石1対をもつ。

第46土塘

第45土壙の南約 3.5mの丘陵頂近 くには、尾根稜線と直交する形に4 基の土壙が一列に並んで存在する。



第55図 第42土壙実測図

それぞれ長軸の向きは異なるが、ほぼ同巧同大のものである。

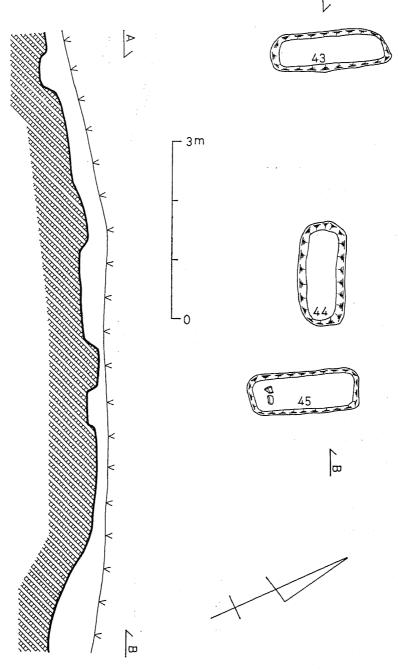
第46土壙はそれらのうち東端に、尾根稜線に直交して位置し、東に低くなる傾斜面にある。そのためか西小口掘り込みは、麦土層から掘り込まれているが、地山層にも約17㎝切り込み、全体として29㎝の壁高を測るが、地形の低い東小口では、地山上面が床となる。隅丸長方形で整然と箱形に掘られ、床面は水平を保つ。枕石等の設備はない。

第47土塘

第46土壙の西約1mに東小口をおいて、それと直列状に位置する。そこは尾根稜線上にあたる場所でもある。表土層内に掘り込みの上端がはじまり、床面もその表土層内においている。地山上面と床面の比高は約15㎝である。 隅丸長方形の プランで 整然と掘られ第46土壙と ほぼ同巧同大である。土壙中心線上、やや東小口によった部分の埋土中から床面にかけて、径約30㎝の範囲から石鏃36本が発見された。これらの石鏃は、土壙掘り方上面から約10㎝掘り降ろした付近から検出されはじめ、床面に至るまで次々と発見され、現位置に残して全体を確認できない状態での発見である。その出土の状況から推して、土壙葬送に際して、その被土直上に一括して置かれたものが、棺の腐りに伴なって埋土とともに土壙内に落ち込んだものではないかと思われる。先に報告した四辻峠台

擴出土の石槍 目されるもの

の行坊る壁土つ㎝形,がて動しとが高層が掘の床,は内,り掘は一点が掘の床がいった。



第56図 第43~45土壙実測図

の南西約 2.5 線から約8 m

面に、第51土擴とT字形に切り合った形で位置している。丘陵頂より高さにして約 1.2 地点である。

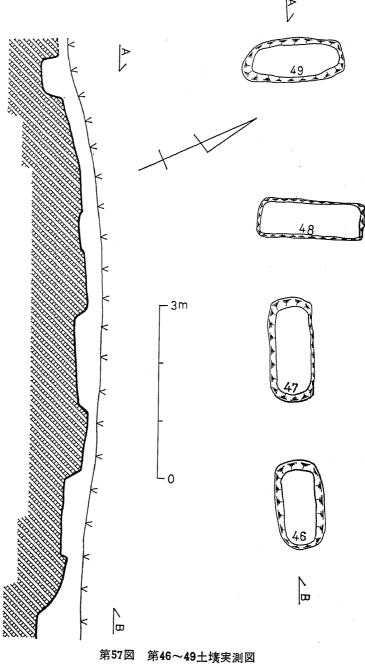
第50土壙は等高線に直 交する向きに掘り込まれ ている。隅丸長方形のプ ランでかなり整然とした 掘り方を示し, 床面も水 平な面を保つ。したがっ て, 地形の高い東小口の 壁高は40cm, それに対す る西小口壁高は15cmであ る。ともに表土層から掘 り込みははじまり, 地山 面にまでおよんでいる。

第51土塘

第50土壙の南側壁中央 外縁に北小口をおいて, T字形に直交するように 掘られている。ほぼ第50 土壙と同巧同大であるが 掘り込みは浅く, その床 面比高は20㎝本土塘の方 が高い。

第52土塘

第47土壙の南約 1.4m の丘陵尾根稜線上に, そ れと直交して位置する。 ことは本丘陵最高位にあ たり,標高89.4mの地点 である。掘り込み線は表 土層内からはじまるが,



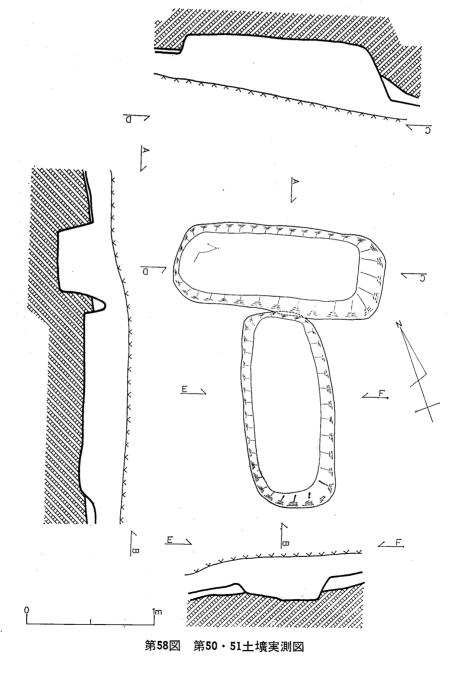
整然と 掘り込まれ、 箱形の長方形を呈している。 床面も水平な面を保ち、 東西の両小口に溝をも つ。床面上に僅かではあるが朱の広がりが認められる。地山上面は床面西小口で一部削平切り込ま れているが、中央付近で床と同レベルとなり、東小口では逆に床面下6cmとなる。南側壁中央部付 近の床面2か所に、弥生式土器の一括破片が検出されたが、いずれも各1個体分の高坏であり、う ち1個体はほぼ完形に復元できた。

第53土壙

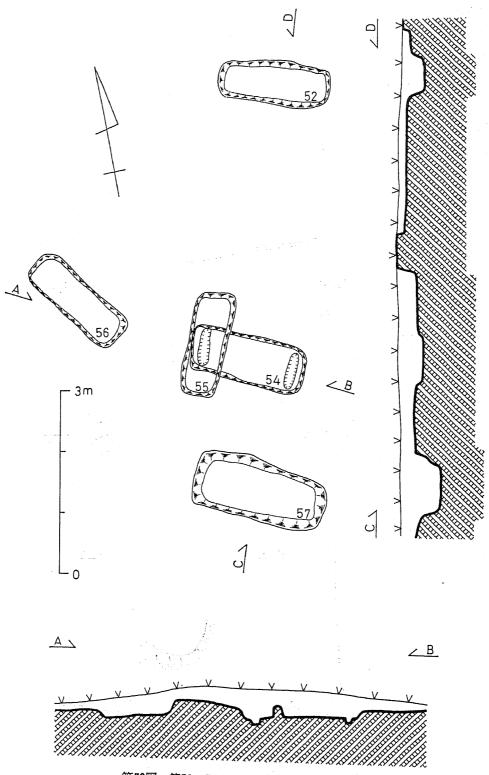
第52土壙の東約 6 mの東斜面に位置する楕円形プランの小土壙である。 そこはテラス状に削平された地域内でもあり、掘り方は地山を直接掘り込んでいた。掘り方、形状ともにやや粗雑ではあるが、床面は水平な面を保っている。

第54土壙

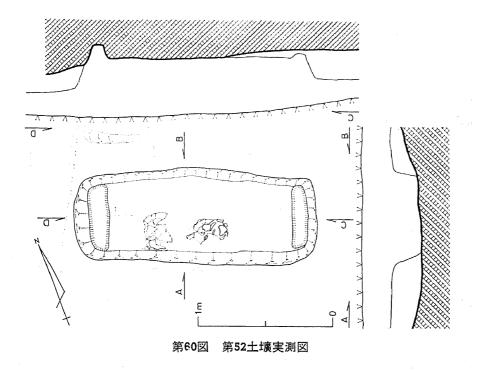
第54土壙の南約 3.5mに第55土壙を中心に4 基の土壙が集まっている。第54土壙は尾根稜線上に

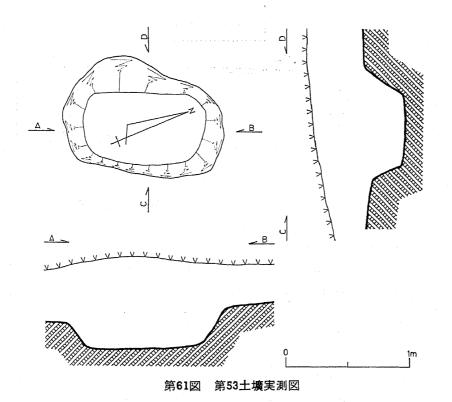


- 107 -



第59図 第52・54・55・56・57土壙実測図



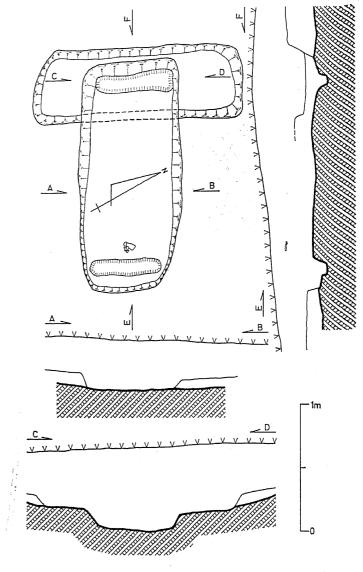


— 109 —

立地し、それと直交しているが、第55土壙と大きく切り合い関係をみせている。

この両者の切り合いは, 第54土壙の床面上方に第55 土壙の床が面として検出され,第54土壙の方が先行す るものといえる。

第54土壙は, 表土層内に 掘り込み線がはじまり,地 山上面にまでおよんで掘り さげ構成されている。整然 とした箱形長方形で、床面 も水平な面を保ち, その両 小口に溝をもつ。東小口埋 土中に土器の破片数片が一 括して検出された。本土頻 長軸中心線上にあたり、床 面からの高さは約22cmのと ころである。したがって掘 り方上端よりやや高位とな るため,直接本土壙に伴な うものかどうかは不明であ る。



第62図 第54・55土壙実測図

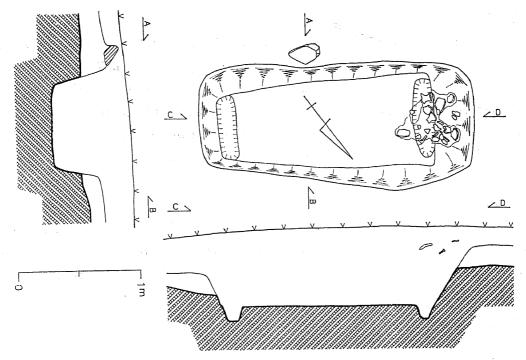
第55土塘

第54土壙が、本土壙の東

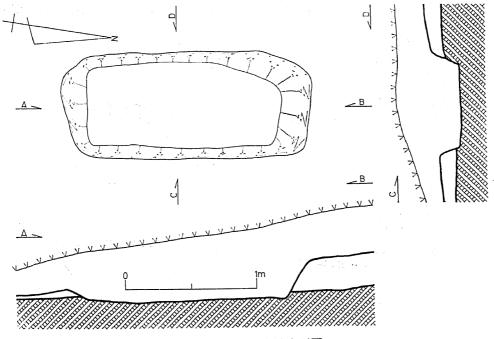
中央部からT字形状に大きく切り込み、その西小口は本土壙西側壁にまでおよんでいる。長方形に掘り込まれた土壙であるが、その掘り込みは浅く床面は地山上面で終っている。したがって両土壌の床面比高は、本土壙が約10㎝高位を占める。床面はほぼ水平な面を保つが、床面施設は何も認められなかった。

第56土壙

第55土壙の西方約1mに、尾根稜線と斜交して存在する。掘り込みは表土層内からはじまり、 床 面は地形の高い南東部で一部地山面を切っているが、他の大部分は地山上面にその床面をおいている。 隅丸長方形の整った掘り方プランを示すが、床面はやや不規則で、凸凹が認められる。



第63図 第57土壙実測図



第64図 第58土壙実測図

第57土壙

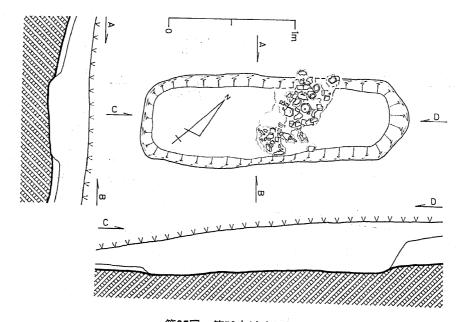
第54土壙の南約1 mに、それとほぼ平行して掘られ、しっかりとした掘り込みである。長径 213 cm、巾82cm、平均の深さ43cmと、C地区土壙群中最大の規模をもつ。隅丸長方形のプランで、表土 層内から掘り込まれているが、床面は地山上面をかなり掘り込んでつくられ、水平な面を保つ。地形の高い西小口がより深く、壁高47cm、東小口壁高37cmを測るが、床面巾は西76cm、東52cmと台形状のプランを示す。床面両小口に溝をもつ。西小口掘り方上端から床面にかけて、弥生式土器の一括破片が崩れ落ちた状態で検出された。高坏4を含む5個体分である。

第58土壙

第59土塘

第57土壙から南へ約 6.5mの尾根稜線近くに、それと平行して第59土壙は位置する。本土壙から南は、丘陵頂平坦部も一応終り、南面して下降する尾根稜線となるが、この一帯にさらに14基の土壙が広がるのである。土壙の配置は一段とまばらとなり、その掘り方形状も粗雑なものが多くなる。また伴出する遺物も酒津式併行期と思われるものが目立つ傾向をみせる。

本土壙は、小口部は外ふくらみの円弧状を呈する長方形のプランを示す。地形の高い北小口部壁



第65図 第59土壙実測図

は約20cmの壁高を有するが、全体としては平均約10cmと浅い掘り込みである。掘り込みの上端は現地表下約10cmの表土層からはじまり、地山上面に床をもつ。床面は水平な面を保っている。本土擴上に斜めにたすきをかけたように帯状となった土器群が検出され注目された。土壙横巾一ぱいに広がり、粗小土器が多く、中でも手づくねのコップ形の土器5個体を含む計22個体以上の土器溜りである。その特徴から推して酒津式併行期のものと思われる葬送に伴なう祭祀に用いられたものと考えられるが、具体的なことは不明である。

第60土壙

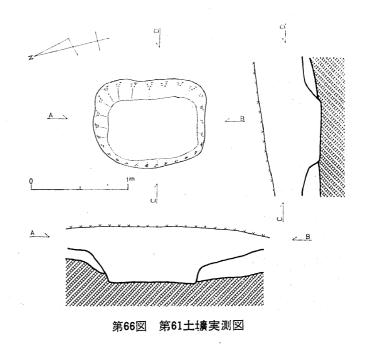
尾根稜線を対称軸として,第59土壙と対応する位置にある。その間の距離は約3.5mで尾根稜線と平行する。掘り方プランは不整形な長方形を示すが,床面はほぼ水平な面を保つ。麦土層内から掘りてまれ,床面は地山を約5㎝掘ったところにつくっている。

第61土塘

第60土壙の西方約 3.5mの西 斜面にある小形の土壙である。 隅丸方形のプランで掘られてい る。床面は水平な面をもつ。掘 り込みは表土層からはじまる が、床面は地形の高い部分のみ 地山層にまで、その切り込みが 若干およんでいる程度である。

第65土塘

第61土壙の南約 4.5 mに,尾 根稜線に直交して掘られている。ほぼ第61土壙と同巧同大の 小形の土壙であるが,形状,掘



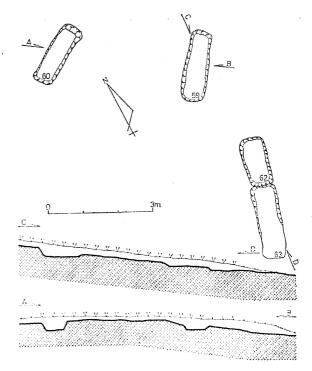
り方ともに粗雑である。掘り方プランは楕円形, 床面は地形の低い西小口が, 東に対して14cmと低く斜傾している。

第62土壙

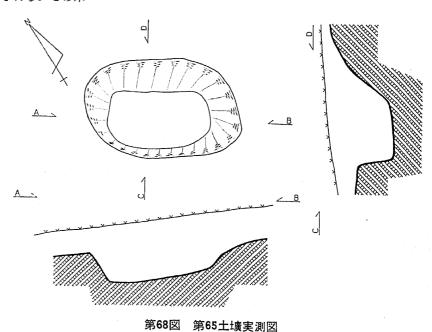
第59土壙の南約2mに、第63土壙と直列状に連なって位置する。ともに尾根稜線に平行である。 第62土壙は、長方形プランをもって掘り込まれた比較的小形の土壙である。掘り込みの深さも約5 cmときわめて浅く、床面も地形の傾斜につられて、南小口で約7cm低くなっている。北小口床面に 第59土壙と同様の粗小土器片およびその埋土中に石鏃2個が検出された。

第63土塘

第62土壙の南に、それと直列に相 接して位置する。尾根稜線に対して はほぼ平行であるが、傾斜面の等高 線に対して斜交する。長方形プラン で掘り込まれているが、きわめて浅 い。地形の高い北小口では壁高7cm を測るが,南小口では床面高が現地 表より高位となって流失し,確認で きないほどである。床面も地形傾斜 に影響されてか北小口に比べて, 南 小口部では約15㎝低くなり、かなり の傾斜をみせている。しかし床全体 としては平らな面を保つ。掘り込み は現表土層内からはじまり、一部北 小口部のみ床面が地山上面に達して いる程度である。被覆土をも含めて かなりの流土が予想される。この床



第67図 第59・60・62・63土壙実測図



第67土塘

第63土壙の南約4mの斜面に、第69土壙を中心に5基の土壙が存在する。いずれも掘り方の粗雑な土壙である。第67土壙はその中での西端に位置する。尾根稜線に近くそれと平行につくられ、長

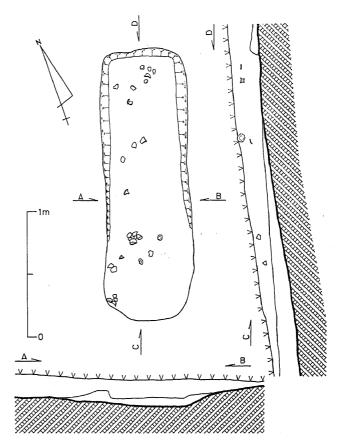
径 140cmと小形である。長方形のプランで掘り込まれているが、掘り込みは浅い。床は地形の低い南小口にやや下降傾斜をみせるものの、ほぼ平らな面を保つ。

第68土壙

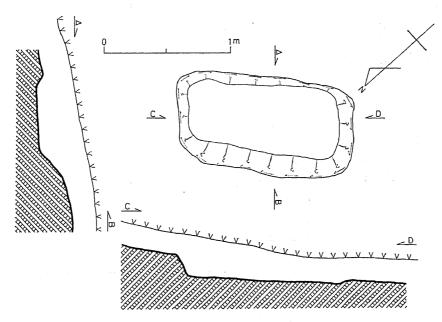
第67土壙の東約1 mに、それと直交した形で存在する。掘り方、形状ともにやや不整形で粗雑な掘り込みである。壁も外傾が著しく、床も不規則で一定の面をもたない素掘りの土壙である。

第69土壙

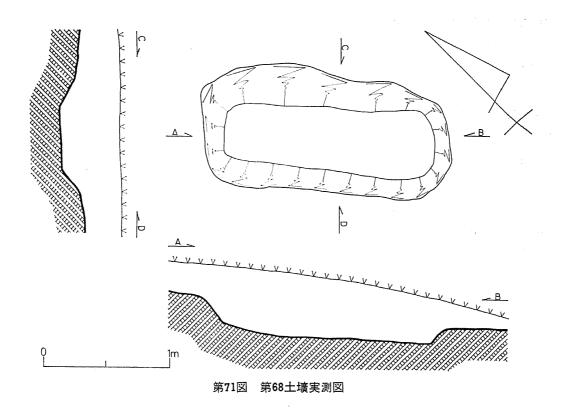
第68土壙の北約 1.3mに位置する。尾根稜線に斜交するが,等高線に対して直角に掘り込まれている。 歪みをもった楕円形プランをもって掘られ,掘り込みも浅い。床面も地形の低い東南小口では25cmと比高をもちかなりの傾斜面となっている。

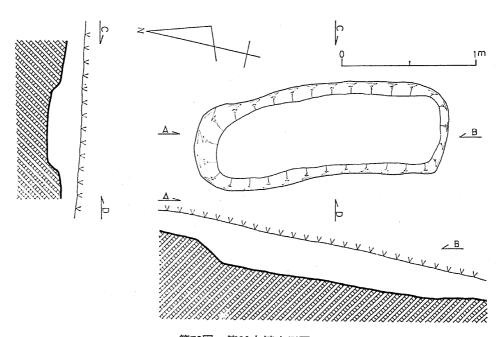


第69図 第63土壙実測図



第70図 第67土壙実測図



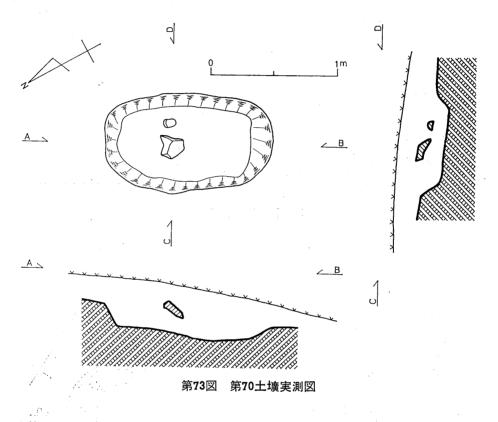


第72図 第69土壙実測図

全体的に粗雑な素掘りの土壙である。

第70土壙

第69土壙の東約 2.3mに位置する。楕円形プランをもった小土壙である。掘り込みは粗雑で床面も不規則で一定しない。掘り込み中央付近の,掘り込み上端と同レベルに20cm大の扁平な石材が検出される。また本土壙埋土中に弥生式土器片4片を散見したが,本土壙に直接伴なうかどうかは不明である。



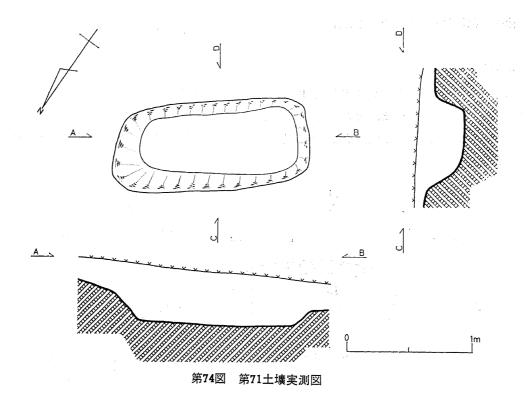
第71土壙

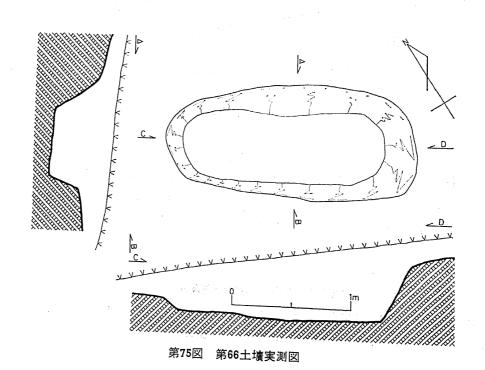
第70土壙の南約 1.5mに, 等高線とほぼ平行につくられている。小口円弧状の長方形プランをもって掘られ, 床面もほぼ水平な面をもつ。土壙内に何の施設ももたない素掘りのものであるが, このグループの中では比較的整然とつくられている。

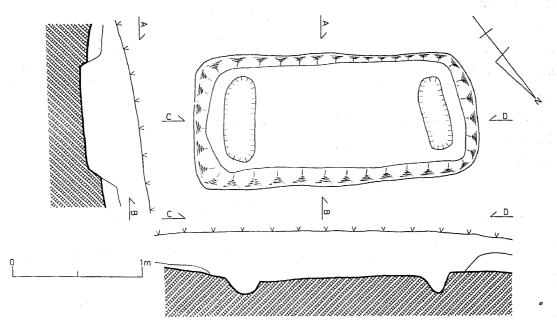
第66土壙

第67土壙の東約5 m,尾根稜線上の比較的平坦なところに存在する。尾根稜線に対して直交して掘られ、そのプランは長楕円形をみせている。掘り込みもかなり深く、地山面に達し、地形の高い東小口壁では、その壁高46cmを測る。床は水平な面を保ち、しっかりとしている。

第64土壙







第76図 第64土壙実測図

尾根稜線上に立地する土壙としては、本土壙墓群中最南端に位置する。丘陵尾根に直交して現表 土内に掘られ、地山上面に床面をおいている。現状での掘り込みは浅く、壁高は約15cmしか遺存し ないが、もとはもっと深い掘り込みをもっていたと思われる。長方形プランを示し、床面も水平な 面を保ら、しっかりしたつくりである。床面 両小口に溝をもつ。

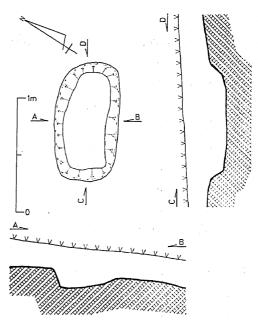
第72上壙

第64土壙の南東約 4.3mの傾斜面に位置する小土壙である。楕円形プランで、長径 105 cmの掘り込みは、本土壙群中最小のものである。掘り込みも浅く、床面も安定しない。やや粗雑な素掘り土壙である。

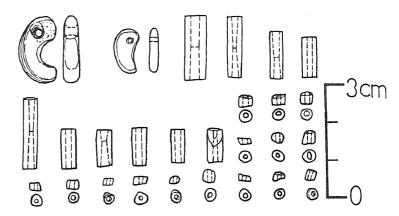
第3節 出土遺物

本土 振群の発掘調査に伴なう遺物は、前節においても記述したとおり、直接棺内に被葬者とともに埋納された供献物としての資料は少ないが、土壌上に置かれたと思われる多数の土器片の出土をみた。

棺内副葬と考えられるものとしては, 第1



土壙 床面 出土の玉 類と,第26土壙出土の鉄鏃のみである。土壙埋土中に石鏃を検出するものが 3 例 みられたが,特に第47土壙埋土中から一括して出土した石鏃36本が注目される。



付表5 玉類計測値

色

調

番号

玉

12

13

14

15

"

1.7 0.6 乳青色 2 0.4 1.6 管 0.35 1.9 3 0.45 1.1 4 5 0.4 1.0 6 0.4 1.05 7 0.38 0.9 8 0.35 1.25 \pm 0.45 0.88 10 0.4 1.0 7 コバルト 0.38 0.32 2 0.35 0.32 3 紺 0.32 0.30 暗 Ť 0.32 4 0.29 ガ 5 0.35 " 0.30 6 0.35 0.30 ラ 7 0.30 0.25 8 0.30 0.20 9 0.30 0.18 ス 10 0.30 0.20 11 " 0.30 0.12

0.28

0.30

0.30

0.30

高

径

ż

第78図 出土遺物玉類実測図

土器類は多量に発見したが、そのほとんどは接合による復元もできないほどの、小破片としての出土である。第5号填封土、各発掘区表土および土壙埋土中に2~3片の遊離片として散見されるものの他に、明らかに個々の土壙に対して、供献されたと推察できる一括土器群が16例あった。

1. 玉類 (図78)

第1土壙の南小口床面,土壙長軸中心線上に枕石1対が置かれている。その枕石を中心とした径約30cmの範囲に,これらの玉類は散在していた。小形勾玉2,碧玉製管玉13,ガラス小玉21の計36点である。

勾玉は 2個とも 乳黄色の 小形の ものである。 ①は風化の著しい碧玉製である。 表面は 清沢を もたず 粉状の ざらっと したものである。 一応 C字形をしているが, 頭部と尾部の大きさに,大きな差はない。 器厚は比較的薄く 扁平な 感じのする ものである。 全長 1.7 cm, 巾 1.0cm, 器厚胴部0.42cm, 頭部貫孔部0.3cmを測る。 貫孔は材質が軟質なのにもかかわらず, 両面からおこなわれ径 0.2cmと均 下本体の規模の割には大きい。 ②は,手に持つと表面が粉状に剣離して,白く付着するほ

0.18

0.15

0.12

0.30

ど風化が進み、軟質なものである。したがって材質も泥板岩等の推積岩と推察できる程度で、それ以上のことは不明である。耳朶状の己形、扁平且つ小形のもので、いわゆる石製模造品を思わせるようなつくりである。全長1.15cm、巾0.62cm、器厚 0.2cmを測る。貫孔は頭部のほぼ中央に、石材の軟らかさに応じて、整然と一方からおこなわれている。

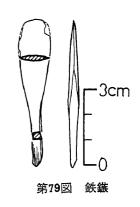
管玉は13本検出したが、すべて乳青色の細身且つ小形である。碧玉製で縦に鎬目をもつものも含むが、中には風化が著しく、調査時すでに破砕され、その存在を知るのみで計測および実測に耐えないもの2点がある。計測可能の11点についての計測値は表に示した。貫孔は両端から行なわれ、中央部で細くなるものや、若干の行き違いをみせるものもあるが、総じて精巧にあけられている。

ガラス玉は、計21個の検出である。紺色1、コバルト色2、暗青色18個である。いずれも径0.3 cm内外の小玉である。紺色およびコバルト色の玉は、胴部が張った太鼓状の全体として丸味をもつものであるが、暗青色の玉は、管玉状につくられたものを、切断した手法を残す。したがって上下端は平面をみせる。器高の価もまちまちで、中には歪みをみせているものもある。

2. 鉄鏃 (図79)

第26土壙の埋土中に遊離して検出された鉄鏃1である。土壙掘り方内の床面上12cmからの出土で一応本土壙埋葬に伴なうものと思われる。仮に本土壙埋葬に直接伴なわないとしても、方形台状墓埋葬継続中の時期のものである。

鉄鏃は銹化しているが、その遺存状態は良好である。 鍛造によるもので基部から刃先にかけて、台形状に広がりをみせ、刃先はやや外張りの円弧状をみせるがほぼ一文字の刃となり、いわゆる「のみや」の形態をもつ。中央にしのぎをもたず、横断面形は扁平である。 茎は四角形の断



面をもち、未端になるにつれて漸次細まる。基部から茎部への移行も自然である。全長 5.8cm, 刃 部長 3.3cm, 茎部長 2.5cm, 刃先巾1.15cm, 刃基部巾0.85cm, 刃部中央厚 0.3cmを測る。

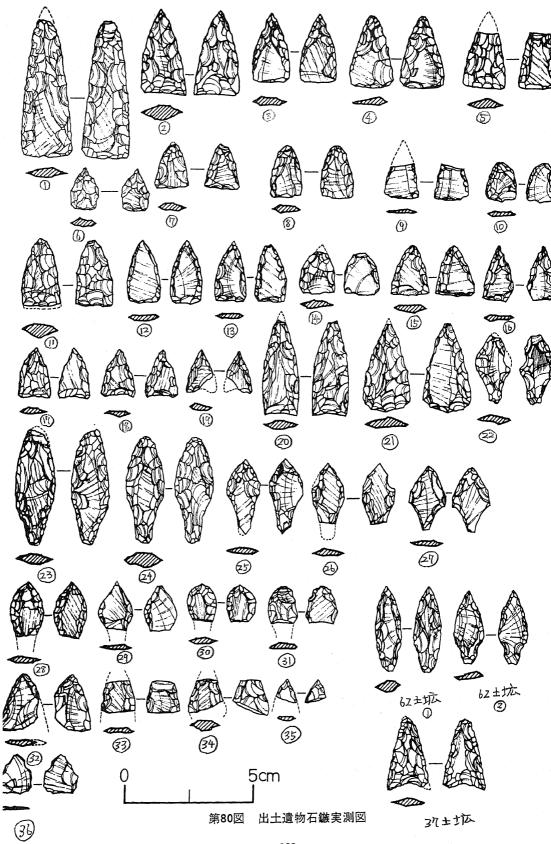
3. 石鏃

第47土壙埋土中の一括石鏃36のほか,第37土壙1,第62土壙2の計39点である。 すべてサヌカイト製の打製石鏃である。

墓に対して供献されたものとしては、折損品を多く含み、気がかりとなる点の一つでもある。一部欠損を含めて折損例は18点にもおよび、全個数の5割に近い。完全形を保つものおよび原形を推定し得るものについて、形態的な分類を試みるならば、二等辺三角形を示すものと、蛇頭形の基部に凸基をもつものの二種類に大別できる。二等辺三角形23例、蛇頭形10例である。

つくりも細かに打ちかき精巧なものから、原石の剝離面を多く残し、刃部のみに打痕をみせる荒 いつくりのものまで存在する。また稜線に磨滅痕を見せるものもあり注目された。

石鏃の大きさも推定長 5.8cmの長大なものから、 1.6cmとさまざまであるが、 2cm ~ 3 cm長のものが多い。



4. 土器 (図82~86)

土器類の出土はかなり豊富である。第5号墳封土内およびA地区表土層に遊離破片として散見さ れたのをはじめ、B地区方形台状塞各土壙に直接供献されたと思われる一括土器10例,同じくC地 区 6 例,および土器棺 3 例等がそれである。

これらの土器は、そのほとんどが破片となって検出され、接合による復元も不可能なものが大半 を占め、完全形を知る例は少ない。各土壙および地区ごとに、器形、胎土、焼成等の個体差をたよ りに分類検討し、 個体分離の可能なものを 選んでみると、 別表 9 のようになる。 総個体数 166に およぶ。しかしこの数値は、確実に分離確認できたものについてのみであり、小破片の類似のもの は、同一個体として扱ったし、また復元作業においても、その大半を失なっている例も多く、すで に流失しているものもかなり含まれると思われるので、本遺跡に伴なう最低個体予想値として理解 願いたい。さらに坩の類は高坏脚部と、同一手法による脚を有する例がかなりあるため、高坏脚と して分類したものの中に、若干数はそれらの脚を含んでいる可能性もあることを付記する。

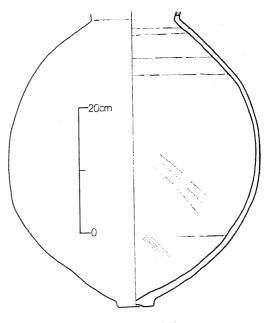
葬送祭祀に伴なう供献遺物としての性格から、高坏の出土例が、粗小土器も含めて73例と圧倒的 に多く,また一括土器群での検出例では,壺類も比較的小形のものが多かった。甕形土器の破片も 25例とかなりの個体数を示すが、その多くは、A · B地区の表土層および古墳封土中の出土であっ て、一括土器群に共出するものはまれであった。K2、K3の土器棺の出土状態等から考えて、あ るいは、土壙墓より浅い層序の中に埋納された土器棺の可能性も強いのである。

高坏形土器

形態的に3つのグループに大別できる。 第1グループは、図(6)に代表される器形 である。坏部口縁が稜線をもって立ちあが り, その外表に数条の凹線をもつ。 脚は裾 の広がった形で、脚端部は外反し拡張され ている。脚部に三角形の透孔4または6を もち, その上方に数条のへら描きによる沈 線をもつ。坏部の立ちあがりは、やや内傾 するものが多いが、なかに直立および外傾 のものも含む。口縁部は凹線文のみのもの が通例であるが、(1)のようにその上に重ね て円形や紐状の張り付け文をしたものもあ る。また脚裾部に鋸歯文帯をもつ(6),

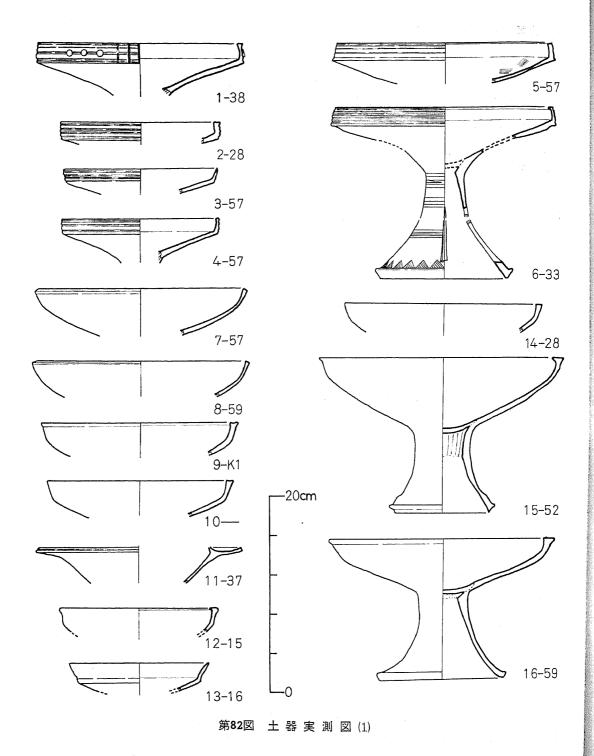
(28) の例もある。

これらの高坏は,おおむね淡褐色ないし

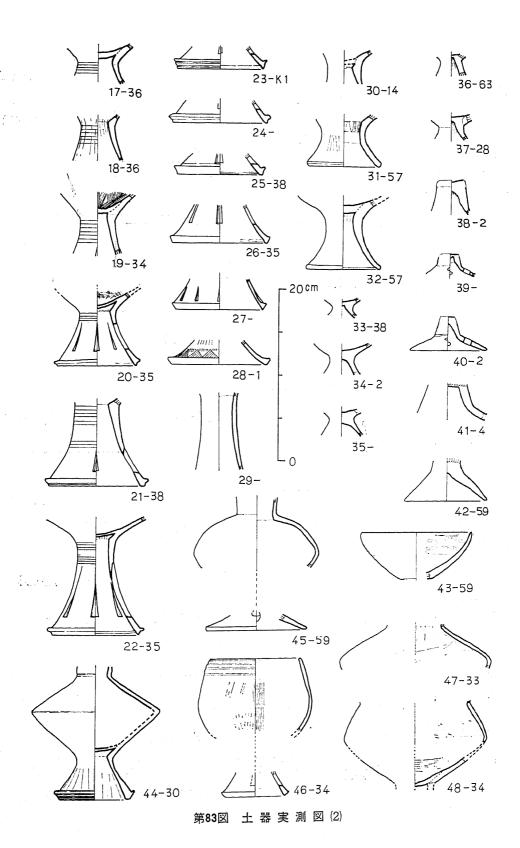


第81図 土器棺K1

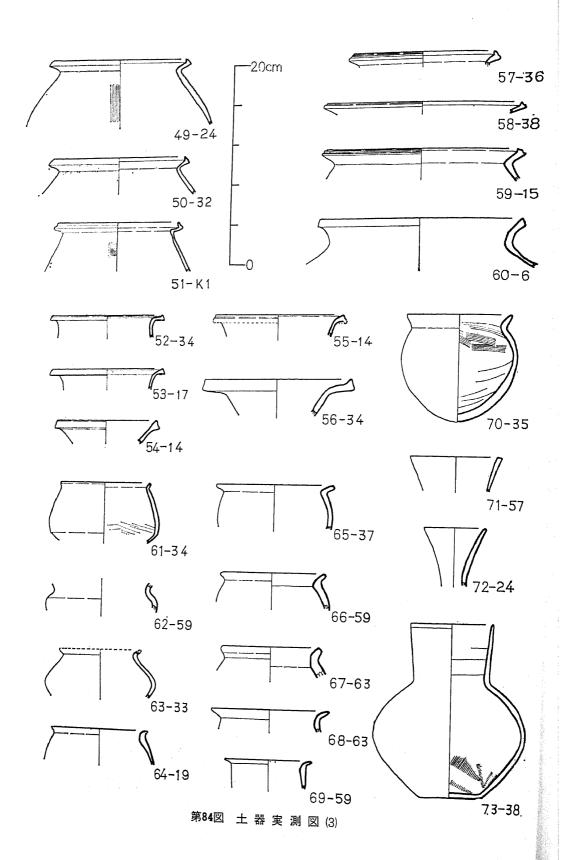
褐色を呈し、胎土に雲母を含有する細砂粒を含む。焼成は比較的良好である。器外表はていねいに へら磨き、坏内面は刷毛目、脚内面はへら削りで調整されているのが通例である。また坏部と脚部



※図中の数字は、左は土器通し番号、右は土壙番号である。以下第85図まで同様である。



-125-



の接合部は坏部底面に 直径約 $5\sim6$ cmの 円盤状のものを、 へらで浅い刻みをつけて 張りつけている。 この器形は、 B地区一括土器群中に検出される。

第2グループは、図(15)、(16)に代表されるものである。坏部が大きく皿状に関き、口縁部はやや拡張された平坦面をもつ。脚は裾の広がりの大きいものと、やや小さいものがあるが、脚端部は僅かに外反して拡張されている。文様および貫孔等は施されず無文である。

淡わい褐色のものが多いが、黒味がかったものもある。胎土に砂粒を若干含み、焼成はやや軟質で、器表の荒れが著しい。調整手法は明確でないが、坏部口縁部および内面は指によるなで、器外表は縦方向へのへら磨き、脚内面はへら削りによるものと推定される。また脚部と坏部の接合部は、先に脚上部を絞りてんだ後へら削りで整形し、その後に円盤状の板をはりつけている。この器形は、C地区第52・57・59土壌の一括土器群にのみ検出される。

第3のグループは、明瞭な出土状況を示さない。その多くは、第5号墳封土内およびA地区表土層に遊離出土した小片である。高坏の通例として、もっともよく遺存する脚柱部のみが図示できるていどである。(図39)、(40)のように脚裾が極端に広がり4円孔をもつものと(33)~(38)のように短かい立ちのものがある。いずれも、酒津式土器に併行する特徴を示し、前記グループに後出のものである。

壺形土器

いわゆる通常の器高をもつ大きさの壺の出土例はきわめて少ない。土器棺に用いられたK1, K3を含めて採集した口縁部片4, 底部片6個体分である。いずれも小片となって全形を知る手がかりとなるものは少ない。土器棺として用いられたK1の胴部が唯一の資料である。

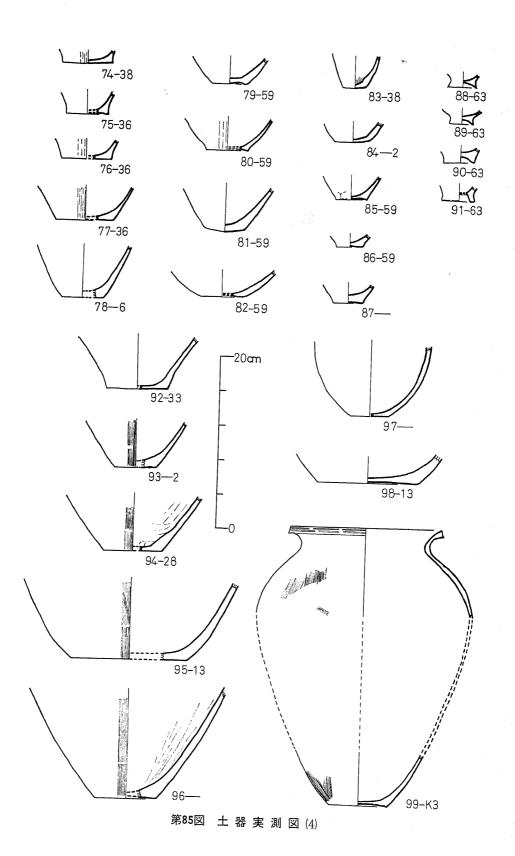
K1は、口縁部を欠くが、胴部の大要は知ることができた。基底部がやや突出した平底の壺である。 胴部はその中央に最大巾をもつ。 現存部高45.6cm, 胴部最大径41.7cm, 基底部径 6.2cmを測る。 色調は茶褐色, 胎土に5㎜大までの砂粒を含み, 焼成はよい。 外表面は横方向へのへら調整, 内面は荒いへら削りのうえをなでで調整されているが, 輪積みの痕跡を残している。

K2 (95) は、基底部のみの検出である。基底部径14cmの平底である。外面は縦方向に刷毛目調整がされて、砂粒はほとんどみられないが、内面には多く砂粒が浮き出している。

その他の基底部片も上記K2と大同小異である。

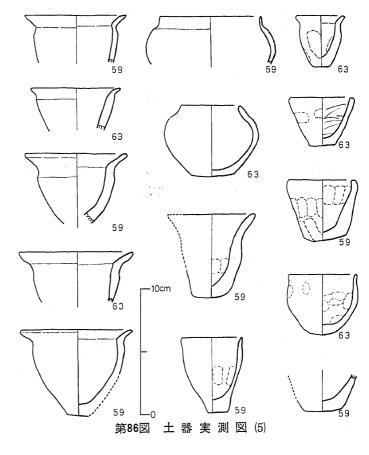
小形壺形上器

小形のつぼに脚台をもつもの(44)~(48)と脚台をもたないもの(61)~(73)がある。前者はB地区方形台状墓の一括土器群に多く含まれ、「つぼ部」はさまざまな形態を示すが、脚は第1グループ高坏と共通する。中に1点,第59土壙に伴なう脚裾に円孔 4 をもつもの(45)があり注目された。後者の脚をもたないものは、直口坩(71)~(73)と、手づくねの粗小土器に近い球状の胴をもつもの(61)~(70)に大別される。



甕形土器

壺形土器とほぼ同様の出土状 態を示す。いずれも破片でその 完形は不明である。 K3 (99) に代表されるように, 口縁端の 拡張部に、2~3条の凹線をも つもの(57)~(59)と,もた ないもの(49)~(51)とがあ るが, 器形的にはさして変化は ない。胴部の最大径は、基底よ り約%の高位にあって、やや肩 の張った形状を示す。基底部は 平底である。磨滅が著しく、調 整等 細部の 検討は 困難で ある が、口縁部は外内面とも指先に よるなで, 胴部外面はへら磨き の後刷毛目による調整を施して いる。 刷毛目は 胴部 上半 のみ で、基底部近くは縦方向へのへ ら削り痕を残すものと, 基底部



にまで刷毛目のおよんでいるものもある。内面の底部は指圧による調整,他は縦方向へのへら削り 調整が基本的である。

粗小土器

第59・62・63土壙から集中して出土した小形の土器である。いわゆる手づくね土器と呼ばれるニップ形のものと、台付の鉢形土器台部片とが顕著である。

手づくね土器 (図86) は、器形の細部は各々若干異なるが、手づくねであること、整形が全体的 に粗雑で器表に凹凸がみられること、器壁が土器の大きさに比して厚いこと、底部も一定ではない が原則として平底であること、等を共通点とする。高さ4cm~6.5cmを測る。

色調は、褐色を一応基調とするが個体差がある。胎土に砂粒を若干含み、なかには1 mm大のも(も検出される。焼成はおおむね良好である。内面は指圧痕が顕著に認められるが、口縁部近くはからへらにより削って整形したらしい痕も残す。外面はへらおよび指によるなでで整形している。

ての立ちあがりがほぼ直口するコップ形に対して、口縁部がくの字形に大きく外反して、口径 cm~9 cmになるものがある。その多くは底部を欠損しているのが特徴的である。あるいは (88) ′ (91) の台部がこれに接合し得るかも知れない。基本的には指による整形で、口縁部および台部 ともに、指先でつまみ出す手法をとっている。口縁部は内外面とも指によるなで、胴部にあたる:

表はへらによるていねいな調整がなされている。内面は磨滅していて明瞭でないが、前記コップ形のような指圧痕は残していない。色調、胎土、焼成はコップ形と同様である。

第4節 まとめと若干の考察

1. 概 況

四辻土壙墓群は、眺望視野の広い標高約88m、限下の埋積平地との比高約70mの、丘陵頂の平坦部に立地する。そこは平坦部といっても、南から北に向けてのびる、巾狭な丘陵支脈の馬の背尾根で、他の甲形の南北に細長い僅かな平坦地である。遺跡範囲は南北長約80m、東西巾約18mにおよび、その一帯に71土壙の墳墓群が構成されているのである。

土壙墓群は、丘陵尾根肩部の地山を削平整地してつくり出した、一辺14m,高さ約80cmの方形台 状茎に、集中して葬られた22土壙を中心に、その北方尾根に17土壙2土器棺、南丘陵頂一帯に散在 する32土壙の計71土壙墓3土器棺で構成される。

各土壙は北から、 $\mathbf{A} \cdot \mathbf{B} \cdot \mathbf{C}$ の3グループに分けられる。各地区毎にほぼ共通した形態的特徴を示す。

A地区は比較的粗雑な掘り込みが多いが、尾根稜線に沿って、それと直交して一群を形成している。直接地山層に掘り込まれ、各土壙とも、意識的に直接供献されたと思われる副葬遺物はもたない。ただし第1土壙のみは地山上面にまで床面が達せず、尾根と平行の土壙であり、玉類の副葬遺物をもつ。現表土層内また一部土壙の埋土中に、遊離散見される弥生式中期土器片および酒津式併行期の土器片少数が共存して検出された。

B地区は、台状墓上の平坦部を中心に構成された土壙墓群であるが、地山上面から直接掘り込まれた土壙と、表土層内に掘り込まれたものとがある。比較的しっかりした精巧な掘り込みで、小口に溝をもつものが多い。土壙個々について、明らかに供献されたと考えられる一括土器を、土壙直上またはその縁辺に置く例が10例あり注目された。これらの一括土器は、すべて当地方の編年観で前山Ⅱ式と呼ばれるもので、弥生式時代中期中葉から後半にかけての土器である。この地区は、第5号墳と複合しておりその封土中および、浅い掘り込みの土壙埋土に酒津式併行期の土器片を散見する。

C地区は、AB地区に較べて若干おもむきが異なる。32土壙と多いにもかかわらず、その配置はまばらである。土壙の方位を尾根稜線に対して、直交、平行、斜交とさまざまで、掘り方の形態についても、精巧なもの、粗雑なものといろいろである。土壙の掘り込み上端は現表土層からはじまり、その床面を地山上面におくものが多い。一括土器をもつ土壙6例があるが、3例は前山 II式、3例は酒津式併行期と分離が明瞭である。第57土壙を境に北半と南半の2グループに分けることも可能かも知れない。

これらの土壙墓群は、明らかに集落とは切り離された、丘陵尾根頂の高所を意識的に墓域に設定 って構成されたものである。しかしB地区方形台状墓の他は、墓域を定め区画するための、溝状遺 青や列石等の諸施設、および墓域全体またはグループ単位を対象とした、祭祀等を示す遺構や遺物 は何も認められなかった。

2. 土壙および埋葬の形態

本遺跡の土壙は原則として,長方形に深く土壙を掘り込み,遺体を埋葬するという共通の構造を有するが,部分的には,別表に示したような特徴と差異をもつ。そしてまた,各地区グループ間の特徴をも暗示するのである。

例えば、土壌床面施設についてみると、小口溝をもつもの、枕石をもつもの、無施設のものの3つに分類できる。A地区では、小口溝を有するものはなく、枕石をもつもの5例、無施設11例である。B地区では、小口溝をもつもの8例、無施設4例(土器棺K1を内蔵する第18号土壌は省略)である。土壌規模も小口溝をもつものが比較的大きい。またC地区では、小口溝をもつもの4例は、すべて尾根頂上付近の稜線に集中し、一括土器をもつ。枕石をもつ1例の他27例は、すべて無施設である。小口溝をもつ土壌は、丘陵尾根最高位周辺か、方形台状茎に集中し、無施設素掘りのものが、縁辺部に多いという特徴を示している。しかし、このことが、本土壌墓構成の時期差を表わすものか、あるいはまた、共同体構成員の階層差等を表わすものかなどについては、明確にはできなかった。

土壙床面両小口に溝を有し、床面が水平な面をもつことは、土壙内に箱形木棺の使用を物語るものであろう。長方形に掘り込まれた土壙両側に側板をたてかけ、その側板端に溝に埋め込んで前後に倒れることを防いだ小口板をたて、側板をも安定させる手法をとったものと思われる。小口溝を有する土壙の床面巾は、若干の例外を除いて60cm~80cmあり、棺板を組む余裕が十分あったことを裏付ける。また棺の蓋であるが、これも木板を用いて施設されていたと考えられる。土壙被土の直上もしくは掘り方縁辺に供献された一括土器群の、土壙内への崩落状況は、単に被葬者遺骸の窗朽

付表6 土 壙 施 設 別 分 類 表

	A	В	С	計
	土壙番号	土 壙 番 号 土 壌	土壙番号	旗 『
無 施 設	2. 3. 5. 6. 8. 9. 11. 12. 13. 14. 15	18. 19. 27. 30. 39	41. 42. 43. 44. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 53. 55. 56. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72.	7 43
枕石をもつもの	1.4.7.10.16	21. 22. 25. 26. 28. 29. 31. 32. 36.	45.	15
小口溝をもつもの	0	20. 21. 23. 24. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 11 40	52. 54. 57. 64	15
石材をもつ もの 埋土中	2.3.4.6.7.6	26. 33. 35. 38 20. 24. 25 7	43. 44. 70	17

付表 7 小口溝・土壙床面計測表

土壙	rt: 75. 17	H: 75 H	rt: 755 pts	rt* 777 ala	H+ TE da	東	小 口	溝	西	小 口	溝	alk that E
番号	床面長	床面巾	長さ	th	深 さ	長さ	ф	深さ	满 内 法 長			
20	170	72	65	17	13							
21	120	66	55	17	3			_				
23	88	46	41	14	13	37	. 13	1.1	54			
24	183	83	60	8	11	67	13	.9	157			
26			_	,—		62	. 17	8	_			
33	230	81	72	13	16	75	14	. 10	148			
34	210	86	70	18	13	67	20	8	154			
35	195	82	68	16	11	66	18	11	147			
36	190	83	67	20	11	75	16	10	1.26			
37	190	74	65	11	8	65	10	8	156			
38	182	90	65	12	10	70	13	12	157			
40	187	66	60	13	17	55	10	11	147			
52	164	54	45	11	4	47	16	11	139			
54	181	71	59	13	12	62	12	8	128			
57	169	66	51	13	12	65	13	12	143			
64	198	82	68	24	11	57	21	15	130			

(単位cm)

陥没の容積をはるかに越える空洞の存在を示す。

その他の土壙についても、小児用を思わせる第72土壙等数例を除いて、床面の長さ 170cm~ 200 cm, 巾150cm~70cmの長方形で平らな面をもつ。 木棺の構造がどのような ものであったかについては、何も明らかにする材料はないが、前述の小口溝をもつ土壙と同様、木棺に納めての埋葬と思われる。

枕石として扱った床面小口部の石材は、こぶし大程度の2個の山礫を対にして置いているもので 先に報告した用木第4号墳の土壙において、直接その石材を枕として、遺骸が納められていたこと から確言できるものである。

3. 土壙直上の石材について

本遺跡各土壙の発掘において、上壙掘り方土壙埋土中に、こぶし大から人頭大程度の山石が2~3個検出される例が、17例におよび注目された。これらの石材はいずれも枕石と同じ粗面岩であり本土壙墓群の立地する基盤の地山は頁岩を主体とする堆積層であることから、あきらかに他所より寺ち運ばれたものである。

石材は、土壙の長軸中心線上か、またはそれに近いところで発見される。 埋土中にあるものも、 自の腐朽に伴なって陥没した形態を示し、枕石・棺台・支石等とは性格の異なる出土状況である。 われわれが発掘に際して、 認知することが できない状況で、 表土層内に床に置く 埋葬施設があって、 それらの枕石等の施設か、また土壙の被土の上に、 墓標的な意義をもたせて置かれたもの、等々が考えられる。

各土壙の配置をみると、土壙群はきわめて接近して並列し、かつ規則的に掘り込まれ、たがいに切り合うことも少ない。このことは埋葬に際して土壙を掘る場合、前の土壙の存在する位置を知る何らかの標式があったのではなかろうか。 ただ記憶にたよるのみでは不十分であるし、特に方形台状墓においては、被土の盛り上げにもおのずから限界があろう。 これらの石材に、そのような意味をもたせたのではなかろうか。

4. 土 壙 の 方 位

各土壙とも、その向きは一定の法則をもつ。 尾根稜線に対して直交するもの49例、平行するもの18例、斜向するもの5例である。 しかし斜向するものについても、 等高線に沿ってみた場合は、常に直交または平行するのである。 したがって、土壙の置かれる向きは、 その構築の物理的要件もさることながら、一定の形式として存在するのではないかと思われるのである。

5. 土 器 棺

土器棺と推定されるものが、3例検出された。方形台状墓上に小土壙をもって発見されたK1の他は、ほぼ原位置を知る程度の破砕残痕としての発見である。これらの土器棺は、土器の納まる程度の小土壙を掘って、埋納されたと考えられるが、その掘り方も浅く、土壙墓掘り込み上端とほぼ同レベルに底部を置き、土壙と上下に重なるものもある。後の項でもふれるが、土壙に直接供献されたとみられる一括土器群より後出のものが多く、それらの土壙よりおくれての埋葬と考えられる。K2、K3の例をとると、土器棺の底部は、土壙掘り方上端におき、その位置で土器を復元すれば現地表より外表に露呈する状態である。このことは、土器棺埋葬の時点では各土壙直上にはすでにかなりの高さの被土が施されていたことを物語る。少くとも土壙掘り方上端より上層で、土器棺の埋葬が十分行なわれるだけの被土の高まりがあったのである。

一括供献物である土器群の中には、通常の器高をもつ壺・甕の類は検出されないし、またそれらの土器群に大きな乱れは少ない。それにもかかわらず、第5号墳およびA地区発掘に際して壺・甕の遊離破片がかなり検出された。このことは先のK2・K3土器棺の遺存度と合せ考えて、さらに数例の土器棺の存在した可能性を示すものと推定される。

土器棺に用いられた土器は、特殊なものではなく、集落址等の調査において通常発見される日常の壺・甕である。したがって土器の大きさも、器高32cm~46cmとさして大きいとはいえない。セットとなるべき蓋の状況が不明であるが、それらの土器棺に納まる程度の乳児・嬰児の埋葬が考えられるのである。

6. 供献遺物および葬送祭祀

土壙内に直接副葬され、現代にまで遺存する遺物はきわめて少ない。確実に棺内遺物と言えるも

のは、第1土壙の玉類のみである。可能性の強いものとして、第26土壙土中検出の鉄鏃1点を加えても2例にすぎない。棺外供献物はかなり豊富であった。土壙被土の直上に一括して置かれた土器群16例、石鏃1例をあげることができる。

石鏃の供献されている顕著な例は第47土壙で、36本もの石鏃が一括して発見された。土壙の被土の直上にまとめて置かれた、一つかみの石鏃が、棺の陥没とともに崩落した形状を示していた。量と形態的な問題はさておき、検出した36本の石鏃のうち、18本までが折損品であることが注目された。

墓に対して、それも葬送の祭祀としての供献遺物であるならば、常識的に考えて、新品が供えられるべきであるように思われる。それだけに石鏃の貴重度を示すのかも知れないが、現在調査進行中の集落址である用木山遺跡では、すでに1000本を越える石鏃の出土例を検出し、その量は豊富である。

石鏃個々についてより細かく観察すると、これらの折れ口は古く、埋葬時にすでに折損していたものであり、接合できる同一個体の破片は存在しない。石鏃先端の欠損部は先端から基部へむけての方向に剝離されており、実際に発射され、獲物に射込まれた痕跡を呈している。その獲物の対象が人間であったか、また獣であったのかは知る由もないが、射込まれた際に骨等の硬度のものに当って折損したものを、再び回収したのではないかと推察されるのである。このように考えると、折損した石鏃が、土壙に供献される意義も納得いくのである。そして被葬者の性格も、そのこと自体が暗示し物語ってくれるようである。確実性の乏しい一推論ではあるが、一つの可能性として記述した。なお石鏃の形式比率は、先述の用木山遺跡では二等辺三角形型が圧倒的多量を占め、本土壙の二等辺三角形23:蛇頭形の基部に突基をもつもの10と大きな差をみせている。石鏃の形式、機能等については、ここでは割愛して用木山遺跡の報告の際にゆずりたい。

一括土器群をもつものは、B地区方形台状墓の土壙に多く、10例を数える。B地区の土器群は、葬送供献物の性格からか、高坏の多いのが目立ち、壺も背高の低い脚台の付いたものなど小型のものに限られる。これらの土器は、その置かれた土壙個々に直接供献されたもので、土壙群全体とか、いくつかの土壙をまとめたグループ等に対しての共通供献物とはいえない。5個体ないし9個体の供献であり、各土器群とも当地方の編年観からすると「前山Ⅱ式」と呼ばれる、弥生式時代中期中葉~後半と、時期を限定されたものである。またC地区の6例のうち、丘陵頂にある3例はB地区と同様の出土状況を示すが、第59・62・63土壙の3例では、手づくね土器を中心とした酒津式

付表 8 出土遺物の地区別一覧

A			В		С]	
	土壙番号	土壙	土壙番号	土壙数	土壙番号	土壙数	計	
確実に伴出 遺物を持つ もの		0	24. 28. 30. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38.	10	52. 54. 57. 59. 62. 63	6	16	
もの そ の	1 (玉類)	1	26(鉄鏃)	1	47 (石鏃)	1	3	
理 士 中 土 器 片 2.3.4.6.10. 13.14.15.16.17		10	29. 39	2	60. 70	2	14	

併行期の特徴をもつのが多い。第59土壙22個体,第63土壙17個体と個体数も豊富である。そして後 者には,中期土器片も併出する。総じてより古い形態を示す土壙には,棺内遺物をもたない。

以上のほか、現表土層内に断片的に散見される土器片を見受けるものの、墓域全体、および数土 擴のグループに対しての祭祀を行なったような施設なり、遺物の出土は確認されない。

本遺跡と同じ丘陵尾根支脈,本遺跡の北方約300mに所在する便木山遺跡は,41土擴,6土器棺で構成される,酒津式併行期の墳墓遺跡であるが,特殊器台,特殊壺に代表される,共同祭祀および4溝状遺構をもち,多量の破砕土器片をその溝底にもつのとは対象的である。

7. 遺跡の年代

出土した遺物は、すでに何回か繰り返しふれてきたように、弥生式時代中期のものと、酒津式併 行期のものとの二時期にわたる。弥生式時代後期の時期を通しての土器は検出されない。器形変化 は特に高坏において顕著である。

土器の出土例の豊富のわりには、直接個々の土壙に伴なうと断定できる例は、一括土器群と、土器棺のみである。一括土器を有する土壙は、16例、埋土中に土器片をもつもの14例を加えても、計31土壙である。したがって伴出土器をもたない土壙は半数以上の40土壙におよび個々の土壙の営造時期は明確にはできない。

本遺跡で最も古いと考えられる土壙は、前山 II 式の中でも古式といわれる、皿状に大きく広がる 高坏のみを伴出する、C地区第52・54・57土壙である。 これらは、丘陵頂最高位の頂上に立地する グループで小口溝をもつ。ついで、方形台状墓の一括土器群に、高坏 I 型を伴出する土壙群があげられる。したがって方形台状墓は、高坏 I 型,すなわち前山 II 式の時期に構築されたものと思われる。

土器棺に用いられた壺および塾は、弥生式土器集成だおける上東式土器に近い特徴をもつが、それにやや先行する形態を示す。また古墳封土およびA地区表土層検出の壺・甕の遊離土器片のなかには、前山II式の範疇に入るものも含まれる。出土の状況が、土壙掘り方上端に底を置く等、方形台状墓構築とともに埋葬された一括土器をもつ土壙にやや後出すると思われる。

酒津式併行期として一括出土するものは、C地区南端に近い第59・62・63土壙の3土壙である。また遊離散見されるものとして、A地区表土層、B地区古墳封土層に、さらにはA・B地区の若干の土壙埋土中から、断片的小破片として検出される。

第59土壙の一括土器は、いわゆる手づくね土器を中心とした土器群であるが、その中には、高坏 I 型のほぼ完形に復元できるものも含み注目された。手づくね土器はその製法の性格上本来器形変 化も少なく、弥生式時代中期初頭から、その存在が知られている。現在われわれの調査進行中の用 木山遺跡 (集落址) においても、前山 II 式と共存併出する手づくね土器の出土例もあり、一概に酒 津併行とは言い切れない面もある。しかし伴出土器の中に台付壺の脚裾に四円孔をもち、明らかに 酒津併行期と思われるものが検出されたので、一応酒津式併行期にさげて考えた。 今後の資料の増 加を待って、再度検討を加えたい。

A地区第2土壙は、その埋土の中に数個体分の酒津式併行期の土器片をもつ。直接その土壙に供

付表 9 出土土器器形別個体数

1340	ىد بىر													
土 壙 番 号	高坏	壺	坩	甕	鉢	台付壺	粗小 高坏	壺	坩	処	コップ	鉢	計	その他
2	4	2		1			1				-		8	
3	7	1		1				1	1				11	
4	1	1		1									3	
6		1											1	
7		1											1	
10		1											1	
13		2		1									3	
14	2	2		1									5	
15	1	1		2									4	
16	2												2	
17				1			2						3	
24	2		1	1									4	
28	1	2	1				1	1					6	
29	1			1						:			2	
30						1			1				2	
32	2	1		2			1						5	
33	2	2		1		ĺ							5	
34	3	1		1	1								6	
35	4		1	1			1						7	
36	4	1		2									7	
37	4	3											7	
38	4		1	2					2				9	
39		1	ŀ										1	
52	2												2	
54				1			-						1	
57	4	1								_	_		5	
59	2						4	4	3	1	5	3	22	
62	1												1	
63	3	1		1			2	4	1		5		17	
K L E 是性	2	1		2									5	
K 1 5 号墳 封 土	4	4		2				1					10	
	62	30	4	25	1	1	11	10	8	1	10	3	155	

献されたものとは言い切れないが、少なくとも土壙内に、それらの土器が混入崩落する時期の構築と考えられよう。しかし第14土壙は第2土壙と同様、埋土中に土器片をもつが、それはすべて前山 II 式であり、A地区すべてが酒津式併行期とは言い切れない面ももっている。

B地区土壙群のうち、その多くの土壙が地山上面に直接掘り方上端をもつのにくらべて、表土層内に床面をもち、方位も尾根稜線と平行する第21・29・39土壙がある。これらは明らかに、台状墓埋葬の一応完結された後に改めて掘り造られたもので、高坏 I 型を伴なうものより後出する。土器棺が埋葬された時期、もしくは酒津式併行期の所産と考えられる。また土壙構造の共通点から、A 地区第1土壙もこれと併行すると推察される。

このようにみてくると、上東式土器に代表される、弥生式時代後期の時期が空白となる。伴出土 器を伴なわず年代の決められない土壙も多く、後期の時期に、供献土器を伴なわない埋葬が行なわ れた可能性もないことはない。しかし、仮に茎域に対して供献が行なわれなかったとしても、何らかの形でその痕跡には残るはずである。先にもふれた月末山遺跡は、中期中葉からはじまり、中期終末または後期初頭までの土器を伴出する一時期を限っての季素地であり、本遺跡の古いグループの土器群とその年代を一にする。 これは当住宅団地内の全体的な遺跡 および土器の検討のうえで、さらに 考察を要することがらである。

以上の諸点をまとめて、本遺跡の 年代を考察すると、本土壙墓群は、 個々の土壌の時期を明らかにできないまでも、 弥生式時代中期中葉からはじまり、 中期終末または後期初頭までの 墓群と、一定年代の休止期間をおいて、 再び酒津式併行の時期に同一立土地 に埋葬が行なわれた、二時期二回 にわたる墳墓遺跡とみるのが妥当のようである。そしてさらに四辻古墳 群 第5号墳が、5世紀代になって方形 台状墓の立地を利用して、その直上に構築されるという複合墳墓遺跡なのである。

8. 遺 跡 の構成

以上述べてきたことおよび用木山 集落 址等 の調査状況等をもとに、少

付表10 出土土器時期分類表

付表1	U 14.1.1.1.1	s时期分积表 ——————	<u> </u>		
土壙	弥	生 豆	時	代	酒津式
番号	中期中葉	中期後半	後期初頭	後期終未	併行期
2					7
4					1
6		1	1		
.7			. 1		
13			2		
14		1	1		1
15		2	2		
16				1	
17		1			
24		4			
28		2	1		
30		1			
32		2			
33		6			
34		7			1
35		4			1
36		4			2
- 37		4			
38		.7			1
39	1.				2
52	1	1			
57		4	1		
59		2	1	2	20
63			1		13
K 1		2	1		
K 2			1		
К 3			1		
封土中	1 / 1	1	1		2

(数字は個体数を表わす)

々大月旦 な 推論ではあるが、本遺跡の構成について、若干ふれてみたい。

本 **達 」** の最初の土壙墓は、本丘陵の最高頂でありまた中心でもある、C地区第47・52・54・57土 坊の グ ノレープである。これらは、丘陵頂の尾根稜線上にそれと直交して立地し、約10mの範囲に並 んで つ く られている。第47土壙は一括石鏃、他は単一の土器形式前山 II 式のなかでも古式の高坏を (4) に集落を構成する最初の時期と一致する。

第2の時期は、方形台状墓を中心とした土壙墓である。 B地区だけについてみても、この時期は土壙の数も急激に増大する。このことはまた集落遺跡においても、住居址数および伴出土器の量が圧倒的に増大する時期とも一致する。丘陵尾根頂の自然立地をそのまま利用した墓域を設定、営造が行なわれる過程のなかで、方形台状墓の墓制形式がとり入れられたのである。 したがって方形台状墓は、すでに墓域となっていた、第1等の立地である丘陵頂をさけて、第2等の立地、丘陵尾根平坦部端に設営されたのではなかろうか。この時期の土壙は、単に方形台状墓内のみにとどまらずにС地区尾根頂稜線にも広がる形でも営造されている。

やがて墓域は、尾根稜線の方向に従って南北にのび、その長さ約80m、巾約18mの 範囲に広がり、弥生式時代中期終末または後期初頭の時期まで、断続的に続けられるのである。これまた、用木山遺跡の終末の時期と、一致するのである。

したがって、本土擴群の営造は、当丘陵高位に立地する集落の開始と同時に、集落と切り離れた 墓域として設定され、その集落の癈棄とともにこれも終るのである。

その後, 弥生式時代後期の時期を中断期として, 酒津式併行期に再び同一立地に墓域として造営される。これら2時期の被葬者間の関連は不明である。

本遺跡検出の埋葬施設は土壙71,土器棺3である。個々の土壙の時代別分類が不可能のため、機械的に合算すると、その被葬者数は、若干の同一土壙複数埋葬を考慮に入れれば約80人となる。この被葬者数は何を物語るのだろうか。共同体構成員の、共同墓地として把握されているけれども、果してその構成員すべての人々が、納められているのだろうか。四辻古墳群第1号墳と複合する四辻峠台状墓は、ほぼ本遺跡と同年代の所産であるが、7土壙墓で完結する。今後の同種の墳墓遺跡資料および集落址の調査を待って、総合的検討を行なったうえで、稿を改めての課題としたい。

いずれにしても、本遺跡は、当地方における、墓域を定めての墳墓遺跡としては、最も古いものである。宮山台状墓、便木山土壙墓群、用木第2・4号墳、そして定形化した用木古墳第1・3号墳へと引き継がれる、土壙墓を内部主体とした当地方での伝統的墓制の初現的性格をもつものである。

またふりかえって、土壙墓という土中へ深く素掘りの土壙を掘って埋葬する葬制は、本来、原始社会から今日まで、途切れることなく連綿と続く墓制なのである。 当地域内においても、 群集墳盛行期の、 須恵器坏を伴出する土壙墓群、および平安時代未から鎌倉時代初頭にかけての灯明皿を伴出する土壙墓の存在も知られている。また現代においても、 各部落集落単位に墓山を定めて、 集落でとの墓地群が形成され、 埋葬が繰り返されているのである。 このことは考えるまでもなく、 至極当然で当り前のことである。 古墳と呼ばれる高塚に埋葬される、 特定の人々の墓の方が特殊なのである。 われわれは、 この当り前のことを当り前として、 関連集落と合せて総合的に考え直さなくてはならないと思うのである。

註

- 1) 神原英朗「用木古墳群発掘調査概報」本調査概報(1) 1971年
- 2) 神原英朗「便木山遺跡発掘調査概報」本調査概報(2) 1971年

- 3) 小林行雄·杉原莊介編「弥生式土器集成」
- 4) 用木山遺跡は、木遺跡の南東約300m、谷水田一つをへだてた、標高92mを最高位に南面する傾斜面に立地する集落遺跡である。現在調査進行中であるが、約120戸の竪穴住居址群で構成される、弥生式時代中期中葉から終末までの、時期を限った遺跡である。出土土器の時期巾は、本遺跡と一致する。直接この用木山遺跡の居住者と、木遺跡が結びつくかどうかは不明なまでも、考察を進めるうえでは、大きなてがかりとなるものである。調査の終了を待って改めて論及したいと思う。
- 5) 用木山遺跡調査に伴なって検出され、現在8例発見されているが、更に増加する可能性がある。
- 6) 便木山方形台状墓調査に伴なって 発見された。 「便木山方形台状墓」木書に 集録しているので 参照された い。

四辻古墳群第6.7号墳

第1章	序 説	141
第2章	立 地	141
第3章	調査前概況	·····143
第4章	四辻古墳群第6号墳	·····143
第5章	四辻古墳群第 7 号墳	·····148
第6章	その他の遺構	·····157
第7章	まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	163

四辻古墳群第6.7号墳

第1章 序 説

四辻古墳群第6号墳(略記号F6) および第7号墳(略記号F7)は、ともに岡山県赤磐郡山陽町大字河本小字野山65-26番地に所在する。

岡山県営山陽新市街地開発事業に伴なう住宅団地造成工事のために、発掘調査の対象となったものである。発掘調査は、先に報告した四辻古墳群第5号墳と合せて、岡山県の委託により、当山陽町教育委員会が実施した。調査は第5号墳の発掘調査終了に引き続いて、昭和46年5月26日に開始し、昭和46年6月16日に終了した。2基の古墳が同一立地に隣接して所在していた関係もあり、調査は同時に併行して行なった。

昭和47年3月27日,住宅団地造成工事によって当地は削平され、その基盤である丘陵もろとも, 古墳もわれわれの眼前から、永久にその姿を消し去ったのである。

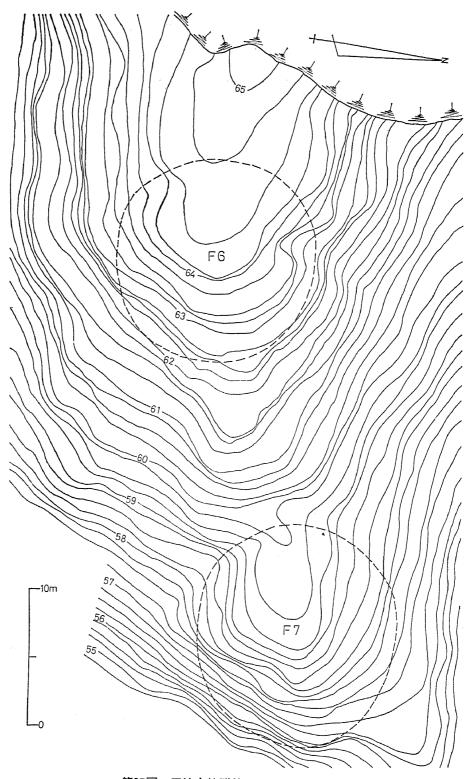
両古墳は、互に近接して立地し、その古墳規模も類似する。しかも発掘調査を同時に併行して行なった関係上、ことに一括して報告することとした。

第2章 立 地

四辻古墳群第1号墳が立地する標高81.6mの四辻峠で分岐した北に向う丘陵尾根支脈は、再び高まりをみせて標高88.06mの南北に細長い丘陵頂平坦地を形成する。この丘陵頂には、四辻土壙墓群および第5号墳が築造され、その東斜面はかなりの急斜面となっているが、東斜面の中腹の標高約65mの地点で、下降傾斜を緩め、再び中池谷頭に向う尾根小支脈となっている。

本古墳2基は、この小支脈の尾根上に直列状に隣接して立地している。すなわち、傾斜を緩め、僅かにテラス状の台部となった、標高約62mの地点に第6号墳が、その東約20m、尾根突端部標高約57mに第7号墳が築造されているのである(図3)。

ことは、門前池・中池を含む谷水田の谷頭正面に張り出した、尾根支脈である。眼下の中池満水面との比高約20m,西方約 120mには、四辻第1・5 号墳の立地する、標高80m前後の丘陵尾根をはじめ、谷水田を取り囲むように、標高90m~70mの丘陵稜線があって、眺望視野は広いとはいえない。巾約80m前後、奥行約 600mの谷水田を、正面谷奥から東方に臨む地である。しかし、この谷水田を取り囲む丘陵主脈の尾根稜線には、用木第1号墳から第6号墳、野山古墳群等の古式古墳の系列が、ほぼどの尾根にも営造され、さらにそれらの尾根主軸から、谷水田に向って分岐して張り出した尾根小支脈の突端部に、本古墳とあたかも対応するように小古墳が指呼の間に立地しており、注目に価する。これらの古墳はいずれも標高50m~60mにあって、南東から用木古墳群第7号墳・同第11号墳・同第8号墳、野山古墳群第12号墳、本古墳2基、そして便木山古墳群へと続



第87図 四辻古墳群第6・7号墳外形図

く。それだけに、一見何の変哲もないこの谷水田の持つ意義も大きいと思われるのである。

第3章 調査前概況

本古墳の立地する一帯の丘陵は、かつては河本部落有の共同野山であった。傾斜面を、巾狭な階段状に削り開き、砂防植林がおこなわれ、松林であったと伝えられている。したがって本古墳外表もその影響を大きく受けて、原形はかなり損なわれていた。昭和28年町村合併によって、現在の山陽町が発足したのを機会に、共同野山を部落民に分筆され個人有とした。そのため部分的にはその植生や形態を変容したのである。

古墳の周辺においても例外ではない。古墳そのものは松林としての景観を保ってはいたものの、 この稜線を境に、南斜面から谷にかけては開墾され、果樹園となり桃が栽培されていた。そのため の被害は第7号墳にはおよばなかったものの、第6号墳は、開畑のために一部採土された痕跡を残 していた。

砂防植林は、今から約50年前に行なわれ作業従事者のうち存命者も現存されるが、その際遺構や 遺物が発見されたという伝承は全くない。立木の繁い茂っていた時点での分布調査では確認できな かった古墳の一つである。

開発工事開始に伴なって,立木が切り払われ,再度の分布調査によって,本古墳2基は発見された(図版42)。

第6号墳は、尾根上の僅かな平坦部にあって流土が著しく、且つ階段状に段築がなされ原況は大きく損なわれていた。墳丘の高まりも殆んど確認できないほどの状況で、自然地形とは異なる僅かな高まりと、第7号墳の存在と合せて、一応古墳として調査の対象とした。墳域も明瞭でなく径15m前後、高さ1m程度の円墳と推定される。

第7号墳は,第6号墳の東約20mの尾根突端部にあり、外表はかなりの乱れと流失をみせるものの,一見して円墳と確認できる程度の遺存状況は残していた。その時点での径15m,高さ 1.2mを 測った (図87)。

両古墳ともに、すでに掘られたものかどうか、 葺石や埴輪等の 外部施設についても 不明であった。

本古墳の周辺は、発掘調査に先行して、造成工事が開始された。直接施工区ではなかったが、他工区造成による残土の搬入地となったのである。工事用道路が本古墳をかすめて通り、中池はもちろん、谷水田も埋めつくされてしまった。かつては谷水田奥の丘陵、約20mの高さを誇った古墳も、発掘調査を開始する時には、搬入土砂の方が逆に高位を占め、谷底に取り残された形となっていた。古墳の範囲ぎりぎりまで高所は削られ、低所は埋められて、調査は古墳立地範囲のみに限られたのである。

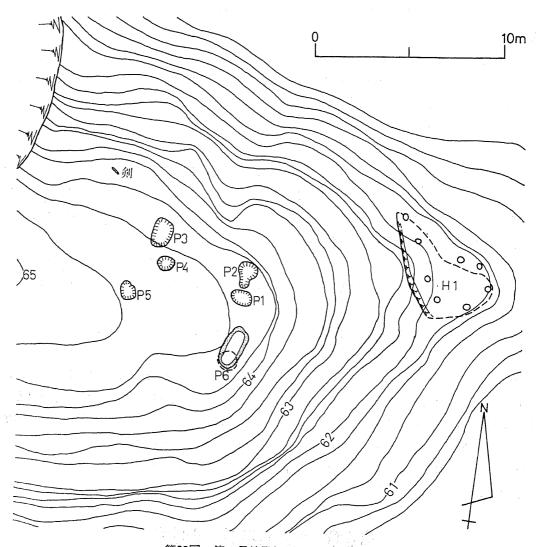
第4章 四辻古墳群第6号墳

第1節 外形·外部施設

本古墳の外形は前節においても述べたとおり、砂防工事による切り込みおよび流土が著しく、外 観からは墳域、墳形も判然としないほどの状態であった。本古墳の立地していたと思われる丘陵尾 根部は、現地表面がそのまま、地山生き土である。したがって古墳が存在しなかったのか、また存 在していたとしても、すでに古墳そのものが壊滅消失してしまったのか確認できない状態である。

当該地域の全域に、4 m×4 mの正方形グリットを、4×5 列の計20区を設営して、全面剝土調査を行なった結果、地山削平整地面を僅かに掘り込んだ粘土床1、ピット状土壙6 が検出された。さらに丘陵尾根平坦部の北肩部あたりの斜面にかかる付近で、一度掘り出されて投棄された形状の現表土遊離層出土の鉄剣1、東丘陵尾根の竪穴住居址、埋土中に遊離した刀子1 が発見された。

丘陵尾根部の断面観察で、明らかに地山を削平して墳域を定めたと思われる、人手による整形面



第88図 第6号墳発掘区・遺構配置図

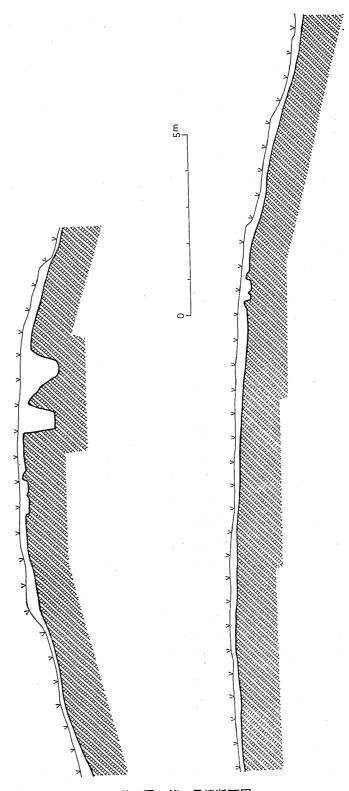
が検出され、鉄剣出土と考えあわせて、古墳が存在したものと推定した。墳丘整形部両端からの距離は12.8mを測り、もとは径13m内外の径をもつ円墳であったと推定されるのである。古墳の高さおよび葺石や埴輪の外表施設については、知る由もない。

なお、発見された粘土床およびピットについては、果して本古墳に伴なうものかどうか、現況では判定できない。墳外に弥生式時代中期の土器を伴出する、竪穴式住居址も発見されており、それらとの関連の方がより深いと推定される。粘土床はさておき、ピットについては、本古墳に伴なう可能性が薄いので、後に章を改めて住居址とともに記述したい。

第2節 埋葬施設

前節においても述べたとおり, 本古墳は原形を全くとどめないま でに壊滅していて,埋葬施設の全 貌は不明である。

古墳の立地していたと思われる 尾根稜線より、少し南によった地 山削平面に、粘土床1基が確認さ れた。ここは原墳丘中央と推定さ れる地点からみても、やや南東に 片寄った場所でもある。遊離検出 された鉄剣は、この粘土床より尾 根稜線を越えて北西約11mにあっ た。これらのことから、この粘土 床が本古墳の埋葬施設としても、 中心主体は別に存在していた可能



第89図 第6号墳断面図

性が強い (図88)。

粘土床は、地山削平整地面を僅かに掘りくぼめた、長方形の土壙の中に構築されていた。長軸中 心線の方位は北18°東を指し、尾根稜線と斜交するが、その地の等高線に平行である。

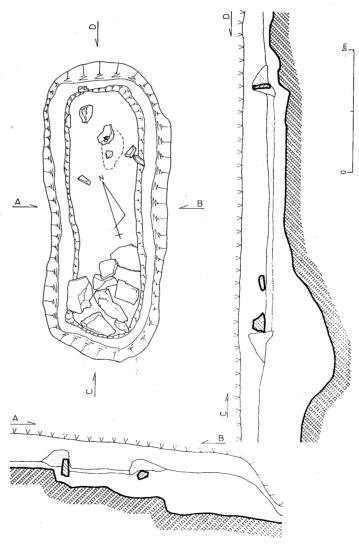
粘土床には青白色の粘土が用いられ、かなりのゆがみをみせているが、両小口部が外ふくらみの円弧状をもつ長方形である。削平整地面を約5cm掘りくぼめ、粘土をもとの整地面と同じ高さまで水平に敷きつめ、さらにその周囲に巾20cm~25cm、高さ10cm~15cm程度のベルト状に粘土を巻いたものである。粘土床の全長238cm、同巾99cm、床面長195cm、巾54cmを測る(図90 図版174)。

床面は水平な面を保ち、形状もほぼ整然とした長方形を示す。北小口床面中心線上の、北小口壁から約30cmに、山石を利用した枕石状のものがあって、その南側床面に30cm×18cmの楕円形の範囲に朱の広がりが認められた。また南小口一帯に大は20cm×30cm、小はこぶし大までの扁平な割り石

8個を、床面上に敷いた形状で検出し注目された。しかしこれらの石材は床面上に密着するのではなく,2~3cm浮いていたり,堤状の外周粘土帯の上面にかかっているものもあって、上方に置かれたものが、落下した形状を示している。棺の直上または被土の上に敷き並べ、墓標等の意義をもたせた埋葬施設と考えられる。しかし現床面と現地表の比高は、平均約20cm、外周粘土帯上端と現地表の比高8cmの遺存度では、この石材が棺直上全面に置かれていたのかどうかも、確証は得られなかった。

内部主体内での副葬遺物は、何 も発見されなかった。

粘土床の構造について、特筆されることがある。それは、床面の周囲に施された粘土帯の中に、15cm×20cm大、厚さ5cm~8cmの扁平な石材を芯のように立て、それを包みこむように粘土が用いられていることである。この石材は枕石等と同質で、付近の丘陵から多く得られる花崗岩の割り石である



第90図 第6号墳内部主体

が、隙間なく立て並べるのではなく、 点々とまばらに用いられている。

また粘土床の下約12cmに、現地山上面が確認され、床面南小口の直下に、この地山面をさらに掘り込んだピットが存在した。このピットは、粘土床がつくられる際の、地山削平整地より明らかに先行し、他のピットとともに、後章にゆずる根拠の一つとなったものである。

第3節 出土 遺物

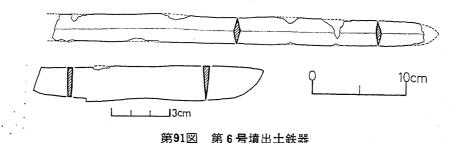
墳外に遊離した鉄剣1,刀子1の2点が発見されたのみである。

鉄剣 (図91)

墳外丘陵平坦地の北肩にあたる現表土層の浅いところに遊離して発見された。6片に折損していたが一括して検出され、折れ口が互に接合できる鉄製剣身の一部である。 切先と関部の 両端を欠き、その全体を知ることができない。剣巾は左右平行につくられ、切先部に近づくにつれて、自然に細まる形態を示す。中心に鎬をもち、その断面形は菱形を呈する。切先に近い部分で表裏の鎬の角度に差がみられ注目された。現存長39cm、巾 3.0cm、厚さ 0.8cmを測る。

刀子 (図91)

古墳の東墳外丘陵尾根を約10m降った,竪穴住居址埋土中に遊離して発見された。したがって,本古墳に伴なうものかどうか断言できない。2片に折損して検出され,銹化は著しいけれどもその保存度はよい。現存長12cm,刃部長9cm,同巾 1.8cm,背の厚さ 0.3cmを測る。断面形は二等辺三角形を呈し,全体として薄い巾広の感じのするつくりである。茎の断面形は長方形を示すが,端部を折損して全形は不明である。関部は刃部にのみ段状をみせるが,背部の刀身から茎への移行は直線である。



第4節 築造の年代

上記のような出土状況のため、本古墳の年代を知る手がかりがきわめて少なく、その築成年代を明らかにすることは困難である。粘土床と鉄剣の検討および次章の第7号墳との関連等から、前期 古墳としての性格が強いという程度である。

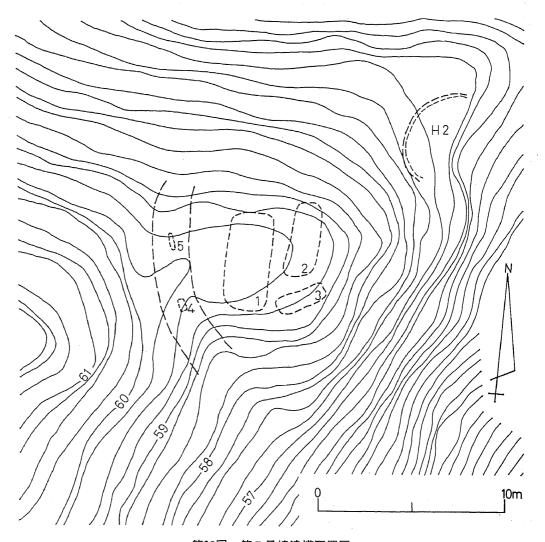
第5章 四辻古墳群第7号墳

第1節 外形·外部施設

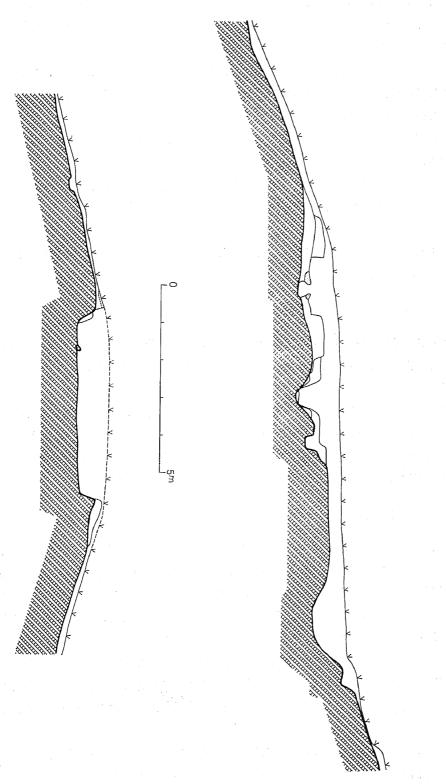
本古墳はかなりの下降傾斜をもつ、巾狭な尾根上に立地しており、流土も著しく、また砂防植林の際の段築によってかなり原形を損なっていた。したがって調査前の外表観察では墳域も判然とせず、径約14m前後、墳高約 1.5mの円墳と推定した程度である。

発掘調査の結果,地形の高い西墳端部に,丘陵尾根に直交して地山を深く掘り込んだ三日月状の 周湟と,地形の低い東墳端部で,墳丘を整えた整形痕が検出され,本古墳の原形と規模を知ること ができた(図87)。

周湟は丘陵尾根部で巾 2.8m, 深さは地形の高い西掘り込み上端から, 最深部である中心までの



第92図 第7号墳遺構配置図



第93図 第7号墳墳丘断面図

比高 1.2m, 平均80cmの大きな掘り込みである。三日月状に円弧を描いて、稜線を切っていた。との周湟底と、地形の低い東墳端整形部とは比高2mを測り、本古墳の墳端が地形傾斜とともに、傾きをもつことを示している。

本古墳の築成にあたっては、内部主体を構築する面を、地形の高い西部は削平し、低い東部は埋めだして、径約9.5mの水平な平坦面をつくり出している。埋葬施設はその平坦整地面から掘り込まれているが、封土は現存で平坦面上平均値約45cmである。深さ1mにおよぶ周湟が、現在では全くその存在が判らないまでに埋没している状況から推して、もとはかなりの高まりを有していたと推定される。

以上を総合して本古墳の外形を推定すると、径15.4m、 墳高は真横からみて約 2.3m~ 2.5mの 截頭円錘型の円墳であったと考えられる。

外表施設である葺石および埴輪の存在は、認められなかった。 しかし東南墳斜面の一部に葺石に 用いられる程度の山礫を数個散見した。流土の状況等から推して、外表施設がなかったとは断言で きない現況である。

第2節 埋 葬 施 設

本古墳の埋葬施設である内部主体は、5基である。墳頂平坦部に掘り込まれたもの3,西墳端の 周湟内に設けられたもの2である。これらの内部主体の形態は、それぞれ異なり注目された(図92 図版46)。

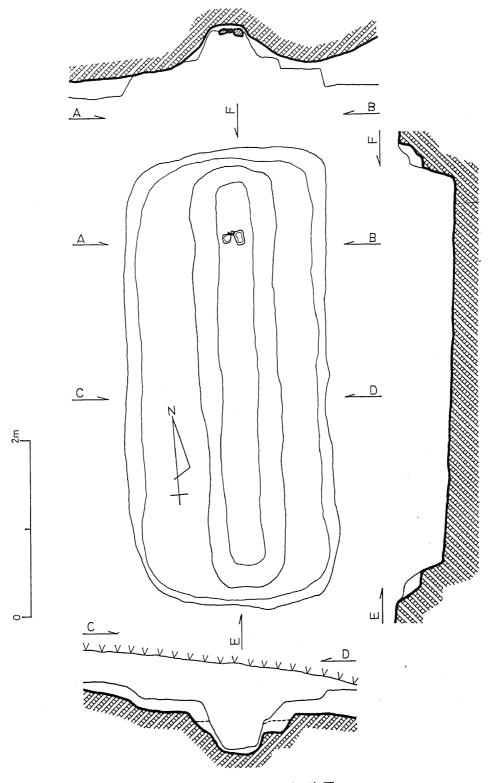
墳頂平坦面に、尾根主軸に直交してつくられた第1主体は、大型土壙の中心に棺を置き棺側に精 選された地山マサ土を埋めたものである。第2主体は、その西に隣接して平行につくられているが 粘土槨、その南にコの字形につくられた第3主体は素掘りの長方形土壙である。周湟底につくられ た第4主体は、小形の箱式棺、今一つの第5主体は小形の浅い土壙である。

1. 第 1 主 体

本古墳のほぼ中心に、丘陵尾根と直交につくられた大型の埋葬施設である。長軸中心線の方位は北4°東を指す。水平整地面から長さ 512cm、巾 222cmの隅丸長方形プランで、深さ76cmの大型土壙を掘り、その中央に長さ 430cm、巾40cmの平底木棺を安置したものである。土壙内の埋土は棺側に近い部分は、粘土まじりのマサ土、その上方は有機質を含まない、地山の精選された生き土を使用していた (図94図版48)。

土壙の掘込みは、上端での巾 2.2mと巾広であるが、約24cm掘り さげたところで 水平な面をもち、その中央に巾1.18mで再び掘りさげ、2重の掘り込みとなっている。その横断面は図示したように、階段状をみせていた。したがって、土壙底は最終的には棺をやっと納められるほどの巾45cmとなり、上広がりの台形を示している。

床面は巾40cm,長さ 430cmの水平な長方形の面を保ち、土壙掘り方底面より約7cm上位に置いていた。床面と掘り方底面との間の埋土は、砂礫を含むマサ土である。側壁部は粘土まじりのマサ土で、やや外傾するものの、直線的に約35cm立ちあがり、その上端は左右ともに巾22cm~25cmの平面



第94図 第 1 主 体 実 測 図

となっている。この形状から棺は外法長 430cm, 中40cm, 高さ35cmの平底の箱型木棺と想定される。 床面北小口, 北壁から53cmの長軸中心線に, 山石を利用した枕石1対が置かれ, そのまわり約30

cmの範囲に朱の広がりが認められた。被葬者の頭位を示すものとして注目される。

棺内に副葬された遺物は何も検出されなかったが、南小口に近い東棺側の埋土中に、土壙掘り方 底面に接して、鉄斧および鉄剣各1点が発見された。鉄斧は刃先を棺内部方向へ剣は切先を南に向 けていた。これらは明らかに棺外供献物として、棺側に置いた後に埋土を行なったことを示すもの である。

2. 第 2 主 体

第1主体の東 105cmに、それと平行に掘り込まれた、粘土槨を内部主体とする土壙である。第1 主体にくらべてやや小さい掘り込みであるが、北に少しずれており、北小口の掘り込みは、本主体 の方が1 m北になる。第3主体が本主体の南に接し、斜交して位置し、その南壁が第1土壙南小口 の掘り込み線と揃い、全体として均整のとれた配置を示している。このことから本古墳の埋葬施設 は、当初から3主体埋葬が計画的であったとも思われるのである(図95図版49)。

本土壙の掘り込み上端は、第1主体と同様平坦整地面から行なわれ、その底面高位は、第1主体 土壙床面と一致する。土壙の長軸中心線の方位は北4°東を指す。

土壙は長さ385cm, 巾146cmの隅丸長方形のプランをもって, 最深部で約55cm掘り込まれている。 その中央に外法長 299cm, 同巾平均70cmの粘土棉がおかれている。粘土は青白色のものである。

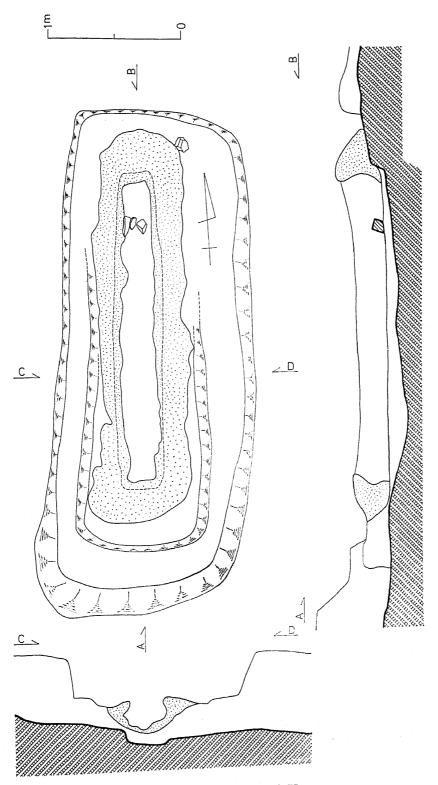
粘土棉の中心線は、棺の腐朽に伴なって陥没した形態を示し、巾約20cm、長さ 230cmの不整形な 帯状の穴となっていた。発掘による横断面は円弧状を示し、もと割竹形木棺が棺として用いられて いたことを推測させる。粘土圧痕から棺の大きさを復元すると、長さ約 241cm、平均径約38cmとなり、北小口に元部を置いた形となる。 棺はほぼ全体を粘土棉によって包まれていたが、棺底中心線 には認められなかった。巾 $10\sim15$ cmで帯状に、砂礫まじりの地山マサ土が約5cm ~8 cmo原さに敷かれていた。

床面の北小口に近い中心線上に3個の山礫を利用した枕石1対が置かれていた。北小口内法壁より28cmのところである。その他床面および粘土内壁部に、部分的に朱の広がりが認められたが、その遺存度は良好とはいえなかった。副葬遺物は何も発見されなかった。

土壙の掘り込みは第1主体と同様、最初は充分の余裕をもって巾広に掘っているが、掘り方上端から約25cmで水平な段状部をつくり、再び15cm掘りさげ、また段をもつ。そして中心部では棺の規模に合せて、最終的な土壙を掘っているのである。したがってその断面形は3段の階段状を示し、粘土塊が2段目の水平面にのっていることから、その時点で埋葬および葬送祭祀が行なわれたことを物語っている。粘土棉の粘土を除く他の埋土は、有機質を含まない地山マサ土をもって埋められていた。

3. 第 3 主 体

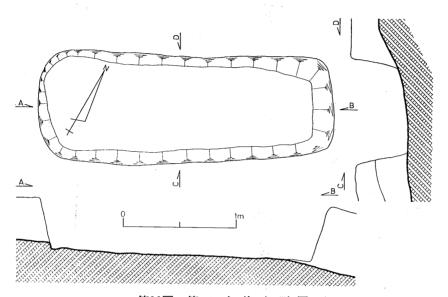
第1主体の東にその小口を揃え、第2主体の南に斜交する形でつくられた、 素掘りの土壙であ



第95図 第 2 主 体 実 測 図

る。第1・2主体と同様整地平坦面から掘り込まれ、その長軸中心線は東29°北を指す。掘り込み上端の長さ 260cm、同巾94cm、床面の長さ 233cm、同巾73cmを測り、ともに隅丸長方形のプランを示す。床面はほぼ平らな面を保つが、平坦部肩の傾斜面につくられている影響からか、地形の低い南東にやや低く傾斜している。掘り込みの深さは平均42cmを測る (図96図版50)。

主体内には、枕石等の施設は何も施されておらず、朱の広がりをはじめ、副葬遺物は何も検出されなかった。



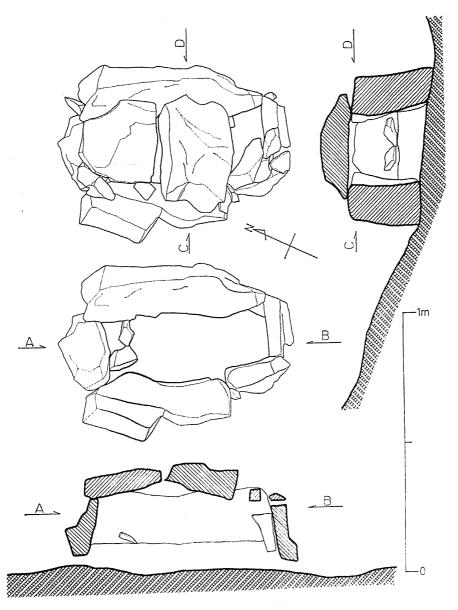
第96図 第 3 主 体 実 測 図

4. 第 4 主 体

本古墳の西墳端周湟底に位置する。丘陵尾根稜線より、約1 m南によったところの、周湟の中心に尾根稜線に直交して構築された、小型の組合せ式箱形石棺である。長軸中心線の方位は北24° 西を指す。周湟埋土中につくられているため、その構築の時期は不明であるが、側壁を周湟底の現地山上面に、小口壁を地山上面より約4 cm浮いたところに置いている。また石棺内は底面から10cmの高さまで土を入れて床面をつくり、北小口部に小さいながらも枕石1対をもち、部分的に朱の広がりが認められた(図97図版51)。

石棺の規模は、内法で長さ60cm、巾25cm、高さ20cm、外法で長さ86cm、巾平均60cm、高さ40cmを測る。使用された石材は、すべて花崗岩である。東側壁1、西側壁2、南北両小口各1、天井2の計7個が基本石材で、その間隙には同質の小石を充塡している。

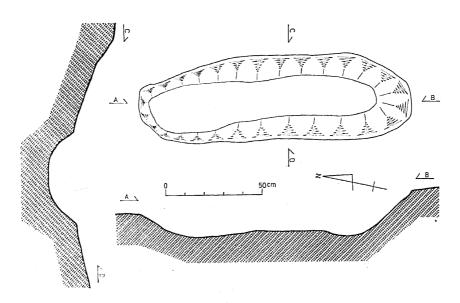
周湟底に構築されているとはいえ、高さ40cmの石棺が、かくれるだけの被土を用いれば、この周湟の半分以上は埋没することとなる。墳中心の各埋葬が終わり、この周湟がかなり埋没した時期での葬送と考えるのが妥当のようである。また棺内に枕石をもつことから、伸展葬が考えられ、内法長60cmに納まる程度の子どもが埋納されたと推定される。



第97図 第 4 主 体 実 測 図

5. 第 5 主 体

第4主体と同様,周湟底につくられた内部主体である。尾根稜線の北約 1.5mに,周湟底の地山面を浅く掘り込んだ,素掘りの小土壙である。現状は長さ 140cm,巾42cmの長楕円形のプラン,その横断面は抛物線を示し,深さ14cmを測る。床面も若干の凹凸をもって不整然で,内部主体といえないかも知れないが,現地表から 1.2mの地下にあり、しかも周湟底でさらに掘り込まれる可能性、および第4主体に対応する立地等から、一応内部主体として取りあつかったものである。周湟埋土の進行過程で掘りこまれたとすれば、さらにその規模は大きくなると思われるが、調査の段階では



第98図 第 5 主 体 実 測 図

周湟底の地山上面でしか確認できなかった。枕石および副葬遺物は検出されない(図98図版50)。

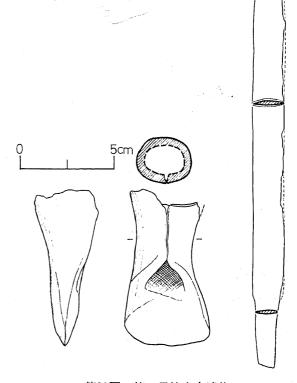
第3節 遺 物

本古墳発掘に伴なう出土遺物の発見例は, きわめて少ない。第1主体土壙底面に副葬された。鉄斧および鉄剣各1の計2点のみである。これらは第1主体東棺側に接して,枕石の南310cm,床面南小口から約60cmの,棺側埋土底から一括出土したものである。

鉄斧

銹化はしているが遺存度は良好である。鍛造によるもので、刃部は振りおろす軌道半径に合せて、緩やかなカーブをもって広がり、鳥帽子形を呈する。したがって形状は、現在使用されている根切り斧と類似性をもつ。上部は左右からつき合せて、袋状の器をつくり精円錐形の袋状となっている。

上部端を若干欠損するが, ほぼ完全形に近いと推定される。現存長 8.3cm, 湿上端外法 長径 3.7cm, 同短径 3.7cm, 同内法長径 2.6



第99図 第7号墳出土遺物

cm, 同短径2.35cmを測る。刀部はゆるやかな外ぶくらみの円弧状を呈し, 刀部長 4.4cmを測る。側面形は左右相対で滑らかなカーブをもって, 器上端に移行し, 全体としてやや小型ではあるが柔かみのある, 均整のとれた形態を保つ。

鉄剣

4片に折損し銹化が著しいが、接合により完全形に復元できた。保存状況も良好な薄手細身の剣である。全長22.4cm, 刃部長18.8cm, 茎部長 3.6cm, 刃部最大巾 1.8cm, 同厚0.45cmを測る。

左右相対のつくりで、切先および関部から茎部への移行ともに自然である。 刃部中心線に鎬をも たずその横断面は、とつレンズ状を呈する。 茎部も端部になるにつれて自然に細まり器厚も薄くな る。横断面は刃部と同様とつレンズ状を呈し、目釘穴は認められなかった。

第4節 築 成 年 代

本古墳の築成された年代を明確にする資料はきわめて少ない。古墳立地や内部主体構造伴出遺物を手がかりに推測しても、後期古墳時期といえる材料は何一つ持たない。すでに発掘調査を行なった、本古墳と同一立地条件をもつ、用木第8号墳、同第11号墳および本古墳の所属する四辻古墳群等の対比、また吉備地方の類例によって、大まかに5世紀代にさかのぼる小形古墳の1例としてよいと思われる。

本古墳第2主体である粘土棉、および第1主体出土の鉄剣は、ともに津山市阳6号墳での出土例と類似する。 吉備地方において、 遺物のとぼしい 小型古墳の多くが、 箱式棺を内部主体としており、 その多くが5世紀代にさかのぼる可能性が知られている。 これらは尾根上に立地し、 須恵器を伴なわない共通性をもっている。 こうした類例資料の中に、本古墳のように、 多種の主体構造を内蔵する、一資料を得たことは意義深いと考えるのである。

第6章 その他の遺構

第1節 発見と概況

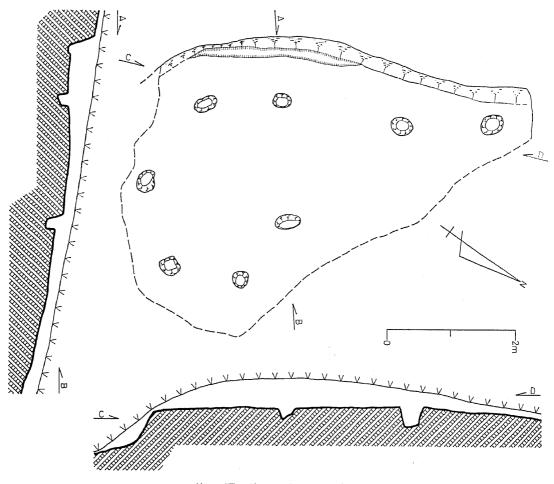
第6号墳および第7号墳の発掘調査の過程で、本古墳に先行する時代の遺構が、当該地に所在していることが知られた。

第6号墳と同一立地の尾根平坦部でのピット群6,第7号墳基盤となった地山削平整地面に検出された柱穴痕および,墳外尾根上に立地する竪穴式住居址2がそれである。

ピット群は、第6号墳築成以前の時期に、すでに丘陵傾斜を若干削平整地して、構築されていた らしいが、伴出遺物を伴なわないので、明確な時期は不明である。第6号墳がその立地を利用し複 合して築成されたことは確実である。

住居址は若干例であるが、弥生式時代中期の土器を伴出し、その時代のものと推定される。第7 号墳の発掘調査の際、削平整地面内に、若干の土器片を含む 有機土層が 検出されさらに柱穴址 4 例, 溝状の遺構等がみられたが, 古墳築成の整地によるものか, 床面下まで削平され, 詳細は不明であった。開発工事に伴なう造成工事から, 僅かに残された墳外尾根部の拡張調査によって, 住居址 2 が確認されたのである。

当該丘陵の尾根稜線にそって、弥生式時代の集落址が、ある広がりをもって存在していたことが 想定される。しかし古墳立地部のみを残して、すでに造成工事が進行している現状では、その存在 を知ったとしても、調査はごく限られた範囲についてのみしか行なえない。同古墳群第3号墳調査 の際にも、同様の経験をさせられ、誠に遺感であるとともに、残念でたまらない。



第100図 第1号住居址実測図

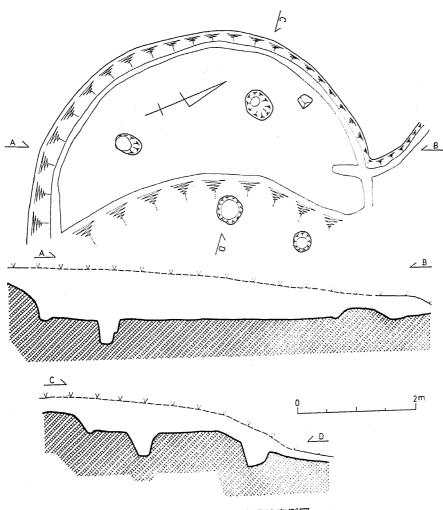
第2節 住 居 址

第6号墳と第7号墳の中間にあたる丘陵尾根部に立地する1号住居址と,第7号墳の北東墳外に 発見された2号住居址である。第7号墳直下にも存在した可能性が強いが,遺存度が悪く追求でき なかったので,記述は割愛する。

1号住居址

かなりの下降傾斜をみせる, 巾狭の丘陵尾根部の地形の高い西地山を切り込んで段状の削平面を つくり, そこに営築された竪穴式住居址である。地形の低い東半部は床面も含めて流失し,約4分 の1程度が遺存する。

円形の竪穴式住居址である。 地山を掘り込んだ壁は、 地形の高い西側に一部遺存する のみである。現存深36cmを測るが原高は不明である。壁帯溝の存在もその痕跡を残すのみである。床面も流失が著しく、地形の低い東方にやや傾斜しているが、平面を保つ部分は約 2.6mである。柱穴8 本を発見したが、本来は5 本柱で建築された 径5 m前後の住居であったと 想定される (図 100図版53)。



第101図 第2号住居址実測図

2号住居址

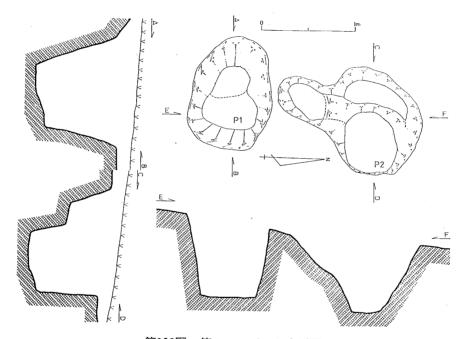
第7号墳の北東部墳端から墳外にかけて、尾根上につくられた円形の竪穴式住居址である。 構築

方法は1号住居址とほぼ大同小異であるが、本住居址の方が遺存度がよく、約2分の1を現存する (図 101図版53)。

床面中央に1,そのまわりに4の計5本の柱で建築されている。現存掘り方上端の径5.68m,床面径5.14m,掘り込みによる壁高は,最もよく残る部分で48cmを測る。床面の外周には壁に沿って巾15cm~18cm,深さ5cm~7cmの断面抛物線を示す溝がめぐっている他は,何の施設も検出されない。床面はもとは水平な面を保ったと推察されるが,地形の低い東半部は流失し,水平面は 204cm 残すのみである。

両住居址の埋土および第7号墳墳土整地面に、若干の土器片を検出したが、すべて弥生式時代中期に属するものである。実測に耐えるもの2点を第106図に図示して、記述に代える。

第3節 ピット 群



第102図 第1・2 ピット実測図

第6号墳とほぼ同一立地の,尾根平坦部に掘られたピット群である。地山を削平整地して,径8 m~9 mの平坦部をつくり出し,地山に掘り込んだものである。径7 mぐらいの範囲に点在する6 ピットがそれである。

第1ピット

第6号墳の粘土床の北約1 mに、地山上面から直接掘り込まれたピットである。長径 119cm、短径83cmの楕円形のプランを示し、深さは地形の高い南壁で85cm、地形の低い北壁で72cm、平均80cmを測る。底部は57cm×67cmの楕円形の平面を保ち、その断面は上広がりの台形を呈する(図 102図版45)。

第2ピット

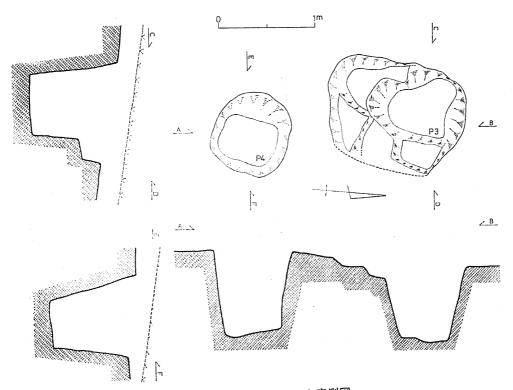
第1ピットの北に隣接する。掘り込み線間の地山平面は僅かに7cmである。基本的には長径 113 cm, 短径98cmの楕円形プランをもって掘られたものと推察されるが、南に60cm×42cmの浅い掘り込みを切り合った形状をもち、一見不整形なプランを示す。掘り込みの深さは平均80cmである。底面は30cm×62cmの楕円形平面となっているが、西壁部で掘り込みのはじまる上端から、約42cmのところに、巾23cmの階段状のテラスが設けられ注目された(図 102)。

第3ピット

第2ピットの西約4mに,第4ピットと隣接してつくられている。掘り方,形状ともに第2ピットに類似する。掘り込み上端のプランは,長径 152cm,短径 113cmの楕円形を示し,本ピット群中最大の規模を有する。掘り込みの深さは平均で82cm,床面はほぼ平らで,62cm×54cmの楕円形を示す。東壁の中間,掘り込み上端から18cmに,巾20cmの階段状テラスを有する(図 103図版45)。

第4ピット

第3ピットの南40cmに位置する。長径84cm, 短径78cmの隅丸方形に近い掘り込みプランを示し、深さ約85cmのピットである。床面も58cm×50cmの隅丸方形のプランでほぼ水平面を保ち、掘り込み壁も直線的に整然としている。断面形は縦横とも台形を示す(図 103)。



第103図 第3・4ピット実測図

第5ピット

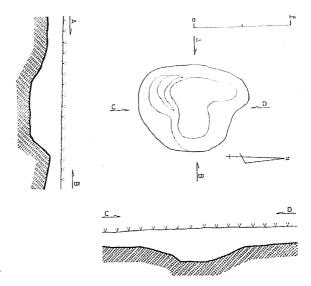
第4ピットの南西約 1.8mにある。前4 ピットの南西約 1.8mにある。前4 者に比べて浅い掘り込みである。長径 115cm, 短径90cmの楕円形プランで掘られているが, その深さは18cmと浅い。当該地が前者にくらべて地形が高く, もとはもっと深いものが, 古墳築成等のため, 地形を削平された可能性もある。断面形は現況では抛物線を示す(図 104)。

第6ピット

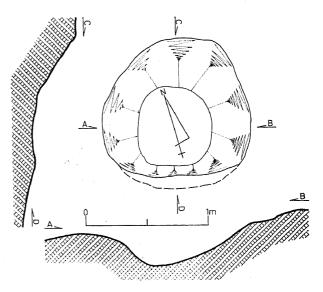
第6号 墳粘土床の 南小口 床面 下にある。 径約 140cm, 円形プランで約40cm掘られたピットである。 断面形は上向きの 抛物線を呈するが, 古墳築成との関連もあって, 上部構造の原形はかなり損なわれているものと考えられる (図 105)。

第4節 遺構の年代

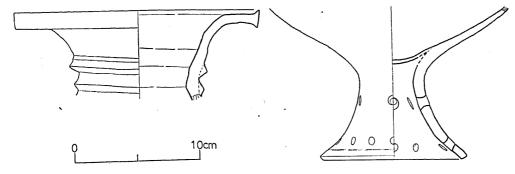
住居址は前にも述べたとおり、伴出土器の特徴から、弥生式時代中期中葉から、後半にかけての時期の所産と推定される。しかし、ピット群は伴出遺物をもたず、その使用目的とともに明確でない。第6ピットと第6号墳粘土床の共出関係から、明らかにこのピット群は、第6号墳に先行するものである。そしてまた、当該地は竪穴式住居址を建築するのに、当丘陵としては恵まれた地であるにもかかわらず、住居址と複合しない。それらのことから本ピット群も、住居址と同時代の所産と考えられるのである。



第104図 第5ピット実測図



第105図 第6ピット実測図



第106図 出土土器片実測図

第7章 ま と め

- 1. 本古墳2基は、谷水田に向ってのびる、小丘陵尾根支脈の突端部に立地する、径14m前後の小 円墳である。内部主体は基本的には土壙墓であり、伴出遺物のきわめて少ない特徴を有する。
- 2. 特に第7号墳は、墳頂平坦部に3主体の埋葬を古墳築成の当初から考慮されており、また発見された5主体のすべてが、形態を異にして注目された。すなわち、第1主体は土壌内に平底木棺を置き、地山マサ土で埋納、第2主体は粘土槨、第3主体は素掘りの長方形土壙、第4主体は周湟底につくられた小型の箱式組み合せ石棺、第5主体は楕円形の小形土壙である。
- 3. 本古墳の出土遺物は、きわめて少ない。遊離していた第6号墳の、刀子1はともかく、第7号墳は5主体ありながら、副葬品は第1主体の鉄斧・剣各1のみである。吉備地方の5世紀代小形古墳で、、このように伴出遺物の少ないものの多くが、箱式棺を内部主体としているのに対して、多種の埋葬形態を示す資料を、一つ加え得たことは意義深いと思われる。
- 4. 本古墳の発掘に際して、古墳に先行する集落址が発見されたが、調査に先立って造成工事が開始され、調査時点では、きわめて限られた小部分のみの発掘を余義なくされた。したがって、十分な調査の成果を得ることができず、本古墳報告に付記する程度である。本当に残念なことである。

註

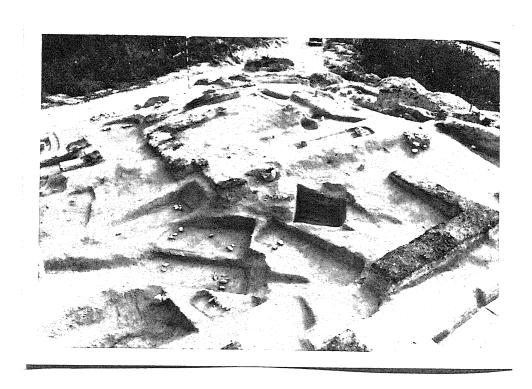
- 1) 今井堯他「美作津山市沼六号墳調査報告」古代吉備第6集 1969年
- 2) 今井堯他「備中国高松町観音山第12号墳」私たちの考古学16号 1958年 渡辺健治「美作国津山市隠里箱式棺調査報告」古代吉備第2集 1958年 間壁忠彦「岡山県下の人骨を出した小古墳6例」倉敷考古館研究集報4号 1968年など
- 3) 註(2) に同じ

便木山方形台状墓

第二	L節	序 説	165
第2	2 節	立地と調査前の概況	167
第3	3 節	遺跡の外形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	167
第4	1節	埋葬施設	171
第5	5節	出土遺物	174
第 6	節	その他の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	178
第二	7 節	まとめ	182



第107図 便木山周辺地形図



ブセンターの当初計画の縮少を含めての造成計画変更を了承され、本遺跡は現状保存となったのである。 したがって調査は、本方形台状墓の外形露呈にのみとどめ、内部主体の発掘調査は中止した。 とりあえず遺構の上に厚さ平均30cmの被土を盛って埋め戻し現況保存に備え、旧和46年11月20日一応終了とした。具体的な保存処理は今後の課題となるが、現在までのところ、一度記録保存と決定され、調査が行なわれた遺跡で、計画変更を伴なう現況保存の処置が決定されたのは、本遺跡のみである。

第2節 立地と調査前の概況

四注 古 墳 群 第 5 号墳が立地する丘陵尾根最高位(標高89.6m)から、いくつかの小支脈を分岐しながら、 北東方向に下降してのびる丘陵尾根がある。この丘陵尾根は、便木山遺跡の立地するあたりで、 その下降傾斜をゆるめ、巾狭ながらも平坦地となり鞍部を形成している。さらに鞍部を分岐点とした、 低小な丘陵支脈が分岐し、 縄文寺池から門前池にいたる谷水田を抱きかかえるような形での び ているのである。これらの支脈は多少の起状はあるものの、その稜線はほぼ平坦な舌状となって の び ている。谷水田の比高は平均約15mと低小で、尾根稜線の標高も40m内外である(図107)。 本 遺 助 は、 丘陵分岐点となった、 便木山遺跡の北に隣接して所在する。 前節においても述べたとおり、 この丘陵尾根上はその稜線に沿って、 巾 4 mの木材搬出用林道が 尾根部を削平して 施敷され、 遺 助 が その道路敷の真下に存在していることもあって、原形は全くその姿をとどめておらず、分布 割 至 の 時点では感知することすらできなかった。

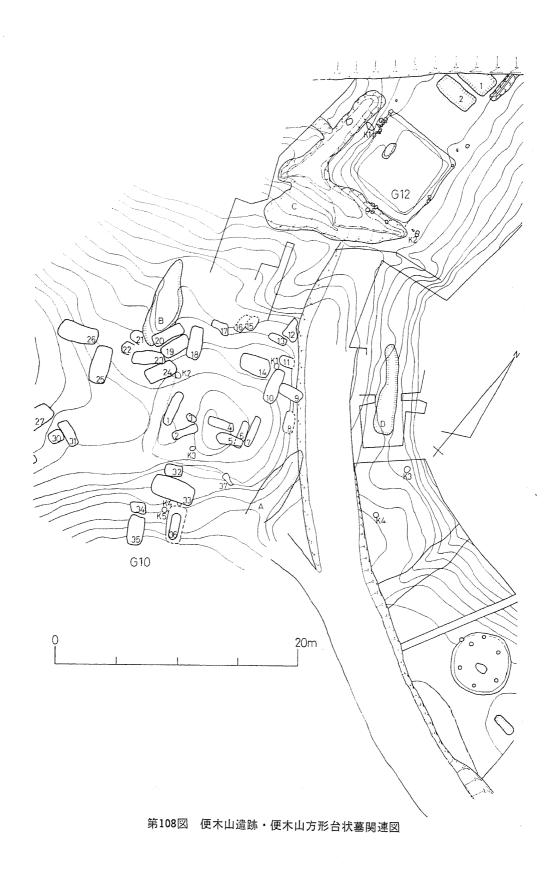
当 初 の 分 布 調査の 段階では、 便木山遺跡をはさむように、 西に便木山古墳群 第1号墳〜第3号墳、 東 (こ 同 第 4 号墳〜第6号墳と、6 基の円墳が直列状に丘陵尾根上に並び、さらに北へ約 100m の地 点 の 尾 根 支 脈に同第8号墳の存在が知られているのである。 山陽町教育委員会の調査によって便木 山 遺 跡が、 また岡山県教育委員会文化課の発掘調査によって、 本遺跡東限下の谷頭から門前池にか (ナ て の 谷 水田面下に、 弥生式時代中期未から、 平安期にかけての集落址が発見され、遺跡群の密集 す る 地域であることがわかったのである。

当言**亥 ±也**は、 調査が行なわれる 前までは松林で、 埋積平地との比高も 約20mとさして高くはないが、 **コヒカ**> ら 東へ向う眺望視野は広く、砂川によって形成された埋積平地の大半を、眺望できる地点を占 とっている。

第3節 遺跡の外形

発力記書 査の結果、本遺跡は鍵状に2方向にのみ溝状遺構をもつ、1辺 6.8m× 7.0mの方形台状 墓と、 その北側約 3.5mの尾根上に、それと並列する土壙墓2が検出された(図 109図版54)。

方 形 台 状 墓 は、丘陵尾根を一度削平整地した上に、赤褐色の粘質土を盛ってつくられている。現



-168 -

状では底辺で尾根と平行する南北長 6.8m, 直交する東西長 7.0m, 墳頂台状部南北長 5.4m, 東西長 5.8m, 墳高約30cmを測り, 各々の稜線は明瞭に遺存し,ほぼ正方形に近い平面形を示す。しかし現在施敷されている林道面が,本遺跡台状部上約14cmにあって, その高まりおよび台状塞平坦面は,かなりの影響を受けているものと思われる。

溝状遺構は、地形の高い南側の尾根と、傾斜の緩い西墳端部に鍵状に掘られている。一見周湟状を呈する溝状遺構である。記述の便宜上、これらの溝状遺構を南溝、西溝と呼称する。

南溝は、先に記した便木山遺跡と、本台状墓の境を画するように、台状茎の南端部に丘陵尾根と直交して、深く掘り込まれている。 横断面は抛物線を呈し、 その底面の中心線はほぼ 水平を保つが、馬の背で中狭な尾根稜線を切っているため、溝中および深さは一定でない。尾根中心線での地山上面巾約4 mを測る。深さは、地形の高い南掘り込み上面からの比高 132cm、台状墓頂平坦面との比高 102cm、平均 114cmを測る。溝の両端は、その底面が丘陵斜面と標高が一致する付近で自然に消滅し、長さ11.8mである。

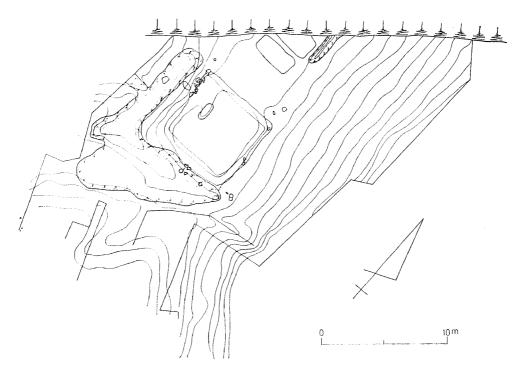
西溝は、台状墓西墳端に沿って、北墳端までの間に掘り込まれている。台状墓側は、台状墓斜面の傾斜度と合せて掘り込まれ、地形の低い西端は、掘り込みも浅く、一見して段状を呈するところもある。溝底中心線は、南溝同様ほぼ水平を保ち、横断面は西に低い抛物線を示す。台状墓頂平坦面との比高平均 140cm、地形の低い西地山掘り方上面との比高平均16cm、平均深約45cmを測る。溝の平面形は、南溝と鍵状に掘られているが、北端は楕円形を示し、全長10.3mを測る。両溝の交わる南西角では、台状墓稜線は、頂部から溝底に至るまで明瞭に保っており注目された。

この溝底全面に破片となって遊離する土器片と、部分的にではあるが人頭大程度の山礫が、かなりの量転落した状態で検出された。台状墓墳端部に列石状を呈する石組みが、部分的に認められることから、もとは本方形台状墓墳端を囲続する形で、列石が施設されていたものと考えられる。

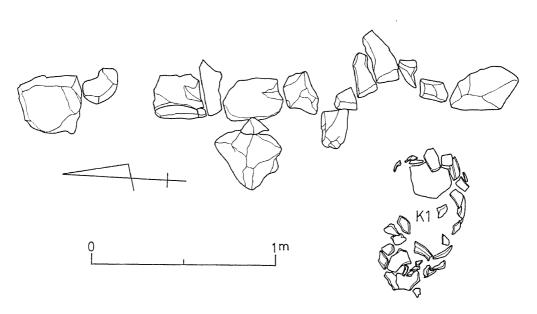
以上の事柄を総合して本遺跡を復元想定すれば、一辺約7m,高さ30cm以上の正方形プランをもち、その端部に人頭大の山礫による列石と、南および西墳端部に鍵状となる溝を有する方形台状墓となる。

方形台状墓北墳端からさらに北方約 3.5mに, 直接尾根地山を掘り込んだ 2 土壙が検 出 さ れ た が, 当該地は林道施敷の際削平されて, 現状を大きく損なわれているため, その外形は全く不明で ある。工事によって北側尾根は巾約60mにわたって削りとられ, その全容も明らかでなく, 方形台 状茎と直接併存するものか, 別個の墓地遺跡であるのかも明確でない。土壙形状および方形台状墓 出土の土器の検討から, これらの土壙墓は方形台状墓に比して,後出するものではなかろうかと推 測されるのみである。

また本遺跡の調査において、方形台状墓の西斜面北端に近く、酒津式併行期の土器棺1、および 東斜面に接して6世紀土師器甕を利用した土器棺1をはじめ、須恵器片や土師器片が、地山上面と か表土層内に遊離して散見された。さらに工事区に入るため、便木山遺跡から東にのびる丘陵尾根 上において、弥生式時代竪穴住居址1、および鎌倉時代と推定される灯明皿を伴出する土壙1を発 見した。したがって当該地は、何回かの中断期をもって、弥生式時代中期以降少なくとも鎌倉期に 至る長期間、同一立地を利用した集落や墳墓が複合して営なまれた地域といえる。



第109図 便木山方形台状墓外形



第110図 列石出土状況図

第4節 埋葬施設

1. 方形台状墓

方形台状墓は、その外形を露呈した段階で現状保存の処置が決定したので、調査を打ち切った。そのため本遺跡の埋葬施設の全容は明らかでない。現存の台状墓頂平坦面から掘り込まれた土壙1についてのみ調査した。しかし本土壙は、台状墓の中心から西北にかなりはずれた場所に位置し、本来の中心主体というか、複数の埋葬施設の営なまれている可能性が強い。

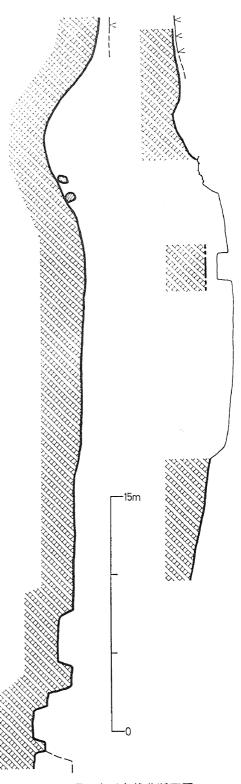
この埋葬主体は、台状頂平坦部の南北中心線の西約 1.3m、南小口部を東西中心線上にして掘り込まれた、長方形プランをもつ土壙墓である。掘り込み上端は、現平坦面から掘りおろされ、その埋土中一面に高坏を中心とした一括土器片が充満していた(図 112図版55)。

土壙は、長方形プランをもって整然と掘られた箱形のものである。壁もほぼ直立に近く、床面は水平な面を保つ。長軸中心線は台状墓南北線に平行し、北1°東を指す。掘り方上端の長さ 201cm、巾169cm、床面長 192cm、巾61cm、現存の深さ平均36cmを測る。床面北小口の北壁より33cmに、枕石 2 対が置かれている。枕石の状態から、並列する 2 人の埋葬が考えられる。枕石から南へ約 8 cmの床面中心線上に、管玉1が発見された。

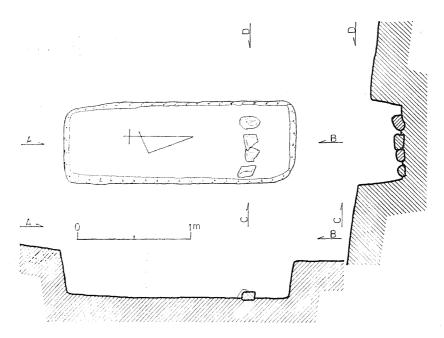
なお、本土壙床面下の地山上面をボーリング探査をした結果、平均して土壙床面より36cm下方で地山上面に達するが、枕石のある付近のみが、65cmと深くなる。したがって地山上面から掘り込まれた、本土壙に先行する埋葬主体の存在する可能性が強い。

2. 尾根上の埋葬施設

方形台状墓の北方約 3.5mの尾根上に、それと直 交する土壙墓2が確認された。丘陵尾根が工事によ り中断され、崖状となっているため、すでに損壊消



第111図 方形台状墓断面図



第112図 内部主体実測図

滅した土壙の存在した可能性もある。現存するもの2土壙である。現況では道路敷となっているため,その外形,外部施設等についても,また台状塞との関連についても不明である。

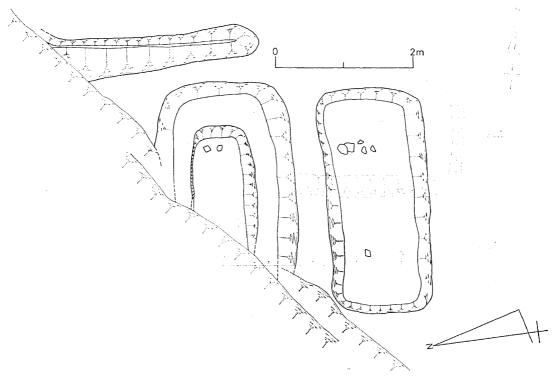
第1王璇

丘陵を削り取った崖面にその断面を露呈し発見された土壙である。尾根稜線に直交して、その長軸線は東10°南を指す。西半部を斜めに切り取られ、約½を残すのみである。長さは不明であるが巾 195cm、深さ 104cmの隅丸長方形の大形掘り方の中に棺を置き、棺側の高さまで精選された地山マサ土をもって埋め、何らかの葬送祭祀の後、さらに土壙埋土を行なう形式のものである。したがって発掘の際には、大型土壙の中間に、階段状の段をめぐらす形態を示し、二重掘り方となっていた。 用木第2号墳の中心主体の 埋葬施設ときわめて類似する。 棺側に埋められた マサ土内の土壙は、おそらく箱型に組まれた木棺の外法を示すものと思われる。長さは不明であるが、上端の巾94 cm、床面巾74cm、マサ土埋土高38cmを測る(図 114図版59)。

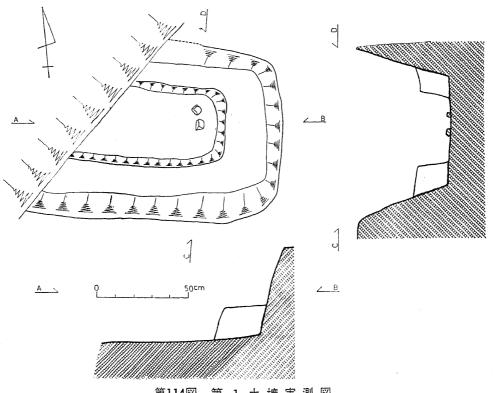
床面は水平な面を保ち、東小口部に枕石1対が置かれ、その周辺床面上に朱の広がりが認められた。その枕石は床面長軸中心線から若干北にずれている。また西小口切断面外法に枕石状の石材2個が検出され、東小口同様床上に朱の広がりが認められることから、あるいは本埋葬施設内に2遺体の複数埋葬の可能性も考えられる。

第2土塘

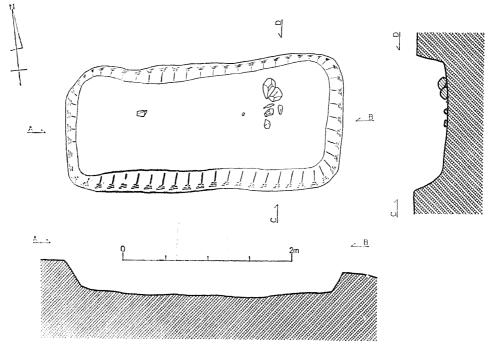
第1土壙の南に隣接して営なまれている土壙である。地山上面から直接掘り込まれた,長方形プランをもった大形土壙である。両土壙の間に残る堤状の地山上面の巾は22cmで,その長軸中心線の



第113図 第1・2土壙実測図



第114図 第 1 土 壙 実 測 図



第115図 第 2 土 壙 実 測 図

方位は東30°南を指す。掘り込み上面の長さ 328cm,巾 150cm,床面長さ 299cm,巾 106cm,地山上面からの深さ36cmを測る。床面はほぼ水平な面を保ち,掘り込みの断面は上広がりの台形を呈する。床面中心線上の東小口から70cmに枕石1対が置かれ,その周囲に僅かではあるが,朱の広がりが認められた。北枕石に接してその北側床面に鉄鏃1,枕石の西約23cmに勾玉1が検出される。この枕石の他に3個の石材が床面上に検出されたが、棺直上に置かれたものが転落した可能性の強い出土状況を示している。また枕石に対応する西小口壁より70cmに,枕石に用いられる大きさの石材1個が検出される。土壙の規模から考えて、複数埋葬の可能性も推定されるものの確証はない(図115図版60)。

第5節 出土 遺物

埋葬施設である土壙内に副葬された遺物は方形台状墓土壙検出の管玉1, 尾根上第2土壙出土の 鉄鏃および勾玉各1の計3点である。

他に台状墓土壙埋土中に検出された一括土器群および溝状遺構底検出の土器片多数である。

1. 副葬遺物

勾玉 (図 116)

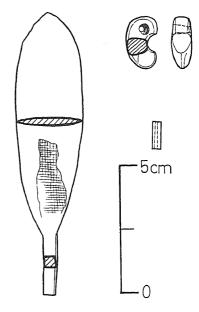
硬玉製の小形勾玉である。頭部のやや大きいC字形を呈し、研磨は精巧である。乳白色と薄緑色が斑文状に混じっている。全長2.02cm、巾1.25cm、器厚最大部 0.7cmを測る。貫孔は頭部中央に一方からなされ、上端径0.35cm、下端径 0.2cmである。孔の円周は糸ずれによる 磨粍痕が認められ

管玉 (図116)

乳青色の碧玉製の管玉である。長さ 1.1cm径0.35cmの, 細身小形のものである。貫孔は一方からのみ行なわれ,上 端径0.11cm,下端径 0.1cmを測る。

鉄鏃 (図116)

矢先部にややふくらみをもつ、楕円形の平根式鉄鏃である。銹化はしているが保存度は良好である。中央に鎬をもたず、その断面形はとつレンズ状を呈する。茎は角柱形を呈し、鏃部との移行は 段をもたず 自然である。 全長11.1 cm, 刃部長 8.6cm, 茎部長 2.5cm, 刃部最大巾2.75cm, 同最大厚 0.6cm, 茎部巾 0.6cm, 同厚 0.5cmを測る。鏃部から茎部にかけて、布目の圧痕が2cm程度認められ、もとは布に包んでの埋納が考えられる。



第116図 出土遺物玉類・鉄鏃

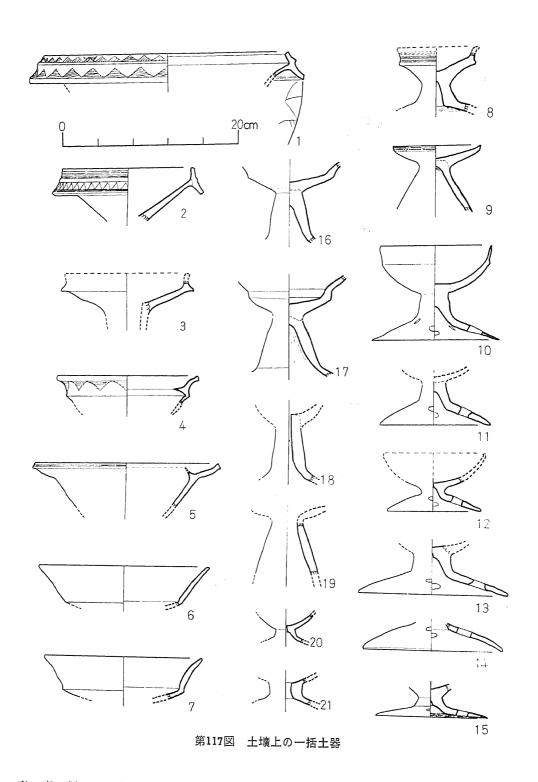
2. 土 器

方形台状塞頂土壙と,溝状遺構底に夫々一括破片として検出された土器片である。ともに時期的にはごく限られたもので,酒津式併行期のものにやや先行する特徴を示す。葬送祭祀に伴なうもののためか,高坏形土器が圧倒的多数を占める。いずれも小破片となり,接合による復元も困難のため,その明確な個体数は明らかでない。先に報告した便木山遺跡C溝の土器も,当然本溝状遺構に含まれるものであり,合せて検討し実測土器も再録した。分離可能なものを検討した個体数は別表に示すとおりである。若干は,便木山遺跡に伴なう土器片も混在する可能性もあるが,原則的には本台状墓に伴なうものと思われる。

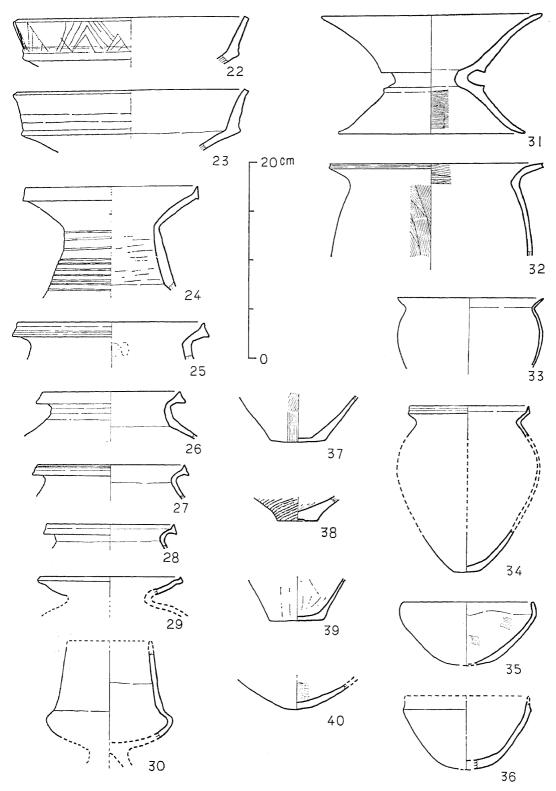
高坏形土器 (図124・125)

個体数は最も多く,葬送祭祀に伴なうためか器形も特殊なものを含み変化に富んでいる。 (10) に代表されるように, (6・7) の坏部に (13) の脚がつくものが大半を占める。 坏部外面の下半に稜線を有し, 脚台部に十字形に 4 個の円孔をもつ。 坏口縁部に沈線 (8・9) , 鋸歯文 (1・2・4) を施していたり, 蓋受けをもつもの (4・5) もあるが 出土例は少ない。 小形低脚高坏のなかに坏底部中央に, 焼成前に穿孔したものが 3 例 (18・20・21) 検出された。 胎土は比較的精選された粘土を用い, 若干の砂粒を含み, 焼成は良好である。 検出例のうち約%は丹を塗られていた。

壺 • 甕形土器



壺・甕の類は、量的には個体数は少ない。特に通常の壺は検出されなかった。 塾はくの字形の口縁部を、ややつまみ出して拡張されたものであるが、四線をもつものと、もたないものがある。四線をもつものについても、朦朧として明瞭でない。底部は原則的には平底であるが、中には丸底との中間的なものも含む。鉢は塊状の小形のもので、底部は丸底である。坩は直口のものが多く、脚



第118図 溝状遺構底の土器片

を有するのが通例のようである。

器台形土器

先の便木山遺跡報告の際に記載した鼓形器台(31)は、C溝内出土であるので、ここに一応再録した。南・西両溝状遺構の出合う南西角から、さらに南西方向に張り出したように掘られた、溝底よりの出土である。中央くびれ部の巾が狭く、稜線をもち上・下台とも高坏状に滑らかに外反している。器高12.2cm、上縁径22.6cm、くびれ部径 7.6cm、下縁径19.2cmを測る。脚部内面以外は平滑で丹塗りが施され、脚部内面は刷毛目による調整がなされている。赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土も精選されておりわずかに砂粒を含む。鼓形器台の編年観および出土状況から推して、前記一群の土器よりやや後出の二次的遺物と思われる。

ラッパ脚器台(19)および高坏状器台(3)は、いずれも一見して高坏と見られたが、ラッパ脚器台は柱状部、高坏状器台は坏部下底部の検討の結果摘出した。

2000年でである。 2010年でである。 2011年の中でである。 2012年である。 2013年である。 2013年である。 2013年である。 2013年であるが、 2013年で

付表11 弥生式土器片個体別分類

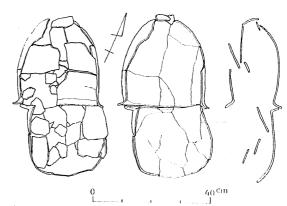
	高	J 	台付州	· ·	鈴木	鼓 形 器 台	高坏状器台	ラッパ脚器台
土壙内一括 溝 底 土 器 計	13 88 101	1 2 3	2 2	20	3	1	2 2	2

第6節 その他の遺構

今までにも何度かふれてきたが、本遺跡および周辺部に複合する、直接本遺跡と併存する時代の 異なる遺構が、数件検出されている。現状を略記してその責を果したい。

1. 壷 棺

方形台状墓の,西斜面北端の近くに営なまれた壺棺である。破砕され接合も困難であるが,器高約50cm内外のものである。基底部は,とつレンズ状にふくらんだ平底であるが,胴部との稜線は明瞭でなく,器表にたたき目を有する,口縁は打ち欠かれており不明であるが,便木山第6土器棺(K6)と類似し,酒津式併行期の所産と考え



第119図 土器棺K2出土状況

られる。

2. 合せ口甕棺

6世紀代の所産と思われる土師器甕で2個体を合せ口に利 用した土器棺である。台状墓の東南角の稜線付近に埋納(図 120) されたものが、より保存度が良好であったが、図(108) の地形図に×印でもって示したように、丘陵斜面に4か所確 認された。便本山遺跡K7の例と合せて, こうした墓制をも って、当地が墓域に設定された時期があったことを物語るも のである。

3. 須恵器

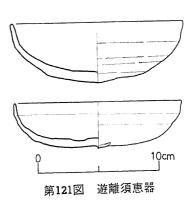
本遺跡の発掘に際して、須恵器片や完形の坏等が、表土層 内において数点検出された。東眼下の谷頭には古墳時代の集 落址も確認されており、それらとの関連が強いものと理解し たい。われわれの調査においては、遊離検出のみで、それに 伴なう遺構を確認できなかった。今次では図示できる2~3 の例を示すにとどめる(図121)。

-10cm

第120図 K2 土器棺

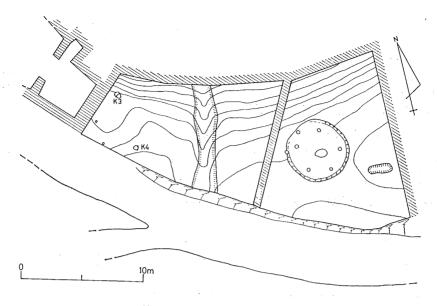
4. 土壙墓

便木山遺跡から, 東にのびる丘陵支脈尾根平坦部に検出さ れた土壙である。小口部が外ふくらみの長方形を呈し、尾根 に直交して地山に直接掘り込まれた土壙である。掘り込みの はじまる地山上面での長さ194cm, 同巾58cm, 床面の長さ181 cm, 同巾46cm, 掘り込みの深さ24cmを測る。床面はほぼ水平 な面を保ち、西小口部床面上に鎌倉時代に比定される、灯明 皿1点が検出された。また土壙中央に40cm×35cm×20cm程度 の,一かかえもある山石2個が,転落した状況で検出され注 目された。おそらく灯明皿に代表される時代の所産と考えら れるが、保存される便木山第3号墳と林道との間の、ごく限 られた面積での調査のため、具体的なことは一切不明である (図123, 125 図版60)。

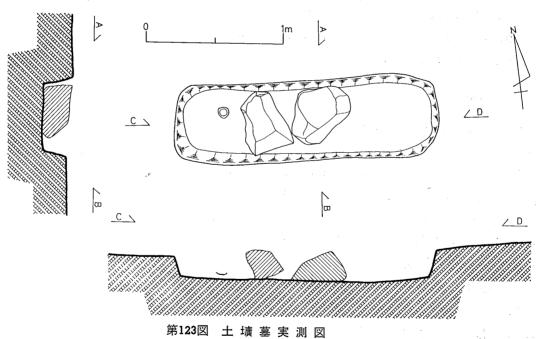


5. 竪穴式住居址

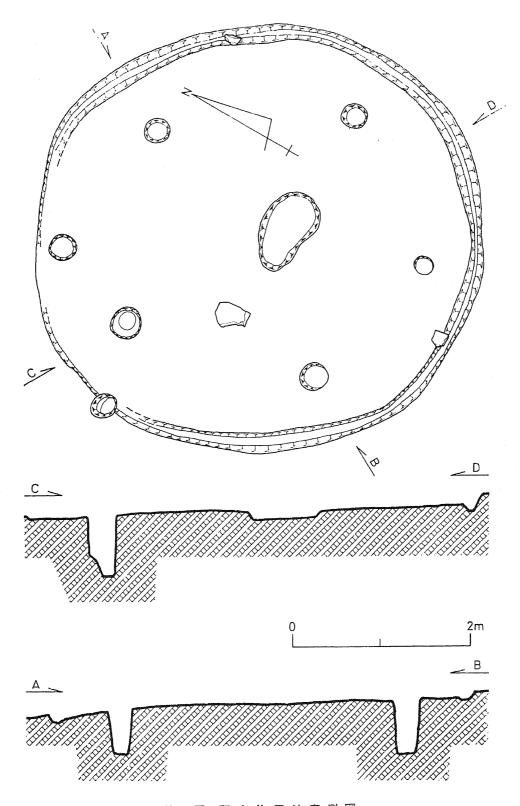
前記土壙と接して、尾根上において発見された竪穴式住居址である。壁部下半および床面の保存 度は良好であるが,丘陵頂のための土砂流失等により,掘り込みの上部は残されていない。現地表面



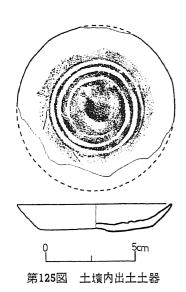
第122図 住居址周辺地形図

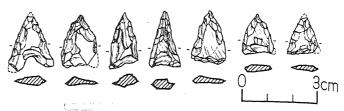


と床面の比高11cm, 地表面と地山生き土上面との比高5cmがそのことを物語る。径4.94mの円形竪 穴式住址居である。柱穴は7本検出されたが、基本的には5本柱の構造で,他の2本は,出入口の設 備に伴なうものと考えられる。中央にやや歪みをもつが、楕円形の穴を有する。壁帯溝がめぐらさ れているが、出入口設備と思われる柱穴間では途切れている。伴出土器が不明で年代を明確にでき ないが、サヌカイト製打製石鏃4を掘り方内より検出したこと、および眼下の用木池遺跡の集落址



第124図 竪穴住居址実測図





第126図 住居址出土石鏃

との関連から、弥生式時代後期の所産と推定する。本住居址についても、限られた小面積の発掘であるため、単発的な事例としてしか報告できない。本住宅団地内集落址調査の進行と合せて、後に稿を改めて報告したい(図 126図版61)。

第7節 ま と め

- 1. 本遺跡および周辺部は、中断期はあるものの弥生式時代住居址から後世墳墓まで、かなり長期にわたる複合遺跡である。今次は方形台状墓に焦点をしぼっての報告としたい。他の事項に関しては、いずれ稿を改めて、関連遺跡と合せて論求したいと考えるので、御了承賜わりたい。
- 2. 本遺跡は、丘陵尾根部を削平整地の後、粘質土を盛った一辺7m, 高さ30cm以上のほぼ正方形な方形台状墓である。地形の高い南尾根と、傾斜の緩い西斜面には溝を掘り、墳端に列石をめぐらしたものである。
- 3. 内部主体の形状は、調査の過程で現況保存が決定されたため、その全容は不明である。 浅い場所に設けられた1主体の調査では、長方形土壙に枕石を配した、2 遺体の埋葬である。
- 4. 主体内に充満する一括土器,および溝底出土の土器群の大部分は,ともにある一時期を限ったものである。土器の特徴から推察して,酒津式併行期に若干先行する,弥生式時代終末期の所産と考えられる。
- 5. 方形台状茎の北方約 3.5mに、尾根に直交する 2 土壙が並列して所在した。 しかしこれらの土 坊が、直接本方形台状墓に伴なうものかどうかは不明である。 第1 土壙の主体構造が、 用木古墳 群第 2 号墳の中央主体と酷似し注目された。

宮山古墳群第4号墳宮山方形台状墓

第1章	序	言	183
第2章	立.	地	183
第3章	宮山	古墳群第4号墳	183
第4章	宮山	方形台状墓	193
第5章	まと	<i>⊗</i>	204

宮山古墳群第4号墳·宮山方形台状墓

第1章 序 説

宮山古墳群第4号墳および宮山台状墓は、ともに同一立地に重なって複合する遺跡で、岡山県赤磐郡山陽町大字河本小字宮山 713番地に所在する。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう住宅団地造成工事のために、記録保存の対象となったものである。発掘調査は岡山県の委託を受けて、山陽町教育委員会が実施した。調査期間は、昭和46年12月8日から昭和46年12月31日、および昭和47年2月11日から昭和47年2月16日までの間、実質調査日数計23日である。

発掘調査終了後、昭和47年3月10日、造成工事によってその基盤である丘陵もろとも削平された。現在は住宅団地外周の道路敷となって、その姿を永久に消し去ったのである。

第2章 立 地

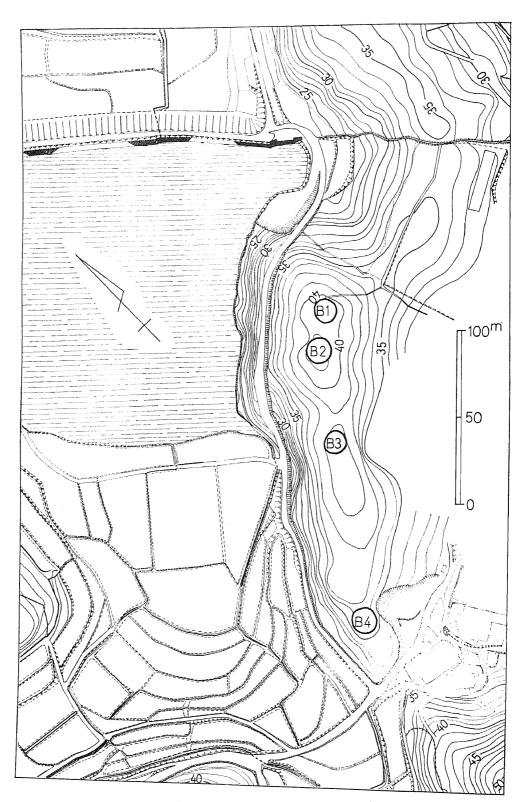
住宅団地造成予定地である 丘陵排の ほぼ中央部にあって、 標高92mと最高位でもある 用木山から、東に下降しながらのびる尾根支脈は、ふたたび隆起して標高66.9mの要宕山となる。 この愛宕山を分岐点としてさらに北北東に、滑らかなスロープをもってのびる低丘陵上に、本遺跡は立地するのである。

丘陵群の北東末端部にあたり、丘陵群の外縁となって、東に埋積平地、西に門前池を含む谷水田と、平地の中に細長く張り出している。また愛宕山から下降した尾根は、標高約28mで鞍部となって、ふたたびゆるやかに高まりをみせ、標高40mを最高位として本丘陵は形成されているが、その鞍部を深く割って農道がつけられているため、一見して独立丘の観すら呈するほどである(図127)。丘の尾根部はほぼ平坦な稜線となり、その規模は南北長約450m、東西巾約150m、麓の水田面との比高は約15m前後である。

丘全体が部落有の松林となって、その中央には氏神様である祗園神社が祭られている。最高位を 占める尾根稜線に宮山第1号墳が立地し、それから南西約200mの尾根上に、同第4号墳までの4 基の小形古墳が直列状に点在する。

調査対象となった宮山古墳群第4号墳は、これら古墳群の南西端にあたる、掘り割道の崖部に近く立地している。そこは標高約33m、谷水田面との平均比高僅かに10mと、さして高まりを持たないが、中池を含む奥行約500mの谷水田の正面谷口にあたり、また砂川流域に開けた埋積平地を一望する、視野の広い立地である。

第3章 宮山古墳群第4号墳



第127図 宮山周辺地形図

第1節 調査前の概況

本古墳は丘陵尾根平坦部の南突端部に位置する。古墳立地部の南約40mの鞍部は,深く掘り割られ,農道や用水路が施設されて切り通しとなり,高さ約5mの崖面となっていた。また古墳の立地する丘陵東斜面は,河本部落の共同採土場となり,丘陵そのものも大きく削り取られて,本古墳東墳裾にまでおよび,墳丘も約2mぐらいは掘り込まれ,高さ12mの絶壁状の崖面となっている。古墳墳丘を含めてその北部一帯は,祗園神社の宮山となり植生も松林である。

古墳の南墳端から南尾根平坦部および西斜面は、開畑されて果樹園となっていた。特に西斜面の畑は、一部古墳裾部を切り込んだ状態であった。したがって本古墳の外形は、後世の人手による作為により、かなり原形は損なわれていることが予想される。調査前の外観では、長径16m、短径12m、高さ約1.8mの尾根主軸に沿って、やや楕円状のプランをもった小円墳と理解した(図版62)。

調査に先立つ外形測量の際,等高線の乱れと,外表面の不自然な傾斜面が見受けられ気にかかった。地元作業員の談話によると,かつては当該丘も含めて開墾されていた時期もあり,子どもの頃には,もっと高まりをもった築山で,杉皮などを敷いて,その斜面をすべって遊んだ経験があるとのことである。それらの事柄を総合して考えると,本古墳はもとは,もっと高まりをもった古墳であったろうと推定されるのである。

外表観察の時点では、埴輪、葺石、周湟等の外部施設は感知できなかった。

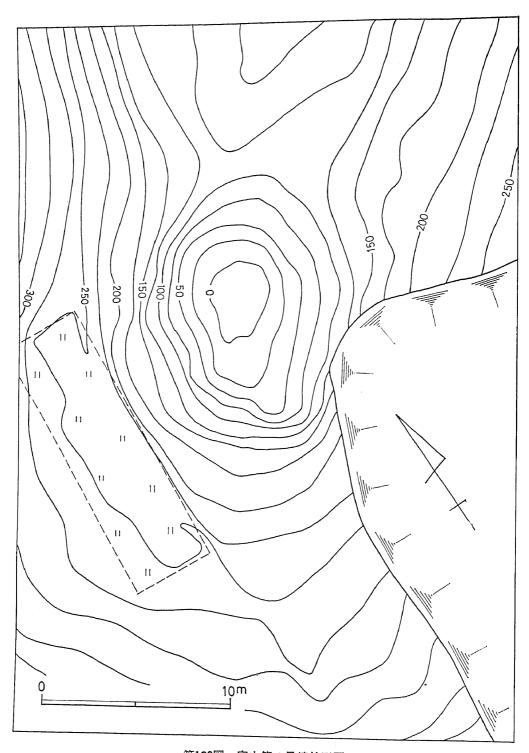
第2節 古墳の外形・外部施設

発掘調査の結果、本古墳は当初の円墳と予想したのと異なって、方墳であることがわかった。それは本古墳の北墳端部を、丘陵尾根に直交して、大きく掘り込まれた周湟状の溝遺構が検出され、古墳に面した墳端傾斜面一面に葺石が直線上に敷きつめられていたことによる。そしてさらに他方位の墳裾部の剝土調査によって、その基部が地山を削ってつくりだした方形プランを有することが確認されたのである(図128~130)。

しかし、後の方形台状茎の項でも述べるように、本古墳がこれに先行する方形台状茎の立地を利用して、その直上に重なって所在するため、こうした地山削平による方形プランは、直接本古墳に伴なうものでなく、台状墓基部の可能性もある。しかし葺石の形状、および葺石間に散見される埴輪片および須恵器片の特徴から、明らかにこの溝部の掘り込みは、本古墳に伴なうものである。以上の理由から、本古墳を方墳と認定したのである。

溝状遺構の底部および地山を削りだした基部をもとに、本古墳の規模を推測すると、尾根主軸に沿った南北長18.9m, それに直交する東西長 13.5mの長方形プラン をもった 方墳ということになる。墳頂部の形態および古墳の高さについては、原形を保たない可能性も強く、現状では不明である。溝底から現存墳頂までの比高 2.2mであることを記すにとどめる。

溝状遺構は、北側墳端部にのみ掘られていた。地形の高くなる北側にだけ意識的に設営し、墳丘の高まりとその幅員の巾をもたせたもののようである。尾根に直交して直線状に掘られた大きな溝である。尾根稜線上での巾 3.4 m, 長さ15 cm, その横断面は抛物線を呈し、現地山上面からの深さ



第128図 宮山第 4 号墳外形図

0.9m, 現地表からの深さ1.14mを測る。

葺石は、この溝状遺構の地山掘り込み面の古墳に面した 斜面にのみ集中的に検出された。石材はすべて付近の山で多く見られる 花崗岩の割り石で小はこぶし大から、大は20cm角程度まで、形状、大きさともにさまざまである。中に1個50cm×75cmの大きな石材があって注目された。 葺き方も、現況ではかなりの崩落も予想されるが、別にこれといった規則的な法則は見受けられない。 地山を削り込んだ部分全体に、ただ敷きつめた感じである。このように墳端尾根部を掘り込んだ、生き土面にだけ葺石を敷く手法は、東高月遺跡群では、用木古墳群 第1・3・5・11・12号墳でも知られそこに何らかの共通性をもつと思われる(図130図版64)。

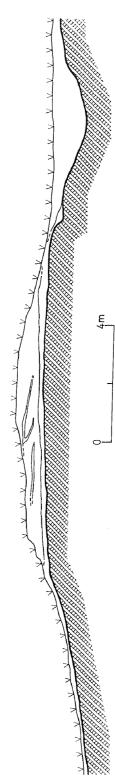
埴輪はすべて小破片となって、この溝状遺構の葺石の間に、転落遊離した状態で検出された。原位置を示す埴輪もなく、最も保存可能な溝底のみでの検出で、その大部分は破損消失している現状である。また接合による復元も不可能であるため、具体的な囲繞のあり方等については 不 明 で ある。発見された埴輪片の中に、通常の円筒埴輪の他に 家形埴輪片 が 含まれ、かなり原形を推察できる状態であり注目された。

さらにこの葺石および埴輪に混じって、葺石群中央部付近に、一括須恵器 片と、 須恵器坏が発見された。 そのうちの一括須恵器片は接合によって、 俵形の大形線が ほぼ原形に近く復元され注目された。 埴輪とともに転落し たとしても、 狭い範囲での一括土器片として 採集できる状況から推して、 そんなに高い所からの崩落とは考えられない。 墳端裾部から、 墳域に足を 踏みこまないで 置くことのできる、 手とどきの 範囲での 供献と 考えられ る。 このような例は、先の四辻古墳群第1号墳の須恵器、 用木古墳群第5 ・12号墳の土師器とともに、 当地域での古い伝統的な 供献の方法であるの かも知れない。

いずれにしても一辺19m×13.5mの小型方墳に、家型埴輪を含む埴輪の 囲繞および葺石の外表施設、須恵器の墳外供献は、本古墳の被葬者の性格 や、その築成年代を知るうえでの、大きな手がかりとなるものである。

第3節 埋葬施設

本古墳の埋葬施設である内部主体は、 細心の注意をもって 調査したにもかかわらず、 遂に検出することができなかった。 すでに盗掘されたのか、あるいは 墳丘封土の流失とともに消失してしまったのかも知れない。 また 私達の調査の不手際で 木棺直葬が行なわれていたものを、 見逃がしたのかも知れない。 とにかく検出することができなかったのである。 墳丘断面図に示したように、 墳中央からやや南に寄ったところの、 現墳頂表土下約24



第129図 墳丘断面図

Cmに、暗灰色の有機質土層がベース状に広がっていた。この有機質土層は厚さ10cm、長さ188cmでその上面はほぼ水平を保ち、あるいは木棺直葬の床面かとも推測されたが、横の広がりが不整形であり、弥生式土器片をもつ包含土層でもある。さらにこれと同質の不規則な層序がみられ、その可能性も極めて薄い現状である。断面観察によっても墳丘盛り土の層序が、部分的にかなりの乱れをみせていることから、本古墳の内部主体は、すでに盗掘破壊を受けていると考えるのが、妥当のようである。

第4節 出土遺物

本古墳出土の遺物は、北墳端溝底より出土の須恵器および家型埴輪を含む埴輪片のみである。

1. 須恵器

大型碌 (図131)

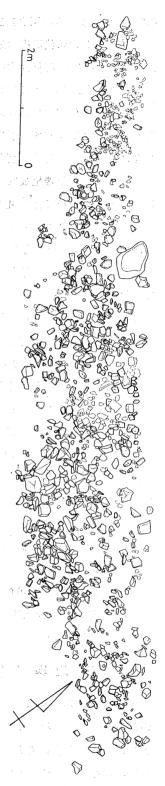
溝状遺構内葺石のほぼ中央部に、破砕片となって一括遊離していた ものである。約70片の小破片となっていたが、接合によってほぼ完形 に近く復元できた。

俗に俵壺と呼ばれているもので、陶邑古窯址群 T K 208-29に 酷似 (1) するものである。

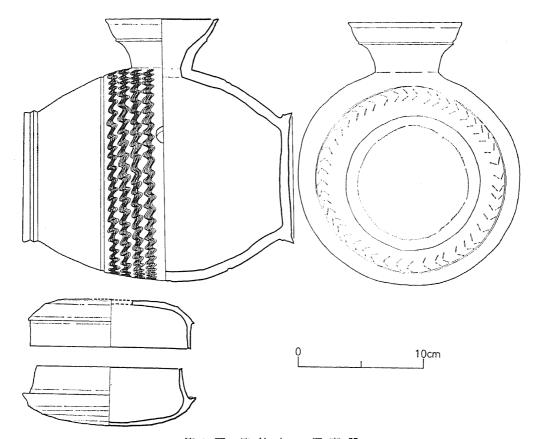
口頸部は一旦外湾したのち、段をつくって外上方へまっすぐのびる。口縁部はわずかにつまみだしているが、その上端はへら削りによって、平坦面をもちその端部は鋭い。体部はビール樽を横倒しにした形を呈し、体側中央部に円孔を1個もっている。体部中央には櫛描き波状紋を縦に帯状にめぐらしている。中央線から左右に各4条の波状紋で一単位の帯となし、その左右をそれぞれ1条の凹線によって区切っている。したがって体部は合計3条の凹線によって、4区に仕切られた形を示す。円孔を正面に向けて、右外区に、波状紋に用いたと思われる櫛状のもので、八の字状の文様帯が付され注目される。

体部の左右両側面は、厚さ0.7~0.8cmの円形粘土板を外側からはりつけ、体部と口頸部との接合は、体部上方に円形の穴を繰り抜いた中へ、口頸部をさし込んでつくられている。器壁内外面とも、なでによる調整が施されている。

色調は上半分は灰白色,下半部は青灰色,断面はやや赤味がかかる。胎土はわずかに砂粒を含み,まれに2~3㎜大のものも見られるが,きわめて精選された良質の粘土を用いている。焼成も良好であ



第130図 葺石出土状況図



第131図 墳外表の須恵器

る。

器高20.7cm,体部高16.7cm,体部長21.1cm,口縁径 8.9cm,接合部径4.75cm,両側端径10.6cmを測る。

坏1 (図131)

葦石の間に口縁部を上にして、完形で出土した須恵器坏である。

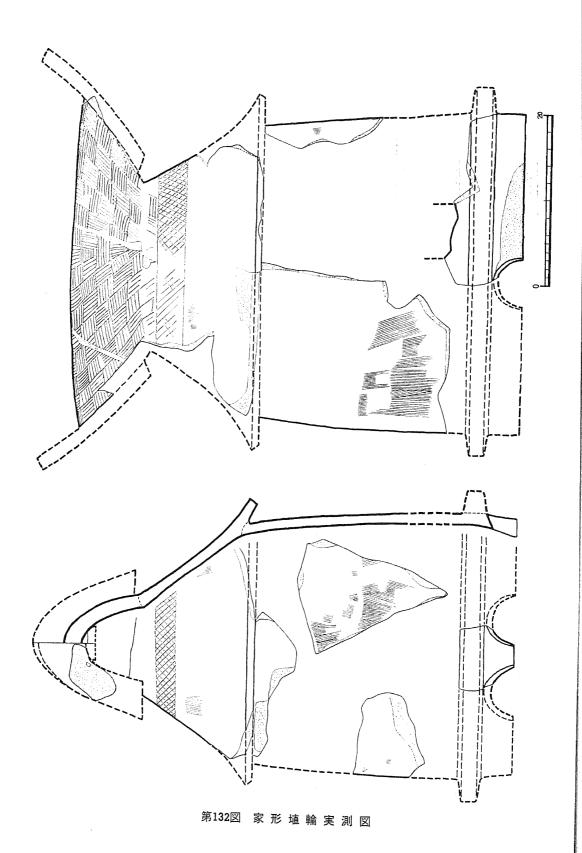
たちあがりはやや内傾して高さ 2.3cmと長い。端部は面となって鋭い稜線をもつ。受部は外上方へのびるが、比較的短かく先端は丸味をもっている。体底部は全体として扁平である。

色調は薄灰青色を呈し、胎土には小砂粒を若干含む。焼成は緻密で良好である。 たちあがりおよび器内面は、なでによる調整がなされ、特に内面底部は、原則的には横なで調整であるが、その上を不定方向へのなでが行なわれ平滑にされている。 体底部の調整は時計まわりのへら削りである。 底部全面にわたりていねいに削られている。

器高 4.6cm, 口縁径11.4cm, 受部径13.6cmを測る。

坏2

坏1とほぼ同じ地点に破片となって検出した。接合により約¼が復元でき、その大要を知ること



-190 -

ができた。出土の状況および器形の特徴から、坏1と対をなすものと考えられる口縁部のたちあがりは、ほぼ直立で2cmと高い。端部は面を有するが、中央がわずかに凹みをもつ。底面はほとんど平らに近い。底部と口縁部の境は段状に突出して鋭い稜をもつ。

色調,胎土,焼成,および調整手法とも坏1に大同小異である。器高 3.6cm,推定口縁部径12.6cmを測る。

2. 埴 輪

家形埴輪 (図132)

北墳端部の溝遺構内葺石の間に、破砕転落した形態で検出された。 古墳の長軸中心線付近約1.5m ぐらいの範囲に集中して発見された約 100片におよぶ器材埴輪である。 すでに欠損する部分が多く接合による復元も不可能であるが、胎土、焼成、形状、整形法等の特徴から、 これらの破片は同一個体の家形埴輪と思われる。部分的な接合復元からその大要を知り得た。

家形埴輪は、四柱式の屋根に切り妻の棟を載せた、入母屋造りの構造である。器壁は屋根部も含めて、厚さ1.8cm~2.0cmとほぼ統一された板づくりである。

壁体は、いずれの面も上にやや内傾したつくりである。器表に刷毛目による調整がなされているが、柱の施設や文様は施されていない。入口や窓の構造は不明であるが、破片の中に長方形に切り 抜かれた面をもつものがあり、それらの施設が設けられていたことは確実である。

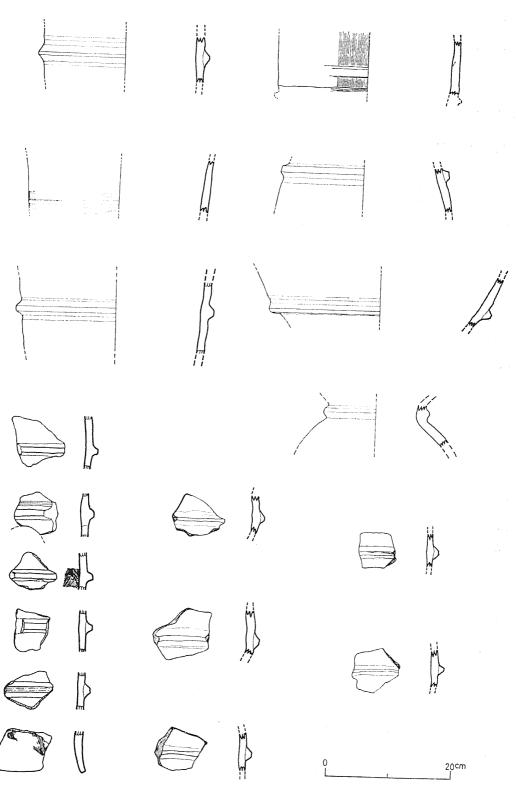
裾廻り台は、基底部から約 5.5cmの高さに水平面をもって、器壁四周にめぐらされていたらしい。破片の形状から推して、その断面形は背の高い台形を呈し、壁表面に突帯状に張りつけられたものである。張り出しの水平距離は平均4cm、厚さ 2.5cm~ 2.7cmである。裾廻り台の下方基底面に、半円形に切られた透し穴が設けられている。平部は中央に1個妻部は2個の計6個である。特に妻部の2穴間の裾廻り台部の高さで、器壁が水平に切られていることから、この部分に入口等の施設が施されていた可能性が強い。

壁体および裾廻り台とも、その四隅にあたる角部は、直線的な稜線をもたず、隅丸方形状を呈している。また壁全体も板造りとはいえ、縦横方向とも丸味をもった、やわらかい曲面をみせている。

四柱を示す屋根は、ややそりかえり気味となっている。平部で平均59度、妻部で平均56度ほどの 勾配をもっている。製作は壁体部と同様丸味をもった曲面の組み合せでつくられているが、四隅の 角は直線的な稜を明瞭にみせる。軒鼻部もこれといった特別の施設は認められない。壁部から軒先までの水平距離は平部で3.4cm、妻部で2.5cmである。屋根部も全面に刷毛目調整のあとを残すが、上方に巾約4cmの帯状に、斜行格子文様がへら描きで施されていた。

棟は切り妻である。逆台形の棟が四柱箱型の屋根に載るものである。棟部全体に網代葺きを示す 文様が、へら描きによって精巧に施されている。破風板は破片の特徴や、棟妻部端にその痕跡を残 すが、その全容は不明である。棟木の施設は存在しない。

全体として色調は褐色を呈し、焼成はほぼ平均した焼き上りである。胎土は精選された粘土が用いられているが、中に砂粒をかなり含む。器表全面に刷毛目が施され、壁体部では原則として縦方向へ走るが、屋根に近い上部では斜行したり不規則となる。点々と各部に赤色顔料の残痕が認めら



第133図 円筒埴輪実測図

れ、もと全体が赤く彩られていたことを示している。

推定値も含むが,全器高約58cm,棟高54cm,壁体平部巾37.5cm,同妻部巾31.4cm,屋根軒巾平部41.5cm,同妻部33.5cm,棟上端長39cm,壁高27cm,屋根高23.5cmを測る。

円筒埴輪 (図133)

家型埴輪と同様,溝遺構内の検出で,いずれも磨粍の著しい小破片である。40cm×75cm×9 cmの 整理箱4杯の採集であるが,原形を知る程のものはない。

破片の形状から、基底径18~20cm、口縁径32~33cm、器高45~50cm大程度の、器壁が直線的に外傾して立ちあがる形式のものが多い。たがは、断面形が台形となってかなり鋭い稜線をもち、3条程度めぐらされるものであろう。たがの間の胴部は縦方向への刷毛目が施され、貫孔は検出される限りでは、すべて円形である。

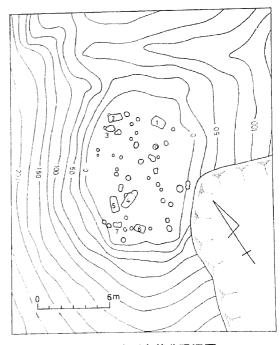
しかし、これら通常の円筒埴輪片の中に、上部で一度くびれて、口縁が朝顔状に大きく広がる式の、くびれ部片2、および口縁部片若干が検出された。したがって、本古墳の埴輪の囲繞は、原位置を保つものがないため、具体的にはわからないが、通常の円筒埴輪の他に若干数のB型円筒埴輪の樹立、および家型埴輪等の器材埴輪を有していたといえるのである。

第4章 宮山方形台状墓

第1節 発見とその状況

第4号墳の発掘調査の際,墳丘封土層および 溝状遺構の埋土中に,弥生式時代の土器片が遊 離散見され,古墳のほかに弥生式時代の遺跡と 複合するのではないかとの予測がもたれた。そ して調査の結果,第4号墳と全く同一立地に重 なって営造された,方形台状墓を検出したので ある(図134図版66)。

方形台状墓は、封土を盛って築成するのではなく、丘陵上の自然地形の高まりを利用して、削平整地してつくりだす手法によるものである。削りだしてつくられた現存地山生き土面での規模は、基部長18.5m×13.5m、台状平坦部長11.5m×7.4m、高さ約50cmを測る。立地基盤である尾根主軸に沿って長辺をもつ、長方形の方形台状を示す。そして、斜面四隅の角はかなり明瞭な稜線を残す。検出された各土壙は、



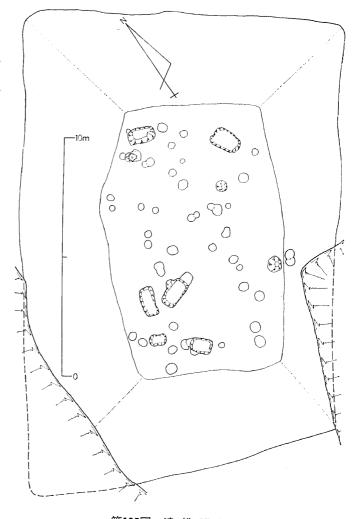
第134図 方形台状墓現況図

すべて地山を削平した平坦面上端から掘り込まれており、埋葬時における土壙に対する被土を考慮に入れると、本台状墓は今少し高さを増していたことが予想される。したがって本台状墓の原形は底辺長19m×13.5m、墳高約0.8m~1m程度の、截頭角錐形の台状墓が想定されるのである。

古状部平坦面には、その上面から直接掘り込まれた土壙墓7のほか、柱穴らしい掘り込み痕が48 検出された。これらの柱穴群は別にこれといった規則制もつかめず、互に切り合っていたり、径も 24cmから40cmまで、深さも12cmから45cmと、さまざまである。何回か同一立地を利用しての、建て 替えが繰り返えされた住居址と思われるが、床面らしきものも確認されず、具体的なことは不明で ある。台状墓周辺部に調査区を拡大して、丘陵上の表土層の全面剝土を試みたが、今回の調査が前 述もした掘り割り道路の拡巾部に限っての調査範囲で、面積的にもきわめて限られ、さらに当該地 が開墾されて、果樹園となっていることもあって、土器片の採集が若干できたのみで、遺構の確認 はできなかった。本丘陵の大部分が第1号墳〜第3号墳を含めて、自然緑地公園として現況保存さ れることでもあり、この丘陵立地を利用しての弥生式時代の集落址が、古墳と複合して広がる可能 性の強いことを指摘して、その責

を果したい。

台状部に営なまれた土塘墓のう ち, 第3土壙内の土器棺, および 第5土壙内の一括土器群はともに 弥生式時代後期初頭の, 当地域で の編年観からする上東Ⅰ式に比定 される単一時期のものである。そ してまた遊離する土器片は, 前記 上東Ⅰ式の土器も含むが、それを 逆のぼる弥生式時代中期中葉から 後半にかけての時期のものを多く 含むのである。すなわち, 図に示 した土器群で, 若干の菰池式併行 と思われるものから, 前山Ⅱ式, 上東I式への時期巾をもつのであ る。そこで大胆な推論が許される ならば,本遺跡は,弥生式時代中 期中葉から後半にかけての集落立 地を利用して,後期初頭の人達が ふたたび墓域に設定し, 営造した ものと考えられる。本台状墓築成 にあたって, 旧住居址の床面下ま で削り降ろして, 台状平坦面をつ



第135図 遺構配置図

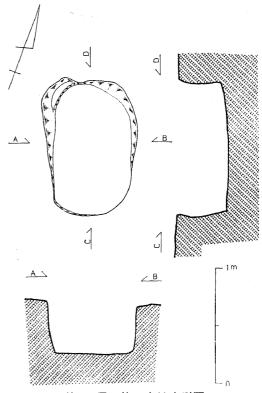
くりだしたものと解釈されるのである。したがって本遺跡立地は、弥生式時代中期集落址・同後期初頭方形台状茎・5世紀代方墳へと、同一立地に3回にわたっての複合といえるのである。

第2節 各土壙の素描

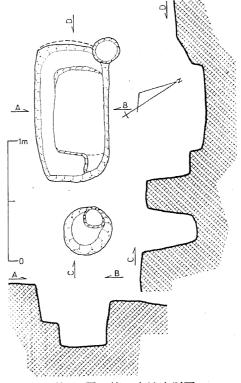
本台状墓平坦部に検出される土壙は、土器棺を 内蔵する もの も含めて計7である。当住宅団地造 成予定 地 内 で の, 現在までの土壙墓遺跡の例に比 らべて, その土壌規模も小さく,通常の大人であ れば、伸展では納まらない大きさである。当所は 柱穴群から想定される住居址に伴なう、貯蔵穴等 のピット群カ>と思えるほどであった。しかし第3 土壙内 土 器 棺 , 第 5 土塘内 一括土器群出土状況 を 便本山方形台状墓土壙との比較等から、土壙とし て扱ったのである。また各土壙の配置および方位 も、今までの例ほど規則制をもたない。台状平坦 部の中央には埋葬施設をもたず、その北端部に3 土壙, それ(こ対応する南西端に4土壙と2グルー プに分れた不規則な配置を示していた。本台状墓 に先行する四辻土壙墓群,また後出の便木山土壙 墓群が、 それでれ一定の規則制をもって、かなり 整然と埋葬が行なわれているにもかかわらず、本 土壙墓が 方形 台状墓上に土壙埋葬を行なうとい う,共通の埋葬様式をもちながら,土壙規模や配 置の点で大きな差異を示すことが、果して何を意 味するか, 今後の大きな課題となるものである。

第1土塘

台状平坦音Sの北東隅に尾根稜線と斜交して位置している。 地山削平上面から直接掘り込まれた,素掘りの小形土壙である。掘り方上面および床面ともに, やや歪みをもった隅丸長方形を呈し,掘り込みの角度は垂直に近い。土壙北西隅の壁中間に,巾7cm/ほどの段状部が検出され注目されたが意識的なものかどうかは不明である。床面は水平



第136図 第1土壙実測図

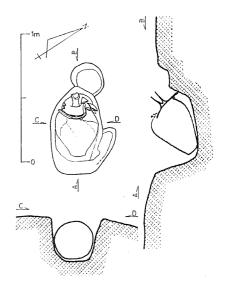


第137図 第2土壙実測図

な面を保ち、箱形の土壙である。長軸中心線の方位は北21°西を指す。掘り込みのはじまる上端での長さ116cm、 同巾76cm、 床面長 111cm、同巾60cm、深さは中央部で44cmを測る。通常長身の成人では伸展は困難で、成人の埋葬とすれば、横臥屈葬の可能性が強い(図 136)。

第2土塘

第1土城に対応する平坦部の北西偶にある。尾根主軸にやや斜交し、第1土城とは八の字形に立地する。長軸中心線の方位は、西22°北を指す。地山削平面から掘り込まれた、素掘りの小土漿である。掘り方および床面ともに隅丸長方形のプランを呈するが、北側壁部を除く3方向の壁部は床面上約10cm~18cmに、巾10cm程度の階段状の段を有し、二重掘り方となり、床面は水平につくられている。掘り方上端の長さ114cm、同巾61cm、床面長69cm、同巾42cm、掘り込みの深さは、平坦面肩部のため地形が若干傾斜して一定でないが、地形の高い東小口外法面から、段上部まで31cm、同床上まで51cmを測る。土 坡の北西隅を柱穴址と一部切り合っていた(図137)。



第138図 第3土壙実測図

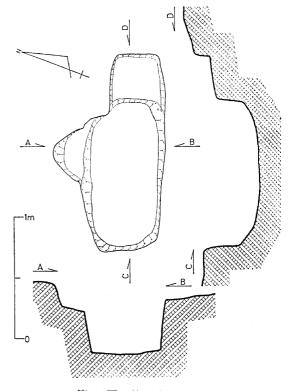
第3土塘

第2土壙西南隅に接するように、それと 平行して掘られた土器棺を内蔵する土壙で ある。西小口部で柱穴と切り合いをみせる が、甕と高坏を合せてセットにした土器棺 の形状に合せて、楕円形の小土壙が掘られ ていた。掘り込み上端の長径68cm、同短径 41cm、深き34cmを測る。長軸中心線の方位 は第2土壙と同じ西22°北を指す(図138)。

第4土塘

台状平坦面の西南偶に4土壙が集まって 営なまれている。いずれも素掘りの小土壙 である。方位等の規則制はない。

第4土壙は、それらの中では台状墓中心に最も近くに位置するが、中心点から西南約1mにその小口部をおく。やや歪みをもった隅丸長方形プランを呈し、北東小口部



第139図 第4土壙実測図

第7土塘

第5土壙の南約1mに位置する。あるいは柱穴2本の切り合いの跡で、土壙茎とはいえないかも知れないが、土器棺等の納まるだけの規模を有するので、一応土壙としてとりあげた。楕円形プランをもつ小土壙である。長径76cm、巾41cm、深さ29cmを測る(図 142)。

第3節 出土遺物

本遺跡の発掘調査によって発見された遺物は、すべて土器片のみである。本方形台状墓の築成年代を知る手がかりとなった、第3土 據の土器棺および第5土壙内の一括土器片と、第4号墳封土内および溝状遺構埋土中に遊離する、弥生式時代中期後半から後期初頭を中心とする土器片、さらに古墳および墳外表土層に散見された須恵器片がそれである。土器棺、一括土器、遊離土器片の順に記述を進めることとする。

第142図 第7土壙実測図

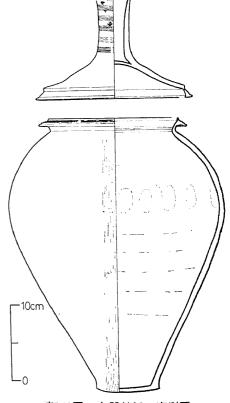
1. 土器棺

甕に高坏の坏部を蓋として用いた土器棺である。 両者とも土圧によって破片となっていたが、接合によって甕はほぼ完形に、高坏は脚柱部上半をほぼ原形に復元ができ、その大要を知り得た(図 143図版 68)。

2018年間は、やや肩の張った器胴に、口縁端の拡張されたくの字形の口縁をもつ。胴部の最大径はかなり上位にあるが、均整のとれた形状を保つ。

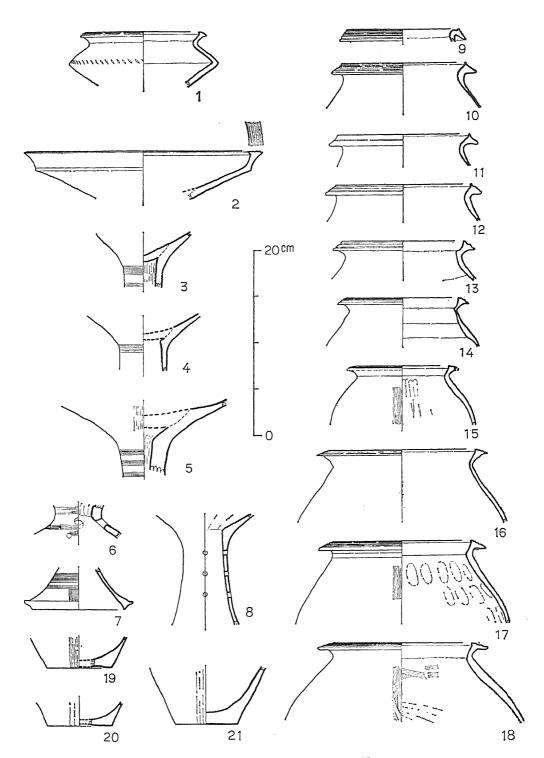
口縁部は横なでによる調整が施されているが、外面に3条、内面に1条の浅い凹線がはいる。 胴部外面は縦方向へのていねいなへら削りで整形している。 底部は一応平底であるが、幾分外ふくらみに凸レンズ状に張り出し安定が悪い。 へら磨きで調整されているが、底部から胴部へ、 へらの動きは連続しているようである。

色調は赤褐色を呈するが、底部から胴下半部にか



第143図 土器棺K1実測図

けて、部分的に黒斑が認められる。胎土に1 mm~3 mm大の細砂粒を多く含む。焼成は堅徴である。 器高42.5 cm, 口縁部外法径23.4 cm, 胴部最大径34.2 cm, 底部径 8.4 cm を測る。器形および調整の手 法に弥生式時代中期後半の特徴を多分に有するが、胎土、焼成の特徴は弥生式土器集成上東遺跡の 土器に類似する。後述の高坏形土器は、器形および整形手法ともに上東式に類似し、当地域での土



第144図 第 5 土 墳 一括 土器

計式の変化が高坏形土器において、より敏感なことを示す事例となるものである。

調整は脚部口縁は内外面とも横なで、坏部内面、脚柱部外面はへら磨き、脚柱部内面はへら削りである。色調は黄褐色を呈するが、脚柱部内面は赤褐色である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。器形の特徴から、いわゆる上東式と呼ばれるものの中では、古式に属するものに比定でるきと考える。

2. 土壙内一括土器

第5土壙の掘り方埋土中に一括出土の土器片である。いずれも破片となって接合による復元も不可能であるが、特徴等から個体分離可能のものを分類すると高坏9、甕10、台付壺2の計21個体以上となる。第144図に示したように、単一時期の所産と考えられる。色調、胎土、焼成、調整手法等、いずれも前記土器棺と大同小異である(図 144)。

高坏形土器は、土器棺利用のものと同一手法のものが多い(2・3・4・5)が、細部については若干の個体差をもつ。(2)の坏部口縁は、突出した稜線をもって外反するが、その端部の拡張面に4条の浅い凹線が施されている。脚柱部の櫛描き沈線文も、櫛の歯数や、文様帯の間隔や条数に差がみうけられる。脚台部(7)が1個体分検出されたが、あまり裾が広がらないもので、その端部が拡張されて稜線をもつ形態を示す。おそらく前述の(2・3・4)等と一形式になるものと思われる。また(6・8)のように脚柱部に小円孔を穿たれているものもあるが、その円孔の組み合せも、個体によって若干の差異がある。

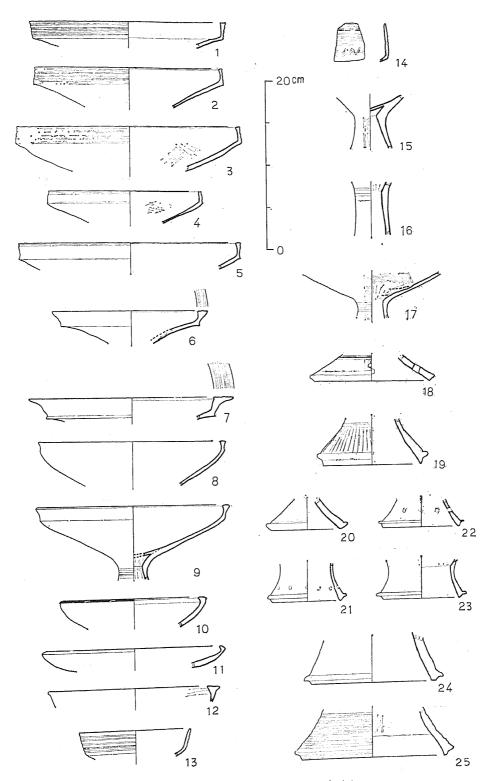
2015年2日本としてほぼ統一のとれた、形態を示す。細部については若干の個体差はあっても前述の土器棺と大同小異である。(15・17・18)のように、整形の後縦方向への刷毛目調整の施されたものや、18のように内面へら削りの上に横方向への刷毛目、15のように内面横方向へのへら削りの後、縦方向にへら削りを施し、その両者の痕跡をともに残すものもある。底部は平底である。

壺は小形台付壺と思われるが、上半部のみしか確認できない。扁平なつくりで、胴最大径部に刺 突による文様帯をもつ。

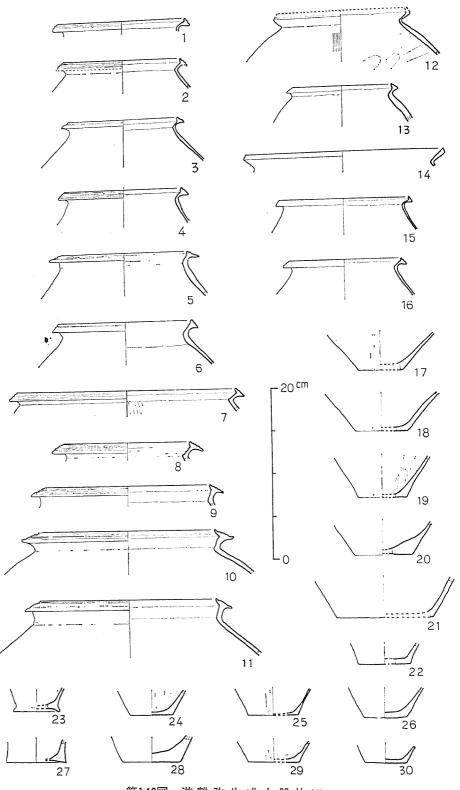
3. 遊離弥生式土器片

古墳封土内等に遊離した土器片は、前記土壙内の土器棺や一括土器片にくらべて、かなりの時代 力をもつ。弥生式時代中期中葉から後半、および本台状墓に伴なう弥生式時代後期初頭に至るまで の特徴を示す土器片を含むのである。柱穴群の存在から想起される、台状墓に先行する集落址に伴 なうものを含むものと推定される(図 145~ 147)。

形式変化に敏感な高坏についてみても、当地方でいわれる前山Ⅱ式(中期中葉〜後半)に比定さ



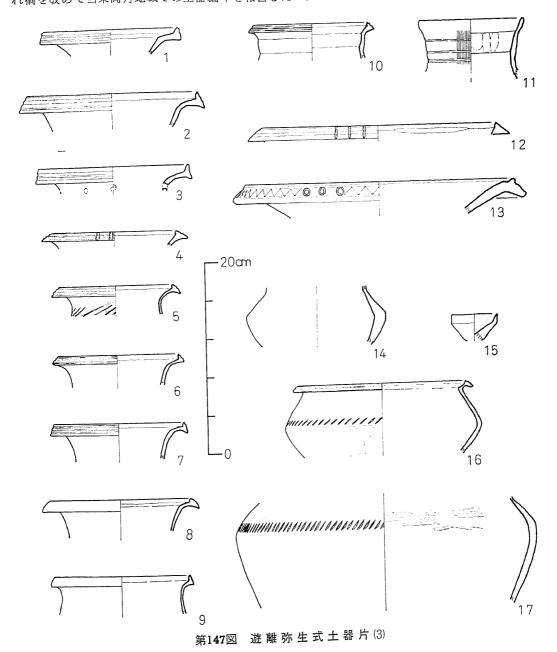
第145図 遊離弥生式土器片(1)



第146図 遊離弥生式土器片(2)

れる第145~147図10・11・および1・2・3の直立する口縁部に凹線をもつものから、中期終末の 仁伍式に比定される4・5、そして後期初頭の上東I式併行の6・7と、それぞれの時期の土器を 含み、継続的な立地の形態を示す。台状墓平坦面上の約90㎡の狭い範囲に48柱穴と密な分布を示し 数度の同一立地での建て替えが想像される、集落址のあり方を裏付けるものと思われるのである。

これらの土器片はいずれも小片となり、器表も磨耗が著しく細部の観察も十分できない状態である。一応実測可能のものを第145図~第147図に図示した。四辻土漿群出土土器と比検されたい。現在発掘調査中の用木山遺跡の調査で、かなりのまとまった一括土器の検出がされているので、いずれ稿を改めて当東高月地域での土器編年を報告したい。



— 203 **—**

4. 遊離石鏃

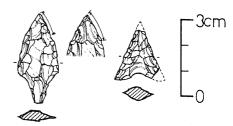
古墳および台状嘉発掘中に遊離検出した 石鏃である。サスカイト製打製のもので、 原則的には二等辺三角形を呈し、本東高月 丘陵の弥生式中期~後期初頭の集落遺跡に 多くみられる種類である(図148)。

5. 遊離須恵器片

本古墳周辺部表採および表土層内遊離土器片中に, 若干の須恵器片が散見採取された。遺構との関係は不 明である。実測可能のものを第149図に一応図示するに とどめたい。第4号墳に伴なう時期のものも含むが, 大半は奈良,平安期に降るものである(図149)。

付表12 弥生式土器片個体別分類

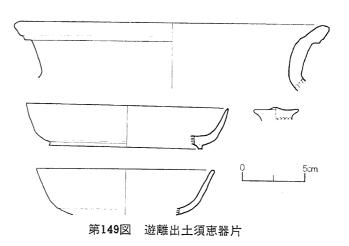
	高坏	畫	111	M	器台	粗小土器
第2土壙土器棺	1			. 1		
第5 土坡一括	9		2	10		
遊離出土	17	11	2	34	4	1
∄ •	27	11	4	45	4	1



第148図 遊離出土石鏃

第5章 ま と め

1. 本遺跡は丘陵群の外周端にあたる,谷水田との比高わずかに15mと低小な舌状丘陵尾根に立地する。同一立地に弥生式時代中期後半を中心とした集落,弥生式時代後期初頭の方形台状墓,5世紀代方墳,奈良・平安時代遺跡と四回以上にわたる複合遺跡である。ここでは方形台状墓および方墳に焦点をしぼって,まとめとしたい。



2. 方形台状墓は丘陵尾根の高まり

を利用して、地山を整形削平してつくりだされた長辺18.5m, 短辺13.5m, 高さ約1 m前後の長方形プランをもつ。

- 3. 埋葬施設は、土器棺を内蔵するもの1を含む計7の土壙墓である。いずれも長方形に直接地山に掘り込まれた素掘りのものであるが、長径で1.20m以下と小規模のものである。また配置についても不規則であり、先に報告した四辻土壙墓群、便木山方形台状墓等と比較して、特異の形態を示す。
- . 本台状墓の築成の時期は,第3土壙の土器棺,第5土壙一括土器の特徴から,弥生式時代後期 初頭(上東第1様式併行)の時期の所産と考えられる。

- 5. 古 墳 は方形台状墓の高まりをそのまま利用して、 そ の直上にさらに封土を盛りたして築成された19 m×14m,高さ約2 m前後の方 墳 で ある。
- 6. 内 音R主体の検出はできなかったが、葺石埴輪 および 須恵器等の特徴から、前期古墳(5世紀 中葉~後半)の所産と考えられる。
- 7. 吉 備 地方における5世紀代の小形古墳において も , 器材埴輪を含む葬送の例を,四 辻 5 号 墳 , 岩 田 3 号墳に次いで加えることができた。また 墳 端にのみ葺かれる葺石の間に,墳端外法

付表13 宮山方形台状墓土壙計測値

土坡	掘りフ	5上面	床	ىد ئالان	
番号	長さ	ıþ	長さ	t ı	深さ
1	cm 11.6			60 60	cm 44
2	114	61	69	42	43
3	68	41	.1. 4		34
4	162	66	117	56	14
5	112	53	111	45	32
6	81	59	73	52	33
7	76	41	63	27	29

から供献された形での、古式須恵器の検出例として、四辻1号墳の高坏とともに注目されるものである。

註

(1) 平安学園考古学クラブ「陶邑古窯址群 I 」1966年

さくら山方形台状墓

第1節	はじめに	207
第2節	立地と概況	207
第3節	方形台状墓	210
第4節	埋葬施設	212
第5節	出土遺物	215
第6節	まとめ	215

さくら山方形台状墓

第1節 はじめに

さくら山方形台状墓(略記号 E 10)は,岡山県赤磐郡山陽町大字河本小字石井谷 124番地に所在する。この遺跡は事前の分布調査の時点では確認できなかった。岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう住宅団地造成工事の進捗中に発見されたものである。当該地は,標高81mの丘陵頂平坦部にあたるが,重機械によって丘陵頂を削平工事中に,弥生式土器を含む暗灰色有機質土層が発見され,その遺跡の存在を知り得たのである。

遺跡発見に伴ない,直ちに造成工事を中断して,岡山県土木部および岡山県教育委員会に報告,その取り扱いについて協議が繰り返された結果,記録保存の処置がとられることとなった。発掘調査は岡山県の委託を受けて,山陽町教育委員会が実施した。調査期間は,昭和47年5月1日~昭和47年6月30日である。

調査の結果,当該地は弥生式時代中期後半を中心とした集落遺跡と,本方形台状墓が複合して存在し,集落遺跡の範囲はさらに丘陵尾根延長線に沿って,東南方向に広がることが判明した。しかし今回の調査は,不時発見に伴なう緊急発掘でもあり,造成工事の工区および工期等の関係から,当面の必要面積約1500㎡のみに終った。したがって集落遺跡に関する報告は,今後行なわれる拡大区の調査と合せて,稿を改めて報告することとして,今回は本報告集に集録する台状墓との関連において,方形台状墓のみを摘出して報告することとした。なおこの遺跡は調査終了後の昭和47年9月10日,工事は再開され消滅したのである。

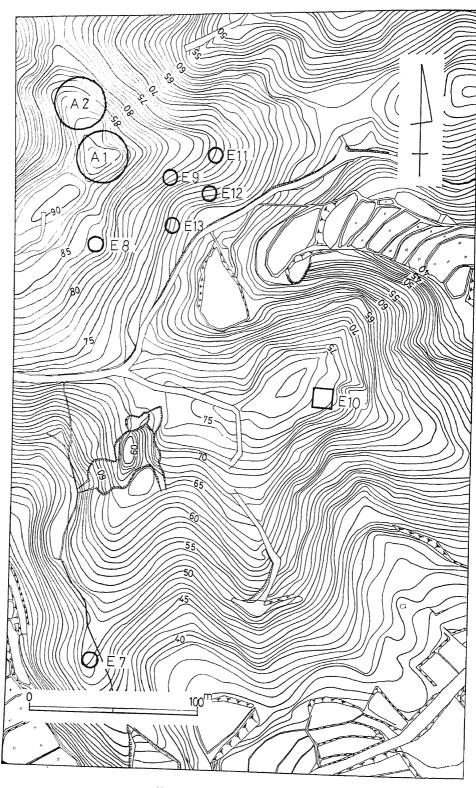
第2節 立地と概況

住宅団地造成予定地内のほぼ中央部に、東高月丘陵群中最高位であり、用木古墳群第1号墳の立地する標高92mの用木山がある。この用木山を起点として東南方向に下降してのびる丘陵支脈は、標高約77m付近で下降傾斜を止め、ふたたび高まりをみせて、その東に標高81mの丘頂平坦部を形成している。平坦部は横巾約25m、長さ約80mの削平面となり、調査前の時点では白桃を栽培する果樹園であった(図 150)。

旧地権者および村人の話によると、当地は江戸時代末頃まではさくら様と呼ばれる神社が建立されており、その境内として 削平整地がなされて いたとのことである。 その後は 松林となっていたが、昭和25年頃ふたたび開かれて果樹園となったのだそうである。 そして村人の伝説として当地にもと古墳があったとも語り継がれている地でもある。

造成工事に先き立つ分布調査の際には、それらのことを考慮に入れて、当該地の踏査には特に留意したが、遺構を確認することができなかったのである。したがって造成工事の際に要注意地域としてチェックし、その進捗に伴なって遺物包含層を検出し発見となったのである。

当初古墳の残骸が存在する可能性があるとしてマークしていたが、包含層の検出を契機として、 その遺跡の性格は集落址の可能性が強まった。削平面下および、丘陵斜面肩部一帯に、竪穴住居址

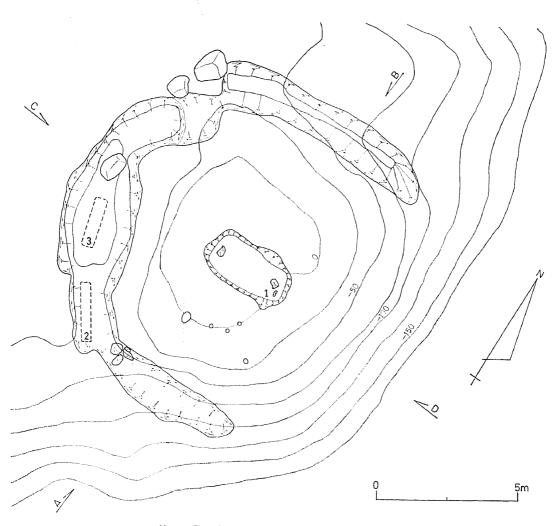


第150図 周 辺 地 形 図

10戸およびピット状遺構 7 を検出し、さらに遺跡範囲は南東方向尾根末端まで、広がることが確認されたのである。同時にまた、丘陵頂尾根平坦部の東突端に、コの字形に三方に周湟状に溝状遺構を有する方形台状墓の基部が、現存平坦面の地下に残存することが確認され、村人の伝承の正確さを裏付けられたのである。

方形台状墓は、神社境内の削平整地の際にすでにその上方の高まりは削りとられ、現状では周湟状の溝遺構の掘り込みと、台状墓の基部および内部主体の一部残骸を残すのみであったが、その形態と規模についての大要は知ることができた。

東眼下の高月平地に向って張り出した、丘陵頂平坦部の突端、下降傾斜のはじまる肩部に立地して眺望視野は広い。平地との比高は約60mである。 先に述べた用木古墳第1号墳 および第2号墳は、谷頭一つへだて西北方約 180mの指呼の間に存在する。また本遺跡南方約 100mの同丘陵尾根上には、横穴式石室を内蔵する円墳岩田古墳群第1号墳が立地しているのである。

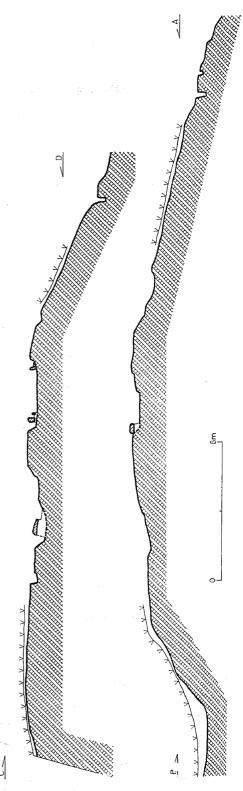


第151図 方 形 台 状 墓 現 状 図

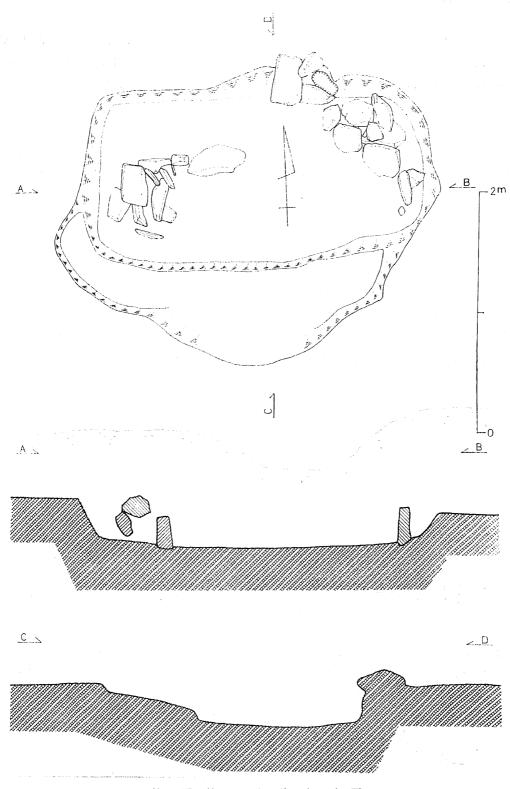
第3節 方形台状墓

神社境内として削平整地され、さらにその後に 開墾が行なわれ原地形は大きく損なわれ原形を全 くとどめていない。いわゆる地下に残る部分につ いての確認である。上部構造のようすについては 知ることができないけれども、基部についての遺 存は良好で、その大要は知ることができる。丘陵 頂平坦部の東突端に立地するためか, 地形の高い 西墳端および南北墳端に, 溝を掘って墓域を画し たものである。地形の低くなる東墳端部には溝は 存在しない。 溝は現存地山削平上面で巾 1.5m~ 2m, 深さ 0.5m~ 0.8mを測りコの字形に整然 と掘られている。溝の横断面は上向きの抛物線状 を呈し, その底面中心線は, ほぼ水平を保つ。し たがって南および北溝の東端は、地形の低まる尾 根斜面となるため、溝底と等しい高位でもって自 然に消滅する。この溝の遺存は本遺跡の墳形を知 るうえでの大きな手がかりとなった。西溝は丘陵 尾根主軸に直交して掘られ,南北両溝はそれに直 角である。したがって本台状墓は丘陵主軸の方位 に規制されて構築されたものとも考えるが、南北 中心線の方位もまた真北を指すのである。溝中心 からの一辺の長さは10.7m,掘り込みの始まる現 存地山上面からの内法長 9.3mを測る。本遺跡の 原形は一辺約 9.5m前後の正方形 プランを有す る, 方形台状茎で あったと 推定し 得るのである (図 151図版69)。

哲端三方面に溝を有することから、本遺跡の原形を、最近多くの報告例にみられる方形周湟墓とする考えも成り立つが、後に述べる埋葬施設の出土状況から、方形基部はもとはある程度の高まりを有していたことが推定され、また本丘陵群中の墓制の多くが台状墓の形態を示すことから、方形台状墓としたのである。



第152図 方形台状墓断面図



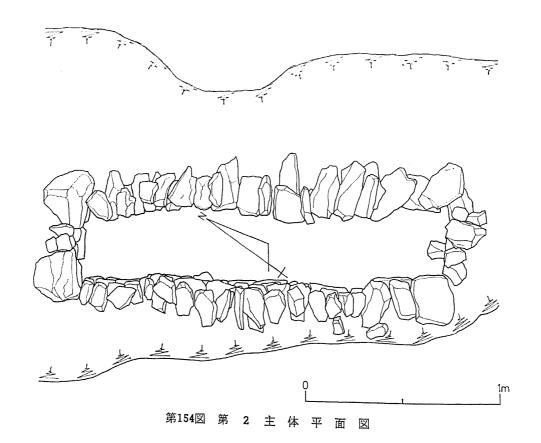
第153図 第 1 主 体 実 測 図

第4節 埋葬施設

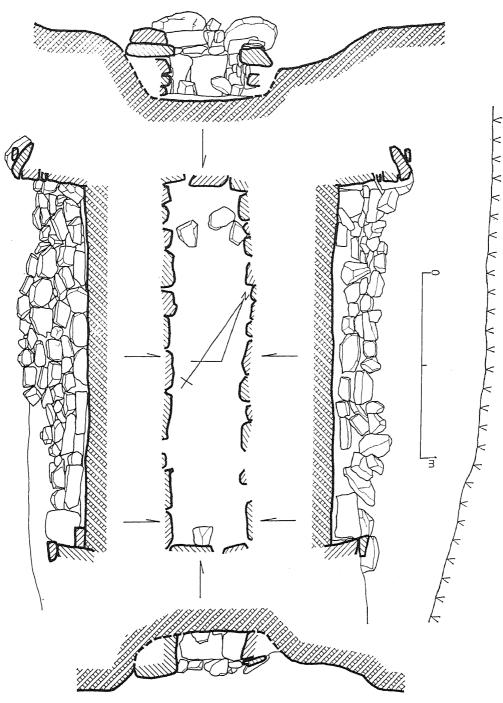
本方形台状墓の埋葬施設は、3主体を確認した。台状墓中心部に1主体、西溝底中心部に直列状に並らぶ2主体がそれである。いずれも原形をとどめないくらいに破損されているが、付近に産する花崗岩の転石を用いて構築された長さ2m前後の小竪穴式石室(棺)である。

第1主体

方形台状部のほぼ中央部に、地山削平上面から掘り込んだ土壙があり、その中に山石で組まれた小石棺が 管造されている。 台状部上面がすでに 削平されているため、 原形を知ることはできないが、現状の掘り方プランは地山上面長 291cm、 同中 150cm、 深さ平均35cm、 底面長 268cm、 同中 136cmの関丸長方形の浅い土壙である。 その中にもとは箱形石棺が組まれていたと思われるが、 調査時にはすでに原形をとどめないまでに破損されており、土壙内に25個の石材が散乱していたのみである。これらの石材はいずれも付近の山塊に産出する花崗岩の転石で、25×35×15cm程度の板状のものが用いられている。 原位置を保つものと考えられる石材 2~3 個から想定すると、これらの石材で被葬者を身展して納められる程度の、箱形にたて並らべる形式の内部主体を推定される。 棺の推定内法長は 182cm、 巾33~35cmと思われる。 本主体の長軸中心線は 方形台状墓の 方位と一致し、東西を示す。 副葬遺物は何も検出されなかった(図153図 版70)。



-212-



第155図 第 2 主 体 側 面 図

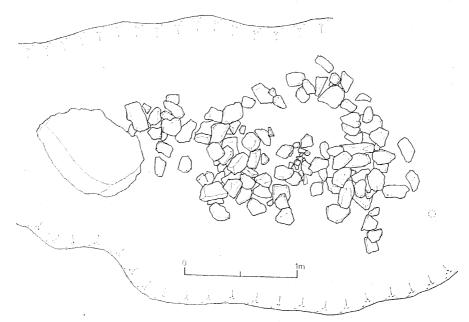
西溝状遺構成長軸中心線上に、2つの主体が直列状に接して組まれていたらしい。南側にあった第2主体は、側壁部はほぼ原形を保って検出されたが、北の第3主体はすでに破壊されその石材が、溝状遺構内全体に散乱状態となって検出された。そのため調査当初は、葦石かと錯覚するほどであった。

第2主体は溝底に長き 240cm, 巾80cm, 深き平均18cm程度の浅い長方形の土壙を掘り, その中に 児頭大程度の山礫を小口積みにした,小竪穴式石室(棺)を組んだものである。石材は付近の山塊に 多くみられる花崗岩の風化転石が用いられ,床面内法長 192cm,巾35cm,現存側壁高38cmを測る。 床面北小口部に枕石1対を有する他は,主体内施設は不明である。蓋を含めての上部構造について も,現時点では不明である。第3主体の撹乱石材中に63cm×100cm大の扁平な石材1が検出され, もとはこの程度の石材を用いて並らべた天井石が施されていたことが予想される。石室長軸中心線 の方位は北35°西を指す(図 154・ 155図版71)。

第3主体

第2主体の項で 述べたように、 溝埋土中に撹乱投棄された形状の 山礫が多数検出された。 当初は、第1主体あるいは第2主体の破壊の際の所産とも考えられたが、北に向かって掘り込まれた長方形土壙が確認され、第2主体とほぼ同巧同大の内部主体が存在したことが推察されたのである。 しかし、本主体石材はすべてが動かされ、原位置を保つものは 皆無であった。 土壌の規模は長さ203cm、 巾82cm、深き平均12cmを測り、その長軸中心線の方位は、北32° 西を指す。

第2主体と第3主体のちょうど中間付近、溝底面から約6cm程浮いた地点に、碧玉製管玉2と,



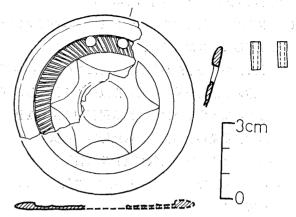
第156図 第3主体石材出土状況

小形内行花文鏡1面が遊離検出された。棺内副葬品であるのかどうか、両主体のいずれに伴なうも、のかも不明である。強いていうならば、第3主体に対する供献の可能性が強いように思われるものである。

第5節 出土遺物

小型内行花文鏡(図 157)

第2主体と第3主体の中間, 溝底遊離出土のものである。破砕しているが小破片を集めるとほぼ一個体分が, 小範囲内において採取された。したがって副葬された時点では完形品であったと思われる。面径7.15 cmを測り, 平縁一斜行櫛歯文帯一内行6花文帯一鈕の背文構成をとる。鈕は当初から破損していたらしく, 櫛歯文帯内に2孔が



第157図 出土遺物鏡・管玉

穿たれている。貫孔は鋳後に行なわれ径 4.4mm, 孔中心間の距離は 1.2cmである。孔縁に紐がかけられていたと考えられる磨粍痕跡を残す。斜行櫛歯文は手描きによるものか, その斜行角度, 間隔ともに一定でなく粗密の乱れをみせる。また花文も同様で大小の差をもつ。鏡面部に赤色顔料の付着が認められた。本東高月遺跡群出土の銅鏡のうち, 用木古墳群第2号墳第1主体, 第3主体出土の鏡も, ともに鈕が鋳崩れており, 本台状墓出土の鏡とともに注目されるものである。

管 玉 (図157)

小形内行花文鏡の周辺に、これまた遊離出土の細身の管玉2である。いずれも碧玉製で、乳青色を呈する。径はいずれも 0.4cm, 器高は 1.1cmと 1.0cmを測る。貫孔は両者ともに一方からなされている。小口肩部は使用による磨滅によるものか、その稜線は丸味をみせている。

第6節 ま と め

- 1. 標高81m, 眼下の埋積平地との比高約60mの, 眺望視野の広い丘陵頂突端肩部に営造された, 小形方形台状幕である。
- 2. 当該地が神社境内,果樹園と数次にわたり削平され,原形をとどめないにもかかわらず,溝状 遺構および台状墓基部が現存地表下に遺存し,その大要を知ることのできたものである。
- 3. 台状墓の構成は、地形の高い3方向にコの字形の溝を掘り、自然地形の高まりを利用して削りだした、方形台状墓である。 台状墓規模は一辺約 9.5mの正方形、 溝は巾約 1.5m、 深さ約80 cm、横断面抛物線を示すものである。
- 4. 内部主体は、台状部1、西溝底2の計3主体である。すでに盗掘破壊されていたが、付近産出の山礫を用いて組まれた、成人伸展葬棺大の小形竪穴式石室である。いずれも長方形の浅い土壙を掘り、その中に組まれていた。

- 5. 副葬遺物は、すでに破壊された遺構のため、原位置での検出はできなかったが、鏡1、管玉2を検出した。特に鏡は、小形仿製の斜行櫛歯文内行花文鏡で、本遺跡の性格および年代を知る、大きな手がかりとなるものである。
- 6. 本遺跡の年代を知る手がかりは、きわめて少ない。弥生式時代集落址と複合していたり、すで に破壊しているためその推定は因難である。

小形仿製鏡を手がかりとして考えるならば、東高月遺跡群においては、用木古墳群第2号墳第3主体の小形仿製鏡は、尚方作獣帯鏡を伴出した同第1号墳に先行する。また同様小形仿製鏡を出した、便木山遺跡は、酒津式併行期の土器を伴なう土壙墓群である。

方形台状墓の検出例は、四辻峠方形台状墓(弥生式中期後半)、宮山方形台状墓(弥生式後期初頭)、便木山方形台状墓(弥生式後期終末)、そして用木古墳群第12号墳(王泊6層併行)へと、当地域内では伝統的に継続する墓制である。そして引き続いて定形化された古墳へと発展するのである。

このように考えると、本方形台状墓の築成期は、大胆な予測が許されるとすれば、当地域における定形化される古墳の出現される直前ぐらいの所産と考えられるのである。

7. 吉備地方における周煌状の溝遺構を有する、方形台状墓の事例を増すことができたのである。

あとがきにかえて

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業に伴なう住宅団地造成予定地内の埋蔵文化財発掘調査概報第3集を、遅ればせながらやっと刊行する運びとなった。工事工程による時間的な制約と、調査体制の不備と相まって、必ずしも十分な発掘調査であったとはいい難い。また息つくひまもなく、継続的に次から次へと調査にかかり、発掘調査遺跡の提起する諸問題について、検討および論及する間もない状況である。

調査概報も回数を重ねるにつれて、そのもつ意義について考えさせられることも多い。「記録保存」のための行政発掘であってみれば、この記録は、発掘調査遺跡の生命である。その事実を細大もらさず正確に記録保存をしなくてはならない。しかし現実にはその遺跡個々に割り当てられた、調査員の個人的力量の限界もさることながら、時間的予算的諸制約によって、十分な記録の公表ができないのである。調査概報といえども、生きた資料として活用に堪えることのできるものでなくてはならない。したがって今回の調査概報は、論考はさておき事実報告に重点をおいて、具体的かつ詳細な記述に心がけたつもりである。そして調査中における試行錯誤も、本文中に記載した。そのため本書のスペースは膨張し、当初の予算計画はオーバーしてしまったのである。その点を快よく理解いただき、その裏付けをしてくださった、岡山県土木部に感謝の意を表す次第である。

住宅団地造成予定地である東高月遺跡群も用木古墳群、便木山遺跡、惣図遺跡、四辻古墳群、四 辻墳墓群、岩田古墳群……そして用木山遺跡と調査が進むにつれて、その全容と性格を明らかにし てきつつある。特に今回集録した遺跡群は、当地方における土壙墓を主体とした、弥生式時代中期 後半から、定形化した古墳への墓制の発展過程を、また、古墳群も供献遺物を 僅かにしか持たな い、前期の小形古墳の諸形態と共通性を知るうえでの資料となるものである。

しかしまた同時に、これらの貴重な遺跡が削平消滅することにつながるのである。目の前で大型スクレーパーが遺構を削り消して行くのは、見るに忍びない。千数百年の風雪に耐えて今日まで、その姿を保ち続けてきた遺跡に対して、何故に今自分が鍬を振り降ろさなくてはならないのか、その葛藤に苦しみながらの毎日なのである。

山陽住宅団地の発掘調査は、それはそれなりに、何がしかの成果はあげてきたと思う。と同時に また文化財保護行政、文化財保護保存の問題も数多く提起するものである。その幾つかの事例を列 記して、あとがきにかえたい。

1. 土壙墓遺跡・方形台状墓

- 1. 東高月丘陵群における最初の墳墓遺跡として、四辻土墳墓群があげられる。 弥生式時代中期中 葉から後半にかけての墳墓群で、71土墳墓、3土器棺で構成されていた。 当初は丘陵頂平坦部に 埋葬が行なわれていたものが、葬送継続の過程の中で、方形台状墓の形式を取り入れるという、 興味深い様相を示している。
- 2. 東高月丘陵群の丘陵尾根および斜面に集落が構成されるのも、上記墳墓群の出現と期を一にし

た, 弥生式時代中期中葉からである。そして現在までに調査した4集落址内には, 墳墓址を併存しない。したがってこの丘陵立地を利用して, 生活を開始した時点において, 当初から居住区と墓域とは区別されて, 画絶された立地に営なまれたようである。

- 3. 調査の結果, これらの土壙墓群および方形台状墓は, 弥生式時代中期以降, 定形化する古墳の 出現の時期まで, 各時期の資料を提起した。すなわち, 弥生式時代中期中葉から後半の四辻土壙 墓群(71土壙3土器棺), 四辻峠方形台状墓(7土壙), 同後期初頭の宮山方形台状墓(7土 壌),同後期終末の便木山方形台状墓(保存のため主体数不明), 酒津式併行期の便木山遺跡(42 土壌6土器棺), そしてさくら山方形台状墓, 用木第12号墳, 用木第2・4号墳を経て, 定形化 された用木第1・3号墳へと, 順次引き継がれていくのである。
- 4. しかしてれらの遺跡は、土壙墓群としての共通の特徴はもつものの、個々の遺跡によって個体差を有する。四辻土壙墓群、 便木山遺跡のように多数の 土壙墓群によって 構成されるものに対し、四辻韓方形台状墓のように 7 土壌で完結するもの、あるいは四辻峠方形台状墓のように、あらかじめ埋葬被葬者数を予測するかのように、計画的に整然とした遺構配置を示すもの、宮山方形台状墓のように、配置およびその主軸方位が不規則のもの等さまざまな形態を示す。 これは、築成時期の時代差を表わす形式変化によるものでなく、その母体となる共同体構成集団の差によるもののようである。今後の事例の増加を待って、さらに検討課題となることであろう。
- 5. 本住宅団地内におけるこれらの埋葬施設として、共通手法としては、直接地山に深く、長方形箱形の土壌を掘り込む土壌である。土壌床面に小口溝を有するもの、枕石をもつもの、無施設のものの3 形態に分けられるが、概して小口溝をもつものは、弥生式時代中期後半までと、比較的古いものに限られ、枕石をもつものは同中期後半から始まり、古墳時代を通して見られるものである。無施設のものは各時期を通してみられる。一般的に床面は水平な面を保ち、直上供献の一括土器片等の崩落状態から、かなりの容積の空間が存在したことも推察されるので、これらの土壌内には、もと木棺の使用が推定されるのである。
- 6. 葬送祭祀に対する副葬遺物および供献物について、若干述べてみたい。棺内副葬は装身具も含めて現代まで遺存するものはきわめて少ない。殊に弥生式時代中期に属するものでは、殆んどその例をみない。弥生式時代後期終末期に管玉1をもつもの等が散見され、酒津併行期になってガラス小玉、管玉、鉄鏃、鉇、刀子を伴出する等、副葬遺物の種類の変化をみせるようになる。しかしすべての土壙が、それら副葬遺物をもつのではなく、ごく限られた主体にのみ、それも1土壌に鉄鏃1とか、ガラス小玉2というようにきわめて小数の出土である。この時期には、土壙規模もより深く大きいもの、小口に石積みをもつもの、二重掘り方(床部に段をもつ)となるもの等の個体差も生じるのである。

供献物である土器等の存在については、古いものは個々の土壙埋土の直上に、高坏を中心とした数個体の土器を置く例が多い。それが溝状遺構を伴なう弥生式時代後期終末以降となると、台 状塞全体とか、特定の土壙塞グループを単位としての供献というか、共同祭祀へと変化するよう である。特に便木山遺跡では、特殊器台・特殊壺に代表される共同葬送祭祀が行なわれていたの である。 7. 土壙墓群および方形台状墓の発掘調査によって、高坏を中心とした弥生式時代中期以降の各民期による、土器群の一括資料を得ることができた。それによると岡山県南冲積平野地域とやや異なる土器形式の編年特徴をもつようである。土器形式の変化は壺・甕の類は南部平野に比較してやや緩慢で、その器形および調整手法においては、古い要素を残しながら、胎土や焼成および文様等の変化のみが影響しているようである。高坏が最も器形変化の影響を敏感に受け入れているので、今後この高坏を指標に現在調査中の用木山遺跡等の集落址と合せて検討すれば、当地域としての単位地区を限っての土器編年標式が作成される可能性が強い。次の報告第4集は、丘陵高地に立地する集落址を中心にまとめたいと思っているので、その際にぜひ試みてみたいと考える。

2. 四辻古墳群一前期小形古墳

- 1. 四辻古墳群は、眺望視野の広い丘陵尾根支脈の稜線上に散在する、 7基からなる 古墳群である。いずれも径15mに満たない小形古墳であるが、吉備地方の類例によって、大まかに5世紀代にさかのぼる古墳と思われるものである。
- 2. これらの古墳は、その多くの例がそうであるように、副葬遺物の種類および量ともに貧弱である。第1号墳は玉類の他鉄剣1、刀子2、針1、櫛1で最も豊富である。第2号墳は、すでに盗掘にあい内部主体の確認はできないまでも、鉄剣1、鉄鏃3を検出した。第5号墳直刀1、第6号墳鉄剣1、第7号墳鉄斧1、鉄剣1である。
- 3. 吉備において、遺物のとぼしい小形古墳の多くが、箱式棺を内部主体としているのに対して、本古墳群の内部主体は、同一立地に所在する古墳であるにもかかわらず変化に富む。 第1号墳は丘陵主軸に直交する箱式粘土棉、第3・4号墳は組み合せ式箱式棺、第5号墳は素掘り土壙と粘土床の2主体、第6号墳は粘土床、第7号墳は大型土壙に平底木棺を安置した後、地山マサ土で埋めたもの、割り竹木棺を粘土で包む粘土棉、素掘土壙、箱形小形石棺、小土壙と5主体すべてが異なる埋葬主体と多様である。

同時代の遺物の少ない多種の埋葬手法の資料を得たことは、それ自体として意義が深いが、同一支群に属し、きわめて少範囲に集まる古墳の個々がこのような個体差を有することの意味については、今後の課題となるものである。

- 4. 東高月古墳群におけるとうした小形古墳は、現在までに調査したものについても、岩田古墳群第3号墳(竪穴式石室)、用木古墳群第8号墳(木棺直葬)、同第11号墳(粘土槨)とやはり内部主体は多様性を示す。
- 5. これらの小形古墳のうち、外表施設として埴輪を有する例は、四辻古墳群第1号墳、同第5号墳、宮山古墳群第4号墳、用木古墳群第11号墳、岩田古墳群第3号墳が知られている。なかでも四辻古墳群第5号墳および宮山古墳群第4号墳は家型埴輪を、また岩田第3号墳はキヌガサ、短甲等の器材埴輪を検出し注目された。円筒埴輪は、通常のやや外傾しながら立ちあがる円孔をもつ円筒埴輪の他に、「上部でラッパ状に開くまでに一度くびれた形式」のいわゆるB型円筒埴輪片を各古墳とも共通して有している。

これらの埴輪の樹立は、いずれも崩落した小破片となって、原位置を保たないため不明であるが、その出土状態および遺存の状況から、密な樹立ではなかったようであり、埴輪自体の形態も終末期に近い特徴を示す。小形古墳とはいえ、被葬者の死後にまでこうした円筒埴輪の他に器材埴輪を立てたことに代表されるように、首長層を構成する有力な人物であったと推定されるのである。

- 6. 四辻古墳群においては、葺石を有する明らかなものは検出されなかった。宮山古墳群第4号墳は方墳であるが、丘陵尾根を切った溝状遺構掘り方斜面および地山を削平整地した際の墳端基部となる地山生き土面にのみ、葺石を施設されていた。このような事例は本古墳に先行する、用木山古墳群第5・12・1・3号墳においても見られ、また岩田古墳群第3号墳においても同様であった。当地方における伝統的な葺石を敷く手法と思われ、且つ宮山古墳群第4号墳の例はその終末に近い時期のものと推定される。
- 7. 四辻古墳群第1号墳,宮山古墳群第4号墳は、その基盤である丘陵尾根主軸線であり、古墳正面にあたる墳端裾部に、須恵器片が発見され注目された。この須恵器は、当地方における最古式に属するもので、それぞれの古墳の築成年代を決める大きな手がかりとなるものであるが、これらの土器はその出土状況からみて、偶然性によるものではなく、意識的に墳外正面から、その手とどきの場所に置かれたもののようである。このような例は、これらに先行する用木古墳群第5、12号墳の土師器の出土状況と類似し、葺石の敷かれる手法と同じく、当地域葬制に伴なう伝統的なものと考えられるのである。
- 8. 四辻古墳群第1号墳および同第5号墳、それに宮山古墳群第4号墳は、ともに弥生式時代方形台状墓の高まりを利用して、その直上に構築された古墳である。古墳の築成そのものは、先行する方形台状墓と直接的な関係はなく、その立地条件が偶然に一致して重複したものであろうが、これらの台状墓は古墳発掘というこれまた偶然性によってはじめて発見されたのである。

土壙墓を中心とした便木山遺跡、便木山方形台状墓、さくら山方形台状墓と、現在までに発見し調査した遺跡すべてが、こうした偶然のチャンスによる発見なのである。したがって、複合しての古墳築成等もなく長年月による自然風化によってその高まりを流失した。こうした遺構がすでに開発された丘陵尾根上に存在しないとは言い切れないのである。表面的な観察にたよる分布調査の限界を痛感する一事例である。

9. 本古墳群を含む東高月丘陵群中のこうした小形古墳は、砂川流域および丘陵支脈間に開けた、水田地帯を背景とした生産と分配の一単位となった、世帯共同体の墳墓群と推定されるのである。こうした小共同体が6世紀以前からすでに古墳を造り得るだけの変質をとげつつあったことを示すものである。と同時にこの丘陵群の主丘陵線に立地し、これらに先行する用木古墳群との関連、および豊かな水濠をたたえる全長192mの前方後円墳両宮山古墳との結びつきについて、今後の大きな課題となるものである。

3. 埋蔵文化財保護の問題

1. まず第一に、精密な埋蔵文化財包蔵地の分布調査と、その資料公開の必要性である。開発行為

が立案計画され、用地買収が先行してからでは、文化財保護は後手にまわらざるを得ない。事実 当山陽住宅団地計画段階では、「遺跡地図」には4基の古墳しか登録されていなかったのであ る。(当初計画地内には9基あったが、熊崎地区5基を造成地から除外した)。「4基ぐらいの遺 跡なら、自然公園内に取り入れても……」と、遺跡地図におけるポイントの数が、当該地をその 候補地として決定する有力な誘因の一つとなっているのである。

しかし現実には、開発計画策定後分布調査を繰り返すたびに、その遺跡数は増大し現在では工事中発見も含めて、79遺跡と驚くほどの密度をもった埋蔵文化財包蔵地であったのである。これ程の例はきわめて特例かも知れないが、一度用地買収等資本投下がなされた後においては、当事者がいくら努力をしても、その限界は明らかである。

岡山県教育委員会では、県内文化財の総点検と、精密な分布調査を県内各市町村および、岡山 県遺跡保護調査団の協力を得て、昭和46年度より5か年計画で実施されている。またこうした開 発行為に対しては、事前協議制と知事の許可制を制度化して、積極的な姿勢を示そうとされてい る。一日も早くこれらの成果のあがることを望みたい。

2. 分布調査の限界の問題についてふれてみたい。分布調査は原則的には、調査者の実地踏査による表面的な観察を中心とする。したがって、当該地の土地利用状況、植生等の地理的環境によって、その成果は大きく規制されるのである。古墳等のように、構造物等が地上に実在するものは別としても、地下に埋没してしまって、現在では自然地形と変らぬまでになっている集落址とか、単発的な土壙塁等は確認が極めて困難である。田畑とか、切り通し道となって地肌が露呈している箇所での、表面採集および断面観察にたよらざるを得ないのである。

近年のように開発行為が大規模化し、丘陵とか山塊でとに削平整地が行なわれるようになると、地肌の露呈しない自然林地帯にまで、工事範囲は拡がるのである。

当山陽住宅団地内においても、 何回も分布調査を 繰り返しても 確認できなかった 遺跡や遺構が、偶然の機会に発見されたり、工事中発見として数多く検出されている。

例えば、本書に集録した土壙墓および方形台状墓のすべては、古墳発掘の際にその下に複合していたり、他の集落址調査によってはじめて認知したものである。 用木古墳群 第9・10号墳等は、丘陵稜線上に立地し、封土は全く流失し分布調査では確認できなかったが、用木古墳群発掘調査に伴なう、関連遺跡追求のためのトレンチ調査によって検出された。また用木山遺跡は、常識では考えられない程の急傾斜面に立地する集落址であるが、工事の進行に伴なっての発見であり、その発掘調査によって、地下に埋没する横穴式石室墳7基、後期古墳期の土壙墓群、奈良時代蔵骨器等を合せて発見されたのである。遺跡数においても、開発の行なわれる前と現在とでは2倍となっているのである。

分布調査によって遺跡や遺物が確認できなかったとしても、そこに埋蔵文化財が存在しないとは云い切れないのである。当山陽住宅団地のように近くに専従調査員が常駐している場合は、或る程度工事進捗中の遺跡発見もカバーされることもあるが、当初の段階で色分けされて開発行為が行なわれる場合は、例えそこに遺跡が存在したとしても、現在のような重機械による工事であってみれば、感知されることなく終る可能性が強いのである。

3. 埋蔵文化財の包蔵地における、開発行為と発掘調査の併行実施の問題がある。

当山陽住宅団地においても、四辻古墳群第2・3号墳、および同6・7号墳は集落遺跡と複合し、さらにその遺跡範囲は拡がりをみせていた。しかし当初の段階では、小形古墳の記録保存と決定されていて、造成工事が先行し、古墳部分を残してぎりぎりまで削平されていたのである。したがって、古墳調査によって、さらにその下方に集落址が広がっていることが、わかったとしても、それを拡張して調査を行なうことが不可能となった。またその年度工区に設定されていなくても、残土処理、工事用道路等の工事によって、丘が削られたり谷が埋められることがある。集落址等調査によってその遺跡範囲が拡大されても、調査区域が限定されるという問題を生ずるのである。

分布調査の後、本工事が開始される間に充分なる予備調査がぜひとも必要となってくるのである。

- 4. 開発行為に伴なう、埋蔵文化財の発掘調査とは、調査の結果その遺跡が重要なものであれば、保存協議することになっている場合が多い。われわれも、保存協議の意見をつけて、報告した遺跡がいくつかあるのである。用木古墳群、四辻古墳群第1・5号墳、便木山遺跡等がそれである。そのたびに調査遺跡は一時凍結の処置をとり、保存のための協議が繰り返され、努力がなされるのである。しかし遺跡は現状で凍結されたとしても、その周辺は当初のマスタープランのとおり工事は進められ、既成事実として造成面は広がっていく。その結論が長びけば長びくほど、遺跡は局部的に孤立した形で、造成地内にたちはだかるような存在となるのである。そして地域住民の農業用治水路、学校建築、道路計画等の生活権との対立という形となって、その解決をせまられる。また一方現況凍結といってもわれわれは、委託によって調査を行なっている関係上、その予算的裏付けは、調査対象遺跡の掘りあげまでである。したがって、凍結となった遺構を埋め戻す等の処置ができず、風雨によって原況を損なわれるのである。
- 5. 出土遺物の保管および管理も大きな問題の一つである。発掘調査も最終的には5年の年月を要しよう。現時点ですでに保有遺物は鏡、銅鏃をはじめ金属製品,玉類,土器,それに多数の石器,整理箱 500箱を越える土器片と多量の出土遺物をかかえているのである。それらは発掘調査に追われて,充分な整理,検討を加えるひまもないままに,毎日毎日増え続けるのである。それに加えて,実測図,写真の量も膨大である。これら出土遺物および資料の帰属については,まだ決定されていない。したがってそれまでの間は,当発掘調査団ならびに山陽町教育委員会にその保管 義務が負わされるのである。帰属の定まらないこれらの遺物および資料を保管する十分な施設をする予算的な裏付けはなされていない。調査現場の一隅に仮収蔵施設をもうけ仮保管の形で毎日を送らざるを得ないのである。
- 6. 最後に、調査の組織とその限界の問題について若干ふれてみたい。

開発行為が大規模化,多発化してくるのにともなって、埋蔵文化財の保護行政もまた多忙化を極めてくるのは当然である。「記録保存」のための行政発掘を行なおうにも、専従調査員の絶対数が不足して、十分な調査組織が構成できないのが現状である。1パーティ3名以上の専従調査員をの希望もむなしく、現在では、1パーティ1調査員で構成される場合が多いのである。

個々の遺跡の発掘調査は、その遺跡の発掘調査を担当することになった調査員の肩に、すべて の責任がゆだねられるのである。より正確かつ精密な「記録保存」をと努力をしても、その調査 は常に調査員個々の持つ力の限界の範囲内のものなのである。まして、調査の期限と予算に制約 されての調査であってみれば、それが完遂できない苦しみを、毎日毎日背負いながら、発掘調査 を続けているのである。

当山陽住宅団地における発掘調査団も、専従調査員1名を中心に、町教育委員会で構成された 弱体の調査団である。生業を犠牲にしてまでも調査員として加わり、協力いただいた在地研究者 則武忠直氏、同じく作業長として献身的な尽力をいただいた阿部政信氏をはじめ、チームワーク のとれた地元作業員の人々の暖かい援助があってはじめて、調査が成り立っているのである。ほ んとうに私は幸せ者であると思う。

1973年3月

神 原 英 朗

岡山県営山陽新住宅市街地開発事 業用地內埋蔵文化財発掘調査概報

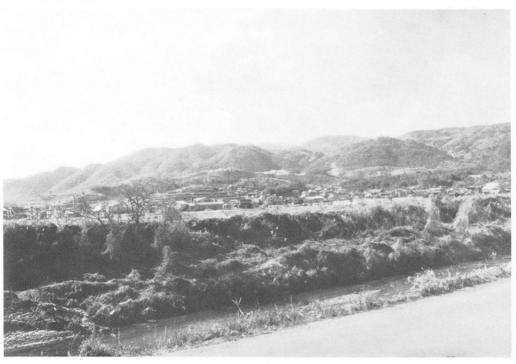
第 3 集

昭和48年3月31日発行

発行 山陽町教育委員会 岡山県赤磐郡山陽町上市108

印刷 西尾総合印刷株式会社 岡山市津高651

図 版



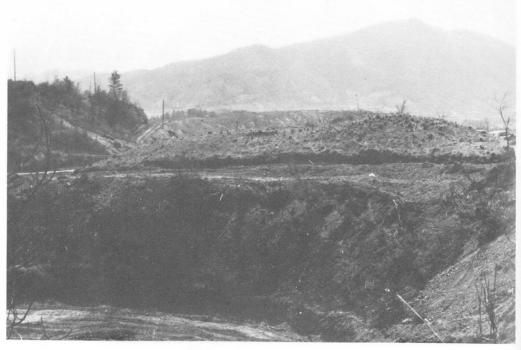
1. 住宅団地予定地遠望(砂川堤防から)



2. 住宅団地造成丘陵 (善応寺山から用木古墳群を望む)



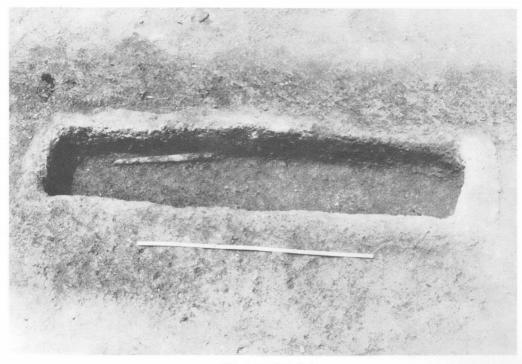
1. 四辻古墳群第1~5号墳景観(南から)



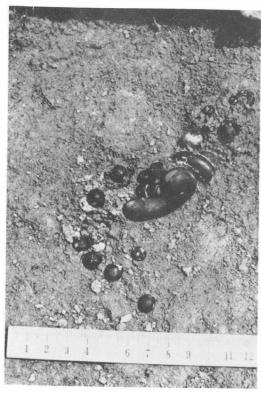
2. 四辻第 | 号墳外観 (第 5 号墳から)



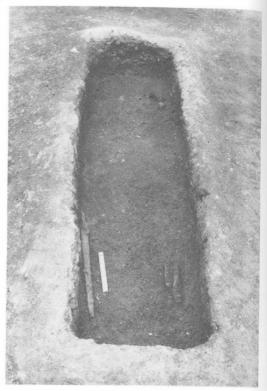
1. 第 1 号墳内部主体発見



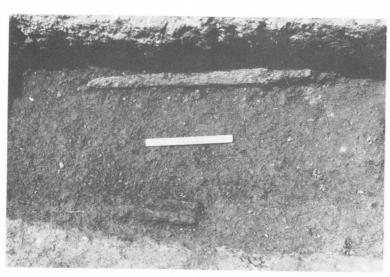
2. 第1号墳内部主体



1. 玉類出土状況



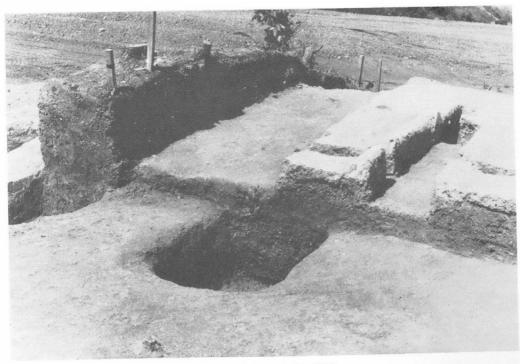
2. 遺物出土状況



3. 鉄器出土状況



1. 第 1 号墳墳丘調査状況



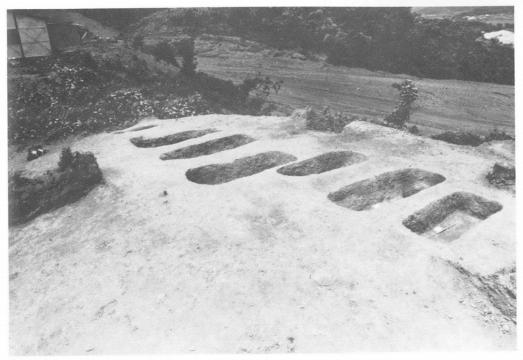
2. 内部主体と土壙の関連



1. 方形台状墓全景(北から)



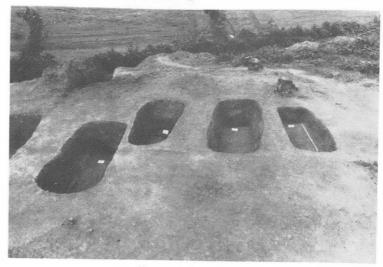
2. 方形台状墓全景 (南から)



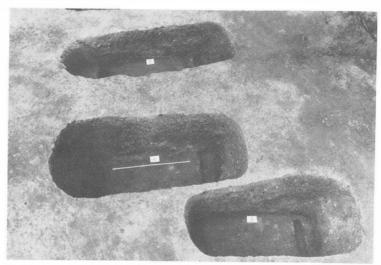
1. 土壙群出土状況 (西から)



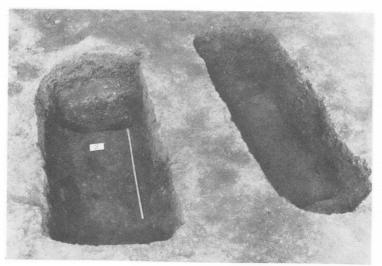
2. 土壙群出土状況 (南から)



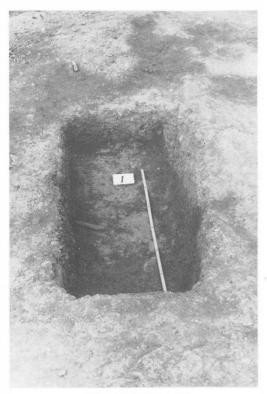
Ⅰ. 第4~7土壙 (西から)



2. 第3~5土壙 (南から)



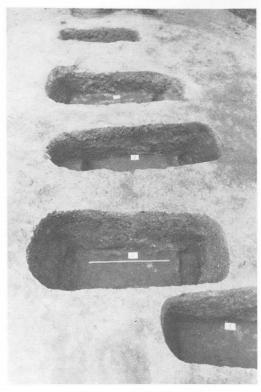
3. 第2・3土壙 (西から)



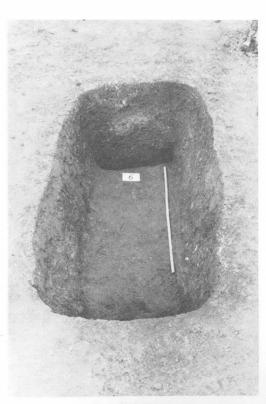
|. 第|土壙(西から)



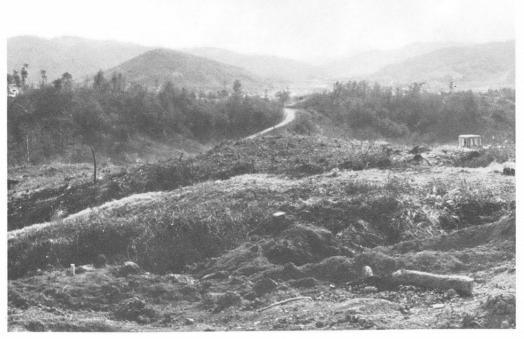
3. 第4土壙(西から)



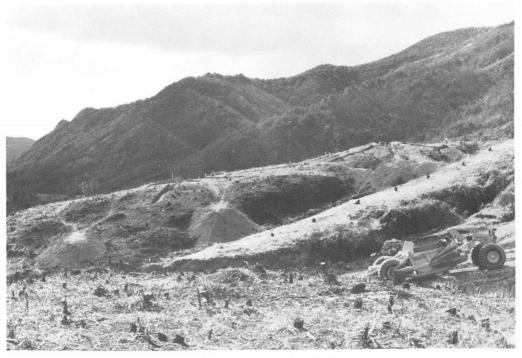
2. 第1~4土壙 (南から)



4. 第6土壙 (西から)



1. 第2 · 3号墳外観



2. 第2·3号墳調査後外観



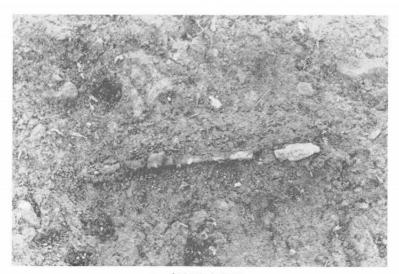
1. 第2号墳調査前外観



2. 第2号墳調査区景観



1. 鉄剣出土状況



2. 鉄鏃出土状況



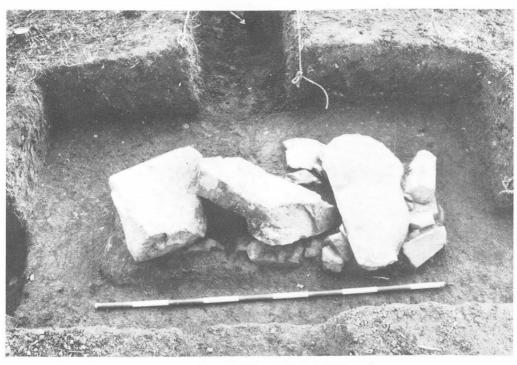
3. 鉄鏃出土状況



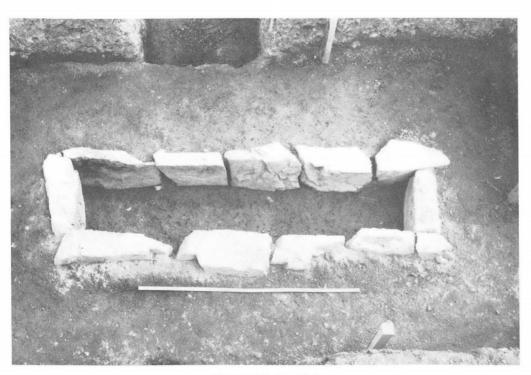
1. 第3号墳調査前外観



2. 第3号墳調査状況



1. 第3号墳箱式石棺出土状況



2. 第3号墳箱式石棺身部